

スーパーロボット大戦Z 辺獄編

レゴシティの猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒き獄鳥を駆る青年、アサキム・ドーウインはスフィアを求めある惑星にたどり着いた。旅路の先にあったのは可能性の物語：彼が垣間見るのは希望か絶望か

(注意)

八話から十話、十七話は833(ヤミさん)好きにはおすすめしません

オリ主該当は前日譚、堕ちた果実編です

この話(世界)のジから始まるあいつもいるので気になる方は探してください

追記

話がTo LOVEるに寄ってたため原作の部分を調整しました、アサキムが主役のつもりなのは変わりませんが、面汚しかもしれませんが生暖かく見てもらえれば嬉しいです。

以下参戦作品

スーパーロボット大戦Z、a To LOVEるダークネス

Fate/Zero FFI トランスフォーマーマイクロン伝

説 仮面ライダーオーズ 仮面ライダー電王

etc.

目次

スフィア編

第一話	楽園に足を踏み入れる放浪者	1
第二話	元殺し屋は家族のために	4
第三話	血の味	8
第四話	宮殿を搜索する放浪者	14
第五話	「知りたがる山羊」前編	20
第六話	「知りたがる山羊」後編	25
第七話	スフィア争奪戦	29
第八話	過去からの亡霊	35
第九話	あなたの名前は	41
第十話	chaos bringer	46

番外編

一周年突破記念 前日譚、ある子供の半日	52
---------------------	----

ユニクロン編

第十一話	「暴走ーきき」	65
第十二話	「闘争ーたたかい」	72
第十三話	「雷光ーきりふだ」	78
第十四話	「再臨ーユニクロン」	84
第十五話	「魔王ーデビルーク」	89
第十六話	「決着ーケリ」	95
第十七話	「銃神ーデイス・アストラナガン」	101
第十八話	「突入ーしんにゆう」	107
第十九話	「悪夢ーさいせい」	115
第二十話	「対峙ーやみ」	121

第二十一話 「解放ーわかれ」 128

第二十二話 「亡霊ーペるそな」 140

堕ちた果实編

第二十三話 舞い降りる者達 152

第二十四話 「彼女が来たその理由」 160

第二十五話 変わるもの、変わらないもの 169

第二十六話 「スファイアが変えた運命」 178

第二十七話 再び、交える刃 185

第二十八話 「彼女の秘密…それは」 195

第二十九話 「地から昇って天から降りて」 206

第三十話 「拾い集めた記憶と虚憶」 216

第三十一話 「Transformationトランス・カム
バック」 227

第三十二話 「Questionその顔は誰に似ている？（前

編）」 238

第三十三話 「Questionその顔は誰に似ている？（後編

）」 247

第三十四話 「過激な嘆きにクライマックスを」 259

第三十五話 Farewellさようなら、ミラー」 266

第三十六話 美奈子ルート 師匠の望みってなんだっただろう

? 273

第三十七話 美奈子ルート シロ編 答えを病室で言わせないで

292

第三十六話 ライムルート 過去、回想!!オレ、演奏!!

第三十七話 (結城) ライムルート ノゾミと代償 330

時の列車編

第三十九話	妖怪、何か用かい？	348
第四十話	妹、そして放浪者	361
第四十一話	巨大化!!ペケVSシユロウガ	368
第四十二話	イマジン、接触	378
第四十三話	血の刃	388
二周年特別記念	V・M・C妄想新風録	398
第四十四話	電王、求めて	407
第四十五話	アサキムVSライムくその1・心が決めるもの	420
第四十六話	×アサキム○美奈子VSライムくその2・芽生える気 持ち	431
第四十七話	アサキムVSライムくその3・王手	442
第四十八話	悪鬼滅魄 ダイヨウジン	450
第四十九話	再びの銃神	459
第五十話	魔剣(ブラディクス)の優雅な目覚め	471

スファイア編

第一話 楽園に足を踏み入れる放浪者

アサキムはある並行世界のとある惑星にたどり着いた。外観は内部にたどり着いたため一望はできないがそこは地球ではないところだと一目でわかることができた。何故なら住人は……尻尾が生えていたから。

「作られたものではなさそうだね」

尻尾に注目すればそれは時々動きを見せていた、揺れや風による動きとはまた別のものだった。アサキムが歩き回っていると住人から話しかけられた。

「お兄さん、どの惑星《ほし》から来たんだい？」

「僕は……地球からさ」

地球こそスファイアを得るのに最も都合が良い。他に母星と呼べるものもなかったためそういうことにした

「地球…今の王様と同じ惑星《ほし》か…」

「?…惑星の名前を教えて欲しい、どんな名を以て在るのかを」

住人「知らないでここに来たの?まさかアンタ……」

アサキムは住人に手を引つ張られた。その力は容易に離せない程に高く、そしてどこか酒場のような店の内部に連れられた。

「マスター、怪しいやつです。どうしますか?」

その店のマスターらしい人間が顔を出した。

「なあにい、ほうどれどれ…」

老人に近いが気は良さそうだった。アサキムは例外かもしれないが。

「良くやった、行っていいぞ」

「はい」

そして、アサキムはマスターに捕まった。

20分後

「たどり着いたのは悪魔の惑星というわけか…」

「悪魔とはなんだね。デビルークだぞ」

「王族はほぼ中間に悪魔の名を冠している、逃れられないのさ、その認識からは」

マスターはアサキムを捕まえることはしなかった。

アサキムはマスターと会話する事によりこの惑星がどんな星なのか理解した、名前はデビルーク、かつて王の働きにより銀河大戦で支配者の座を勝ち取ったらしい。王様には娘が3人いたが現在3人も1人の地球人と結婚して王位を継いだらしい、名前を結城リトという

「他にもたくさん女性がいるらしい」

「ハーレム……というわけか」

「その内の一人にもうすぐ子どもが生まれるんだってさ」

「誰に生命が宿ったのかわからないのか？」

マスターは首を横に振った

「王女でもないからあんまり知らないぞ」

「そうか、ならば僕は行こう。どこにいけばいいか分かりかけてきた」

「またこっちによって話でも聞かせてくれよ」

「再び巡り会うその時にまた」

アサキムは目で軽く一礼して店内を去った。

一方そのころ……宮殿内にて

「……ついに来ちゃったか……」

赤い髪でおさがげが特徴の黒咲芽亜と呼ばれる女性はアサキムがこの世界に来訪したことが分かり半ばどうしようかと悩み半ば興奮していた

「何が来たんですか？」

その声を聞いて一人の女性が降りてきた

「あ、お姉ちゃん、来ちゃったんだ……ついに、私と同じ力を持つものが」

「変身《トランス》ではなく？」

「そう。楽しみだなー、何を経験してるんだろう、何を背負ったりし

てるんだろう、何を考えてんだろう、あつお姉ちゃんはその人に対して何もしなくて良いから」

「させませんよ、芽亜。最近のあなたがそんな風に知らない相手の事を考えるのはたいてい無事じゃすまない時じゃないですか、私が行きます」

「場所分かるの?」

芽亜がお姉ちゃんと呼んだ女性は足を止めた

「知ってるんですか?」

「多分黒くて鳥に変形しそうなロボット、目立つからルナテイク号で探せばスピード負けせずに捕まえられると思う。それ以上は分からない」

女性は芽亜のいる場所から去った

女性は急いだ、妹の安全を守るため、夫と呼べる人を侵入者などでわずらわせたくないため

「あつヤミネーちゃん」

突然声をかけてきたのはラズ・ベルゼブ・デビルーク、デビルーク第一王女と現在のデビルーク王の息子である

尻尾がないことと髪の色を除き外見は2人にそっくりだった

「ラズですか、私は今から忙しいんです。私の子供と遊んでください」

「りょーかいまた今度遊ぼーぜ」

ラズは敬礼のポーズを取りその場を去った

「(遊ぶのも良いですけど勉強身についてるんでしょうか…)」

母親の頭の良さは継がずに産まれたようで問題を色々間違えたりしたのをヤミは思い出した、しかし5歳児に今嘆く必要はヤミには感じなかった

ヤミは急いで自身の宇宙船、もしくは相棒のいる場所に向かった

「誰だろうと私の家族には手出しさせません!!」

第二話 元殺し屋は家族のために

宮殿内にて

ヤミとの会話の後ラズは疲れ気味だった。

「引き算の勉強…つかれた…」

ヤミとの会話の後地球でいう算数のテストが14点であったことが分かり補習を受けさせられていた、それも一応一段落ついた感じだった

「姉さんたちうらやましいぜ」

ラズが姉さんと呼ぶ人は満点だったらしい

「おれもいつか姉さんたちみたいに答えられたらいいな。よーし、ちゅーぼーだ！」

ラズは走った、ご飯をつまみ…のぞきに行くために

少し行った先に兵士らしい人間がイスに座ってテーブル越しに二人で何かをしていた、一方は赤いサングラスをつけてもう一方は青いゴーグルを額につけていた

「そこだ」

「あー」

たくさんのカードを弄って遊んでいるようだ、カードの束が両者共に置かれている

「なにしてんすか？」

ラズが声をかけると二人はイスに座ったまま敬礼を شدした

「あ、ラズ様」

「私達はサボってるわけでなく…」

「おれもまざっていい？」

「これは二人用のカードゲームなんです、すいません。」

「そっか…」

「おい、あれ（小声）」

兵士がもう一方の顔の向く方を見ると侍女やそういった関係の人間が隠れてこっちを見ていた

マズいと思った兵士は

「よろしければ見ますか？ 私達のやっているところと
となだめようとした

「よっし、見る見る」

そしてラズは兵士たちのカードゲームを観戦しだした

「しかし地球のカードゲームはすごいですね、竜や機械系統に植物、
本物よりすごそうなどところとか」

「カードゲームと王様には頭が下がりますよ」

「他はないの？」

「王様の父と親衛隊隊長の奥様ぐらいですね」

「プリーンのことか？」

おそらくクイーンと言おうとしてるのかもしれないが兵士たちは
どうフォローすればいいか分からなかった

「多分そうです」

それから時間が少し過ぎた

「もうそろそろ戦闘訓練か、こいつでアタック」

「平和な時でも腕は磨いとかないと、ブロック」

ラズ「お、おう。なにするんだ？」

「金色の闇と戦うらしいです、秒殺されるかもですが」

「よくわかんないけど、誰？」

「王様や女王様がヤミと呼んでいるものです」

「ヤミねーちゃんか、強いのか？」

「私達が束になってどうなるかという相手じゃないですね」

兵士はヤミがどれだけ強いかわかった、要約するところだっ
た。

彼女の身体はナノマシンでできており身体の色々な部分を刃物に
変えたりすることができるとか、また、本気を出せばワームホール
を作ったりできるそうなの

「その力で数え切れないくらい：おつといけね、ブロック」

「変身できるのって限られてるのかな、おれだったらいつペンライ
オンや魚になってみたいけど」

「食われますよ、魚になったら、フィニッシュ!!」

勝ったのは青いゴーグルをつけた兵士のようだ

「あちやー、では、もう行きますね」

「興味がお湧きでしたら王妃様と店にお行きになるのがよろしいかと」

兵士たちは出発した

「さて、あらためてちゅーぼーいくか」

一方そのころく

アサキムは黒き獄鳥、シユロウガと呼ぶ人型のロボットを召喚し搭乘して空を飛んでいた。レーダーに捉えられないように細工もしつつ……

アサキムは少し考えていた

「結城リト…彼が関わる世界とするなら「いがみ合う双子」か…」

「いがみ合う双子」は相反する感情を力とするスファイア、アサキムが自身の旅路で知った結城リトは女性に近づくことでたまる衝動とそれを抑えようとする精神によりラツキースケベを発動させていた、だがアサキムはそれはないと判断した。この世界の結城リトはデビルークの王、王女たちと結婚している。つまりラツキースケベを起こし得るような精神性を保っている可能性は低い

「僕は…十二の鍵を手に入れるために彼らの楽園を血で汚そうとしている…」

許しはしないだろう、そうなれば

免れはしないだろう、彼女達からの報復は

けどデビルークなら王宮を調べるのが一番だった

違っても情報の1つや2つ手に入るかもしれない

そう思っていた時宇宙船のようなものがシユロウガの目の前にやってきた、その船は黒いエイのようなものであった

乗っている人間から通信が来た

「所属はどこですか、その情報は聞いたこと有りませんが」

「少し急いでいるので」

アサキムはシユロウガの速度を上昇させ突破しようとするのを阻まれた

「ダメです、何者か分かるまで通しません」

「なら、堕ちてもらうまでさ。ラストーエツジ!!」

シュロウガの額が輝きだし、その輝きは光線となり相手に向かいだした、密着に近いため割とモロにくらった

「大丈夫ですか？ルナ」

『大丈夫さ、ヤミちゃん』

「飛びます。開けてください」

『分かった』

シュロウガの上に突如金色の流星のようにヤミが飛来し髪を2つの拳のように変身させ、シュロウガを叩いた。

ダメージには至らないが、それでもシュロウガは地上に落下させられた

アサキムはとりあえずシュロウガから降りた、辺りは樹木などが生い茂っている

降りるとヤミが近づいてきた

緋色の眼光、白い肌に真っ黒な衣装、金色にたなびく髪

「君は伝説の殺し屋と呼ばれる金色の闇か」

伝説と呼ばれるくらい依頼を受けそれをこなしてきたらしい

「昔の話です、それより質問するのはこっちです、何を求めてあなたはこの惑星へ？そのような兵器、見たことは有りませんが」

隠してもいざればれることなのでアサキムは白状することにした

「僕は僕の鎖を断ち切るため、十二の鍵…スフィアが必要なのだ」

「させませんよ。言ってみました、他人のスフィアを取るということ

はその他人と殺し合うことと。それ以外なら譲歩しても良いですが」

「それがあるなら…僕の罪は少しは刻まずに済んだらうね」

「なら…あなたは敵です!!」

ヤミは自身の髪と手を武器に変身《トランス》させた

第三話 血の味

ヤミは手や髪を武器にした状態でアサキムに飛びかかった。

「来るか…なら…」

アサキムは空に向かって右手をかざした。すると右手の周辺が紫色に光り出しその光は次第に剣を形作った。アサキムはその剣でヤミの手だった刃物と交錯させた。

「!? (急に出てきた。)」

金属と金属のぶつかるような音が鳴り響いた、誰かが近くで聞けば驚き警戒してしまうような音が。

「君は何を望み、何を願う?」

唐突な質問に一瞬言葉を失うヤミであつたがすぐに対応した

「私を人として受け入れてくれた人達とのこれから、です。」

押し切られてしまったのはアサキムだった、アサキムが一瞬よろめくとヤミはすかさず回し蹴りをいれアサキムは空中に飛ばされた。

アサキムはすぐに受け身をとり地面に着地した、それでも数歩分地面を抉れる程の衝撃だった。また、手が少ししびれだした

今度はアサキムがヤミに突っ込みに行った

「ならば君は過ごせばいい、闘争の炎に身を焦がさず、ただその命が尽きるまで」

アサキムが剣で切りに行くと今度はヤミの髪が龍の首のようになりアサキムの攻撃を防御した。

「あなたのような人間がいるから、そうはいかないんです」

ヤミの髪が変身《トランス》したことにより生まれた龍の首は8つに増え、アサキムを攻撃しだした。

「それは違うさ、僕のような人間がそうそういるわけではない。それは僕がよく分かっている」

アサキムは1つ1つ龍の首を避けつつその龍の首にある人間の頬と口の間を横に両断し、ヤミの二の腕を斬りつけた

しかしヤミの肌は鎧のように硬かった。予想外の硬さにアサキムは絶句した。

もう一度、今度はもう片方の二の腕を斬りつけた
しかしまたもや鎧のような硬さだった。

だがアサキムはようやくその秘密が分かった。

「(当たったと認識した瞬間に変身《トランス》したと言うわけか)」「
アサキムが斬りつけた瞬間だったが一瞬ヤミの肌がアサキムが斬
ろうとした場所だけ金属のような色に変わっていったのが目に見え
た

「気は済みましたか?」

そしてヤミの髪は再び大きめな手に変わりアサキムを殴りに行っ
た

回避しようとしたアサキムだったが間に合わずに吹っ飛ばされ数
十m程飛ばされた

アサキムの頬には血が滲みだし殴られた跡が出来ていた、吹っ飛ん
だ衝撃であまり立てなさそうだった

そしてヤミが近づき、手だった刃物をアサキムに突きつけた

「もう勝負はつきました、あなたの名前は?」

「アサキム・ドーウィン、呪われし放浪者」

ヤミは自分で呪われしとつけるアサキムに困惑しながら言い放つ

「アサキム・ドーウィン、二度と私の家族に手を出そうとしないでく
ださい」

アサキムはゆっくり首を横に振った

「丁寧に断らせてもらうよ、それと勘違いしてるようだけど僕の勝
利はスフィア・リアクターを狩ることにあつて他じゃない」

「ララに突き出そうか…」

元第一王女(今王妃)ララに頼んで宇宙の彼方に飛ばすロケットを
作ってもらおうか、そうヤミが考えていると

「逆に言えば、他は敗北の狼煙をあげる必要はないってことだよ、君
を止めるためには…こうするさ」

アサキムはヤミの腕を手でつかみだした

「!?何を…」

そう発言した直後ヤミの顔に、血がかかった。そして、アサキムは

仰向けに倒れた

アサキムは、自分の心臓部にヤミの刃を突き刺させたのだった、ヤミは慌ててアサキムに駆け寄った

「何をバカなことを…この手のバカは、嫌いですよ。」

「どうだい、血の味は、君が長年忌避した生命の味だ。」

「私の大切な人の命を狙うやつだからって死んでほしいわけではありません」

「君は知るだろう。僕が何故、呪われし放浪者と名乗ったかを」

その声はか細く、やがて息すらも消え、深紅の色の瞳は閉じていった

「そんな…」

ヤミはがく然とした。また、殺してしまった。結城リト…現在のデビルーク王とその妃達と生きると決めるときもう人を殺さないと誓った…はずなのに

「私は…人を…」

「そうだ、お前は人を殺した」

「えっ」

ヤミは突如聞こえた聞いたことのない声に驚きを隠せなかった、聞いた覚えは全くなくさつきから聞いたアサキムよりも低い声だった。

辺りを見回しても誰もいないためヤミは気のせいと判断した

「では、宮殿に戻りましょうか…ルナ」

ヤミはルナティーク号の内部に移った

ルナティーク号・内部

ヤミは沈んでいた。

もう、殺さないと決めたのに、決めたはずなのに殺してしまった

そのことで考えているとモニターに骸骨っぽいマークが映り出した、ルナティーク号の人格のようなものであった

『そう沈み込むなよ。あれは相手が悪いんだ』

「気を遣ってくれるんですね…ありがとうございます」

『それにそんなふうに悩んでるとヤミちゃんハナタレのガキだっ

て心配するぞ』

「あの子は、まだ地球での4歳です。後何年かすれば改善します。」
『まあ、イケメンにはなれそうだな。それよりあいつ入れたのは何
でだ?』

アサキムの体はルナテイク号の内部に連れて行かれた

「あそこで朽ち果てさせるのも何だかなので」

アサキムとヤミの鬭った場所は森林と草でいっぱいだった

「それもありますけど実は芽亜から連れてこいと催促がうるさい
ので」

『無視しちゃえよ、みんなも許してくれるって』

「では、そうしますか。けど、みんなにこのことをどう伝えればいい
か」

『普通に伝えれば?けど、隠すってことすると感づかれるし』

「芽亜は去年からおかしくなった…元々好奇心が高かった妹でし
た。けど…」

去年〜

「お姉ちゃん、どうだった、今回の他の星の内乱…だったっけ」

「別にどうもありませんでしたけど」

「どんな人間がいてどんな兵器や武器を使ってたとか」

「そんなに見てないので覚えていません」

半年前〜

「見て見て、お姉ちゃん」

格納庫には人間の女性のような型の建物より大きめなロボットが
あった

「こんなのだうやって」

「私の持ち帰ったスフィアを研究させつつ作ったの、私以外使える
訳ないのに、おばかな人達…この子で私はね、人と兵器を超えてみよ
う…そう思うの」

「変なこととはしないでくださいよ」

「しないよ…ただ…満たすだけ」

現在に戻る〜

「なるほど…スフィアは既に黒咲芽亜によつて覚醒を迎えたか」
「!？」

ヤミその言葉に反応し後ろを振り返ったがそれより早くアサキムにスプレーを吹きかけられヤミは倒れた

『何で…何でだよ。何でお前が生きて』

「無限獄に捕らわれた僕には死という概念は意味を成さない。永遠にね」

ルナテイク号が俯瞰して見たときアサキムの呼吸は止まっていた
た

『殺しても生き返るってことかよ』

「そう捉えてくれて構わない、しかし、この船に積み込んでいたこれ
がなければどうにもならなかった」

速効性の睡眠スプレーだった

『せっかくナナがここに乗る子どもたちが護身用に使うためにつて
彼女の友達の体液から採ったものなのに、降ろしてやる』

ルナテイク号は空を飛びつつジタバタした

「良いのか？今一番被害をくらうのは他でもない彼女だ」

『!？ぐぬぬぬ』

ルナテイク号はだんだんと大人しくなってきた

「それじゃ開けてもらおうか」

ルナテイク号は渋々ドアを開けた

「じゃあ、君の主人の居場所、また会うかもね」

アサキムはドアから飛び降りた。いつの間にかパラシュートも
持つてるようだった、きつとくすねたのだろう

『二度とオレの中に入らせるかー!!』

数十分後

「……はっ!」

ヤミは起きた。

『ごめん、ヤミちゃん、奴は…』

「そうですか」

残念そうにしていたがルナテイク号はヤミが安堵してるように

も思えた。

『やつをもう一度、捕まえよう。宮殿に向かっているはずだ』

「はい」

ルナテイク号は急いで宮殿に向かった

宮殿 格納庫内部

黒咲芽亜は一人格納庫でロボットを見つめていた。胸には緑色の球体が収まった状態だった

「どんな人なんだろ？呪われし放浪者」

第四話 宮殿を搜索する放浪者

ルナテイク号から飛び降りて10分後、既に地上に着いたアサキムはどこに行けばデビルーク王の住む宮殿に行けるのか分からなくなってきた

シユロウガなら飛んで行けるし隈無く探せば場所も目立つし見つかるがまたヤミに捕まってしまう可能性があるため使えなかった

「この惑星と僕を結ぶ因子は少ないからね」

ほぼ初めて来訪したとも言える、アサキムが知ってるのは地球人とこの惑星の王女の紡ぐ物語のそして彼は王となりましたのくだり（スフィアを巡る戦いのついでに知った）までだった

「何故この惑星を黒咲芽亜は選んだのか」

一番推測しやすいのは技術面で地球にスフィアの器を作らせることができなかったということ、もしくは彼女がデビルーク星でどれだけできるのか試してみたかったということ、それはさておきアサキムが歩を進めると最初についた場所とは別の町だった

見ると遠くのヘリポートのようなものに円盤型の宇宙船があった
すぐ住民に話を聞いてみた

「あの場に眠る船は誰の物だい？」

「デビルークの兵士たちだよ。知らない？あつ知らなさそう」

おそらくきよろきよろしていた拍子に尻尾が無いことを悟られたのだろう、しかし気にすることなくアサキムは礼だけ述べて走り去った

「礼を言わせてもらおうよ、ありがとう」

そしてすぐ路地裏に行くとアサキムは兵士に扮しようとして試みた

「オリジン・ローの力：僕の身に刻め」

成功しスーツ姿かつ尻尾を生やし例えヤミから見ても口調で判断されない限り分からないように顔と髪型も変えた

ガラスに顔が映った、顔はさっきのアサキムと違い少しだけ能面に近くなり髪型はオールバックになっていた、瞳の色も髪の色もアサキム・ドーウィンとはかけ離れていた

その状態のまま宇宙船に行った

すると宇宙船に降りるところだった兵士と鉢合わせした

その兵士は今のアサキムと似たようなスーツ姿の格好をしていた
兵士は変装したアサキムを見て即座に敬礼してきた

「お疲れ様です。何か用でしょうか？」

「行くべ…道に迷った、船もないので宮殿に送ってほしい」

少し慌てて普通の口調に変えた、口調こそ今もつとも気をつけなければならなかったためである

「交通機関でなんとかしてください」

「あんまりそういうの使った試さないから…どう乗れば良いのか教えてくださいー！」

兵士は…まじかよ…という表情をしつつ教えてくれた

現在地や目的の場所までだいたい覚えたのでアサキムは出発しようとした、その時兵士から付け加えのように

「お代は出せませんからね」

と言いつ渡された

「了解した」

アサキムは仕方ないと思いつそれはそれやりようもあると考えた

アサキムは宮殿の近くに寄る交通機関の近くのトイレに寄ると今度は自分を透明人間のようにさせた

その交通機関の上に、アサキムは飛び乗った

降りて徒歩含め一時間で目的地についた、その間にアサキムはさっきのスーツ姿が変わった、特に怪しまれはしなかった

「デビルーク王…僕は君の愛するものに爪を立てるだろう…嫌、既に心に傷を負わせたか」

その考えを拭うように横に頭を振りアサキムは宮殿の内部に突入した。

すぐに走る兵士と目が合ってしまった、ランニングなどではなく急いでいる状態と見える

「サボリか？お前」

「そうじゃない…今来たところだ」

「ちようどいい、お前」

兵士はアサキムの肩に手を置いてきた

「色々足りなくなってきたから代わり一緒に持って来てくれないか」

アサキムは渋々了解した

「何故そんなことに？」

「ヤミ様が来られないというわけでモモ様に植物の友達をお連れいたいただいたところその植物の友達は水鉄砲が強すぎて訓練用の鎧に穴が開いたり急に火い吹きだして火傷を負う奴が続出し…」

「なかなかの惨状だな」

そして兵士に導かれ進んでいった先の部屋には担架や包帯が有った、それを持って（人はいないので片手で担いで）部屋を出たその時

「へいしさんたち、ちょっとどいて」

ぶつかるとような衝撃が走りアサキムと兵士は横に一回転した

犯人は子どもようだった

「ごめん、へいしさん」

ぺこりと頭を下げすぐに走った子どもは現（きつと）王妃に近い顔立ちに紫に近い髪と緑の眼と先代デビルーク王に近い服装をしていたのが特徴的だった。また、その子どもには尻尾がなかった

「君は…」

アサキムが問いかけようとするや兵士が人差し指を縦に口に当てた

「しっ、王子様の目の前だ、タメ口禁止」

「（あれがデビルークの未来か）」

子どもが走って行く先に侍女らしき人間とこれまた王族に近そうな女の子がいた。今度はピンクの髪に暖色系の瞳かつかつて王女を着てた服の色違いだった

「やっぱりここだったね、ラズ」

「ココ姉さん…何でわかったの？」

「もう少し逃げ方というものを工夫してもらわなきゃ、けど残念っ

もうお尻叩きは決定、よろしくね」

「お覚悟」

ラズは尻叩きをされる数秒前の姿勢にされてしまった

「尻叩きは勘弁ー」

「止めなくて良いのか？」

「あれはほぼしてくる相手が違うだけで一週間に一度はやるらしいからな、始まりは王子が王様の好物を食べてしまった時に王妃様から…」

「食い意地があの見え目ですごいな」

「あー!!」

心地よい音が聞こえた後ラズと言われた子どもはがくつと倒れた、泣きはしなかったがチーンという擬音が流れそうで見えていて哀愁を誘った

「見苦しいところをお見せしました」

ココはアサキムと兵士に頭を下げてきた、そしてラズのもとに駆け寄った

「無事ですか、ラズ」

「いたい」

「つまみ食いは改めるようになってみんなから言われてるのにね」

「たはは…」

「痛みが治まったら部屋に戻りましょう。春菜さんがミミ姉と風夏姉とアイス食べてるって」

それを聞くとラズの体はすぐ反応し、起き上がった

「治ったぜ」

先ほどの元気のなさそうな様子とは打って変わってはつらつとしていた、そしてラズはココと侍女と共にどこかへ帰った

兵士とアサキムは手荷物を運ぶ作業にあたった、アサキムは歩きながら質問してみた

「さっきの王子たち…尻尾なかったな」

「もう半分の半分までデビルークの血が薄まったからな」

「あの王子は…きつとララ様の子もだろうけど髪の色が…」

「セファイ・ミカエラ・デビルーク様の父君に髪の色が似ているそう
だ」

「なるほど」

会話を続けてるうちにアサキムたちは目的の場所まで着いた、兵士
たちは皆どこかに怪我や出血をしていた

「さあ、補充用が来た、これは置いてくぞー」

「よし、もう5人ぐらい一気に運べるようになった」

アサキムはモモ様に頼んできてもらった植物の友達を拝見した、一
見動く植物や人間の体に近い植物ばかりだが危害は少なさそうだっ
た。

「まだ必要そうだな、もう二人くらい必要になるか、おいこつち来
い」

兵士が呼びかけていると窓からコウモリが飛来してきた、そのコウ
モリは紫色を主な色としアートのような模様があった、アサキムはそ
のコウモリを見つめてみた、すると

「何をしているの？あなたの狙いは私…そうでしょう？」

そう言うコウモリはまた別の場所へ飛び立とうとしていた

「僕を誘うか…ならそれにありがたく応じよう」

アサキムは兵士を無視しコウモリを追いかけた

「おいっ待て！ちっ仕方ない、他動けるやつは」

アサキムは宮殿内を駆け回りコウモリを追いかけた、途中見回りを
してた兵士に気づかれないように動き追った先は…格納庫だった

進むごとに大量の宇宙船がそこかしこに並んでいた

その中に一機だけ人型の兵器が佇み異彩を放っていた

「こんにちは、不審者さん」

その人型の兵器の近くに黒咲芽亜はいた

「黒咲芽亜…君がスファイア・リアクターに目覚めたか」

「そう、あなたの求めるスファイアは私を選んだ、そしてね…できるこ
とが増えていったんだ」

コウモリは芽亜の体に密着し吸われていく

「使い魔を精製できるようになった…」

「意識を分断する感じでね、まだまだできるようになることが何なのか知りたいけどそれにはあなたが悪魔なの」

芽亜はその手を変身《トランス》させ砲台に近い状態にしアサキムに向かつてビームを放った

アサキムの手の近くが輝き剣の形になりアサキムはそれを払った、そのビームは辺りに当たっても特に破損はしなかった

「こんな戦いは不毛だ、僕らの交えるべき刃はただ一つ…：そうだろう？」

「そうだね…お互い様子見は終わりにして…：けど場所を変えよう、ここじゃない宮殿の外に」

「良いだろう、君の望む場で決めるとしよう、君が僕の心を貪るか、僕が君の魂ごとスフィアを貪るか」

一方そのころ…

「リトさん!!」

音を立ててヤミは扉を開けて入ってきた

「?・何だ」

仕事が忙しそうだったがヤミはお構いなしに用件に移った

「リトさん、芽亜を狙ってるやつがいます。兵士たちに城内に怪しい人間がいないか調べて下さい」

第五話 「知りたがる山羊」 前編

格納庫内く

「ここだと邪魔だから出てってもらおうよ、道は開けておくから」
芽亜がそう発言すると宇宙船などが出入り出来そうなほどのゲートが開いた

それをアサキムが見た瞬間芽亜が突っ込んできた、芽亜の手は既にバットに変身《トランス》されており快音と共にアサキムはふっ飛ばされた

「ここからなら着地点につくと死ぬるよ、だから早くあなたのロボットに乗り込まないと」

その話をアサキムは聞いてないが飛ばされてる間に変装を解き

「今が舞い踊る時だ、黒き獄鳥よ」

シユロウガを召喚した

芽亜が遠目に見るとまるで黒い騎士が翼を生やしたようだった

宮殿内く

警報が鳴りだした

「どこから異常が見つかったか分かるか？」

「お、映像見つけられました。映します」

モニターには黒い人型の翼を生やしたロボットが映っていた

「あいつです。あいつが…芽亜を狙っています」

「あれがか、よし」

リトは兵士たちに迎え撃つとその辺りの非戦闘員の避難させることを命じた

「話し合いに持ち込めないだろうか…」

「目的のために自分の身を貫かせる奴に通じるとは思えませんが」

「うーん」

「モモに協力を頼めないでしょうか」

その時モモと呼んでいた女性がやってきた

「呼びました？」

「好都合ですモモ、あなたの友達の力借りてもよろしいでしょうか

？」

「ええ、デダイヤルも準備したし行きましょう」

「俺は？」

「兵士の指揮でもしといてください、両方通じない気がしますし」

二人は駆け足でリトの元を去った

格納庫内へ

黒咲芽亜は悠然と翼を生やしてコックピットに乗り込もうとした
す、その時声がした

「行くのか」

「ネメちゃんいたんだ」

「あいつはいったい何なんだろうな」

「どゆこと？」

「あれに融合しようとしても上手くいかないんだ、霞を食らうみた
いで逆に何か損なわれるような」

「今から調べてくるよ」

「そうか、私がこんなこと言うのもあれだが気をつけろ」

「うん、じゃあ行こう『カプリコー・ネフェシユ』」

芽亜はカプリコー・ネフェシユと呼んだロボに乗り込んだ、機体は
瑠璃色に発光し格納庫の外へ向かい出した

一方そのころへ

宮殿の外でアサキムの乗ったシユロウガは迎撃されていた

銃撃、ランチャー、その他の色々な武器と多岐にわたるものだった
しかしいずれもシユロウガには効かずだった

「化け物があそこにいるぞ」

「化け物って言ったら先代デビルーク王は銃弾を指で止めつつすり
つぶして、粉しか残らなかったって聞くが」

「対惑星用ビーム砲が効かないって何なんだよ」

「そんなもの使用してたのか」

それらの声を聞きアサキムは

「君たちは余興に過ぎない、僕の求める獲物は黒咲芽亜ただ一人」
と呟いた

その時、高速で飛来する機体が一つ

全体的に赤色を基調とし人型の女性に近い体型かつ羊のような顔に純白の翼かつ尻尾といった見た目だった

「お待たせ」

「少し待ちわびたよ」

そしてその機体が止まるころお互いに構えだした

アサキムの乗るシウロウガは剣を召喚し、芽亜の乗るカプリコー・ネフェシユの両腕は刃物に変わりだす

「あれも変身トランスできてるっ！」

そして数回剣を両者は閃かせた

辺りには本当にうるさい金属音が両者が斬りつけた分鳴り響きだす

宮殿を背後にシウロウガは攻め立てる

カプリコー・ネフェシユは後ずさりしつつそれを捌いた

その内に両者は誰もいない場所に着いた

するとすぐカプリコー・ネフェシユは加速しだした

アサキムの乗るシウロウガはそれを追いかけてしようとす、がカプリコー・ネフェシユは手を元の形に戻しエネルギーの弾を手のひらから放出

シウロウガはすぐ受け身の体勢を取るがカプリコー・ネフェシユは尻尾にエネルギーを溜めていた

「来るか、だがそれでは僕は倒せない」

「デンジャラス・ビーム!!」

轟音、それに比例するかのようになきなビームがシウロウガに接触しだす

それは城内にも聞こえだした

「おれ知ってる、こーいううるさい音たてるの近所迷惑って唯ねーちゃんが言ってた」

「近所迷惑ってレベルじゃないけどね」

ラズはアイスを口のまわりにつけつつ双眼鏡で二人の戦いを見ていた

「男の子ってあーいうの好きだよねー、一番年の近い異母弟もそう」
「おれは兄さんに比べるとそこまでないぜミニ姉さん」

話はアサキムたちに戻る

シユロウガの胸部分は少し溶けだしていた

しかしそこまででありちよつとしだせば再生が始まる

「ナノマシン由来じゃない回復方法：素敵（ハート）」

「君の姉には一度見せたけど死ねないのは何も僕だけじゃない、シユロウガも呪われてるのさ、無限獄に」

「あなたたちに課せられた呪いは…いったい？」

気になる、知りたい。その気持ちを胸に秘め叫んだ

「お姉ちゃん、モモちゃん、いるんでしょう、力を貸して！」

すると樹木がシユロウガに絡みついてきた

手に、足に、絡みついて捕らえだす

「第三王女モモ・ベリア・デビルーク、彼女が導いたのか？」

彼女は植物と心を通わせる能力を持っていた

「だが簡単な話さ…ドラゴンでもない限り動物と植物なら…獄炎よ、凶鳥と形を成し、焼き払え。トラジック・ジエノサイダー」

シユロウガの手のひらから魔法陣が展開され鳥の型をしたエネルギー体が飛び出した

そのエネルギー体はモモが放ったであろう植物に向かい衝突し、植物は燃えだした

途中で水鉄砲が飛びそれは小火で止まった

「ならば…ラスターエツジ!!」

シユロウガの額からエネルギーが集まる

しかし上空からヤミと、白く禍々しい甲冑を身に包んだ男から邪魔された

「協力感謝します、ザステインさん」

「貴様のためではないがな」

そしてカプリコー・ネフェシユは翼を一つ目のコウモリ二匹分に変化させた、それに応じてカプリコー・ネフェシユは緑色に発光しだす

「精神照射《サイコ・シャワー》」

ヤミ達が避難した後コウモリはその大きな目玉からビームを雨のように放った

シユロウガに当たるが効果はないように見えた、しかし

「侵入成功《ダイブ・イン》」

「なるほど…狩られるのは僕だった、そういうことか」

アサキムは自嘲的に呟き眠るように崩れ落ちた

シユロウガの動きが止まりヤミは芽亜の機体のもとに駆け寄った、

しかし芽亜はコックピットを開ける様子もなくじっとしていた

「いつもの精神侵入のようなものですか」

「ヤミちゃん、リトさんが来ました」

リトとモモがやってきた

「芽亜、ヤミ!!…無事か」

「遅かったですね、おかげで芽亜がそのまま支配し捕らえればもう…」

「無用な心配で良かった。ヤミと芽亜なら大丈夫だろうけど」

「しかし、こいつがどの惑星のものなのか調べる必要がありますね」

一方そのころ、

「よーし」

そこは精神世界のようなものだった

芽亜が離れたところ、密封された場所からでも相手に侵入できるよ

うに、スフィアの力を利用して構築した

芽亜は念じてアサキムの隣に移動した

「私、あなたのこと知りたいなー。主観だけじゃなくて、抜けたかもしれない記憶も、覚えてる記憶も、ゼーんぶ」

改めて、侵入開始

「これが彼の歩んだ道…?」

第六話 「知りたがる山羊」 後編

私は黒咲芽亜、デビルーク王である結城リト先輩のハーレムの一員だよ。ハーレムって後宮とも読めるけどそれはさておきこの私、この世界における私はスフィア・リアクター

スフィア・リアクターはスフィアっていう全部で十二個ある人一人楽々越すぐらいの大きさの球体選ばれた…で良いのかな？まあそんな感じ。スフィアの名前には人の感情をそれっぽく述べたものと十二の星座の名前で構成されていてね、私のスフィアは「知りたがる山羊」好奇心が扱うための鍵になるの

これがなくても変身《トランス》能力で人の記憶は読めるけど記憶って抜け落ちたものだってある、主観で見えちゃうから、人って、それはそれで見て楽しいけど

スフィア使えば人の過去を知ろうと思えばいくらでも知れるみたい、例えば先輩の赤ちゃんの時とか初めておねしよした時とか…気味悪がられたりしないかって？口に出さなきゃ大丈夫だったよ、もつとも…口に出さなくてもどうにもならない時もないことはないけど

このくらいで良いかな？今はわざわざ私のスフィアを取るためにこの世界に足を運んできた呪われし放浪者さんの過去を探つていこうと思います、なぜって探つてみたいだけだよ？

じゃあよーい、スタート

見えたのはどこかの格納庫…？

そして…翼を生やしたような呪われし放浪者さんに通じる機体とそれを作った人みたいだった

作った人がその機体を見る目はペケちゃんってロボットを作った第一王女ララにそっくりだった

ああ、そうそう…スフィアの力でペケちゃんの記憶も抜け落ちなく読み取れるようになったよ…私の機体の中って限定されてるけど…機体に乗ってないとスフィアの調子悪いな…

「というか何で初めに機体なの？呪われし放浪者さんの情報知りたいの…次行こう、次」

そしてちよつと見えたけど目を引くのはデビルガンダム…という物で、すごく禍々しくて歪な見た目だった

私たちと同じで体がナノマシンで出来てるけど自己増殖、自己進化、自己再生の機能を持つてるんだって、この機体自体はすごく優しい『兵器』だよ、だって私たちと違って惑星の環境を再生させるために作られたんだから…けど、人が人を憎む気持ちに触れて悪魔に変貌しちゃった…

後、デビルガンダムをもつとも強く進化させるには強い肉体の女性かな？が必要らしい、生命を産み出せる。そこがデビルガンダムには重要なんだって

もし私たちがこいつを攻略しようとするればリト先輩に精神面は丸投げしなくちやいけなさそう……もしの話だけだ

次は…呪われし放浪者さんがもうこの世を去りそうなおじいさんからケーキと一緒にベルトを受け取ってる…

「ハッピーバースデー!!」

「仮面ライダー？電王だけじゃない?」

思わず叫んじやった、宇宙には観測されてないけど地球には仮面ライダーがいっぱいいる……らしい、やっぱり並行世界をまたいでいかなきゃどうしようもない、お姉ちゃんがダークネス化してワームホール作っても別の世界に繋がるわけでもないし

呪われし放浪者さんの受け取ったのはオーズのベルト…

「ありがとう、これは僕がいつかスフィアを使うための感情を高めなければ使いこなせない、正に指標さ」

「欲望とは高めるものではない、欲しいと思えば欲望がついてまわるもの、忘れないでくれたまえ」

欲望…ああ、「欲深な金牛」その名前の通り欲深くないと扱えないやつか…

その他にも色々な仮面ライダーがいたよ、あんまり呪われし放浪者さんは関わりようとしてないけど一部お姉ちゃんに見せたいものが出てきた、クウガ…とか鯛焼き名人アルティメットフォームとか

私たちの情報も少しあった、殺し屋クロって人が別の私たちの世界

にしていること、別の世界の私はさそり座の生まれだということ…：他は当時とはあんまり変わらないうか、イマジンの噂以外…：変な気分だよ、昔の私とは言い切れない私を見るのは

銀河警察にも色々種類があるってことがなんとなく分かった、特にデカレンジャーとお姉ちゃんとは引き合わせちゃダメ。勇者の方や宇宙刑事ギャバンはまだ良いけどデカレンジャーの必殺技でジャツジメントされたらお姉ちゃん赤丸確定だよ、効くかはわかんないけど素敵!!もう少し…調べてみよう

そう思うと何かが見えた、黒歴史の真の意味に通じるような…：あ、何かが見える…：全てを滅ぼす厄災…：人間として…：こうなりたくはないと思える存在…：あ、もう見えなくなった…：なるほど、これが黒の英知…：この人を捕まえたなら探しに行くのも良いかな

次は…：さつき見た厄災のうちおじいさんの方が呪われし放浪者さんの機体に近づいてる…

? 何で呪われし放浪者さんの過去を調べようとしているのに呪われし放浪者さんの機体映るんだろう、あんなに黒い格好するようになったいきさつとかお姉ちゃんとの戦いで呪われし放浪者って名乗った理由とかも知りたいのに、機体のことを調べれば分かるのかな…

そろそろお姉ちゃん達がイライラするのかな…：後少し調べたら一応肉体を支配して捕まえないと

「やめておけ」

え、誰…?!

「その先は闇だ、果てなき好奇心を持つ女よ」

自分で果てなき好奇心と言っておいてその先は止めろって言っても説得力ないな、あつかんべーと思いつつ私は呪われし放浪者さんの情報を探った

そして、ある光景に直面した

空に穴が開き黒く紅い液体がそこから流れていた

その場に居合わせるのには黒いコートを羽織った地球の日本人風の目の死んだ男とザステインさんとはまた違うザ・騎士と言った感じのオーラをまとった女の子…：アルトリア・ペンドラゴン、彼女が?

それと金ピカの鎧に身を包んだ男…お姉ちゃんとその子供に髪の色と瞳の色がそっくりだった、大人になって髪を逆立たせたらああいう風になるのかな…もしあの子が大人になれたのなら

まだ灰色だった呪われし放浪者さんの機体に見えなくもないものは、孔の一番近くにいたため真つ先に浸された、孔からこぼれたものは流れた先で死を作っていた…何でそんなところにいるのかよりもまず先にそれをくればどうなるんだろうと考えてしまった。つい考えてしまったんだけどそれを示してしまうのが私のスフィアの特徴で、瞬間私に液体がかかった

それが今見たあれだと知っても遅かった、それはネメちゃんが私の体に乗っ取った時に私にまとわりついた闇に似てるけど違う、それは悪意…この世界全ての人々の悪意を結集したもの…耐えられる？こんなもの

耐えられるとすればそれは太極…それかなナナちゃんのお父さんでもしかしたら…

「消えろ…死ね…死ね…」

逃げようとしても、液体から手が伸び私を掴んだ、そして呪詛とも呼べる程の悪意に私は飲み込まれる

耐えるのも逃げるのもできない私はただ叫んで痛みを和らげようとすることしか出来なかった

「イヤアアアアアアアアアアアアア!!」

どうすれば良いんだろう…これの元々は…何だろう

その時スフィアが…示してくれた、そうなんだ…なら…

そして私は賭けに出た、スフィアの力で見いだした悪意ならスフィアの力を使えば…何もしなければ死ぬ、うまくいく確立は低いけど…だから私は祈った

呪われし放浪者さんの因子…ある程度の目処はたった…これじゃ彼の夢から覗いてもたどり着くのは…けど、これはネメちゃんがお姉ちゃんを騙した時に言った事より残酷な…次に目覚めた時に言わないようにしないと、次があればね…もう…限界…お姉ちゃん、先輩…ごめんさい…

第七話 スファイア争奪戦

そこは夢か幻か…女が苦しんでいた。夢にしては耳に残る叫びが聞こえ、周囲は闇に覆われ徐々にその闇と同化していった

ああ、彼女は闇に堕ちた…そう感じると共にアサキムは目覚めた
目が覚めた時シユロウガはまだ植物に手足を縛られていた、シユロウガ越しに辺りを見回すと4人の男女が会話をしていたのが見えた

「遅いですね…芽亜」

「大丈夫かな…」

「大丈夫でしょう、彼女なら」

「肉体の支配をするなら早く済ませて欲しいものですね」

既に勝利しているかのような様子でアサキムがどうなっているかはまるで気にしていなかった

それはアサキムからすれば油断していると言えるがアサキムにとつて好都合だった、一人頭数を減らしたとしても今ここには人外級の実力を持つ人間が3人いる、シユロウガは破壊はされないとアサキムは考えるがそれでも邪魔であることに変わりはない

勝負は一瞬、そして急がねば

「罪炎の燭台を、君に捧げよう」

アサキムが言うのとシユロウガから黒い炎が舞い、植物を焼き始めた、4人は驚くがアサキムはそれを無視し自由になった事を確認しつつ芽亜の下に突っ込んだ

「させるものか」

ザステインはいち早くイマジンスードと呼ぶ発光した剣をシユロウガに振りかざした

アサキムはシユロウガの右手でそれを受け止めた、親指と人差し指の間にほんの少しヒビが入りだす

「まだいける？…だったらお願い」

モモは既に消火されたさつききの植物を再びシユロウガに差し向けた
アサキムはザステインを盾にしようとする事で回避を試みた、しか

しザステインは既にシユロウガの手から離れだし地面に着地している

「ふむ…硬いな」

シユロウガは距離を詰めるため空を飛んだ

4人は応対しようとするが間に合わずシユロウガはカプリコー・ネフェシユのいる場所まで到来した

「黒咲芽亜、君のスフィアはこれより僕の物になる」

アサキムがそう言うと言いつつシユロウガの左手から剣が出現するとシユロウガは構えだした

「止めろ、止めろー」

リトの制止は間に合わずシユロウガはカプリコー・ネフェシユを連続で切り裂いていった

シユロウガの攻撃がやむ頃シユロウガの左手にはカプリコー・ネフェシユのスフィアがあった

「なぜ…やつは動けるんですか…?」

「なぜ彼女の肉体支配から逃れたのか…コックピットの中を覗いてみるといい、答えはそこにある」

「ヤミちゃん…」

「俺も行くよ」

「じゃあ、引つ張りますよ」

ヤミは翼を生やしてからリトを連れてカプリコー・ネフェシユのコックピットの内部に行った

「芽亜、芽亜、どうしたんですか? ツ!」

ヤミは驚きを隠せなかった、黒咲芽亜はそこにおらずただ黒い影のみがそこにあった

「嘘…どうして…芽亜!! 芽亜!!」

いつもこんな風でなかったはずだった

「その原因はおそらく僕だ」

「芽亜に何をした!?!」

「覗いてはならないものが有ると言うとき、彼女はおそらくそれを見たんだ」

「そんな…」

「(おそろく…?)」

「ともかくこれで僕の目的は果たされた、もう会うことはないけど
じゃあね」

シユロウガはクルリとリト達に背を向けた

「おい待てよ」

「感じるよ、君の怒りは至極当然のものだ」

「人一人殺したのに何平然としてるんだ」

「こういう戦いは初めてじゃない、むしろ軽く済んだ方だ」

「お前…こういうことをずっと続けてるのか…?」

「そうさ、デビルークの王」

「止めようとか考えないのか…」

「君と知り合うまでの金色の闇と案外一緒かもしれないね」

「?どういうことだ?」

「少し隅に寄ってください、リトさん」

ヤミはシユロウガに近寄った

そして能力を解放

衣装の露出が増え出すと共に一気にシユロウガに近寄った

シユロウガのスフィアを持つている腕の関節辺りを分断した

「君に眠るその因子…解放するのか」

金色の闇は能力を解放すると戦闘能力が格段に高まる、その名を…

ダークネス

「あなたのせいで芽亜は死んだ、芽亜が悪いかどうかなんてどうでもいい。殺します」

そしてまず先にシユロウガの腕とそれが掴んだスフィアを狙った

「こんなものがなければ、芽亜は!!」

細切れにしようとヤミが試みたが上手くいかず飛んでいった

「シユロウガに届きうる力にはムラがあるようだね」

アサキムはちよつと困りだした、このまま時間が進めばスフィアは

別の世界に移動するかシユロウガの腕を搭載機にしだすのではと

「シユロウガ!!その腕を一刻も早く我が物としろ」

シュロウガは飛んでいった腕を追いかけた

「モモ様、お友達の力をお借りしても」

「ええ、捕まえてね早く」

早くという言葉に圧を感じつつザステインはモモの他のお友達の植物に飛ばされた

「オレは…」

「宮殿に、帰って兵士でもよこしてください。」

「そうはいくか、ヤミが…」

「いいえ、大丈夫です」

「そうかな？」

アサキムを一度殺した時に聞こえた声が再び、聞こえた

「…ええ」

リトは渋々宮殿に戻った、そしてヤミは飛び立つ

宮殿近く…

「あ、なんか落っこちてくる」

シュロウガの腕が落下してきた、スファイアを掴みつつ

「科学研究部の玩具か？あれ」

「あれ宇宙船に取り付けるとすごいらしいな」

「噂じゃ王様の嫁の所有物とか何とか、去年から」

「去年って言えばどっかの星の内乱に介入しに行ったっけ」

兵士たちがそう話しているとシュロウガが兵士たちの視界に入ってきた

「来た」

兵士たちは銃を構え、撃った

しかしここでもシュロウガは無傷だった

「くそーどうすれば、あ」

ザステインが空からやってきた

「親衛隊隊長」

そしてシュロウガに向かって剣を振るった

「はあー！」

「僕の邪魔をするなら堕ちてもらおうよ」

アサキムはシュロウガの残りの腕でザステインをはたいた、ザステインは勢いよく地面に激突した

「隊長ー！ーウ」

「あんた俺たちにとつての憧れでしたよ」

「美人で金髪でお嬢さまで年下の妻とかわいい子供を置いて逝くなんて」

星を見ると兵士たちの目にはザステインが礼儀正しくしてる姿が見えた

「許さねえ、あの黒いの」

兵士たちは尻尾からビームを放とうとした

「早まった真似をするなー!!」

ザステインはボロボロになりながら立ち上がった

「隊長、ご無事でしたか」

「(実は距離のせいであまり上手く聞こえないな) これしきの痛み、ナナ様は親友を失ったのだ」

「償いはできないけど…無意味にはしないさ」

アサキムはシュロウガと共にスフィアの元に向かう

「待て」

そしてヤミがやってくる

「はあー！ー！ー!!」

高所を飛行してからによる強烈な跳び蹴りによりシュロウガはバランスを崩した

「届かないとはいえさすがに見事だ」

シュロウガはスフィアに近い…だが一回は死ぬかもしれない

「これで終わりです」

「加減は間違えるな」

「分かってます、惑星断刀」

その時に頭の片隅に何故芽亜はスフィアに固執してしまったのかと考えた

それを振り払うように巨大な光の剣が伸びシュロウガを両断した、そしてシュロウガは爆発する

「敵は取りましたよ…芽亜」

「果たしてそうかな」

周囲は驚いた、ある惑星を切り裂いた…ヤミの必殺技を受けて無事だったことであつた

「無限獄の呪いは当然シクロウガも受けている」

「さっきの腕は…」

「君の憎しみが僕たちの呪いを貫いた、けどその後君は押さえ込もうとした…からかもしれない、彼女がスファイアの力を精神に侵入すること以外に使えば僕ももう少し倒されていただろう」

しかし…とアサキムは考えた

彼女を覚醒に促したのは一体何だろうか

それ相応の行動でもって感情を揺さぶらなとスファイア・リアクターにはなれない

手間と散らす命が少ないのは良いこと（良くない）だが今更のように疑問が湧いたその時

スファイアが発光しだした

「リアクターはもういないはずだが…暴走？思った以上に今ここに知りたいと思う心が充満している…？」

周囲のアサキムやヤミ、その他の好奇心によりスファイアは暴走を始めた

一方そのころー

少女は母親の元に駆けた

「あ、ママー」

「どうしたの、ミミ？ママはリト達に加勢に行くから」

「ちよつと来て、私どうすればいいか…」

「うん、何ター？（リト、もう少し遅れそう）」

第八話 過去からの亡霊

ある日宮殿の夜の内に起こった出来事らしい

黒咲芽亜は宮殿に起こった異変を調べていた、正しくは兵士たちに起こった異変を…兵士たちは石化していた、それも何かに驚いていた様子で

試しに芽亜は指で触ってその指をなめてみたが石のそれだった

「これは…兵士たちなの？」

試しに芽亜は調べてみた

「ちよつとチクツといくよー」

髪の毛をトランス変身させ針状に変え人にとつての二の腕の部分に刺した

兵士の記憶らしきものが浮かび上がった

その兵士はもうすぐ結婚するらしい

「お幸せに（本物か…）」

行く先々でそんな光景で溢れかえっていた

「これは…ちよつと前から開発されていた石化レーザーガン…名前何だったっけ」

現デビルーク王…結城リトがデビルーク王になりたての頃だった

地球の人間達の知識からアイデアもらって何か作ってみよう

という提案を誰か研究開発部の人間がしそれを元に作られた非殺傷武器だった、ボタンを押す間生物反応を持つ者を石化させるビームが発射されるタイプらしい

1日の半分の間覚めない眠りに襲われるようなものらしい、かといって寝てるわけではないからどうでもいいがくらった直後も眠ることはできるとか

もうすぐ使えるか試験をする手はずになるらしいが誰かに奪われた…そうでもなければこんな無差別に撃つ必要はない

おそらく侵入者だ

「おかしい行動してるやつがいるのに何で警報ならないの？」

芽亜は走ってデビルーク王の嫁達の部屋に向かった

「お姉ちゃんや先輩、ララ先輩のいない時に」

とある星で内乱が起きたらしい、それを鎮めるためにリトさんは仲裁に行った、その時ヤミ達もついていった

それはもうすぐ終わるだろう

芽亜は訳あって別行動を取っていたが

自身の能力も併せて芽亜はすぐに目的地にたどり着いた

「みんな、無……事じゃないか」

みんな石にされてしまっていた、企画通りなら無事ではあるがしかし……今この場にいない人間もいた

「ラズちゃんと……あの子がいらない」

ヤミの子供とデビルークの王子がいなくなっていたのだ

ラズはともかくヤミの子供は夜更かしはしなかったはずだった

すぐ別の扉を勢い良く開けて搜索を始めた

近くで急に明るい場所に着いたと思うとその辺りのトイレの入口でラズと遭遇した

「どうしたの？ラズちゃん」

「トイレ……」

芽亜は呆れてため息をついた

「水飲みすぎだよ」

「もらさずに済んだぜ、けど今戻ったら唯ねーちゃん怒らないかな」

「怒らないよ、今日は」

「お、……どゆこと？」

「まあ見れば分かるかな……ちよっとお姉ちゃんはもう少し夜更かししてくる」

芽亜が走り去って行くのをラズは手を振って見送った後部屋に戻った、石になった人達を見つけて試しに指でコンコンと叩いてみたのは後の話

芽亜は色々な場所を隈無く探した、そしてついに見つけた、石になっっていないヤミの子供を引き連れている男を

……ヤミの子供は眠っていた

デビルークの兵士の格好をしているがテロリストをやっていたよ
うな……暗い雰囲気だった

「その人、止まって」

芽亜は自身の腕を大砲の形に変身させ男を狙った
運良く当たらなかつた男は逃走を続けた

「止まらないと、撃つよ」

「やってみろ」

男はヤミの子供を盾にしていた

「人質とか誉められるやり方じゃないね」

男は大型の銃器を手にしていた、それはおそらくみんなを石に変えた銃なのだろう

男は撃つてきた、しかし避けられないわけじゃない速度だ

おそらく全部不意を突いたんだろうと芽亜は考えた

そうでなければ見た人間ほとんど：場数も踏んできたであろう
人達が石化するのは有り得ない

それをすぐにかいくぐり芽亜は男を斬った、ヤミの子供には触れないように気をつけて

するとすぐに男は手持ちの爆弾を爆発させた

「!くっ」

芽亜は爆風で少し吹っ飛ばされた

「自爆…? あっ」

ヤミの子供も自爆に巻き込まれたようだった

芽亜が駆け寄ってももう遅かった

「どうして…?」

芽亜は男に近づき精神に侵入しようとした

「この人…もうダメか…」

分かる記憶がもうない…心に入り込めない…死んだと言うべき状態にあった

「この子だけを狙ったの? ここを狙いに来たの? 何でこんなことしたの? 教えてよ、ねえ!!」

芽亜の叫びは無駄に終わった

芽亜はケータイを手に取った

「二大事だ」

その時また別の男がそのケータイに触れて首を横に降り出した、男と分かるのは体格だけで顔は仮面に包まれていた

「やめておくといい」

「誰？」

「もう誰でもないさ、それよりお前だ、知りたいか？何故こうなったか？何故金色の闇の子供を連れ去ったか」

「それを知ってるの？まさか」

「知りたければ…来い」

芽亜はヤミの子供だったものを抱いてついていった
命が消えてゆく感触、体温が無くなってゆく感覚を感じながら
そこは研究室のようであり芽亜はそれを見て驚愕した

「あ…あれは…」

スファイアだ

「お前なら適合できる、そう確信している」

芽亜は困った風にそれに触ると突如スファイアは光を放った

「あの男…兵器として生きてた頃のお姉ちゃんに親を殺された…？
それを遠くで見ってしまった妹はそれが遠因になって人とまともに会話できなくなった？」

「流石だ、今回の一件でお前の好奇心は研ぎ澄まされたようだ」

「黙れ!?今デビルーク側にいるとしても私達をそんな風に作り上げた奴らの一員に言われたくない」

「手厳しいな…うぐっ」

仮面の男は芽亜に腹部を刺された、倒れ込んだ男の腹から血が噴き出す

「人の痛みや恨みを利用するなんて…」

芽亜は困った

ヤミの子供を狙った男は最終的にヤミを暴走させる事が目的だった、男の狙った方法でそうなってしまえばもうヤミは戻れないかもしれない

どうすれば…と芽亜が考えた時スファイアが光り出した

正午辺り…石化は解けた、芽亜はみんなのところに戻った

「ただいま」

「芽亜ちゃん、ヤミちゃんの子が…」

「すまん、油断してたとはこのことだ」

「大丈夫だよ、ほら」

芽亜の後ろからヤミの子供がいた

誰かにとつての悪夢：ヤミが幸せに暮らすという悪夢を抽出してヤミの子供を再現させた

「(人の悪夢を抽出するスフィアの力：素敵：だけど…)」

でもそれは命という人形にスフィアという糸を絡ませたマリオネットのようなもの

そして一週間後ヤミ達は帰郷した

「ただいま戻りました」

そしてヤミに子供が寄ってきた

「いい子にしてみましたか?…(何故か聞こえない)」

子供がうんと頷くとヤミは子供をぎゅーつと抱きしめた、子供は嬉しそだった

「そうですか…:よしよし」

「あ、ヤミさんおみやげは?」

「そういう楽しいことはしていませんので勘弁してください」

やがて子供たちは寝静まった

「いつ見てもかわいいものですね、子供は。ティアが私を慈しんでくれた気持ちが分かる…:そう思いませんか?芽亜」

「……:そうだね」

「私は…:子供たちが戦う必要のない…:犠牲にならなくていいように以降の人生はこの能力を誰も殺さずに使ってほしいと思います」

芽亜は誰もいない場所に行った後、泣いた

「ごめんなさい、お姉ちゃん…:私のせいで…」

ヤミの子供を狙った男は仮面の男に利用されていたのと仮面の狙いは黒咲芽亜だったことがスフィアの影響で判明した

「私はもう…:降りれないんだね」

甥と呼べる子供を犠牲にして得た力…:後戻りはできない…:

「なら、その道を登りきるしかないか」
そして芽亜はスフィアに器を与えるべきと直感で判断した

第九話 あなたの名前は

「……」

周りはざわついていた、アサキムと同じものを見たのかどうかは分からないが

混乱に乗じてアサキムは急いでシュロウガで欠けた腕ごとスフィアを回収した、スフィアはどこかにしまい込み欠けた腕はシュロウガの元の位置にくっつけた

「これで少し経てば獄鳥は元通りになるか、しかし……」

スフィアの力によるものかアサキムの脳裏に映った一連の出来事は要約すれば金色の闇の子供は黒咲芽亜の言葉によればその昔兵器として生きていた金色の闇に家族を殺された人間に復讐として……さらにそれにより好奇心を刺激されてリアクターへと至ったらしい

「あれが真実と言えるなら彼女は……」

アサキムはシュロウガから降りシュロウガを隠すとヤミに近づいた、彼女は棒立ちし目の焦点は合わず紅の瞳は輝きを失っていた
アサキムに気がついたヤミはアサキムに声をかけた

「嘘……ですよね……あんなの……嘘に決まっています……嘘ですよね？」

それ以上は彼女が壊れる……アサキムはそう直感で理解した、だから黙る事にした

「何で黙ってるんですか……」

仕方ない……とアサキムは口を開いた

「知る……という行為にあるのは真実だけ……嘘や偽りで知るとは言わないだろうか？君が目にしたものがスフィアの力に寄るものならそれは真実だ」

アサキムは真実を告げる事にした、一度暴かれた秘密はもはや嘘で繕えるものではなかったから

アサキムがそう述べた直後アサキムは拳に変身《トランス》したヤミの髪に吹っ飛ばされた

「嘘に決まってるじゃないですか……あの子と一緒に私は……」

鯛焼きを食べに行った

図書館で本を読んだりもした

結城リトや他のリトの嫁、その子供たちとも楽しく過ごしてきた：事を語り出した

「幻だっって言うんですか？あの時から今までのあの子との思い出は」

ヤミの体は震えていた、口元も小刻みに震え何かを我慢しようとしていた

「紡がれた思い出に立ち入る資格は僕にはない：そこには嘘や偽りなんてないんだろう、ならば確かめると良い、その指で、その肌で、君たちの愛する子供を」

「芽亜の死んだ原因のあなたのその提案は信用できません、逃げようなんて思ってませんか？」

その時アサキムに向かって振り下ろしてくる剣が一振り

、ザステインだった

アサキムは剣を召喚しそれに応対する

「ここは私に任せるといい、行け」

「…必ず捕らえてください」

ヤミは翼を生やし飛んで宮殿に向かった

「君が彼女に気を使うとはね」

アサキムは剣をザステインに向かって振るった

「今奴は迷っていた、あの状態では力になるのは難しい（普通よりは上の腕のようだな）」

ザステインはそれを受け止めアサキムをよろけさせた

「君は見たのか？あれを」

すぐに態勢を立て直し距離を取った

「他の兵士たちで色々と違ったようだが（私はラズ様は王にはなれない：というのを見た、しかし信頼に値する仲間と共に歩む未来にあるのだという事は分かった、どういうことだか分からないがあなたの方はどう思うだろうか）」

その後も攻防は続いた

その内に

「ヤミ——！！」

と叫び近辺を走るリトとモモが見えた

「リト殿!」

「ヤミを見なかったか?」

「兵士たちがこの辺りにいるって言ってたんですが…」

「彼女なら、宮殿に向かったよ」

モモとリトは首を傾げた

「ザステイン、誰だ?」

「さつきは君の友を僕に差し向けただろうか?」

「ああ、あの人ですか」

モモはケータイのような物を素早く操作した、するとシバリ杉が現れアサキムに狙いを定め捕らえた

「じゃあ見張っててくださいいねザステインさん」

「了解しました」

アサキムは少し苦い顔をしつつ述べた

「結城リト、彼女を助けられるのは君だ、早く合流して側にいてやる
といい」

「後でテメーに聞きたいことがある」

宮殿内部へ

ヤミは子供のいるであろう場所に向かった

「(そこに行けば…あの子は変わらずに笑いかけてくれる、お兄さん
やお姉さんと一緒にいるかもしれないけど…西蓮寺春菜のところに
でもいるのだろうか)」

結城リトの子供は基本西蓮寺春菜と仲が良い

何故かは良く分からないがヤミの子供も例外じゃなかった

そう考えてる内にヤミは子供の部屋についた

心に迷いがあつた、それは確かめるのが怖いといった感情と言える
息を吸って吐こうとする瞬間にヤミは一気に扉を開けた

そこにはリトの子供達の中でも年長者たちとララ・サタリン・デビ
ルークがいた

「ヤミちゃん…」

王妃ララがうろたえていた、いつもヤミやみんなに対して明るく笑顔で接してくる（つまみ食いする前後の息子は別）あのララが

「皆さん、あの子はどこですか？それと何で砂が散らばってるんですか？古手川唯もお家の中で砂を持ち込むなって叱ってた…」

その発言に反応がないぐらいみんなは悲しそうだった

すすり泣く声がある場にいる人間の数程聞こえだす

九条凜の息子の真がそれを抑えるように手に持っていたカメラを渡してきた

「すみません…突然過ぎて撮る事しかできませんでした」

すぐにカメラの動画機能を使うと

ヤミの子供が徐々に変わっていく様子…

今さっきの子供達が駆け寄るも崩れて砂に変わっていくヤミの子供

すぐに母親を呼び出そうとする王女が映っていた

「ああ…そんな……」

「私…なんていえば良いか」

すぐにヤミはカメラを放り出して走った、それを真は壊れないようにキヤッチした

その後だった、リトがやって来たのは

「おいっヤミは、いるか？…どうしたんだ？」

「リト…あのね…」

ララは状況を説明した

「つらかったよな…俺も…つらい」

「ヤミちゃんを…助けて」

リトは走り去った方角を聞きヤミの元に向かった

廊下からまた別の場所にヤミは走っていた、遠くまで走っていくと人気は段々と少なくなってきた

「うっうっ…」

4年前…

どこかの病室く

ヤミはそのベッドで横たわっていた

近くにはヤミが生んだ生命が一人、男の子

そしてその生命の父親と祖父がその病室にやってきた

父親はスーツ姿が似合ってたが祖父はワイルドな方であるためあまり似合ってたなかった

父親である結城リトは緊張していた

「なーに初めてののように緊張してんだよ、お前は」

リトの父親の才培は横からリトの背中を叩いた

「初めてじゃないでしょう、リトさんは」

「俺が生む訳じゃないしヤミは初めてなんだ」

「まあそうだよな」

「心配性ですネリトさんは、そんなリトさんにはあなたの手でも握らせてあげましょうか」

ヤミは子供の手をリトに触れさせた

それをうっとりとしながら見た後才培は本題に入った

「そーいや名前は決まったのか？ヤミちゃん」

「ええ」

「あー」

結城才培は残念そうだった、自分で名前を決めてみたかったのかも
しれない

「どんな名前だよヤミちゃん」

「モモさんから送られたものがあってですね」

そしてそれを子供が痛がらないように乗せて名前を告げた

「ヤミちゃんが決めた名前だ、気に入ってくれると良いよな」

「気に入ってくれる、ヤミが気に入らせてくれる」

「そうなるように頑張ります」

その後リトの妻達がやってきてその名前を告げると誉めてくれた
現在に戻る…

ヤミは叫んだ、息子の名前を、モモからもらった花輪にちなんだ名
前を

「ガーランド———！！」

第十話 chaos bringer

アサキムはシバリ杉に顔以外全て包まれた状態で捕まりザステインから簡易な取り調べのようなものを受けていた、アサキムは自分が何者であるかなどをとりあえず話した

「アサキムと言ったな、別の銀河なら分かるが別の平行世界とは：マンガの中だけではないのか」

「そうだね：熟しなかつただけだろう、次元を飛び立つ翼が：黒咲芽亜なら既に知っていただろうけど」

「あのスフィアは全部で12個あると言うのか：」

「そう、12の鍵は全て僕の狩るべき獲物というわけさ」

「全て取ってどうしよう？」

「僕は：太極に至り無限獄からの解放を望む」

「正気を疑うな：本格的に捕まえた際にまずアイスの刑にしてしまつても：」

アイスの間を置かずに食べると頭が痛くなる、これを利用して尋問を行うという方法がどこかで流行った尋問方法である

「理解できない話を聞きそれで正気を疑うのは改めた方が良い」

確かにアサキムの目は嘘やデータラメを話す者の目ではなかつた

「個人的な判断だがどちらにせよ、お前は野放しにはしておけん」

「何故かは問うまでもないけど：聞こう」

「リト殿の妻に刃を向けるという事はララ様やナナ様にモモ様ひいては我々に刃を向けるという事だ、それとお前はこれからも同じことをし続けるのだろうか？そして目的のために不幸を呼ぶ：ナナ様や金色の闇のように親しい人間を失う悲しみを背負わせるわけにはいかない」

「君の言うことは正しい：それはそうと金色の闇はきつと今さらなる悲しみに包まれていることだろうね」

ザステインは首を傾げた

「どういふことだ？」

アサキムはさつき「知りたがる山羊」の影響で見た出来事を話した、

それを聞きザステインはがく然とした

「そうか…そこまで主力を割いたはずはなかったのだが…」

「狙われたのは彼女の息子、突き動かしたのは彼女への恨みや妬みのようなものかもしれない」

「今、宮殿にいるはずのガーランド君は…どうなる?」

「あの使い方は僕でも知り得ない、どうなるかは僕にも分からない」

「ということはそれを確かめに行った金色の闇は下手をすれば…」

「彼女が自分を抑えられないならそれは彼女が人間である証左とも言えるし彼女は一人じゃないから抑えられるとも言える」

「ならば私は少し部下と連絡を取りつつお前を見張り待機しよう」

アサキムは疑問を口にする

「放つておいても良いのかい?」

「前に奴がダークネスとなった時私達のとつた行動はモモ様達に阻まれた、だから今度はどうにもならないと判断した後に対処しようと思う」

「その選択…後悔しないと良いね」

宮殿内部へ通路

「ガーランド…ガーランド…」

ヤミの目からは大粒の涙がこぼれ続けた

息子の死と自分が殺した人間の家族、それを隠した芽亜…そして芽亜の死

全てがひとまとまりに感情を揺さぶったためであった

「気分はどうだ?」

ヤミの目の前に現れたのは自分の息子を道連れにした男だった、その男を目にした瞬間ヤミの心の何かが弾ける

ヤミは自身の髪を変身《トランス》させその男の首をつかんだ

「ぐうっ」

男は苦しそうにうめき声をあげた、そんな中でもヤミにためらいはなかった

「返してください…ガーランドを…私達の息子を…返してください
!」

「おやおや…それはお前にも言えることじゃないか？」

その発言の後男の肌は溶け黒と灰色の肉体で構成された人間と同じサイズのロボットとなった

「誰です？」

「ミラーとでも呼ぶと良い…そして本題だ、今さっきの男に変身してみて思ったが…お前と同じ感情を宇宙にどれだけお前に感じている人間がいると思う？『弟を返せ』『兄を返せ』『妹を返せ』『姉を返せ』『父を返せ』『母を返せ』『息子を返せ』『娘を返せ』『恋人を返せ』『苦しい』『憎い』『悲しい』、お前が兵器として生きること拒んでも…消せない」

「……………」

「あの男が行動に走っただけでお前が刻んだ伝説の分の犠牲は…多いだろうなあ、一度惑星を切り裂いたんだから」

「やめてください」

「お前が覚醒した時、下手をすればお前の親しい友人達に憎まれていた…、破壊者としての運命と共に」

「何が言いたいんですか」

「つまりだ…兵器であろうと人間であろうとお前は憎しみから逃れられないという事だ」

「私は…殺したくて殺した訳では」

「なら聞くなぜ殺さなければ生き残れない場に墜ちたときお前は殺した？自分の死を選ばなかった？殺し続けた？」

「ティアに…私は…」

「理由は何でもいい、お前は生きるために殺した、そうだろうか？」

「私は…」

否定しようとした、だができなかった

「だがそれこそ我が主の新たな因子に相応しい、金色の闇…ユニクロン様の因子となれ」

そう発言した時リトが駆け寄ってきた

「ヤミー……」

「騎士の到着か、だがどうにもなるまい」

「……」

「誰かいるのか？」

ヤミの目つきにリトは何かを察し辺りを見回した、だがどこにも誰かはいなかった、とりあえずリトはヤミの手を握った

「ヤミ、俺がついてるから」

「リトさん…ごめんなさい」

「気にすんなよ…ヤミのせいじゃ」

「いいえ…私のせいです」

ヤミはきつぱりと言い放った

「私はどうして殺し屋になっただんでしょうね」

「俺や美柑に出会うため…てのはちよつと格好つけすぎか、あいつにはその辺感謝だな」

「美柑…どこに行っただんでしょうね」

「探してるんだけど…分からない」

突然ミラーはしゃべりだす

「ああ、良いことを教えてやるよ…お前の息子を返せと言ったな…実は俺達もそう思ってたのさ」

「どういうことですか？」

「(俺は聞こえないけどヤミだけに聞こえてる…?)」

「お前の息子もなかなかユニクロン様に近いものを持っていた、そちらに取り憑いておいて因子にするのも良かったがあの出来事が起こった…残念とはこのことだ」

「……」

「(満ちてきたな)」

ヤミは怒った、息子を利用してしようとしていたと何の悪びれもなく発言したミラーに対して

「許せません…」

「待っていた、その時を」

ミラーはヤミの体の中に入り込んだ

「…何を？」

「やはり人の憎しみもトランスフォーマーの憎しみも大差がない、

そしてユニクロン様：私の残留思念もここまでです、後は尖兵を手に入れることしかできませんがよろしくお願いします」

そしてヤミは急に翼を生やしどこかに飛んだ

「どうしたんだヤミ、待て!?!」

リトはヤミを捕まえようと自分も飛んだ

しかし、ヤミの足に届かずリトは落ち始めた

しばらく空中を泳ぐことによって切り抜けようとしたがダメだった

「あー!!」

下の階の床に激突するその時植物の弦が絡まりリトは助かった

「助かった…ありがとう、モモ」

「お役に立てて何よりです」

「(ヤミ…待ってる…)」

一方そのころ…

「星が急にやって来た」

「銀河ニュースで何も言っていなかったぞ?」

兵士たちの騒々しさが増した

「慌てるな、交信からだ」

「何が起こっている?」

「何か惑星の形をしたものが来ている…」

「特徴は目にすることは出来る?」

「特徴は…」

ザステインは指を差した、その方向を見ると人工的な惑星が一つ在った、橙色と灰色を基調とし人工的な角を生やしフラフープのように環があった

「星帝…ユニクロン…」

宮殿内部へ

「うっ…」

ネメシスはその場に倒れ伏した

「私はいつたい…」

どうなるんだろう…何かの入れ物にされかけている事は分かった

「おい、どうした」

兵士が駆け寄って来る、何も知らずただ犠牲となり

「来るな、今の私に近づくと…」

「苦しそうだぞ、お前」

その瞬間、ネメシスの目は赤く染まる…

番外編

一周年突破記念 前日譚、ある子供の半日

これはアサキムがこの世界に来訪する数ヶ月前の話…

宇宙は目立った争いも特になく平穏な日々だった

そんな中…

デビルーク星の王様のお住まいになる宮殿にて

「まずいぞ…」

宮殿の中で少年は一人道に迷っていた、名前は真、九条凜の息子であるため九条真という名前である

何故かと聞かれれば異母姉のミミ・ディア・デビルークと風夏と異母妹、異母弟達と鬼ごっこをしてたからとしか答えられない、名字に關しては一応母方の姓で名字をつける事になっている。理由はよく分からないがまあそういうものと真は考えている、時々会話する天からの声もそれで良いとの事だった、その時天からの声の言葉から哀れみと羨みの両方を感じた

「母上と唯さんからしかられるぞ!」

鬼ごっこ自体の事ではなくデパートを軽く超える広さの宮殿を目の届かない所までうろつく事と運動用の施設でもないのに走り回る事で（特に唯さんから）怒られそうだった、さらにまずい事に窓から外を見ると門限が近いような

「待てよ、唯さんは父上とお医者さんの所に行くんだっけ」

叱ってくる人達の中で特に厳しいのがいないのは心が救われる、きつと、多分、唯さんはおめでたというお腹に子供がいる状態なのかもしれない

「弟かな〜？妹かな〜？」

考えてもきりがないので深呼吸してリラックスしてから道なりに進んだ

遠くまで来たのはミミにタッチされるのを恐れての事だった、デビルーク星のものすごく強い王様の孫娘であるためかめちやくちや速

い、堅い、強い、(地球年齢換算) 6歳の時岩盤を割ったとも聞く。遊びとはいえそんな異母姉に標的にされるのは少し危険だった。他の妹達の事を考えればチクリチクリと何かが痛むがそれはそれである

「九条真語録その151：遊びこそ全力でやるのさ!!」

という事で今日もこれからもスタンス自体は変わらないだろう、番号と語録内容については天の声と相談して決めた、15番目は開いてるそうだ

まあどうせ門限まで間に合わないからととりあえず真は歩きながら母親達の対応を予想してパターン別で考えてみた

「母上、父上、ヤミさん、ナナ様、セリーヌの姉上は普通に叱つてくると考えて良さそう、優しく諭してくれそうなのが春菜さんと『僕達のママ』であるララ様、ああ：春菜さんは半々か、笑いながら圧を感じさせてくるのがモモ様とルン様、芽亜さんにネメシスさんはいつも僕達より帰るのが遅いから考えなくても良いか」

何故王妃であるララを『僕達のママ』と真は言うのか、それは自分との血のつながりがなくてもリトの子であるなら自分の子と同然と言わんばかりに可愛がってくれるからであった、他の父親の嫁も優しくしてくれるが彼女は際立っていた

話は戻るがやはり一番痛い雷を落としてくるのが唯さんだった、そもそも門限作ったのは彼女だ

「門限自体は必要かもしれないけどテンプレすぎる」
時間帯だった

本当に唯さんが病院に行ったのは好都合だった、最近真は叱られている最中彼女の怒った顔にも美しさを感じ始めてしまい

「やめてください目覚めてしまいます」

と言いかけてしまった事もあった

「まだ小学校入学したばかりだしそんな事考えないようにならないと」

それにしても宮殿は子供には広すぎる、あまり遠くに行つてうろろろしてはいけないと言われるがごもつともかもしれない。連絡を入れるには必要なものが近くにない、扱わせてくれる年齢にないのもま

彼女の名前は黒咲芽亜、父親の嫁達の一人であった。彼女と父親であるリトがあまりべったりしている所を見ていないので真にとつては父親の嫁の一人ではなく近所に住むお姉さんといった印象だった。見れる時間帯じゃないだけだろうと結論づけられるのはまた後の話。へそが見えてしまうような露出度の高い今も着ている普段着は腹は大丈夫なのかいつも真は疑問に思う

芽亜は真にバツクするよう促し、真が後ろに下がるのを確認するとダクトの隙間が見える部分を変身させてから切り裂いて穴を開けた

「うそー!?!」

突然目の前に刃物が生えるようにやってくるのはなんだかきつい

「大丈夫だよ、ほら、おいで」

芽亜はにつこりと笑い両手を掲げておいでおいでと合図を送った、真はダイブしてそのまま抱っこしてもらおう体勢になった、何がとは言わないが柔らかい感触がした、そういえば抱っこをしてもらおうなんて一年ぶりだったなと思いつく真だった

芽亜はゆっくり床に着地してから真を下ろした

「ところで、なんであそこから来たの?」

「それは…あはは…」

真は経緯を説明した

「んじゃちょっとこっち」

芽亜は何もない方向を指差し、真にそちらを向くよう促し、ケータイを用意した

「はい、チーズ」

一緒に写真を撮った、一応真はポーズを取った

その後芽亜はケータイを操作しだした、飛び跳ねて見てみるとこう書いてあった

『真君、確保』

写真も添えられていて、応答が来たようだった

「いったいどこだ、か…仕方ないか、ヤミお姉ちゃんしか見せてないし…あ、『あそこですか、私が行きます』、ヤバ『私が連れて帰るから

待ってて』、と」

芽亜はメッセージを打ち終わった後にケータイをしまった

「真君、私とママ達の所に帰ろう」

「分かりました、けどどこって一体…というかあれは…」

芽亜に抱っこされた後見えたが二足歩行型の大きなロボットが一体色々と調整されているようだった、全体は赤色で女性型のような細身のフォルム、かつ純白の翼があり頭に山羊の角とかがついていて

「気になる？なんだかヤミお姉ちゃんより食いつきがいい感じ、素敵!!けど男の子って別のやつが好きなのかな」

真はコクリと頷いた、もつとゴツゴツしてて乗り物感を感じて力強いのが好みだった。人はそれを勇者と言うだろう

「まあいつか、このロボットは『カプリコー・ネフェシユ』って名前なの」

いかにも山羊っぽい頭だからカプリコーと名付けたくなるのは分かるが

「ネフェシユって何ですか?」

「魂って意味だったかな…これ作るまでに色々あってね、魂は一緒にいようって言葉を込めてつけたの」

誰かに何かがあったのだと軽く言われた気がした、聞いてはいけなと思うその事を詳しく聞きはしなかった

「真君はどんな攻撃ができるか見てみたい?」

何かのスイッチを入れてしまったみたいだった

「その…大丈夫です?」

時間とか時間とか時間とか

「数分しかかからないから平気平気」

「見てみます」

そして芽亜に案内され真は一台のコンピューターのある場所に向かった

「これは?…」

「シミュレーターだよ、あんまりあれおっぴらに動かさないしね」
とりあえず真はその辺のボタンが押そうとしてみた

「待った、モード切り替えるから」

芽亜は慌てて真を止めてコンピューターをいじった

「じゃあいくよ、ポチツと」

なにかのシミュレーションゲームのような画面に切り替わった、カプリコー・ネフェシユの頭部と何か戦艦のようなものの先っぽが表示された

「今から表示されるのは使えるやつといつかできたらいいなってやつだよ、一部名前だけかもしれないけど」

トランス・スラツシュ

芽亜「はあっ」

カプリコー・ネフェシユの手が刃物になり戦艦を切り裂いた

「ダミー」……………

戦艦はHPが0になったので爆発した

「なんだか芽亜さんみたいですね」

トランス変身：体の一部を変化させる能力…だが刃物に変化させるパターンしか見ていない。初めて見た時は物心ついた時に自己紹介がてら見せてもらってだったような気がする、無論刃物とかに変えるので見せてもらう時は母親の後ろに隠れてからだだったが

「そりゃそうだよ、だって私のナノマシン使ってるんだし」

「……………へ？」

ナノマシン：メカの修復やあれこれに役立つ物で、マンガでやアニメでよく目にはする設定だった、芽亜の体内にナノマシンが有るのは知らなかったが

「献血する感覚で私のナノマシンを採ってあれ用に培養したんだ、使えるようにできたのは私たちを作った人達の残党がデビルーク軍の科学者達の中に紛れ込んでいたからかな」

芽亜はさらりと重要な事を言った…気がした

「苦労したよ、暇を作って…王族以外結構暇だけど、個人で組織の跡地巡って残った資料漁ったり銀河警察に侵入して聞き出したり…まああの過去の妄念に聞くのは間違いだっからお姉ちゃんや弟のためにもついでにグツバイフォーエバーしたけど」

「ええ…」

真は驚いた、何故自分にそこまでしゃべるのか

「ああ…これヤミお姉ちゃんとティアーユ・ルナテイクには内緒ね、顔合わせてないからまだ良いけどそいつらを見られたら一悶着ありそうだし」

ティアーユ・ルナテイクはヤミの…：肉親？そうとは言つてなかったような気もするし天の声も何か言っていた気がするが、それはそれとしてヤミは名字としてルナテイクを名乗っていた、名字もある方が良くのことらしい

子供心にも分かる、内緒とは言っているが子供には、違う、子供だからこそ内緒話というものを話してしまいたくなる。自分が痛い目を見ない限り…もしかしたら彼女は心のどこかで話される事を望んでいるのかもしれない、彼女の眼差しはいくらか期待に満ちていた、真が母親におもちやをねだる時の目線に似ていたから良く分かる

「というかいたんですか？弟とか、父上もヤミさんも誰もそんな事一言も言いませんでしたけど」

何故か知らないが違和感を感じた

「先輩もヤミお姉ちゃんも知らなかったから、仕方ないよ。ネメちゃんはそいつをデータで見てたから知ってたけど初めて見たときより肉体的に若返ってたせいで初見じゃ気づけなかったらしいし、それにそいつ感動の再会の時は呆れたくなるくらい何も知らない「人間」で、自分が兵器として生まれた事を全く分かってなかった。まあ私もそいつ知らなかったけど…ネメちゃんとナナちゃんと相談してそいつの事は他人のフリをしようって事にしたよ、何かあつて能力が使えなくなってるみたいできつかけがないと一生能力が使えなさそうだし、使えない事には色々言っても分からないだろうし」

「次行きましょう」

話が長すぎて理解できるかどうか分からない域に入ってきた

デンジャラス・ビーム

芽亜「とっておきだよ、デンジャラス・ビ（→）ーム!!」

カプリコー・ネフェシユの尻尾から威力の強そうな太い光線が発射

された

「ダミー」……………」

光線が直撃している戦艦にカプリコー・ネフェシユは光線に当たらないように近づいて尻尾で一刀両断した

「ララ様達なんか星人がモチーフですかね」

昔話程度には聞いていた、デビルーク人は尻尾からビームを出せるとか、王妃のビームの威力はすごかったとかどうか

「正解、でもエネルギー消費量までデビルーク人に倣ってしまったのがキツイ所かな」

サイコ・シャワー
精神照射

芽亜「教えて欲しいな…君の全てを」

この時だけ画面が変わらないせいでよくわからないが大量に緑色の粒子が散布されている事だけは分かった、他の武装とは種類が違うのか

「本当はもっとギミックあるんだけどね、『キュリオス・ウィング』つて名付けた翼を変質させたりとか」

「この攻撃で何がしたかったんですか？」

「ダメージを与えている感じがする一手ではなかった

「情報収集、後デバフ」

「はあ」

もっと派手な技はないのだろうか、剣による大振りの一刀両断…など

フロントム・リリーヴ

芽亜「私流の火焰の術、見たい？」

カプリコー・ネフェシユの両方の手のひらに魔法陣のようなものが浮かび上がると、それを敵に向かって掲げた。すると緑と赤が混じった炎の球が連続で飛び出した

芽亜「これだけじゃないんだよ」

敵の戦艦が炎の球に燃やされている間いつの間にかカプリコー・ネフェシユは後ろから戦艦に飛んでから落下するように近づき、

芽亜「いつけえー!!」

敵の戦艦の上に手を乗せ、魔法陣のようなものが手のひらに浮かぶと雷が放たれた

「ダミー」……………

芽亜「じゃあね」

攻撃の後カプリコー・ネフェシユはバック転を行い、戦艦から引くと人差し指と中指を立てた状態で頭を小突いてのあいさつを行った

「いったいなんですか？この技」

明らかに他の攻撃と何かが違ってたような気がする

「……………魔法とか魔術とか」

「マジですか」

魔法とかはアニメや漫画でしか聞いた事がない

「そんなものないって思うかもしれないけど、あるかないか、その狭間で揺れ動くものは確かめたくなる。そういった感情が私にこれを習得させたのかも、「知りたがる山羊」の力でね」

急に専門用語が出てきたので何を言っているのか分からなくなってきた

「分からないって顔だね、真君なら大人になる頃には分かるから安心して」

「僕だけですか？ミミ、風夏の姉上や他の妹、弟は？」

「うん、そうだよ」

姉や妹ではなく自分は分かる用語…いったいどういう事なのか見当もつかなかった

「次行こう、これが最後だし」

ワールド・オブ・ナイトメア

何も画面が変わる事はなく精神照射のように画面を変える事なく攻撃する武装でもない

「何も出ませんよ」

「あーしまった、これは使えないみたい、まだそこまでのステージに至れてないのか何か足りないのか」

「ステージ？」

武装使うのにステージが関係あるなんてそんなもの聞いた事がな

い

「だから今日はおしまい、さて、戻ろっか」

芽亜はコンピューターをいじって画面を暗くしたあとしゃがんだ
「じゃあ、乗って」

今度は芽亜におんぶしてもらった、母上達におんぶしてもらった
のも何年ぶりだろうか？と考えていると

「別に遠慮しなくてもいいよー、おいでおいで」
と甘く、優しい声が聞こえてきた

「(ララ様の声が…幻聴!?)」

「目はつぶってて、大丈夫だよ…私を信じて、行くよ」

真はとりあえず目をつぶり芽亜にしがみついた

目をつぶっていたからそれから先はよく分かっていない、ただ、空
気の冷たさが突風のように肌に当たり謎の浮遊感を感じ、そしていつ
の間にか彼女に背負われている内に眠ってしまった

「ははは…寝ちゃったんだ、おやすみ………真君じゃない真君が
さつきのを見てたら攻撃の原理分かるようになったかな?」

真には聞こえなかった。ダクトを通るなんて事をするから疲れて
しまったのだろうか？芽亜の背中に寄る事で安心してしまったのだ
ろうか？いずれにしろ…目覚めたのは次の朝だった

「おはよー、真」

「まさかの姉上か、予想外だよ」

声をかけたのは異母姉のミミだった、ピンクの長い髪が相変わらず
触り心地の良さそうだった。父親も母親も同じはずの彼女の弟のラ
ズが紫の髪なのは不思議なものだ

「え、何の事?」

「何でもないでーす」

「まあいいや、昨日は何してたの?」

真はミミに問われるまま昨日の出来事を話した、ロボとその武装の
紹介の時に言われた事は抜きにして

「真も大変だったんだね、私も妹たちと他の人達とママ達に呼びか
けて」

「……………ごめんさい」

「謝らなくていいよ、だから真も私の事怖がらないで欲しいな」

「言うほど怖がってたかな？」

彼女は強い、速い、頭も良い、おまけにかわいさもかなり…怖いというような感情は湧いてこないはずだ、ただ必ず負けるくらいで…それで警戒するのもまた恐怖につながるのかもしれない

「私が鬼になる時また遠くに行かれるかもって考えてましたら…一緒に遊べないじゃん」

ミミは一目で分かるほどしょんぼりとしていた

「次からは鬼ごっこ以外にしましょう、姉上」

「うん、そうする」

真のお腹は音を立てた

「お腹空いてきたな、姉上はもう食べた？」

「2時間前に食べたんだ、おいしかったよ」

「……………」

このままでは、夕ご飯に朝ご飯、両方抜く事になる。いつもご飯を食べる所にダッシュで行きたいがお腹が空いて動けない

「はい、ママが真君にこれを渡してって」

渡されたのは、一つの弁当だった

「これは…」

「ママ達を作ったんだって」

危険かもしれない、宇宙では王様だから嫁達がたくさんいても普通という事になってるらしい。婿養子でハーレムってなんや、まあラブコメハーレムものにツッコミ入れるのは野暮かと言ってくる天の声もあるが…そこはさておき、王様の嫁と聞き料理が上手いとはたして連想できるだろうか？真はできない。上手いと仮定しても彼女達が料理をしている所は見たことがないのでブランドとかありそうな気がした、叔母である美柑が関わってたなら昔振る舞ってくれた事を覚えてる分安心だったが

その時目線がたくさん真に向いているのが分かった、目線を感じた方向を見ると部屋の入り口に不思議な跳ね方をしたピンクの髪が2

つと金、紺、赤、焦げた茶色とカラフルにドアから見えていた、わざとなんだろうかと真は疑問に思った

「真？」

「嫌…なんでも。ありがとう姉上」

真はミミから弁当を受け取った、扉からの目線が喜びのそれに変わっていったのを感じつつ

妹たち（一括り）にも色々と言わなければいけない、だがそれは食べからの話だ。今は食べなければ

これはアサキムがこの世界に来訪する数カ月前の話…

ユニクロン編

第十一話 「暴走ーききき」

宮殿内部へ

リト達もユニクロンを見ていた

「あれは一体…?」

驚いているとリトのケータイに反応があった

「もしもし…」

「孫達は元気か?」

「あ、ああ…貴方の孫は…」

「…何があったかは後で聞いてやるよ、それより見えるか?あの惑星が」

リトは改めて突如現れた惑星を見上げた、天然でできる形状ではなかった

「見える」

「お前は何をするべきだと思う?」

「俺は…」

宮殿の外へ

アサキムの発言に辺りのザステインを含めた兵士たちはなにそれといった空気を発していた

「ユニクロンとは何だ?」

「この宇宙にトランスフォーマーは存在しているか?」

それを聞いた兵士は未だシバリ杉に縛られているアサキムに近づき

「質問を質問で返すんじゃない」

と言い放った

「始まるのは君の問いではない、僕の問いからだ」

「ぐぬぬ…」

「私が答えよう、トランスフォーマーだったな?トランスフォーマーと言われてもどの銀河にもそのような種族は聞いた事のない」

「ならば聞くといい、トランスフォーマーの話を」

アサキムはトランスフォーマーについての情報を聞かせた、そしてユニクロンにまつわる話も

「乗り物や動物に変形する金属生命体：植物はいないのか？」

「植物に関しては見た事も聞いた事も無い」

「モモ様をハブんな」

「僕に言われてもどうしようもないさ」

「話は変わるがサイバトロンっていうのとデストロンっていうのはずっと争い続けてるって本当か？」

「彼らは未だ逃れられずにいるんだよ、正義と悪の争いに：呪いのように（逃れられても新たな厄災は爪をたてるけどね）」

「その種族達の創世記に在るのが創造の神プライマスと破壊の神ユニクロン…」

「ユニクロンは別名カオス・ブリンガーと呼ばれている。混沌をもたらしものという」

「言わなくても分かる」

「だが何故ユニクロンはこの世界にやってきたんだろうか」

「知るかよ、それよりあれを壊せるのか、壊せるなら壊せばいい」

「壊せない、壊れるけど治るといった方がいいのか：それよりこのままだどこの惑星が命の危機に追われるんだけど」

アサキムが言い放った途端電子音が響いた

「すまん、もしもし…」

ザステインに向けてなのかザステインはケータイを手を取った

「俺だ、ザス」

「!?何用でしょうか」

電話の主に向かって急に改まり始めた

「誰でしょうか？」

「先代デビルーク王、ギド・ルシオン・デビルークだ。」

兵士たちの間で幻の雷が落ちたようだった、アサキムは平然とした態度のままであったが

「頑張ってるか兵士たち、まあいい、それより帰星途中に見たあの惑

星についてなんだが」

「どう撃退しましょうか」

「俺が行こうと思う、隠居してもまだ俺は健在という事を示してやらないと」

「分かりました、私達はどのように」

「奴はまず惑星外まで住民を避難させると言ってるから手助けでもしといてやれ、俺様も杞憂に終わらせてやろうと思うが、そーいやお前どこにいるんだ？」

「宮殿の外にいます、陛下がお帰りになる前に侵入者がいまして、そいつがナナ様の親友の死の原因となっております」

「そいつはどうなってる？」

「ザステインはアサキムに近づきケータイをもっとアサキムに近づけた」

「はじめまして、ですね」

「てめえが人の娘の友達にちよっかいかけたやつか」

「ええ、そのおかげで貴方の娘の友達の植物に捕らえられています、それと僕は目的のためなら貴方の娘でも例外なく牙を向けますよ」

「良かったな、今のところそれで済んで…用が済んだらお前に生きてることを後悔してもらおうつもりだが」

「ザステインは電話越しにギドの言葉に殺意が滲み出ている事を感じ取り冷や汗を流した」

「それはそうとユニクロンに挑むのですか？」

「あれの事を知ってるのか？」

「あれを人工物のように思ってるならそれは誤りであれば星帝…神を相手取るようなもの」

「俺様もなんとなくだが分かる、だが形があるなら壊せば良い」

「形の無い物も相手にしていると見て良いでしょう。憎しみ…とか」

「俺様はそろそろ行こうと思う」

「かの神の全てを破壊するのでは貴方に勝機は無いだろうと思いません、まずユニクロンが真の姿を現した時に首を狙うことをおすすすめし

ようかと」

「参考にはしてやるよ…覚えてたら」

ギドは通話を終え切ったようだった

「おそらくあの方なら」

「無理だろう」

ザステインは既に勝利を確信していたところをアサキムに否定され怒った

ザステイン「あの方が負けるとでも言うのか？貴様は!!」

本来なら胸ぐらをつかんでそうな勢いだったがアサキムは今顔以外シバリ杉に包まれていたためつかめなかった

「能力を開放する場所を間違えなければさほど苦勞せず勝てるけど、あの様子じゃ全て破壊するまで戻らなさそうだからね、幾たびか限界を超えて…」

ザステインは少し黙っていた、疑問にも思っていた

そこまで堅いのだろうか、鬼神と呼ばれる程の先代デビルーク王が限界を超える程かと

考えていると叫び声が聞こえた、一つ…二つ

声のする方向は宮殿内だった

「いかん、私はあっちに向かう、誰か一人こいつの見張りをして他は一人でも多く避難させろ」

ザステインは宮殿内部に向かった

「悲鳴による合唱が始まるか」

「何言ってるんだ？」

宮殿内部へ

ザステインが進むとそこには兵士たちが血まみれの死体となって横たわっていた

「何があつたのだ？」

ザステインが疑問に思っているとリト達の娘、とは言っても血のつながないマンドラゴラ系の少女がタルの中から出てきた

「セリーヌ様あ!!」

ザステインはセリーヌに駆け寄った、セリーヌは涙の跡と返り血が

ついていた、いつ見てもほぼ人間と変わらない容姿であった、頭に咲いている花を除けば

「大丈夫ですか？一体何が…」

「ネメシスさんが急に…兵士が私を逃がすために…」

セリーヌはそう言うのとまた涙を流していた

「そうですか…ここは私にお任せを」

「私も行くよ、パパにママや弟達が気になるもん」

ザステインはセリーヌと一緒に宮殿内を見て回った

宮殿の別の場所にて…

「ジャアツ」

「ぐはぁ」

兵士は倒れた、ネメシスの凶刃に

既に理性を失ったかのように何のためらいもなく、ネメシスは兵士の腹に剣を刺した

そして獲物を求める、動くものを

植え付けられた本能を、何の疑いもなく振り回す

疑えるかという事こそが疑問かもしれない

「やめえろー!!」

避難指示と勧告と他の惑星への伝言その他を終えたりトはモモと一緒にネメシスの説得を試みた

「どうしました、ネメシス？」

ネメシスは反応もせず、ただ変身して形作った武器を振り回すのみだった

「仕方ありません」

モモはキャノンフラワーを呼び出し、種子で砲撃させた

だがネメシスはまた別の…今度は盾に手を変身しそれを跳ね返した

跳ね返ってくる種子に追従するかのようになメシスは走る、そして再び手を剣に変身させた、刀身は光に包まれているようだった、光と例えるには禍々しいが

「グオオオオオ」

高いうなり声と共にキャノンフラワーに切りかかった

「ギャアア」

キャノンフラワーは真つ二つにされた

直後にモモから羽交い締めにされた

「何をしてるのかしら」

モモは精一杯怖い顔になってみた

植物相手なら簡単に恐怖に陥るがまたも無反応だった

「リトさん相手にもさらしいいい表情じゃありませんけど」

リトはもろにそれを見てしまったが何とか振り切つて説得を試みた

「ネメシス、俺だ、分かるか？」

その問いも無駄に終わりネメシスは顔を拳に変身させリトを殴り倒し背中を盾に変身させモモの腹部を押し出した、衝撃でモモは壁に激突した

追い討ちの如く手を光線銃のように変身させる

そして狙い撃った

モモは尻尾でビームを撃つて対応せざるを得なかった

収まった時モモはボロボロになっていた

「ううっ」

リトも立ち上がりながら語気を強めざるを得なかった

「おい、どうしたんだよネメシス」

「ジャアッ」

ネメシスはリトの心臓を剣で狙った

しかし一瞬、びくついた、剣先が鈍ったとも言える

その一瞬に戸惑ったのかネメシスはリトを放り出してその場を去った

「おい、待てよ」

「リトさん、手…貸してください」

「うん…」

一方その頃

「これは？何が起きている？」

不意に振動を感じた

「何も起こらないが」

するとシバリ杉はアサキムを捕らえたまま走り出した

「おい、待てー」

「君は…何を感じ取ったんだ？」

第十二話 「闘争―たたかい」

アサキムを捕まえているシバリ杉は王宮の内部に突入したようだった、目を一瞬でもつぶれば景色の変わるスピードで走られ、根っこでジャンプし階をまたぐが振動はもろにアサキムにも感じる程だった、振動は体が裂けそうな痛みが変わっていく

脱出できないのも困りものだった

その内にアサキムは王宮内で警報音を聞き取った

「感じ取っているのか？友もしくは主の身に迫る危機を」

シバリ杉は何も答える事なく突き進んだ

アサキムは血を流した兵士を見つける、だが生死を確かめる間もなくシバリ杉は移動したためどうしようもなかった

一方その頃く

警報は鳴りだした、原因はネメシス

ネメシスは次々と兵士を切り裂いていった

否、兵士だけではなく非戦闘員も例外なく無差別に、目に映る人間を順番に切り裂いた、剣で切り、刺し、盾で叩き、相手の銃弾を跳ね返し、銃で宮殿ごと撃ち、穴を開けた、抵抗してくる人間は抵抗できない距離で倒し抵抗できない人間はそのまま倒し続けた

特に何も疑問に思っていないかかったかもしれない、が先程結城リトだけは切ろうとすれば何か拒否しようとしていた、そのことに戸惑いを感じてはいたがもう頭にはその事はなかったものだった

ネメシスによって発される兵士の断末魔の叫び声は王子や王女のいる場所にも聞こえてきた

「ココ姉さん…まずくない？」

「うん…逃げよう、兵士をあんな風にしてくるやつは今の私達じゃちよつと」

「よしメンは急げだ」

「善だよ」

ラズは扉を開けココと一緒にいる春菜の手をグイグイと引っ張った

「春菜姉ちゃん、ひなんけいろ忘れちゃった」

春菜は仕方ないといった表情を含めた笑みを見せて

「そうね、ここをこう行つて…」

春菜が説明してる内にネメシスはそこにたどり着いた

「嘘…ネメシスちゃん」

春菜は驚きを隠せずにいる、彼女の変貌ぶりを見てしまつて、艶のあつた黒髪は乱れ浴衣に近い衣装はどこかボロボロになり何より以前の彼女は黒猫のような金色の瞳だったが今は白目の部分ごと赤色になつていた、そして

「ネメシス姉ちゃんは…わんちゃんごっこでもはまつた？」

「そんなわけないじゃん」

ネメシスが見えた時彼女は四足歩行でこちらにやってくるまで、またいつもなら少しは軽口をたたかずだがその気配もなく呼吸のみしかしてはいないようだった

「ルンちゃんからもらつた痴漢撃退用爆弾…使つてみよう」

春菜は安全ピンを抜き爆弾状の物体をネメシスに向かって投げた
投げられた物体をネメシスは即座に変身能力で潰した、直後爆発が起こつた

ネメシスの咳き込むのが聞こえたため

「今チャンスなんじゃねえか？」

ラズの問いから始まり3人はその場から別の部屋を伝つて逃げる事にした

逃げて別のフロアに向かおうとすると思渡せるのは兵士の死体ばかりで兵士は血にまみれ宮殿には穴が開いていた

春菜は口に手を当て目を瞑り涙した

ココはわけが分からず呆然とするしかなかった

ラズは兵士に近寄つて叫んだ

「兵士さん、しっかりしてくれよ…兵士さん!!」

ラズの叫びもむなしくこだましその内に原因となる存在が追いついてきた

3人が驚いているとネメシスは一番近かつた春菜に近づき拳で腹

を殴った、春菜は避けきれず床に倒された

ネメシスは馬乗りの姿勢で春菜に乗り髪を剣に変身《トランス》させ切っ先を春菜に近づける、春菜はその切っ先見て肌に冷や汗が湧き出た

「(リト君…!!)」

春菜は目をつぶって歯を食いしばり恐怖に耐えようとした、その時「させるかー」

ラズは突進してネメシスにぶつかってきた、子供がぶつかってくる分の衝撃や威力しかないためさしてネメシスをよろけさせたりダメージを与えるとといった風にはできなかった、ネメシスはラズの行動でラズの方に狙いを定めた、ラズは殴られ、壁に激突し気絶した

「ラズちゃん!!」

春菜はラズの元に走ろうとした、しかしさつきネメシスに倒された時のショックか立ち上がれず春菜は壁に激突したラズに向かって手を伸ばす事しかできなかった

壁に激突したラズにネメシスが向かった際ココがラズの前に立った

「弟に近寄らないで、近寄るなら私が相手をするから」

ココは震えていた、6歳だから仕方がないかもしれないが春菜は子供に守られてる自分が不甲斐なく感じた、自分が守らなくちゃいけないのに、傷つけさせたくなかったのにと考えていた

自分の娘は無事だろうかとも考えたがそれどころではない、ネメシスは望み通りにしてやると言わんばかりにココに近寄り刃を振り下ろそうとした

「やめてー!!」

春菜は叫んだ、叫ぶ事しかままならない分心から

己の無力感を嘆くように、それが夢なら醒めるように、ネメシスが正気に戻るように

叫びと共にシバリ杉が降りてきた、そしてココを庇いネメシスに切られた、アサキムもろとも

「シバリ杉さん…」

ココは気が抜けたのかへなへなと崩れ落ちた、春菜も同様でこちらは気を失った

シバリ杉はココの無事そうな声を聞き安心したのか目の光を失った

「友の大切なものを守るために…逝ったか」

アサキムは切られた箇所を触りシバリ杉の中から脱出した

「振動以外は君に縛られるのも新鮮で悪くはなかったよ」

シバリ杉の後ろで声がした

「あなたは誰ですか…シバリ杉さんはどうなったんですか」

アサキムは答えずただ回り込みココを気絶させ、ネメシスの元に戻った

ネメシスはアサキムに向かって剣を振るった

「その様相…見たことがある…そうか、君は混沌《カオス》の因子に縛られたんだね」

アサキムは剣を召喚しそれを受け流しネメシスを押し倒した

「どんな心地かな、心が闘争心にのみ支配されている気分は」

アサキムはネメシスの肩を足で踏み憐れみの表情を示す

「もつとも、今の君に話を聞くという理性すらあるのか疑問になるけど」

「グオオオオ!!」

ネメシスはもう一方の肩に連なる腕を銃にしてアサキムにそれを発射した

ビームがアサキムを襲い、ついでに宮殿の一部に風穴を開けた

アサキムはビームを直撃したが呪いのため死ぬことはなかった、しかしビームによる熱はしばらく消えない

アサキムはネメシスが変身《トランス》した銃を思い出した、ついでに剣も、それはスターセイバーやアストロブラスターに酷似していた

「うう…彼女はユニクロンを目覚めさせる3対の武具を模して変身《トランス》しているのか…つまりあのユニクロンは」

マイクロンに関わるユニクロンかもしれない

そうじゃなければこのネメシスがその武具に体を変えるなんてできはしないだろう、知らないから

アサキムが分析しているとララが走ってやってきた

「第一王女…王妃の到着か」

「変わった兵士だね、少しよろしくね」

「逃がすなら早くした方が良い」

アサキムはネメシスと剣戦を続けた、変身《トランス》三人娘はアサキムより戦闘力は上だった（シユロウガに乗って戦うならその限りではないが）、だが今のネメシスと相手取る場合のみ受け流し方を知っておけば防戦なら上手く立ち回れるようだった

その間にララはまず春菜に近寄った

「春菜、心配しなくて良いからね」

春菜をワープさせた、次にココに近寄り

「ココ、大丈夫だよ」

最後はラズだった

「あ…母ちゃん、春菜姉ちゃんは？」

「無事だよ、ラズちゃんのおかげだね、えらいえらい。あ…たんこぶだ、痛い痛いのとんでけ、はい」

ラズをワープさせララはネメシスの方を向いた

「ネメちゃん、あの子達まで襲うようになるなんて、どうかしてるよ」

「今の彼女は彼女じゃない…僕に取ってみれば僕はスカージ…混沌の神の駒と戦ってるように感じる」

「よくわかんないけど止めなきゃだよね…」

ララはつるつるスリップ君を使用した、アサキムは地面に剣を刺しそこを重心とすることで滑らないようにしたがネメシスはジャンプしてその階の天井に張り付く事で回避した

「これは…今の彼女は兵器じゃなくて獣という言葉が似つかわしいね」

「どうすれば良いの？」

「僕にも分からない…けど、来るよ」

「へ？」

アサキムの言葉に反応するようにザステインとセリーヌがやってきた

「ララ様!!とお前は…何故ここにいる？モモ様の友達に捕まったはずでは」

「まう？」

アサキムは指を指しモモの友達を示した、目の光がなくなったシバリ杉を

「誇りにしておくといい、あの樹木は彼女の大切な人間を守り散っていた」

「そんな…」

ザステインはネメシスを見た、お互いがお互いを認識し、敵意を募らせ、ザステインが武器を構えているところをネメシスは襲いかかった

「覚悟するがいい!!」

一方そのころ

ユニクロンは、デビルークに接近した、真っ先に向かったのは金色の闇…ヤミだった

第十三話 「雷光―きりふだ」

ザステインは手に持っている剣、イマジンソードで向かって来るネメシスに振り下ろした、しかしネメシスはまるで効いてない風であった

とりあえずアサキムも地べたを滑る感覚でネメシスに近寄り切りかかりだす、ネメシスの足を切った手応えはあったがすぐネメシスの足はくつついたように元通りになった

「彼女の体はダークマターで構成されているんだったね…光が闇に届かないように君の剣が通じない彼女は君に手が負えない相手なんじゃないかな」

ダークマターにはザステインの剣などは効かないとアサキムは聞いていた

「貴様に言われなくても倒す手段ならある」

「ほう…」

「だがそれを使う時はララ様に離れてもらわなければならない」

「と言ってるけど王妃はどう思う?」

ララは首を横に振った

「私が離れたら、ザステインはネメシスちゃんを倒すんでしょ?そうはさせないよ、リトだつてそう考えるから」

その時リトがモモを連れて

「ハアツハアツ俺は、諦めないからな」

やってきた

「パパ、ママ!!」

セリーヌが心配そうにリトとモモに駆け寄ろうとするとネメシスは剣に変身《トランス》した手を武器にリト達に襲いかかった

「グオオオオ!!」

「させない!?!」

ララは剣を持ち出してネメシスに切りかかった

ララはネメシスを抑えようとするが予想外のネメシスの力に困惑せざるを得なかったため一応押してノックバックさせた

「すみません、お姉様」

「気にしないで…それより」

思った以上にネメシスの変貌ぶりと狂暴ぶりが凄まじかった

「彼女をどうする？」

モモは改めてアサキムの方を見て驚いた

「あなた何でここに…あ、そこにいるシバリ杉はどうしたんですか？」

ザステインは申しわけなさそうに

「ココ様を守ってお亡くなりになったそうです、以来この痴れ者とは少しばかり行動を共にしています」

「そうですね、なら今ここにいることは目をつぶりますから変な邪魔立てしないでくださいよ」

アサキムはモモから殺気を感じたがどこ吹く風と気にしない素振りを見せた

「彼女は今ユニクロンに捕らわれてるかもしれない、彼女の変身《トランス》してくる武器にその特徴が現れている」

「助けられるのか？」

「それは…」

アサキムはネメシスを観察してみた、よく見るとネメシスの周りから粒子が飛び散っている様子が見えた

アサキムはネメシスが放っておけば使い捨てのように散るまで能力を使い続けることを悟ってしまった、とりあえず煽るように答えてみた

「無理だよ」

「だからって俺は!!」

リトはもう一度ネメシスの説得を試みた

リト「ネメシス、お前は人の精神や身体を破壊する方が趣味だったよな…ウツ」

リトはネメシスに腹部を刺された

「リト!!」

「リトさん!!」

「パパ!!」

三人はリトに近づいて安否を確かめた

「ハカイセヨ…ハカイセヨ…(ガクツ)」

リトは目を閉じ、倒れた

「このままでは…」

アサキムは憎しみがこの辺りを充満してくるのを察した、今アサキムの視界にいるネメシスもうろたえている様子が見て取れるようであり3人も血が流れ出しているリトを見て叫んでいた

ザステインはネメシスにもう一度切りかかった

「アサキム…と言ったな」

「侵入者であり罪人の僕に何か？」

「リト殿とララ様達を頼む」

アサキムは少し無言だったがベルトをどこから取り出した

3つのメダル状の物体をはめる穴があったそのベルトをアサキムは腰に巻きつけた

「ペケと言ったね、目覚めているなら僕と一緒に動いてもらうよ」

『何で知らない人間の頼み聞かないのさ?』

ララの衣装から声が出したがアサキムはまだ何も答えず右手に念じると黒いメダルが3枚そこに現れた

「君も彼女の涙は見たくないだろう？」

『仕方ないか』

アサキムはその黒いメダルをベルトの真ん中に差し込み、ベルトを弄って右にあるスキヤナー状の物体を自然体なポーズでベルトに触れさせた

『ギン、ギン、ギン、ライオン、トラ、チーター、ガオオン、ラ・タ・ラ・タ!!ラトラーター!!』

呪われそうな低い音声の後アサキムは赤い目の黒いライオンのような姿に変身していた

「仮面ライダー!?!」

「欲望の王の眼光は僕の闇に触れる間こうなるらしい、それがこの形態だ、それじゃあ僕らは行くかうか」

アサキムはリトとモモを担ぎ

「お聞きになった通りです、ララ様」

ペケはララを動かそうとしつつセリーヌをおんぶした

「…分かったよ、私がやるから」

2人は全速力で部屋を出た、ララとアサキムは同着ぐらいの勢いで走り数秒で見えなくなった、それを確認しザステインはネメシスだけを見た

「あんな手段を隠し持ってたとはな…では、終わらせようか」

ザステインは懐から一つの装置を取り出した

「ジャッ!？」

ザステインはその装置のボタンを押した、その途端ジジジという音と共に激しい電流がザステインを襲った

「うおおおお!!」

端から見ればザステインの骨格が見えたであろう、その内にザステインは自身がイマジンスードごと帯電してる事を肌で感じ取る

ネメシスは本能で危険を察知し剣で直接攻撃の手段を取ることを止め、銃で撃つことにした

ザステインはそれを見て飛び上がった、一度避けようとネメシスは長時間の照射で対応してきた

ザステインは避け続けて一閃二閃と切りかかった

「グオオオオ!!」

ネメシスは苦しそうに叫んだ

「やはり雷の力なら効果があるようだな、しかし人の事など全く考えない装置だ…この「バリバリサンダーかけるくん」は」

ザステインは手に持っている装置を見た

去年、

「オーホッホッホ、あなた宛てに荷物が届きましたよ」

ザステインは天条院家に帰省した際に妻から郵便物を渡された、箱を開けると何かの装置が出てきた

「これは…身に覚えのない物ですね…む？」

ザステインは郵便物の中身の内にある手紙を見つけ、読んでみた、

内容は要約するところだった

変身《トランス》兵器を倒したい時はどうぞ

その文を読み、しばらく沈黙した

「どうしましたの？」

「嫌、それよりヒカルはどうでしょう？」

「元氣過ぎて困りもの、あのララの息子よりは行儀は良いかもしれないけど」

「しばらく会えなかった分顔を見せに行かないといけませんね」

ザステインは手紙を見つからないように処分しその装置を自分で管理しておく事にした、リトに手紙ごとこれの存在を知られれば壊されるだろうし変身《トランス》兵器の危険は0になったわけではない（まだ何かしそうなのは2人いる）、いざという時のために取っておくのも良いかもしれないと考えたためだった、使わずに済むならそれで良いが

現在

ザステインはネメシスに剣を向けた、操られているという事はなんとなく分かったが部下や子供を、そして主を傷つけた敵と彼は断じた「リト殿に恨まれようと私は貴様を倒す、倒さねばならないという事を貴様に思い知らされた」

ネメシスは何も答えず座り込み沈黙を続けた

「ん…？」

ネメシスは崩れ落ち体を維持できなくなったのか徐々に体が消えていくようだった

「…終わった…のか？ウウツ」

ザステインも力尽きて倒れた、ほぼ「バリバリサンダーかけるくん」の影響によるものだが

城外

アサキム達はルナテイク号を見つけた

「ちよつとルナちゃん、助けて!!」

ルナテイク号は着陸し

『どうした？そーいやあの惑星は何だ？ヤミちゃんは？あのロボ消

えてよく分かんなくなつてきてさ』

ヤミの安否と色々聞いてきた

「それより、リトとモモを!!」

一方そのころく

ユニクロン心臓部付近く

ヤミはそこにたどり着いた

用意されたようにそこにある繭にうづくまるように中に入り込む
と眠るように動かなくなった

第十四話 「再臨ーユニクロン」

アサキム以外全員ルナテイク号に乗り込んでリトの治療に専念する事にしたようだった、せわしなく動く足音と所々漏れ出す大声は彼女達の必死さを感じ取るには充分だった。無理もないだろう、夫もしくは父親と慕う人間が腹部を刺されたのだから

アサキムはヤミを眠らせてからのルナテイク号の叫びを思い出しルナテイク号の外でぼんやりしていた、オーズに変身したままだったが

『おい…オマエ誰だ、顔を内部しか映せないからって外部が見えないわけじゃないからな』

「今は緊急事態だしそれを優先したら…」

『あ、テメーその声はヤミちゃんを眠らせた』

ルナテイク号はアサキムと認識するとアサキムに向かって突っ込んで行った、仕方なくアサキムはルナテイク号が通れないような通路まで逃げる事にした

「下手な行動は彼の命を危うくさせる、分からなくはないだろう？」

『はん、進んだぐらいじゃそこまで揺れないように出来てるんだよこっちは…!』

いつの間にかアサキムは消えていた、見えなくなったのでルナテイク号は内部に話しかけるように切り替えた

『はあー、どうだよララ様』

「バッチリ!!けどセツティングだけでまだ時間かかりそう」

王宮内部へ

アサキムが逃げている最中に空を見ているといつの間にか夜の闇が辺りを黒く染めるようになっていた

「流石はチーターの能力を持つコアメダル…上手く止まれない事だけが難点だけど」

実はこれが初めての変身かもしれないなかった

「命を守るのではなく護る戦い…そんなものに出くわすなんて僕には有り得ないと思っていたし」

アサキムは欲望を計るためにオーズのベルトを借り受けたがその力を使うのはためらいがあった、仮面ライダーの力は正義：「誰かの命を守るため」に使うべきとアサキムは無意識に考えてしまう

もちろん、自分の欲望のためだったり目的のために仮面ライダーの力を使う人間がいる事はアサキムも知っていた、だがそのための戦いはシユロウガだけで事足りるし、目的のための戦いといえればロボ戦が殆どだった

「そういえば親衛隊隊長とネメシスの戦いはどうなっているのだろうか」

宮殿の内部は静まり返っていた、そういう場合はたいいネメシスカ両方がやられたようなものと見ていいのかもしれない、ネメシスが生きているなら少しでも悲鳴が聞こえるんだらうというのが先程のネメシスの様子から垣間見えた

「急ごう、彼らの命の灯火が真に潰えるまでに」

アサキムはザステインが戦っていたであろう場所に向かった：がララと並んで走った時、シバリ杉に捕まって連れ回された時、兵士についていった時より宮殿が入り組んでる気がした

「流石と言うべきか…」

倒れていたザステインを発見するのにチーターの力をフル稼働しても30分はかかってしまった

アサキムは壁に座り込むようにして動かなくなったザステインが生きているかどうか確かめた

「まだ命の炎は燃え立たせているか？」

アサキムはザステインの鎧を胴体部分を占めるトラの力によるツメの裏拳で叩いてみた

反応がないため

「あ、そこに誰かのマンガの原稿が!？」
とか

「列車が君を轢きに来るよ」
と言ってみた

少し反応しだったのでアサキムはツメをザステインの顔部分に向

けた、一度上に振った後アサキムはツメをザステインに向かって振り下ろした

するとザステインは目を発光させてアサキムの攻撃を手で防いだ、その時に何かジンとした感触を受けたためアサキムはマスクの下で苦い顔を取ってしまった

「無事かい？」

「そうでもないな…」

ザステインの手の部分は微妙に焦げ付いていた

「ところで彼女は？」

ザステインは少し考え出すように黙り込んだ後に

「私が倒した」

と答えた

「だろうね」

アサキムそれを聞いた後辺りを探り出した、彼女が生きていたりするかどうか確かめるために

答えはすぐに分かった

歩いて調べていると「痛いぞ」という声がしたため調べるとネメシスの体がありまだこの瞬間は生きていることそれだけは確かだった、ただしもうすぐ消えるようであったが

「芽亜と戦った男か…どうやら私はもうだめだ、情けない限りだな…人の身体や心を破壊し操るのが好きな私が操られて最後を迎えるなんて」

「(呪縛からは解かれたか…)諦めるのか？僕か彼に取り憑き休めば君は命を取り戻せるはず」

「どちらもダメだ、あの隊長は今もなお帯電しているしお前の中もしくは記憶に侵入して芽亜は…お前は私の事を少しは知ってるかもしれないがこれを知らないようだから教えておくよ、私は人を自分の色に染めるのが好きであって染められるのは違う、アイツは別だが」

「ところで君が強いたダークネス計画の最終段階の結城リトの抹殺…それを寸前まで君の手で行った感覚は覚えてる？」

ネメシスは消えそうな声で答えた

「ああ、あれは私の意思でやったというわけじゃないが良くはなかつたな、あれをヤミにやらせようとしたのか」

ネメシスの声は少し申しわけなさそうになっていた

「君は…どうなるんだ？」

「もう存在を保てず人でいう死を迎える、改めて考えるのは…怖いな、知人やヤミが子どもに読み聞かせる時あの世の話というものを聞いた、だがそこに行く話を聞くのはまともに生まれた命ばかり、人工的な命が行けるのかは分からない、そういった存在は…どこに行き着くんだ…？」

ネメシスの体は溶けるように崩れていく

「私達は兵器だ、兵器がそんなところに行けるわけがないとそう聞き直つてしまえば楽なんだろうな」

アサキムは首を横に振つて

「感情の煌めきを放つものが兵器という枠に入れはしない、君は人だよ…君たちは人間だ。それに兵器なら命の行く先なんて考えやしないものだろう？」

「フッフ他人に慰められるなんてな」

ネメシスの体だったものは徐々にネメシスの意識が薄れていくのと共にダークマターの塊に変わっていった

「あの世とやらに行けるなら…リトの行く場所で奴を待てるなら…良いな」

その言葉を聞くがアサキムは肯定も否定も出来なかった

「すまない、あの世に関しては何とも言えないんだ」

アサキムはネメシスだった物…ダークマターを握りしめた後アサキムはザステインの手を取った

「今、生きている君は治療しないとね」

だがザステインはアサキムの手を払った

「私はリト殿を守れはしなかった、デビルークーの剣士という肩書きは私には相応しくない」

ひどく申しわけなさそうなザステインの口調だったがアサキムはまたもや無視し、ザステインを担いだ

「貴様…何を」

「君は騎士だ、それも一級の…君のような…嫌、騎士は多少の事で生きる事を諦めちゃダメだよ。生きてさえいればもつとたくさんの人間を守る…人々を守りたいと願うなら」

「貴様の言い方には反感を覚えるが生きろと言いたい事は分かった」

アサキムはザスティンを連れネメシスだったものを握りしめ走った、その内窓からユニクロンが見えた

ユニクロンは環が外れるように動きだし惑星の外観が割れるように何かが表出していた

「(練習曲は既に終わり前奏曲は彼女の存在と共に散った、今宵この時からが本番という事か…生憎だが僕は観客になるつもりはないんだ、それに僕のあがきを練習曲に組み込んだ事は許せる事じゃない…僕は自由にやらせてもらう)」

宮殿の外

兵士はビーム砲をユニクロンに目掛けて撃つてみた

だが届かず逆にユニクロンのカウンターのように放つ雷に全身を焼かれ抵抗できずに終わった、何人かの兵士たちが別の場所と同じようにユニクロンに挑み、そして果てた

ユニクロンは何事もないように動き続けた

兵士たちは最初その行動に意味を感じなかったがユニクロンが何をしているのか気づいた時は手遅れだった

ユニクロンが表出させていたのは手と足…そして顔

変形が完了するとそこには赤い瞳と大きな角、惑星より大きい印象すら与える巨体のロボットじみた物だった

兵士たちとは別の場所…宇宙でギドはユニクロンの姿を見て驚きを隠せなかった

「なるほど…これがあの野郎の言っていた心臓を狙えか、だがおかげでどこを最初に狙えばいいか分かった」

ギドは、ただこれからは自分の故郷を狙う敵としてユニクロンを見据えた

第十五話 「魔王ーデビルーク」

ギド・ルシオン・デビルークはユニクロンに近づくために宇宙用の装備に着替えた、これから宇宙船の外に出てユニクロンに攻撃するためであった

近くで足音がした

振り返ると足音の主は妻のセフィ・ミカエラ・デビルークだった、顔を隠しているがそれはチャーム人と呼ばれる彼女の種族による因子であまりの彼女の美貌に心奪われ理性を失う人間が続出したから、彼女の美貌を目の当たりにしてもなお理性を失わなかったのは夫であるギドとその娘婿の結城リトだった、同族に効くかは分からないが

「勝てるとは思いますがあまり手荒な真似はしないでくださいね」

ギドは余裕そうに軽く笑みを浮かべた

「住民がいたら保護はしてやるよ、あの見た目でいるのかって聞きたいが」

そして宇宙船の外にギドは出た、見据えた先はユニクロンの人間にとってもうなじの部分、遊びに行つて帰ってきた先にこんな惑星に変形するロボットのようなものに出くわすなんて思わなかったが

ギドは手のひらをユニクロンのうなじに向けた、狙いを定める必要はない、首一つとっても都市一つ以上の横の大きさを持っているのが見て取れた、近づいて撃てば必ず当たる

それよりも狙う分の集中力を威力に向ける、いかに届くか、いかに確実に破壊できるかにするかが重要だった、重要なのはそこからだった

「テメー、そこにあるのは誰の母星だか分かってるのか？」

徐々にギドの気《オーラ》が高まり体中から放出される、デビルーク星に当たらないように細心の注意は払いながら、それを手でかき集めるようにしてエネルギー弾のようなものを生成しそれを放った

「無視か？ならくたばれ」

放たれたエネルギー弾はユニクロンに向かって進み出す、進み出したエネルギー弾はユニクロンに命中し惑星の内部でなら轟音が聞こ

える程の迫力と共にユニクロンのうなじの部分は爆発した

爆発が収まり煙が無くなるとユニクロンのうなじに穴が空いているのが見えた、宇宙船一つ楽々に入れる程の穴だった

ギドは深呼吸をした、穴は開いたが見立てより首の破損度が少なかつたことと自分の攻撃でデビルークに危害がなかつたためだった

だが次の瞬間うかうかしてられないということがよくわかつてきた、ユニクロンは再生を始めていた

「くっくっは…」

ギドはセファイに連絡をした

「予定変更だ…セファイ、俺様がユニクロンの内部に入ったら一旦逃げろ」

「え、ええ…」

ギドは背中につけたジェットパックを使つてユニクロンの首に向かつた

「…何かしら、この感じ」

夫は宇宙の覇者になつた男だった、能力もまだまだ心配のいらないうのは分かつてたはずだった、だが何故か言いようのない不安に駆られた

宮殿外部へ

ユニクロンはがくりと少しデビルークに倒れるように前かがみの体勢になった、それと共に遠くから歓声が聞こえた

アサキムはザステインを連れてルナテイク号に再びやってきた、突つ込んでくる事を想定し開口一番でこう発言した

「今は落ち着いて欲しい、急患がここにいるんだ」

ルナテイク号は気にしない素振りで

『そうか、今度は親衛隊隊長か、治療用に使える設備もうないけどそれでも良いなら入んな』

アサキムはルナテイク号の内部に入った、すると話し声が聞こえた

「そんなことが起つてたのか」

話し声は女性のものだったが元王女二人の声ではなくまたセリー

又の声でもなかった

「ええ、あなたの力も借りられたら良かったのにね、ナナ」

元第2王女ナナ・アスタ・デビルークの事かとアサキムは察した

「収穫はあったさ、ハレンチな先輩とヤミには聞かせらんないけど」

「あなたに言えない事が一つあるんだけど…」

「言えるじゃん、言うなら早く言えよ」

「芽亜の敵は私の後ろの壁に隠れてるよ」

「やはり気づかれたか？」

何の対策も講じずにやってきたから気づかれる事は当然とも言えた、アサキムはしばらくつぶくれるように変身を解いてモモの前に姿を現した

「親衛隊隊長を連れてきたよ、彼はどう？」

「そう、ご苦労さまですね、お姉様とセリーヌが看てますけど」

未だに弱っているザステインを横たわらせたのを見てモモはアサキムに尻尾を突き立てた

「何故あなたは私たちにそうも易々と姿を現せるんですか？ナナ、こいつですよ」

敵対者…もしくは知人の仇に対する怒りのようなものがむき出しだった

「こいつが…？」

「初めまして…になるかな、だけど君の突きつける尻尾は攻撃の起点であると共に弱点である事は分かっている」

「あなたをひっぱたくぐらいは出来ますよ、試してみますか？」

アサキムは首を横に振って答えた

「やめておこう」

「お前が芽亜を殺したのか？何故だ!!」

「彼女がスファイア・リアクターに至った、また至るかもしれないなかった。僕にとって必要なのはそれであって重要なのはそこなんだよ」

「スファイア…あの変な球のせいで芽亜を狙ったのか」

「まあ…その通りさ」

「決めた、こいつ捕まえよう」

モモは話を遮りだした

「後で良いかしら？それよりこの人からたつぷり情報を抜き出すのが今やるべき事みたい」

「何を聞きたい？」

アサキムはモモから聞かれた事全て答えた

「分かりました、えい」

モモがスプレーをアサキムに噴射してきた

アサキムはそれを見てあの時ヤミに吹きかけたスプレーだと直感で分かった

モモ「ルナちゃんから聞きましたよ、さあ、眠りなさいな」

アサキムは口をふさぎそれを防ごうとした、だが威力が強すぎて今にも眠りそうだった

「応報するべき因果というわけか…だけど僕には…」

ベルトを装着し再び変身した

「防ぎましたか…」

答えずにアサキムは黒い固まりをモモに渡した

「これは…？」

「彼にも伝えておくといい、彼女だ」

その一言で事態を察したのかモモはそれを受け取った

「じゃあ、僕は行こう」

「捕まる気は最初からなかったわけですか…待て!!」

だが変身したアサキムは思いの外逃げ足が早く逃げられてしまった

「発信機か…やるな、モモ」

「あの人が気づいても遅いですよ、もうバレバレですから、あら」

モモが外を見るとユニクロンはボロボロになっていた、体の部分が一部抜け落ち、欠けていた

「お父様が上手くやってるんですね」

父親の勝利をモモは疑わなかった、いかにしてヤミを救えるかも考えていたが

ユニクロン内部

「はあっ!!」

ギドはエネルギー弾を嵐のように撃ちまくった

イマイチ効いてないがそれでも破壊出来ている事が手応えで分かっているため一切躊躇はしなかった

だがどこに行くべきかは頭では理解しているが道順はつかめてはいない、人間の構造に当てはまるなら動力部なり心臓部なりがあっても不思議じゃない、だが道は広すぎた、人が国内踏破するぐらいは軽く必要かもしれない、そのためジェットパックが心臓部に着くまでに壊れないかは気がかりだった

不意に声がした、低い男の声、そして娘婿の嫁の一人にそっくりな声、2つが重なったような声が聞こえた

「今の私は、トランスフォーマーのみならず貴様ら人間の憎しみも糧に出来るようになった、止められると思うな、破壊出来ると思うな、堕ちよ、ただ堕ちよ」

そう言うとか何か灰色のロボットじみた物が数体湧いて出てきた

「邪魔だ」

ギドは尻尾に力を溜めた、その後鋭い剣の先のような尻尾の先からビームを発射した、湧いて出てきた物とついでにユニクロンの一部も破壊できるような程だった

湧いて出てきた物に関しては全て倒したがまた別のやつが湧いて出てきた

「やはり心臓をどうにかするべきか」

ギドは振り返らずに進んだが振り返ればきつと驚いていただろう、破壊した箇所が元通りになっていった所を

そしてギドは心臓部にやってきた

「!?てめえ…それは…」

心臓部にいた者の姿に驚いた

「自分自身の姿もよく見てみる、確かめるがいい、今どうなっているかを」

ギドは自分の体を確かめた、デビルーク人の特徴…本気を出しすぎると身体が幼児退行してしまう事態にまたなってしまった自分がそ

ここにあった

「ちよつとやりすぎたようだな、だがてめえをどうにかする分はある」

ギドは全力でユニクロンの心臓部にいたもの…ヤミの肉体を狙った

「(わりいな、ララ、ナナ、モモ、やつとお前らの大切な人間…攻撃するの)」

ギドはヤミに向かって殴りかかった

ヤミは飛ばされ頬は赤くなつたがすぐ治癒したかのように元通りになつた

ヤミは攻撃してきた、変身しての攻撃だがララとヤミが宮殿内で軽く手合わせしたのを見た時より弱く感じた

「この攻撃…おちよくつてるのか？」

ギドは全て避けてカウンターに一発放つた、よろめいた隙にと大技に踏み切つたがヤミの手はいつの間にか光に包まれていた

「(ダークネスにならなくても使えるのか？嫌、もうなる必要がないのか)」

ギドは大技を急ぎよ防ぐために利用した、その技で惑星を切り裂いたららしく危険を感じたからであつた

光が収まつた後、ギドはもつと幼くなつていった

第十六話 「決着ーケリ」

アサキムは宮殿の内部に着くと生存者がいるかどうかを確認した、倒れている兵士や非戦闘員の心臓の鼓動を確かめてみたがもう息は誰もしていないようだった

「消えた命の灯火は繕う事は敵わないか…」

不意に窓の外を見上げてみた、先程のユニクロンのボロボロさは誰の仕業かはなんとなく分かった

先代デビルーク王 ギド・ルシオン・デビルーク

彼が一番ユニクロンという存在に立ち向かえるのだろうと言えるし彼ならもしかしたら勝てるかもとアサキムは思えてきた

しかしもう一度見た時の窓の外に映るものはアサキムを絶句させた

「これは…」

周りで起こる爆発をよそにユニクロンの体が崩れ色々なものが剥げ落ちたのは数分前のはずだった、しかしそれは昔の話のようにまたは幻だったかのように元通りになっていた

それだけではなかった、まるで湿度を含み肌のツヤが良くなったように、車やロボットにワックスがかかったようにテカテカとしているのがとてつもない距離があるはずなのに見てとれた

「再世の力が高まつてるとでもいうのか？ 星帝はいつたい」

アサキムの知っているユニクロンより再生力が桁違いのように見えた、ユニクロンはトランスフォーマーの怒りや憎しみを力にする事もできるらしいがトランスフォーマーのというのが重要であった、ザステインに聞いた話を思い出せばトランスフォーマーという種族はどの銀河にも聞いた事がないらしい、ならあれほどの再生能力はいつたい何だろうか

「教えてあげよっか」

「!？」

アサキムは誰かに叩かれた気がした、そしてアサキムの脳裏に映像が浮かび上がった

そこは夜、そこは街中、何故か映りが悪いかの如く詳細は掴めなかつたが一人の黒い少女じみた外見の子が発言してたのが聞こえた

「ダークネス…それは破壊を以て宇宙を混沌《カオス》に導く究極の変身《トランス》…」

また別の景色に移り変わった、詳細はまた分からないが生物の中にいるようで、飲み込まれているようで気味が悪く見えた、その中で見えるのは2体のロボットのようであり1体は青白い剣を持っていた

「光を飲み込み、闇を生み出す…無限の負は、新しい闇…ただただ生きる、そのためにだけ生まれ、あるのは破壊…破壊の先に再び無限の闇、ユニクロン様…光を飲み込む偉大なる宇宙のマスター、目覚めの時だあ!!」

そして剣を持ったロボットはその剣をその場所に刺した

そしてどこかの景色に移り変わった、今度は神殿のような荘厳な雰囲気の間所だった

4人の戦士がいた…何故か1人にも見えなかったのでアサキムは脳裏に浮かぶものと気づいても目をごしごしとしてしまった

対する者は1人…全身を甲冑で包んだ大男のような騎士といった風であった

「ハハハハ…わしを覚えているか？」

「そうだ！わしはガーランドだ！」

戦士達は驚きを隠せずにいた、アサキムには何故かは分からずいたがガーランドと名乗る者は語り始めた

自身がここにいる理由、タイムトリップをした事…

そして結びに、戦士達に告げる

「お前達はここで死に、わしは永久に生き続けるのだ！」

ガーランドはその体を変質させる…カオスという名前のその世界を暗黒に包み込んだ存在に

先程ロボットが剣を突き刺した場所で人間にバイクがしてやられた所とヤミのような見た目の女性がそこにたどり着いたのを見た

そして映像は途切れた、アサキムは辺りを見回したが誰もそこになかった、誰もアサキムを叩けるような状態でなさそうだった

「今のは…そうか、金色の闇が宇宙を混沌《カオス》に導くものとして生まれたならカオス・ブリンガー（混沌をもたらすもの）には因子として期待以上のものになる」

彼女を取り込む事でトランスフォーマー以外の怒りや憎しみもパワーに出来るようになれば、ユニクロンが人によって企みを阻止された事に根を持っていたとすれば

そう考えているとユニクロンは胸部を開き何かを放とうとしていた

「己の腹を満たす気か？だが」

アサキムは窓の外に飛び出し変身を解除しシユロウガに乗り込み、ルナテイク号に向かった

『おい、なにすんだよ』

「結城リトに伝えたい事があるけど…王妃でもいい」

『今出払ってるから後にしろよ』

「…何を為そうとしているのかな」

『オレから見ると北西ぐらいを見りや分かるぜ』

アサキムはルナテイク号から北西を見た

ララとモモは走っていたようだった、宇宙船が飛び上がる頻度の上がる中シユロウガでズームインしなければ見えない距離まで、そしてスーパーヒーローが夢の共演をするような勢いで兵士が少し群がり始めていた

「なら僕もそれに加わろう、黒き獄鳥と共に、君はどうする？」

『ヤミちゃんが見えるまで脱出も参加もしない、ヤミちゃんは今のような時に参加してきたし今ヤミちゃんは…』

リトからモモ、モモからルナテイク号に聞いたのだろうか

「彼女は今ユニクロン…あれの元にいるとすれば…」

『そんな…嘘だ!!』

「本当さ、君だけでも脱出しておくといい、そうでなければ君だけでなく君の中にいる人間も犠牲になる」

『くっ仕方ないか』

ルナテイク号は飛び立った

そしてシュロウガも飛んでいった

その後ユニクロンからビームが発射された

都市を一のみ出来る範囲のビームが撃たれる、惑星すら貫ける迫力と食らえば死ぬという直感をすぐに感じとれた

まず突っ込んだのはシュロウガだった

「あの人…何のつもりで？」

シュロウガはユニクロンのビームを真っ先に受けてユニクロンの方に引っ張られだしたがユニクロンのビームは何ら勢いを落とす事なく向かって行った

「みんな、来るよ、用意は良い？」

「ラジャー！」

「刺された王様やボロボロの隊長の分もやってやるぞー」

ララとモモはそれぞれ尻尾からビームを放ち兵士たちは手持ちの武器で対応しだした、それでもビーム全てに対応しきれず地面が削れだしビームを抑えようとしてララ達の背は縮みだした

一方そのころ

ギドは幼児に近い状態となって倒れていた

「この後本気出せば死ぬるな…」

生きて還る気はあったが限界が近づいている事が分かってきた

「止せ、もう逃げろ、かなう相手じゃない」

知らない声が頭の中に響いてきた、男の声だった

「誰だてめえは」

「俺か？俺は…因果律の番人、と言っておく。混ざってはならないもの同士が混ざってしまったから、ここにきた」

「ならさっさと手を貸せ」

「今俺の力はそちらにはいけない、因子が足りない…」

「そうかよ、じゃあ指加えて見てろ、オレはそうならないように奴を倒す」

「知ってるか？こいつがどういう存在か」

自分を因果律の番人と語る声の主はユニクロンについて語り出した

「なるほどな、どうりで」

「もはや手に負える相手じゃない、だからもう」

「なめてんのか？てめえ」

ギドは声の聞こえる方に対して睨みつけた

「オレ様の辞書に、引くとか退却の文字は無い。特に母星をこいつが狙ってるならなおさらだ、オレ様の娘が認めた男の嫁に手えだしたやつならそれもプラスしてやる、だから最大限叩きつけてやるよ、人の力ってやつを」

「そうすればもうお前は…」

ギドは目を閉じて含み笑いをした

「オレ様がダメならお前がなんとかしろよ、感じる、薄まりつつもオレ様に近いものを、ユニクロンがそうやって復活したなら同じようにやってもいい」

「…分かった」

「言つとくがまだオレ様のターンだからな、おい、まだオレ様は生きているぞ!!」

急に大声をギドはあげた

ヤミに取り憑いたユニクロンはそれを聞きギドと目を合わせた

「素直に這いつくばれば良いものを、知ってるぞ、お前はもう限界に近づいている、だから倒れる、もう倒れる、この者の体を使い私は」

「1人じゃ死なねえよ」

ギドの周りに気でできた結界のようなものが浮かび上がった

「人間様の中でマウント取ろうと思ってるなら覚えとけ、限界なんてな、大切なもの、大事なもの、譲れないものの事を考えたら眼中に無くなるんだよ!!」

ギドはユニクロンに取り憑かれたヤミに突っ込んでいった、部下達に孫、娘達に妻の事を心の中に思い浮かべて

ヤミの攻撃を軽くよけた後突っ込み、殴った後ヤミを押し倒した

「接続を切るには…」

とりあえず地面もろとも殴ろうとした、しかしヤミの腕の辺りに車輪が生え避けられた、地面にのみ当たり人為的な地震が起こるような

第十七話 「銃神―デイス・アストラナガン」

その頃のどこか

夢の中で誰かが呼んでいた…若い男の声と姿、オレと同じかオレより年下か、聞き覚えとか見覚えは全くなかったが言つてた事はなんとなく覚えてる

「力を…お前の持つ因子を俺に…」

夢はそこで途切れた、あまりにリアルな夢だったから目覚めるまでそれが夢であることに気づかなかつた、目覚めたのはいつも通り宇宙船の内部だつた

起きたオレはパジャマのまま洗面所で顔を洗いに行った、鏡に映るのは銀色のボサボサした髪型の男だつた、顔の形は割と整つた方だとは自分でも思う

でもオレが一番気に入つてるのはオキワナ星の海のように青い眼だつた、そんな特徴だから仲間内からは「シロ」と呼ばれてた、知らないやつからもその名前前で知られてるし他の名前は特に知らないしそれがオレの名前つて事で良いんじゃないか？という事でオレの名前はシロだ

こう見えてオレは…嫌、どう見えるんだ？起きたばかりの優男にしか見えないだろ、まあいい…オレは地球換算で一年半前まで銀河警察の人間だつたんだ、過去形なのはやめさせられたから、金色の闇を捕まえようとしたらデビルークの王様ともケンカ売つた事になつてしまった…銀河警察としてもデビルークとはケンカ売りたくないつてき、証拠不十分でどうにもなれなかつた…監視カメラの映像じゃ決定打にはなれなかつたよ、結局口先だけの批判で終わつちやつたのは後悔してるけど王室の人達みんなあいつかばうしさ…

個人的な恨み？特にない、けど彼女は人だけじゃない、惑星まで殺した、彼女はたくさんの自由を奪つてきたのに星による反撃、罪による罰もなく今を幸せに生きている、それが許せなかつた。彼女が兵器として生まれたからなんてのはどうでも良かった

兵器だから殺すのが当然なのか？

兵器だから壊すのが自然なのか？

そして彼女が人の枠に入ったとしても人殺しであり罪人である事には変わりはないだろう、どれだけの重さを抱えてるだろうか？計り知れない

同僚からも

「バカな事したな…」

と言われてしまった

5年前から知り合ったザステインさんから色々諫められた

「私も人殺しであれば捕まえるのか？」

何も言えなかった、うんって言えば良かったのか

どうせオレは温室育ちだろうさ、拾われたのが銀河警察じゃなかったらオレも人の自由を奪う側になってたかもしれないのも分かる、だけど温室育ちだからって意見はさんじやいけないのか？

まあオレもやめさせられて気づいた事もある

金色の闇の息子、ガーランド

望遠鏡でガーランドを抱いていた彼女を見たとき

「オレはガーランドの心の自由を奪いかけてた」

事に気づいた

人の自由を守るのが銀河警察だ

そう思ってるのは今も変わることはない

だが誰かの自由を守るのは誰かの自由を奪うことに変わらないんだ、気づいてどうこうできるものじゃないけど

そんなこんなで銀河警察をやめさせられたオレは知り合いの手伝いをする事になった

退職金代わりの宇宙船にその知り合いを乗せる羽目になった、掃除屋的な事するんだとき

「おはよーシロ」

今しゃべりかけてきたチヨっていう女の子だ

鏡越しだが寝起きに地球でいう黒いゴスロリの格好は目にきつい、そう思いかけてると

「起きたか」

夢に出てきたやつの声も聞こえてきた、あれはひよつとして正夢か？

「お前の持つ因子を使わせてもらいたい、オレがそちらに向かうため」

とは言われてもオレにそんな人に使われるような因子なんて持つてるつもりはないんだが

「お前の持つ銃…ハーデイスを」

あれか、ハーデイスか…リボルバー型のくせに異様にでっかいオレの銃…銀河警察がオレを拾った際にそばにあつた物で何かの縁つて事でオレの物になってる、材質がオリハルコンでできてて大きいから攻撃とかも大半は無効化できてこれつぶったけば相手の武器も抑えられる何かと便利なものだ

銃の意味なくねつと自問自答する時もあるが撃つのは最後の手段つて事にしてるから仕方ない

「脅威が息を吹き返す前に使わせて欲しい」

何の事だ？

「だがそれを因子として使う時お前はそれを失う、注意してくれ」

つまりあれか、ハーデイスを生け贄にしろつて事か？

後で答えよう…今お腹が空いてる

「また後でな」

チヨが何言ってるんだこいつみたいに変な顔をしてるがオレは冷蔵庫のある場所に向かった

瓶詰めの牛乳を手取る、牛乳とは言ってるがフルーツつていう名前もついてたんだつた、白いのも好きだがフルーツ牛乳も好きだ

さあ飲むかといった瞬間テレビとは別のモニターにかつての上司が映った

「久しぶりですね、部下でもないオレに何か用ですか？」

「知り合いに連絡を入れても問題ないわよ、それよりシロ、あなた銀河ニュース見てる？見てないなら早くしなさい」

こんな事言ってるが見た目は男だ、声は高めかもしれない、とりあえずリモコンを探そうとしたがテレビのスイッチをオンにしたのは

チヨの方が早かった、チヨがテレビをつけるとすぐデカイ人型ロボットのようなのがデビルーク星に迫ってる所がニユースに映ってた

すぐくデカイってのはどれくらいかって聞かれるとデビルーク星に近いぐらいとしか言いようがない、今ロボットに近づいたニユースのキヤスターに何かロボットの武装が近づいて爆発してきた、そしてニユースは不快なざーという音と白黒しかでなくなった

男の声が言ってた脅威はこのことだったんだ…と考えるのが妥当な気はする

「シロ、あなたはデビルークに近いの？だったら逃げなさい、こんなのは命がいくつあっても足りないわよ」

事情を知っても分かったとは言えない

何とかできるかもしれない、そう感じ始めたから

「逮捕とか考えても無駄よ…大きさに見合う牢獄なんてないんだから」

「どうにかする当てはありません」

オレは通信を切り行き先をデビルークの近くに設定した

「良いのかな？そんな事して」

「危なくない場所にいれば大丈夫だ」

オレ達はデビルークからざつと惑星3個分まで離れた場所に向かった

オレは宇宙服を来て外にでた、オレにパスワードスーツなんてないんだよ、残念だけど

操縦はチヨに任せた、一時宇宙船を取られた事もあったし操縦方法も彼女は知ってるはずだ、宇宙船だけ取ってオレを放り出す…てのがなかった事は感謝してる

「良いのか？」

外に出ても聞こえてくるとは…オレの意識にでも語りかけてるのか？そういう事だろうか

「ハーデイスを失う時にお前…お前に近いものの物語は終わりを迎える」

物語が終わりを迎えるとしてもオレの人生は終わらない、昔話の終わり方だって終わりが死につながるわけじゃないだろう、オレはそれより何とかできるだろうか…が心配だった

「例えそうならうとオレは構わない」

「ならば唱えろ…テトラクテュス・グラマトン」

ゆっくりと…そして聞きやすいように唱えてきた

「テトラクテュス・グラマトン」

だからおれもハーデイスを持って間違えずに唱える事ができた、もう一押しいくか

「テトラクテュス・グラマトン!!」

するとハーデイスはだんだんと姿形を無くしていった

代わりに魔法陣が出現する、何か出てくる、恐ろしいものが形を作り出す…そう感じた

「シロ、逃げて!!」

ハハハ、同感だ。子供なら遠くでも怖がる、大人でも恐怖で死ぬかもしれない…というわけでオレは宇宙船の中に入り込んだ

そしておれは宇宙船の中から魔法陣から出てきたものを見た、禍々しい、ゴキブリがものすごくなった感じのロボットじみた見た目、内にどれだけの怨念やらを秘めている事なのか分からなかった、不吉つて言葉を軽く超えるようでのくらしいなのか分からなかった方が良かったかもしれないとさえ思えてくる

「フフフ…」

その言葉でオレは何かの威圧感を感じた、第三王女モモとにらみ合った時ぐらいだった、チヨが固まりだしてるのが分かって来たからオレが操縦を代わった、まあ強い威圧感を放つやつとまともに対峙した事のないときつい

「心配するな」

そう言つて魔法陣から出てきたものは真っ直ぐにどこかに向かった

それは追いかけてようとは思えなかった、ただこいつならどんな相手にも勝てる…そんな期待を抱かせるようなやつだったから、オレは後

悔はしてない、ただ必ず、あの危険なやつをどうにかしてくれと願うばかりであった

第十八話 「突入ーしんにゆう」

デビルーク星にて

兵士たちは疲弊し王妃二人は身長が縮んでいた

「きついな、なんだあれは」

兵士がつぶやくとまた別の兵士が言葉を発した

「王妃がいなければ全滅だった…ありがとうございます」

今そこにいる王妃のうちララがそれに反応した

「いいよ、それより被害はどうなってるかな？」

ララの問いにまた別の兵士が答えた

「報告はまだですが見ての通りだとすれば結構まずいかと思います」

周りを見渡す仕草をしての応答だった

「春菜やラズちゃん達無事かな…」

モモは心配するかと訴えるかのように肩を叩いた

「大丈夫ですよ、きつと」

「うん、そうだね」

二人で笑う表情に移ると一つの宇宙船がやってきた、その宇宙船から音声が聞こえてきた

「姉上ー、モモー、大丈夫かー？」

元第二王女、ナナの声だった

「ナナ!!」

「遅いですよ、来るの」

ナナは宇宙船を着陸させ姿を一同に見せた、王妃達が揃いそれを見て兵士達は敬礼してしまうのであった

「遅くなつてすまん、けど目的は果たした、残念な結果だったけどな」

「どうゆうこと?」

ララとモモはよくわからないといった表情や目線でナナに圧をかけた

「詳しくは…この話は後で良いか?」

ララはこくりと頷いた

「ところでですけど、どうします？あの巨大なロボット」

モモはユニクロンを指差した

「確か…父上が中に侵入したんだよな」

モモは一人の兵士に時計を見せてもらった

「けっこう経ちますよね」

「パパ…大丈夫かな…」

「ボソボソ（どうだった？）」

「ボソボソ（オレ…モモ様に頼られた気がするだけでもう…）」

その時会話していた兵士の額に小石が飛んできた

「あがつ」

犯人はモモだった

「無駄口は今ここでする必要ないですよ」

一方その頃…

ルナテイク号は飛んでいた

「どこに飛ぼうとしている」

ザステインが疑問に感じていると大きな声が響きだした

『決まってるだろ!?ヤミちゃんの所に行くんだ』

それはユニクロンの所に向かうということだとザステインは理解した

「しかし…」

ルナテイク号はあまり使えそうな武装を積んでいないような気がした、そしてユニクロンの周りには宇宙船の爆発が絶えない。せめて光線の攻撃でも使えないと対処すらできずにこちらが沈んでしまおうだろう

『まだやれないって決まったわけじゃない、あんなところにヤミちゃんはいつまでもいちゃいけない、リト、同じ気持ちだろう？』
ルナテイク号がそう言うのとリトがよろよろとセリーヌに支えられて歩きながらこちらにやってきた

「ああ、オレもそう思ってる」

「危険です、座ってください」

王妃達が治療を頑張ったおかげでお腹の傷は殆ど塞がってたがまだ回復しきれてない様子だった

「いえ、リト殿もこいつに止まるように言ってください」

「ザステイン、降りてくれ。セリーヌ、お前もだ」

セリーヌは即座に首を振った

「分かってるよ、危険だって事も、けど…」

「リト殿…嫌、リト君」

ザステインの発する空気が変わった

「君の命は、君と彼女だけの物だけではない、ララ様やナナ様にモモ様、ミミ様にラズ様にココ様にロク様、君を選んだ者達、君の家族、この星の人達の物だ、君が危険な事態に陥れば今挙げた人達の笑顔を奪う事になる、だから無闇に突っ込むことだけはしないで欲しい」

「…」

リトは気を落ち着けるため無言の後自分で両方の頬を叩いた、ヤミを救おうと躍起になりすぎていたかもしれない、ネメシスをどうにもできなかった事への苛立ちもあつたかもしれない

『……わりい、着いちゃった』

3人が外を見るとそこはユニクロンの近くだった

大きさも桁外れであつたが見るからに危険そうな球体がいたらとところにユニクロンにくつついていた

『よし、一旦帰ろう』

「変わり身早すぎませんか？」

『いやー、こつちも熱くなりすぎてた気がするしなんか入れる場所少ない気がするしやつのか嫌だし』

やっぱり親衛隊隊長の言うとおりにせめてせめて準備しないとまずいと言いながらくるりと半回転しようとする球体のうち一つがこちらに密着しかけていた

『あ』

「あ」

球体は爆発しルナテイク号にも被害が及んだ

「翼部をやられたか」

ザステインは被弾箇所をチェックしだした

『墜ちるのか？ここに？』

声だけでルナテイク号が焦っているのが感じ取れた

「まう？ 私達死んじゃうの？」

リトはセリーヌを抱きしめ言った

「大丈夫だからな、大丈夫だから心配するなよ」

『あー、ユニクロンの近くでさえ何か光って見えるぞ』

めったな事言うなよと考えつつリトがユニクロンを見ると黄緑に発光した先程とはまた違う球体を見かけた

「本当だ、ん？こつちに二つ向かって来てる」

黄緑に発光した球体に見えるものはこつちに向かって来ていた

『またやられるのはごめんだ、今度こそ逃げる(今そつちに行けない事を許してくれ、ヤミちゃん)』

ルナテイク号は全速力でユニクロンを後にした

デビルーク星にて：

「何だあれは」

兵士は光る何かに指差した

「行ってみよっか」

「お前たちは他に怪我人がいないか確かめとけよ」

「では、ごきげんよう」

兵士達が了解の合図を取るのを確認して3人はナナの宇宙船に乗って光る物体に向かっていった

「ナナ、頼りにさせてもらいますよ」

「遅れた分は頑張るさ」

今一番背が高く力も有り余ってるのはナナだった

「見て、あそこ」

光る何かの向かう場所に近づくと、ルナテイク号が墜落しようとしているところが見えた

「させるかー!!」

ナナは宇宙船から飛び降りルナテイク号に近づいた

そしてナナは自身の背中にある反重力ウイングを活用し空中でル

ナテイク号に触れた

「熱っ!」

ナナは涙を流しつつ踏ん張った、ルナテイク号と中にいるであろう人間に届く落下の衝撃を和らげようとした

そのかいあってか地面にナナごと激突する事態だけは避けられた

「おーい、無事かー?」

『ああ、早く中に、あいつらは間に合う』

「え?」

ナナは疑問に思いつつルナテイク号の中に向かった

3人とも死ぬところだったと安堵感をたたえた表情で座り込んでいた

「ナナ…ここは?」

ナナは軽くここがどこか説明した

「デビルーク星だよ、それよりルナが早く出て欲しいってさ」

「悪いけど、肩貸してくれないか?」

「話は聞いてるぞ、あんまり無理すんな、ほら、二人も早く」

ナナはリトを支え二人に外に出るよう促し、そして四人は外にでた

「リト、セリーヌ」

ララはひとまず二人が無事である事を喜んだ

「ザステインさんも無事で何より…あ」

ルナテイク号が今にも爆発しそうだった

『良く保ったって褒めて良いぜ』

「嘘だろ…おい」

『みんな離れてくれ、巻き込まれちまう』

ザステインは震えながらルナテイク号から離れようとした

「…クソっ」

リトは娘のセリーヌを連れてララ達と宇宙船に乗った

そこにいる全員が宇宙船に乗り込むのを確認するとナナは宇宙船で辺りから離脱を試みた

『頼むよ、リト、ヤミちゃんを助けてくれ。ごめん、ヤミちゃん、そっちに行けなくて…さよなら、最高の相棒《ヤミちゃん》』

ルナテイク号は自身が保存しているメモリーを今までの人生を振り返るようにして覗いた

ヤミと、数々の惑星に飛び回っている様子。他の人間達がヤミと共に乗っている所、カメラセンサーでヤミの結婚式を覗いている自分、ヤミに子供が出来てルナテイク号にも見せに来た時もあった

『嫌だ…』

このまま爆発して壊れるのだという事を考えると一種の不快感が募った、もつと彼女達と一緒にいたかった、思い出やら何やらを作りたかった

最後辺りに出てきたアサキム・ドーウィン、彼の事も考えるとイライラしてきた

『まだ、壊れたくない』

不意にルナテイク号は叫びたくなった

『嫌だー!!』

次の瞬間、起こったのは爆発でなく光の拡大だった

全員目をつぶらざるを得なくなった

目を開けられるようになった後セリーヌが後ろを振り返ると

全身が白くなったところ以外、正確にはゴーカートより小さめの車がかくつついてる事も除いて全て元通りになったルナテイク号がそこにいた

ルナテイク号自身も驚いているようで

『なにこれ、なにこれ!?!』

と叫んでいた

『良かった…』

もう一つ今度はロボットのようなのが横たわっていた

『あいつを助けないと』

『リト、今はじっとしてて』

ララとナナとザステインは宇宙船の外に出た

「さてリトさん、今ここには私とあなたしかいません、それがどうゆうことか」

「まじっ？」

「ええ、ええ、分かっちゃいましたよ」

そのやり取りをしてる内にララはロボットに駆け寄った

「大丈夫か？」

「@i y t 4 h f d k」

端から聞けば意味不明な電子音にしか聞こえなかった

「こいつ…何て言ってるんだ？」

「大丈夫、だって」

「分かるんですか？」

「うん、マイクロンは相手がトランスフォーマーじゃないから繋がるのに時間がかかるけどさっきから時間が足りなくてどうにもできなかったから間に合ってたって良かったって」

「まさか姉上はこいつと同じ…嫌、ロボット系と心を通わす事ができ…るのか？じゃあ」

ルナテイク号についているマイクロンを指差した

「姉上、あいつの言ってる事、分かるか？」

ララはそのマイクロンのいる所に向かった

「はじめましてだねー、君、名前は？」

マイクロンは変形してララ以外には良く聞き取れない電子音を発した

「へえ、スキツズって言うんだー、私はララ、ありがとう、友達を助けてくれて」

そしてまた電子音を発した

「え？ユニクロンをどうにかしないと？うん、そうだね、力…貸してくれる？」

マイクロンは電子音を発した後ルナテイク号にいた位置に戻った

「最後…あの方はなんと」

「力になるのは僕らだけじゃない、ユニクロンが起きる前に早く行けって」

『早く行こうぜ』

その言葉の聞こえたリトは呟いた

「あいつ…生き返ったからって調子に乗って」

「良いじゃないですか、やるべき事は決まったし」

ナナとララは宇宙船に乗り込み、モモとリトは新生ルナテイク号、ルナテイク号・L《ライト》に乗り込んだ

ザステインとセリーヌはザステインの提案で船から降りた、兵士を引つ張る役割を担うためだそうだ

「では、頼む」

その言葉が自身に向けられたものであると分かったルナテイク号は任せとけ、今こつちには武器もあると言い放った

一方その頃…

ユニクロンの体内で人の通れる通路のようなところから手が出てきた

シクロウガだった

「フハハ、ハハハハハハハ!!」

アサキムは右手で自分の頭を掴み大笑いしだした

「さしもの星帝も僕を呪いごと喰らう事は叶わかったか、ならばいい、僕を利用したことを後悔によって刻む事にしようか」

「ようこそ、ヤミお姉ちゃんに近いものの内部に」

聞き覚えのある声が聞こえたと思うとアサキムは眠りに誘われた
そしてアサキムの視界に写るものは…

「君は…闇に堕ちたはずじゃ…?」

多少変色し体の模様が aumentando している気がするがそれは確かにアサキムとの戦いで好奇心によりアサキムの闇、因子の一部に触れた黒咲芽亜だった

第十九話 「悪夢ーさいせい」

アサキムは咄嗟に自身の剣を召喚した

「そんなに警戒しないでよ」

「何故、君はここにいる？」

先程、芽亜はアサキムに精神侵入を行ったことで闇に堕ち、それを好機とみたアサキムによって乗っていたマシンを斬られた、彼女を直接斬ったわけではなかったが

「確かに私はあなたの闇に触れ、その闇に堕ちた。けどどうせ堕ちるならって「知りたがる山羊」の力でその闇の大元を探ってみたんだ、そして」

スフィアの力も借りて再び自分というものを感じられるようになったと彼女はしゃべった

「そうか、君も囚われたんだね」

「そうだね、だから例えあなたのものもスフィアは今も私と繋がってるんだよ」

芽亜？はまだなにか言いたそうな表情だった

アサキムはおかまいなしに剣を構えた

「ならば君は僕にとつて邪魔者…というわけだ、その魂、漏れ出た僕の闇と共に散らしてやろう」

アサキムはそう言うと言った芽亜？に切りかかった

芽亜？は腕を刃物にしてその攻撃を受け流した

「体がナノマシンじゃなくてもこれ使えるんだね」

芽亜？は髪を刃物にしてアサキムの顔に近づけた

「君の事はなんて呼べば良いのかな？」

「この世全…ううん、君の言う通りでいいや」

アサキムは力任せに芽亜？の髪の毛と腕が刃物に転じたものを振り払った

「ならメア、君に聞きたい事がある」

メアはまるで何でも聞いてと言うようににこりと笑みを浮かべた

「君が再世を果たしたなら何故金色の闇にあれを見せた？君が「知

りたがる山羊」の力を使ってまで繕ったものを」

メアは軽く目をつむりながら答えだした

「私の精神が出てこれたのはあなたにネメちゃんと会話してた時だよ、それまで掛けてたのもリセットされたかな」

メアは腕を銃砲に変えてその長い砲身でアサキムを壁に激突させた

「けどもし、今の私がそんな事が出来たらそれはどうなるか気になったから……てことだろうね」

アサキムは壁に激突して呼吸が荒くなつた状態で問いかける

「僕ならその感情を喜ばしいと思うけど、君を受け入れてくれた人達にそれを言えるかな？」

「君相手だからこそだよ、呪われし放浪者さん」

メアは壁にいるアサキムに近づいた

「私の感情とリンクしてるものを君は狙おうとしてる、ならさらけ出すのも悪くないかなと思う、少し退屈してたし」

好奇心……いかにもメアはその感情を持って余しているという風だった

「僕相手になら遠慮は必要ないと言いたげだね」

アサキムは壁を伝って横に逃げようとした

「逃げる事は無理だよ、私がいる限り夢の中ではね」

アサキムは仕方ないと勘弁して動きを止めた

「そうだ、手伝って欲しい事があるんだ」

「君は何を欲しようとしていた？」

メアはすぐにそれを口にだした

「私の望みはシンカとそれまでの延命、それと過去の清算」

過去の清算……すぐに思い当たるのは彼女の姉……金色の闇だった、彼女への復讐を止めたいのかとアサキムは考えた

「君の考えてる事は分かるよ、けど清算したいのはそれだけじゃない、エデンの人間を撫で切りも良いかもしれないけど……」

メアはあることを口にした

その言葉を聞いてアサキムは絶句した

「それが本当に起こるものだと気づいた時には、もう終わってたんだ。何もかも、それが私が初めて「知りたがる山羊」に触れた時にみたもの」

「君はあの時にリアクターに選ばれたはず…ならその時見たものは」

メアはアサキムの言葉を遮った

「それは必要な分まで満ちた日の出来事、それまでに何も接点がないかった訳じゃない」

「まさか…そんな事が、起こりうるのか？」

メアの語った出来事、それはなんとも形容しづらいものだった、否定するだけならどれほど簡単だろうか？肯定だけするならどれほど無責任だろうか？いずれにしても言える事はただ一つ、幸せの先に幸福があるとは限らない

「確かに君の言う出来事は不幸と呼ぶに値するだろう、だが僕に言わせるなら想いの果てに抱く業火だからきつと彼女は受け入れられるはず、自業自得と言える」

メアはそれを聞き口元を歪ませた

「どうしてそんな風に冷たく言えるかな？」

「君と違って僕は他人だからね、それに僕は例えどれほどの闇に堕ちたとしてもそれに関して言うなら彼女程の業《カルマ》は持ち合わせてはいないし」

メアはアサキムの胸ぐらを掴みだした

「私のスフィアを取りたいなら、私を越える感情を身につけてよ、例え幻でもそれを見せられた人の気持ちはどうなるかぐらい、考えてみせてよ」

アサキムも負けじと声を張り上げ始めた

「それでも、彼女は為したい事を為し、その人間も為したいことを為した!!スフィアと違って、そうとはならなくても未来の王妃の技術を使えばそれができるかもしれない!!僕が割って入るべきじゃない、そうするべき理由はない」

メアはアサキムから手を離れた後言い放った

「理由があればいいなら私になろうか、それが出来たら私は消滅する、スフィアが本当に君のものになるように」

アサキムの心は動き出した、アサキムにとってはスフィアを手に入られるというのはチャンスであったから、これほどのチャンスを不意にするのも癪だった

「僕がそれでも断つたら？」

「メアは含み笑いを浮かべ

「スフィアを別の世界に飛ばす、君は別の世界でリアクターが覚醒するようにまた頑張らなければいけない。楽じゃないよね、きつと」
アサキムは少し考える素振りを見せた、スフィアという餌をちらつかせられた以上答えは一つ

「君のその頼みの内過去の清算の方、引き受けよう」

アサキムはシンカと延命は無理があると考えたため聞かなかったことにした

「やった、それじゃあ今のお姉ちゃんをよろしくね」

「少し待ってくれ」

アサキムはメアに問いかけた

「過去の清算とは言うけどその手段は？」

次元の転移だけならアサキムがシュロウガに乗れば簡単だが時間の遡行だけはそうはいかない、次元の転移の要領でいけばできなくもないが似てるけど違う並行世界かもしれない

「まあそうだよ、手っ取り早い手段と言えば」

「続く言葉はデンライナーだった

「そうくるか…」

「また呼ぶかもしれないね」

「スフィアを明け渡す用意は忘れないでくれ」

そう言った直後アサキムの目は覚めた

目覚めた事を確認すると少しだけ瞑想に耽った

これが終わってもまだ終わりではない事を確認するために

それが終わると共にアサキムはシュロウガと共に駆け巡った

一方その頃

リト達は、ユニクロンの近辺に移動していた

「改めて見るとデカいな」

迂回して背中に回り込んだのはいいが余りにもユニクロンが大きいためどこから攻めようか迷っていた、そんな時でも容赦なく球体は襲ってきた

『エボリューション!!』

ルナテイク号・Lがそう叫ぶと尻尾の部分が動き出し球体に向かってビームを放った

『こいつら襲ってくるから早く決めてくれよ』

リトは急ぐようにユニクロンを観察した

「なあモモ…」

「何でしょう?」

リトはユニクロンの首を指差した

「やっぱり首かな?」

「人の形をとってるならそれが良いと思います」

と話し込んでいるとララ達の乗った宇宙船がまっすぐに首へと向かっていった

「私の出番というわけだな」

「大丈夫なのか?」

リトの問いにナナは胸を叩いて答えた

「着込むものは着込んでいる、それとも私じゃ不安か?」

「そういうわけじゃないけど…」

「だったら、信じろ」

ナナはそう言うと言信を切り出した、そしてユニクロンの首に宇宙船が近づくと共にナナは外にでて尻尾からビームを放った

「リトさん、高速でこちらに何かがやってきます」

リトがレーダーを見ると確かに何か近づいていた、しかしナナが無事でいられるか心配でそちらに気を配る余裕はなかった

一分程時間がかかってようやくユニクロンの首に穴が開いた

「けっこう…強いな」

声は聞こえなかったがナナがぐったりしだしたのを見て宇宙船と

ルナテイク号でリト達は回収しようと試みた、しかしナナの周りには球体が既に近づいていた

「間に合え、間に合ってくれ!!」

そして一番早くナナのいる場所に着いたのは、黒い悪魔のようなものだった、その手でナナを包み球体の爆発を代わりに受けた

球体が見えなくなったころ手は開きだした

「…父上?」

何故そう思ったのかは分からないが、少しだけナナは父親の存在を感じた

「ナナー!!」

そしてララは急いでナナを回収した

「ありがとう、ナナを助けてくれて」

リトが礼を述べると黒い悪魔のようなもの声もしくは中にいる人の声は

「急がないと彼女の消耗は無駄になる」

それを聞いたルナテイク号とララは中に潜り込んだ

リトはついてくる黒い悪魔のようなものを見た

「(あいつ、ひよっとして…)」

見た目がリトの嫌いなあれに見えた

「そんな…」

見れば見るほどそうにしか見えなくなってきた

第二十話 「対峙ーやみ」

ユニクロンの内部はどこも薄暗く、光が無ければ見えづらかった。当然と言えば当然ではあった、ユニクロンは人の型を取っているからの中身に近いと考えて良いのかもしれない。内臓などの部位があるかどうかは確かめて見なければ分からないが

ルナテイク号・Lはいくつもの壁が見えるためぶつからないよう安全運転を心がけた

「それで?どこに向かおうとしてるんだ?」

ナナはルナテイク号・Lの隣を移動しながら進む悪魔のような機体に通信で話しかけた。先程の会話、行動から味方だという安心感を得ていたが何が目的なのかははつきりさせておきたかった、その後男が画面に映りだした、リトや自分達より若そうな銀髪の少年だった

「俺はユニクロンの心臓部を目指している、そこにきつと奴と同じ因子を持っている人間にたどり着けるはずだ」

誰とは言わないがヤミの事だと推察できた

「じゃあ、一緒に戦ってくれるんだね。けどヤミちゃんを倒そうとしちゃダメだよ」

ララはすぐに釘を刺した、何かあれば倒そうとする人達がいることを思い出しながら

「努力はしよう」

「分かった」

そこでその話は終わり、リトは別の所への通信を行った。そして今度は別の男が画面に映った、二本の飛び跳ねた白と黒の混じった髪と王族の着るような服装が印象的だった

「結城!?今までどうしてた?というかララちゃんは無事か?」

リトは気まずそうな表情を取りつつ

「ちよつと開いた腹塞いでてさ、ララは…その…」

と答えたその時狙ったようにララの顔が出てきた

「はーい、レン君」

「おいてめえ、またララちゃんに無理させてるのか?」

レンと呼ばれた男は怒りをリトに向けだした、デビルーク星の人間は無理に力を使うと幼児化しだす特性があった

「今回リトは私が小さくなる事については何も関わってないからリトを責めないでよ」

「ララちゃんがそういうなら仕方ないか：見たぞ結城、あのでかいロボット」

銀河ニュースの中継もやられてしまった、とレンは付け加えた

「今オレ達その中入ってるから外、頼めないだろうか？」

「分かった、やろう。あんなの他の惑星に行かれてもまずいし。ああ、そうだ」

妹は無事か？とレンはリトに質問した

「宇宙船使つて飛ばなかったら地球にいると思う」

「そうか」

そう言つてレンは通信を切つた

しばらくリトは黙り込んだ、彼と結婚した女性達とその子供達の安否を考え出した。不安は消えなかった、元気に過ごしていたはずの息子が突然死んだ事が判明したから

砂と化した息子を思い出した時彼の目に涙が流れた

「うつつうつつう」

泣き出したリトを一人は隣に立ち、二人は見ている事しかできなかった

「込み入った事情があるみたいだな」

急に悪魔のような機体を男は進めるのを止めた、そして壁に指を差した、ルナテイク号・Lが見ると行き止まりだったためルナテイク号・Lは宇宙船にいるララ達に止まるよう指示を出した

「とはいえ急かすようで悪いが止まってはいられない、特にこんな所ではな、下がっている」

悪魔のような機体は2つの宇宙船を払いのける仕草をしつつ鎌を構えた

「Z・O・サイズ」

男がそう言うのと三回得物の閃く音と共に壁が崩れだした

「行くぞ」

再び行動を再開した

それ以降男は、行き止まりの事以外特に何も言わなかった
軽口も、煽るような発言も

リトにとつてはありがたかった、感情をこれ以上かき乱されずに済むという点では

子供の死の原因たる人間はもう死んでいる…らしかった。嘘ではない、とゆう信憑性だけが確証だった

だからもう恨んでも、恨みは晴らせない、と片付けるべきかもしれない。それだけが相手を憎まなくていい理由だった

その内男は通信越しに2つの宇宙船に呼びかけてきた

「すまない、まただ」

ルナテイク号・Lはそれを聞いて今度は自分がやると言い放った

『こいつで壊せるかやってみたいんだ、エボリューション!!』

ルナテイク号・Lの尻尾は折れ曲がり上の部分にくつつくような砲門の形となった

そしてその尻尾からピンク色のビームが発射された

真つ直ぐに進むそのビームは壁を貫く

モモ達は驚嘆の表情をもらっていた、だが、その表情はすぐに敵意へと変貌した

一行の目線の先にあるものは、アサキムとシユロウガだった、破壊した壁の付近におそらくいたのだろう

「ここで会うとは、奇遇だね」

『何でこんな所に…!?!』

ルナテイク号・Lはアサキムとシユロウガがユニクロンのビーム砲に吸い込まれた事を思い出した

「あれで死ななかつたってこと?」

「それだけじゃない、ヤミの攻撃も腕以外通じなかった…」

『まさか、ここに入るために吸い込まれるようにしたってことか?』

「その通り…と言いたい所だけど終われるなら、別にいいとも思っているよ」

アサキムの声色は言っている事に対して明るいももだった、それがリトには許せなかった

「ふざけるなよ、てめえ…、何でそんな風にできるんだ!」

自分を簡単に危険にさらせる奴のせいで芽亜が…と思うとリトには我慢できなかった

悪魔のような機体は銃をシュロウガに突きつけた

「止せ、こいつに命の使い方の話をしても無駄だ。有るものはそうした使い方をし、無いものもまたそうした使い方をする。そういうものだろう、お前は何が望みだ? 呪われし放浪者」

「因果律の番人か、そうだね、僕の望みはユニクロン…星帝に知らしめたい、僕を利用するならそれがどうなるかを。君たちとおそらく為すべき事は一緒だと僕は考えているけど」

互いに2つ名が飛び交いナナ達は会話に入りづらくなってきた

「手を組まないか?」

話題がこちらに向けられた所でようやく話に入れた

「嫌だ」

即答だった

「お前は、芽亜の仇だ、これ以上顔を見たくない」

「顔を見たくないと言えばリトさんは大丈夫ですか? あれ」

黒い悪魔のような機体はゴキブリにも近いものがあつた

「あいつはナナを助けてくれた、だからどんな見た目でも頑張つて我慢しようと思ってる」

そう言っているリトの目は死にかかっていた

「オレは賛成しよう」

そう発言した男を見てモモは信じられないといった表情を浮かべた

「何でだ? えーと…」

「クオヴレーだ」

「クオヴレー、私も嫌だぞ!! こいつと行動を一緒にするの」

クオヴレーと名乗った男は変わらない口調で答えた

「戦力は多い方が良い、相手はお前たちの父親が全力でやって倒せ

なかった奴だ」

4人は驚きを隠せなかった、父と仰ぐ人間が敵わなかった事ではなく、理由でもなく、それをクオヴレーが知っていた事について

アサキムはただ一人事情を飲み込めたような諦観の表情を浮かべた

「やはりか」

理由を察したナナは首を震わせながらクオヴレーの方を向いた

「まさか…父上を見殺しにしたのか!？」

「そうなるな」

「お前は…!？」

弁明に入ったのはアサキムだった

「彼と僕はこの世界の人間じゃない、特に彼は因子が揃わなければ舞い降りる事すら叶わない。だから救いたくてもすぐに救えはしないんだ」

「何も言う必要はない、オレに何もできなかったのは事実だ」

その声はひどく無念そうだった、見殺しというのは残虐性、その行為を正当化させるだけの何かを持ち込まない限り決まって気分が悪くなる

「分かった、力を貸してくれ」

「リトさん?」

「あの人に貸せなかった分も含めて俺達に力を貸してくれ、それで良いか?」

3人は一斉に答えた

「リトが良いっていうなら良いよ」

「私も同じです」

「私は…」

ナナは考えた、父上をクオヴレーは見殺しにした、何もできなかったと言っていたが信じて良いのだろうか?

だが自分を助けてくれたのもまたクオヴレーであった、その時の行動は善意のそれだった、そこは信じて良さそうだった

「許せないが、考えるのは後にする。今はよろしくな」

「ああ」

アサキムは待つてましたとばかりに声をかけてきた

「僕の申し出は…」

モモはため息混じりに答えを出した

「そうですね、クオヴレーという人のついでになら良いでしょう」

その言葉にアサキムが喜びの笑みを浮かべ出すと同時に

モモは許した訳じゃないから何かに遭遇したときにこちらはあなたを盾にするという言葉突き出した

「ならそれで構わない」

リトはそれで良いのかと思いつつも

「じゃあ行こう」

と号令をかけた

アサキムと一時的に手を組んだリト達は先に進んだ

しばらく移動している内に手当たり次第に進むのはそろそろ止めにしたいとナナは思い始めてきた

「たくさん壊して進んでも良いんじゃないか？」

「ならオレがやろう」

クオヴレーは離れた床に向けるように自分の機体の肩部にある砲台を展開させた

「メス・アツシャー、マキシمام・シユート!!」

ビームが放たれる音とともに狙った場所とそこに近い部分はすぐに穴が開いた

『なにそれ』

自分のより太く、長いビームの範囲に半ば呆れ半ばうらやましがっていた

「行こう、この先に彼女はいるかもしれない」

アサキムはすぐに開いた穴の向こうに向かった

「おい待て!!」

ルナテイク号・Lと宇宙船も後を追いかけてクオヴレーの乗った機体もそれを追いかけた

アサキムがたどり着いた先にあつたのは一人で倒れているヤミ

だった

「僕たちはたどり着いたのか」

一人ではできない事だったかもしれない、道は広く、深かった

「!?ヤミー!!」

リトはルナテイク号・L越しでヤミに呼びかけようとした

すると起き出したヤミの目が一際赤く光りだし、シユロウガと同じ程の大きさになった

第二十一話 「解放ーわかれ」

リト達は驚きのあまりしばらく声を出せずにいるようだった、無理もない。知り合い以上の人間で今までそういうことを行う素振りのないのにいきなりそれをやってのけたのだから。そうじゃなくても人間が急に巨大化するなんて有り得ない、恐らくユニクロンの仕業だろうとの目処は立つが。さらに彼女は既にダークネスのような見た目でありこちらを完全に塵芥と見なしたような視線はもはや説得ではヤミの奪還は叶わなさそうな気にさせた、それでもやらなければ気が済まないのか

「ヤミ、俺達が分かるか？」

リトのルナテイク号・Lからの問いかけに返事は無かった、ただ：ヤミの髪が剣の型をとりリトの乗るルナテイク号・Lに襲いかかった、アサキムはシュロウガでそれを止めようとシュロウガの持つ剣でそれを防いだ

彼女の増大した○○（タブー）と変身能力による刃の切れ味が一体となりシュロウガの魔王剣、デイスキャリバーにのしかかった、アサキムは衝撃を感じつつそれを押し出してヤミの髪の軌道を邪魔するようにシュロウガの剣を振り回した

シュロウガとヤミが組み合ってる隙にと

「切り裂け!!」

シュロウガの上からクオヴレーは機体が持つ鎌をヤミに振り下ろした

「それ、ダメ!!」

急なララの叫び声にクオヴレーは一瞬反応してしまい、鎌を振るう腕の速度を緩めてしまう、途端に気づかれたヤミからのヤミの髪からなる拳の形をした反撃をもろに喰らった

「くっ!？」

クオヴレーは飛ばされた乗機を一回転させ受け身を取り衝撃を和らげた

「何故、邪魔をした？」

「あれは、私達の友達でリトの大事な人でもあるんだから…」
傷つけられたくない、と告げずともそう言いたいのであろう

「殺して死ぬやつなのか？それとあれはもはやそちらの知っている人間ではない、見て分かるはずだが」

「彼らにとつては問題外のようなだね」

アサキムは隙を見つけてシュロウガで蹴手繰ってヤミを飛ばし、話に割り込んだ

「でもダークネスの時のようにはいかないというのは心に留めておいてもらいたい、今彼女の心に巣くうのはバグではなく、星帝の精神だということ…」

アサキムがそう言った途端シュロウガの全方位から穴がいくつも出現しおそらくヤミの能力によるものが飛び道具と化しシュロウガ目掛けて襲いかかった

それは代わる代わるシュロウガに向かいシュロウガに刺さるまで止まらなかった

「爆ぜよ」

彼女が巨大化しての第一声がそれかとアサキムが考えているとシュロウガから衝撃を感じた。シュロウガに刺さったヤミの飛び道具、それら全てが音をたて爆発した

「危ない!?!」

クオヴレーは自身の機体を使い宇宙船二隻を掴み爆発から避難させた

「ありがとう、無事か？みんな」

「大丈夫だよ、リト」

「ええ、はい」

「ああ」

「デイス・アストラナガンはこの程度では碎けない」

リトはほっと息をつきヤミを見た

「ヤミ…ダークネスの時と本当にやってる事が違うな」

リトはヤミがダークネスと化した時を思い出した、あまり思い出すとヤミは忘れてくださいと言ってくるが

「体が同じでも、心の主導権を別の奴が握れば行動も違う、逆もまた同じだ。それより：聞こえてるな、ユニクロン」

「まさか番人が立ちふさがるとはな」

今さっきの言葉では聞き取れなかったがそのヤミの声は男の声も重なって聞こえていた

「混沌と混沌が混じり合い、許されざる存在となった、だからオレは来た」

「そうか、だがもう遅い、遅すぎた。もはや私は、トランスフォーマー以外からも憎しみを感じられるようになったのだ」

途端にユニクロンの放つ空気が威圧的な物に変わった

ユニクロン「感じるぞ：死んでゆく者達の憎しみ、傷つけられた者達の憎しみ。お前達からもな、ネメシス：という名の女は実に利用しがいがあった」

「何だって!？」

その言葉はネメシスの暴走が十中八九ユニクロンの仕業とほのめかしたようなものだった

「てめえが…」

「止せ」

クオヴレーは制止した

「思うつぼだ」

「さて：どうする？私が再びこうする事で私の真の肉体との接続を行いお前達の星へ再び攻撃を始めるが」

デビルーク星にて

止まったユニクロンは活動を再開しだした、まず手始めにと言わんばかりに伸びきった爪のような足の先をデビルーク星に向けて射出した

突然ミサイルのように降ってくる物体を兵士たちは呆然と見つめていた

ユニクロン内部にて

「因果律の番人：私を止めるためにはこの体に危害を加えねばならない、しかしそれをここにいる人間は許さないが」

「そのようだな、どうする?」

クオヴレーはリト達に質問を始めた

「彼女を取り戻す算段はついているか?それが無ければ…邪魔はするな」

「……」

長引けばデビルーク星の被害は増すばかり、しかしヤミを傷つける事はできない、だがどうすれば良いのか分からなかった、それ以外にあるとすればただ呼びかけるぐらいしか思いつかなかった

「もう少し近づいてから…」

一方、アサキムは爆発の拍子に眠りにつき再びメアの精神が居る場
に下りた

「…何か用かな?今は混沌に堕ちた彼女と相手をしているんだ、それは君も知っている筈だが」

それに対してメアは不敵な笑みを浮かべた

「そう…けどあの時にはいたけど今はいない人間がいる、誰だか分かるよね?」

「黒咲芽亜…君だろうか?」

「そう、私もスフィアを使って手伝おうと思うんだ、今の先輩達にはヤミお姉ちゃんを解放するの難しいから、きつと」

メアは理由を説明しだした、ぎつくりの説明だと今彼女はユニクロンと繋がった影響で心を閉ざしている、今すぐにリト達の説得が上手くいってもその時王妃達を見ると亡くなった息子に思考がたどり着き、リトが説得をしようとすれば申し訳なさ…罪悪感に押しつぶされそうになる

「そしてここにいない人間じゃお姉ちゃんを取り戻す事はできないし」

だから自分がやる…と彼女は言った

「怒りをぶつけさせて一度すつきりさせる事がお姉ちゃんには必要そうだし…こっちとしてもサンドバッグをされる気はないし…兄弟げんか、たまには良いかもしれないね」

「なるほど、兄弟げんか…」

だが成人による兄弟げんかは割と見苦しそうだった、それと…

「毒や危険物は…ブツ」

ハーレムという言葉には毒やその他といったイメージもついて回るためつい口に出したところメアに口を手で押さえられた

「そんな物騒な事はしないって、他に人増やすような事してないし、先輩のお嫁さん達はする理由ないしそういうところは健全だよ、うん」

今のうんという言葉は確信に満ちていた、おそらく調べたんだろう、その言葉を聞いた後アサキムはメアの手を払いのけた

「決まりで良いかな？じゃあ僕は行くよ」

話は戻る

その時ユニクロンはヤミの髪からヤミではなくユニクロン自身をかたどった体を複数体作りあげた

「ヤミのゴーレムと同じようなあれか」

「リトさんと違う見た目ならためらう理由はありませんね」

『じゃあ、いくぜ。エボリューション!!』

ルナテイク号・Lは尻尾からビームを放ち、その後ろについていくように巨大化したヤミに突っ込んだ

ルナテイク号・Lの撃つたそのビームは一直線状に進みその範囲にいる分身のようなゴーレムを破壊した、しかしその範囲外かつルナテイク号・Lの近くにいたゴーレムは健在で右に一体、左に一体、ルナテイク号・Lに殴りかかろうとしていた

『あっしまっ』

その時2つの弾がゴーレムに命中しゴーレムを破壊した、撃つたのはララとナナの乗った宇宙船とクオヴレーのデイス・アストラナガンだった

「行って、リト!!」

「あくまであきらめないか、その姿勢は嫌いではないな、必ずやり遂げろ」

「…ありがとう」

リトはルナテイク号・Lの中で外に出る準備をしていた、飛び込

む気のようにだった

「私も行きます」

「ああ」

「お前達の星は二の次というわけか…？」

「違う、私達の母星…そこに生きる人達を、なめるな!!」

一方そのころ、デビルーク星にて

「私が斬り伏せる、皆は破片をできるだけ壊してくれ」

「親衛隊隊長!？」

ザステインは向かってくるユニクロンの足だった物に向かって走った

「イマジンスword、最大出力」

ザステインがそう発言すると手に持っている武器の発光した部分が天高くまで伸びだした

その後ろで兵士たちはじゃんけんをした、負けた兵士はザステインにくつつき

「おりゃー!!」

ザステインをユニクロンの足だったものまで投げた

「ありがとう、ハァー!!」

ザステインはユニクロンの足だったものを横薙ぎに切りつけ、そしてみじん切りにした

「くっ」

あまりに向こうが硬すぎたのか最初の一闪以外通じず切れ目を入れるに留まっていた、ザステインはその後着陸し、少し伏せた

「隊長!？」

「私の事は良い、それより迎撃できる宇宙船で迎撃を」

「はっ」

兵士は敬礼の後その場を去り、程なくして宇宙船が数を並べてそこにたどり着く

ユニクロン内部にて

ルナテイク号・Lがヤミを乗っ取ったユニクロンに近づきかけて

いる時

「待った」

アサキムがルナテイク号・Lに声を掛けた

「何…!?!」

ルナテイク号・Lも驚きそのせいかルナテイク号・Lは大きく体を反らしルナテイク号・Lを回避する瞬間を見逃した

「さっき同じようにネメシスを説得しようとして失敗した、その結果は…死に堕ちゆく寸前に至った君には分かるかい？」

「……」

モモはなんとなくだが目を逸らした、自分に芽生えた感情を、ここで、このタイミングで振り返る羽目に陥る事になるとは思わなかったから

「だからなんだって言うんだ!?!」

「失敗と同じようにしてはいけないって事さ、だから…先鋒は僕が務めよう」

アサキムはシュロウガの手を使い空間に穴を開け、スファイアを取り出した

「それはまさか!?!」

黒咲芽亜のロボットの胸部にはめ込まれていた謎の球体、彼女曰わく「知れたがる山羊」だそうだ

「魔王剣よ、彼女の想いを金色の闇に伝えるための器となるがいい」

アサキムの言葉と共にデイスキャリバーは緑色の淡い光に包まれた、その光は数秒で収まった。そして出でた物…それは二振りの剣だった

「バニテイスライサー!!」

アサキムは叫んだ後紫の色の刀身を成す二振りの剣をつかみヤミを乗っ取ったユニクロンに向かった

ユニクロンを横した分身達を足で押しのけつつ攻撃を回避しつつクオヴレーに迎撃を任せ、ヤミの肉体にその剣を振り下ろした

ユニクロンは両腕でそれを受けた、傷一つつけられなかったが次々と踊るように色々な方向から斬りつける

ユニクロンはシユロウガに一発殴り応戦した、シユロウガは後ろに吹っ飛び態勢を立て直そうとした。それを確認したユニクロンはワームホールをシユロウガの後ろに在るように精製しもう一方の手でシユロウガを後ろから殴った

「そう、それでいい…これで僕は君にたたき込める」

アサキムはシユロウガの持つ二振りの剣を合体させた

「あわ!？」

そしてシユロウガはユニクロンに吸い付くように近づきユニクロンの腹部を攻撃し、ポーズを取った。それと共にその剣は割れるガラスのような音を立てながら崩れていき元の姿に戻った

「何かと思えば…無駄な事を」

「それでもないさ」

「??????」

「とうっ」

メアは舞い降りるかにようにそこに着地した

「とうっ」

体の一部が自分のものではなくってゆく感覚

「あの技は多用はできないか」

メアは辺りを見回した、すぐ目の前に手を真っ白な鎖で縛られているヤミがいた

「ヤミお姉ちゃん!!」

すぐにメアは鎖を切ってヤミに寄りかかった、ひどく衰弱してるようですぐにはメアを認識できてないようだった

「…誰?」

「芽亜だよ、お姉ちゃんの妹の」

その言葉への反応は顔を逸らすこと…拒絶だった

「芽亜は消えました、私にずっと真実を隠したまま」

「けどこうして生き返って…」

メアも自分で発言して不適當だと考えつき黙り込んだ、アサキム、もしくはシユロウガの因子の一つである霊的な存在に自分を殻にさせてそこから肉体支配した…という点を踏まえれば生き返ったとは

言い難いものだった

「あなたが芽亜だとするなら教えてください、ガーランドは本当に…私への復讐で殺されたんですか？」

メアはしばらく考え、低く重めの声で言い放った

「そうだよ」

その言葉を聞きヤミはそっぽを向き体全体が震えだしていた

「お姉ちゃんだけのせいじゃないよ、あの人は煽られて行動しただけ、本当はただ」

その瞬間メアの顔に手が飛んできた

バチンという快音が鳴りメアは態勢を崩した

「今までしたこともない攻撃をするなんて…素敵!!」

ヤミの目の涙の勢いが増していた

「ふざけないでください」

ヤミはメアに向かって殴り込んできた

「どうして、何も言ってくれなかったんですか!? 芽亜、去年帰ってきた時から何か今までと違う雰囲気でしたよ。疲れてるのかぐらいいしか思えなかったけど、その理由があんなことだなんて…」

そして私はそれから今まで息子の死を知らずにいた

「本当の事をいってもらいたかった。私達、姉妹じゃないですか!? 隠し事はなしでいたかったですよ」

メアはヤミの右ストレートを片手で受け止め、もう片方の手でヤミの手を狙った

「言えるわけじゃないじゃん。お姉ちゃんあの幸せそうな顔を見てたら、私…その事を言おうとする度に口が動かせなくなってる」

ヤミとメアは押し合いの状態になっていた

「あの子は、ガーランドはどうなるんですか? 私さえ良ければ、ガーランドが誰からも認識されなくて良いって事ですか?」

「ガーランドが好きだった家族やデビルーク星や地球をお姉ちゃんが、壊すかもしれなかった!!」

「甘く見ないで、芽亜!!」

ヤミはサマーソルトを繰り出し、メアを押し出した、その勢いでメ

アは膝をついた

「私は…痛くても、それを関係ない人達にぶつけようなんて気はありません」

「お姉ちゃんはそれをガーランドを殺した男に言える？」

「そ、それは…」

ヤミは胸に手を当て、考えている様子だった。心臓の鼓動が増して息が過呼吸に至りそうな程急に荒くなっている、個への憎しみとはこういうものかといった表情を浮かべていた、他人による第三者の目線なら元々はそちらが悪かった、因果応報だと言えるかもしれない、だがそれはメアにとつてあまりに非道な気がした、原因がやられた方にあるとしてもそれをそうだという言葉をかける人間の意図を汲み取れる訳がない、やられた方はその分傷ができて、言葉がそれを悪化させるから。なぜ自分がやられなければならないかという問いを自分で考えてる時にお前が悪いという答えが来るなら「じゃあ自分が消えれば解決するね」という思考に行き着くかもしれない

メアは、ヤミの額を殴った

「隙あり」

「やりましたねー!!」

メアは逃げた

「やり返したい?ならここまでおいで」

「上等です」

そして追いかけてここが始まった

2人は足で、翼を広げて、走り、飛んだ。それをしばらく繰り返し返していたが終わりが来た、メアの前にワームホールが開きそこから手が飛んできてメアを飛ばした

「痛ー、お姉ちゃんワームホールだなんて」

互いに息が切れ切れだった

「さすがにここは普通と違う場所と気づきますよ、なのでいつもの状態でもいけます」

「卑怯だよ、卑怯!!」

「いきなり殴ってくる芽亜も芽亜ですよ」

「あ、お姉ちゃんたんこぶできてる」

「そういう芽亜もずいぶんほつぺたが…」

2人はお互いを見ておかしくなり、笑い出した。言葉が続かなくなり、共に寝転がった

「疲れた」

「芽亜…」

先ほどとは打って変わって晴れやかな声色だった

「ありがとうございます、暴れたおかげで今この時は自分の感情を棚上げできそうです。今更ですが何故入れ墨？」

「ちよつとした裏技、色々大変だったけど…話変わるけどさ、ここから出よう」

唐突にメアは話題を切り替えた

「ここからですか、私にできるんでしょうか？」

メアは首を縦に振った

「できるよ、お姉ちゃんにはみんながいるもん」

「芽亜は？」

メアのその言葉にはみんなの中に自分を含めてはいないニュアンスを感じさせた

「私は、もうさよならかな」

メアは自分の手を見た、少しずつ自分が粒子となり消えようとしていた。スフィアにこびりつかせた意識をキープしつつシユロウガの剣に注いだ分の次元力は無くなるうとしていた事が見て取れた

「私には、芽亜もいてみんななんです。だから…」

ヤミは立ち上がりメアの崩れてない方の手を握った

「待つて欲しい人間がそこにいなくてもお姉ちゃんはここから出なければいけない、待つてくれた人達がそこにいるから。お願い」

「リトさん達…ですか？」

「うん」

ヤミは明らかに苦い表情をしていた

「あの事でお姉ちゃん達の関係は壊れないよ、お姉ちゃん次第かもだけど。ガーランドの事は気にしない、けど忘れないで良いんじゃない」

い？ヤミお姉ちゃんの伝説の礎になった人達だつてそう」

「そう…ですか？」

「そうだよ、他に何か言葉が欲しい？」

「もう良いです。その…手、そのままが良いですか？もう少しの間」

「いいよ」

ヤミはメアを支えるような態勢を取り、メアは立ち上がった

フラネットスライサー
「惑星断刀!!」

ヤミは右手から光による剣を生成しそれでこの場所を横に両断した

「おー、スツゴい」

「ここならダークネスとならなくてもいけますね、芽亜」

「何？」

ヤミの目には再び涙が溢れ出そうとしていた

「お別れにならなかつたら何度でも聞かせたい所ですが…今まで本

当にありがとう」

3

「もう十分だよ、何度も言われると重いし」

2

「弟に会ったらよろしくね」

1

「え？」

ヤミがその意味不明な言葉で思わず振り返るとメアは泥が落ちるように崩れて消えていった

「気になる言葉残して行かないでくださいよ、芽亜…」

ヤミはしばらく泣いてから意を決したようにその部屋をめいっばい切り裂いた

第二十二話 「亡霊ーペるそな」

「む!!」

アサキムがシュロウガを通じて振り返った時ユニクロンは取り憑いたヤミの手や体を若干焦った様子で見回した、巨大化したヤミの手から金色の粒子が霧散していき、次々と体が消えていった

残ったのはクオヴレーを除くこの場にいるみんなの知っているヤミ、それと暗い緑の色の球体だった。アサキムの目には一瞬スフィアが見えて思わずシュロウガの手を伸ばしてしまったが色がよく見れば違い、また大きさも大分違う点から慌てて手を引っ込めた、おそらくスパーク：人という魂のようなものなのだろう

ヤミは心臓の位置にいたがすぐに落下しようとしていた

「彼女の心は…届いたか、拍子抜けかもしれないがデビルーク王：早くかくまうと良い。一呼吸でも少ない内に」

「!?分かった、頼む」

『よし』

ルナテイク号・Lは大急ぎでヤミに向かった、リトはルナテイク号・Lから外に出てその時を待つ、そして時は来たので立った

「おうつと!!」

リトはヤミに落下の衝撃が伝わらないように注意を払いながら落ちゆくヤミをキャッチした、そしてすぐにルナテイク号・Lの内部に入った

「ヤミ、オレだ」

「……リトさん?」

その声を聞いたリトはほっと息を付いた、それを見てモモも良かったという表情を浮かべた

アサキムはそれを見届けた後、暗い緑色の球体に向かい、ユニクロンに語りかけた

「割とあっけなかったね、ユニクロン。だがこれは必然とも言える、同じ混沌をもたらし、そこに導く部類に入る人間に目を付けたんだろうけど君と彼女は違う。彼女は一人じゃなかった、信頼、愛情、絆。彼

女にはそういうものがまだ憎しみに勝る分残っていたということさ」
「ええ…」

ナナはひどく驚き嘘だという表情を浮かべた、アサキムの唱える言葉にお前がそれを言うのかと疑問に思っているようだった、ナナだけでなくララが真顔であることを除いて他の全員も似たようなものでありアサキムは自分の言葉が空虚かつ空々しかったことを痛感した、その上で話を続けた

「今さっき言った言葉は憎しみに転じやすいものもあるかもしれない、けど転じやすいからこそ憎しみに寄り添えるのもそれだ。後は憎しみという炎、それを浄化する悲しみの雨がね。それを絶てずにいたことで…今回は君の負けだ」

ただし…次はない

アサキムはシュロウガでデイスキャリバーを召喚しユニクロンを斬りつけようとした、それをクオヴレーは止めた

「待て、ここから先は俺がやる」

クオヴレーはデイス・アストラナガンの手で胸部を開いた

「廻れ、インフィニティ・シリンダー!!」

アサキムは左右を見回す、周囲が地震が起きたように震え始めていた

「テトラクテュス・グラマトン」

その言葉をクオヴレーが詠唱したためクオヴレーを見ると様子が一変していた、服装はそのままだが髪の色が青くなり表情も凶悪そうになりコックピット内で何かポーズを取っていたようだった、彼の本気を感じ取ったアサキムは

「少し離れよう」

リトや王妃達にこの場から離れるよう促した

「あ、ああ…」

アサキム達が攻撃の邪魔にならないように離れると

「さあ、時の流れを垣間見ろ」

クオヴレーの言葉と共にデイス・アストラナガンの胸部からとてつもないエネルギーを秘めてそうなエネルギー体を放出した

「アイン・ソフ・オウル、デッドエンドシュート!!」

間もなくそれは高度を増しユニクロンの上に向かう。辺りには雲がまとわりついていて、雲の発生源にあたるような水分は何もなかったはずなのに

そして球体のような形をしたエネルギー体は緑色の光と形を変え雷のようにユニクロンに落下し直撃する、閃光で見えづらかったが魔法陣が展開されている事だけはかろうじて分かった。魔法陣の数だけ橙色の球体が飛び出しユニクロンに食らいつくように覆っていた

「存在すら消し去る気のようなだね、だがそれは叶うのか疑問に思うけど」

アサキムの言葉を聞く気がないのか聞ける状態でないのかクオヴレーは何も答えなかった

やがて爆発する音が鳴り、収まる頃にはユニクロンの魂のようなものは影も形もなくなっていた

しんと静まり返ったなか口を開いたのはリトだった

「終わった…?」

「俺はな」

デイス・アストラナガンは何か赤い魔法陣を描こうとしていた

「…何してるの?」

クオヴレー「やるべき事はもう終わった、これ以上オレの出る幕は無いだらうと思うが、ああそうだあそこ」

デイス・アストラナガンは何かを指差した

「赤ん坊…ですかね…!!」

モモがスコープで確認を取ったところ一人赤ん坊がそこにいた。

誰かは周囲にある服からだいたい察しがつけた

「お父様!!」

「姉上、つれて帰るぞ!!」

ナナの言葉より早くララはその場所まで宇宙船を飛ばした

「父上!!」

ナナは着いた後降りて赤ん坊となった父親と仰ぐ者の体を抱き上

げた、その体は冷たくなっておりもはや死んでいたと言っても差し障りがなかった

「どうしてこんなことに…」

「限界を超えて力を使いすぎた、だからこうなった。お前たちはそういうものだろうか?」

「今私達のいるこいつはパパより強かったっていうこと?」

「混沌^{カオス}同士による戦闘力の足し算だった、ただし多すぎた足し算だな」

「ヤミちゃんの事ですか?そうですね?」

「……」

ヤミは何も言えそうになかった、自分のせいではない、と彼等は異口同音でも口を揃えて言うだろう。でも彼の死に自分が関わっているということ、それだけは覆しようがなかった

「ああ、そうだ」

「ヤミは、混沌^{カオス}じゃない」

「言い張るのは構わんがここを出てからの方がいい」

その言葉と共に再び揺れが起こった、一行は浮遊しているため足元にぐらぐらとした衝撃は受けれないが先程のクオヴレーの攻撃と同じ何かの合図だということは一目瞭然だった

「これって?」

「変形しようとしているのかは知らないが脱出した方がいい、行け」

「ああ…分かった、ん?奴はどこだ!」

アサキムはいつの間にかどこかに消えていた、ギドの元に行った時にどさくさに紛れて離れたのだろうか?ルナテイク号・Lのレーダーでも探知できていなかった

「後にしよう、今は」

『了解』

ララ達は急いでその場所から離れた、見送りが終わってしばらくしてクオヴレーは

「さて、俺は…」

また別の世界に旅立とうとしていた

「まだ帰るには早いんじゃないかな？」

声はアサキムそのものだった、振り返るとリト達と反対側に隠れていたのだという事が判明した

「何故隠れていた？」

「隠れる術はあつたし、隠れなければならなかった。そうしなければ彼女達は是が非でも捕まえようとしていただろう、スフィアを狩る者の宿命という奴さ」

「…まあ良い、まだ早いとはどういう事だ？」

「君もまさかあれで本当に終わりだと思つてはいないだろう？」

「あれは負の感情で力を増す奴だ…だから無にしても再び新生する、という事を言いたいのか」

アサキムの乗るシユロウガはクオヴレーのデイス・アストラナガンをまじまじと見た

「近い因子を糧にその身を現す事ができたか、その因子たる人間が何を為したか知っている？」

「あまり知らない」

アサキムはクオヴレーにギドの事を説明した

「だから彼の存在はこの宇宙には大きかった、デビルークという惑星でなく彼の存在を恐れている人間は未だ後を絶たないだろう」

「それ程の奴が死んだと聞けば行動を起こす人間がいると？」

「そう…彼女との繋がりが解けたかは実のところ未知数、闘争とかであまり刺激するのはできるだけ避けたい」

「……………」

クオヴレーはデイス・アストラナガンで急にスピードを上げて前進した

「そして僕は…」

一方そのころ

レンも兵士達と宇宙船を数十隻連れてユニクロンの近くにたどり着いた

「王様、私達は…」

「周りと協力して、撃つぞ」

ユニクロンを指差しレンは言い放った

「ええ…」

「多少の事では壊れないだろう、あれもララちゃん達の乗る船も。だからあれに少しでもダメージを…」

ユニクロン内部へ

リト達はユニクロンの内部を飛び回って出口を探していた

「さすがに、遠いな」

『ヒヤヒヤする羽目に何度おちいつてるんだ?』

やはりどれほど速度を出せてもたまに急ブレーキするようにスピードを止めなければ壁に激突してしまうためにスピードを出し切れなかった、ビームを放つ分のエネルギーも乏しくなり突っ込んで破壊できるカルナティック号・Lは試してみたが中にヤミ達がいる以上、自身が壊れ彼女達を危険に晒すリスクなどは避けたかった

「外に向かつてはいるんですけど」

できるだけまっすぐ進もうとしていた、進めばいずれどこか出口にたどり着けると。しかしユニクロンが大きすぎるのかやはりそこまでは遠い道のりに感じられた

そう考えてると通信が来ていた、その主はレンだった

「…レン、どうなってる?」

「結城、デビルーク星は無事だよ、足のミサイルでの大打撃は避けられた。兵士達いわくザステインさんのおかげらしいそうだ。身体は縮まってないけどそうなるもおかしくないから休んでもらっている、まだララちゃん達とあのロボットのの中にいるのか?」

リトは軽く頷いた

「ああ」

「また何か変形しようとしている、みんなで攻撃しているから脱出するなら合図はしてほしい、何かあつてからじゃ絶対に遅いから」

「レン君、教えてくれてありがとう」

レンは手で軽くピースを取って通信を切った

「では急ぎましょう」

と言ったその時リト達の横をデイス・アストラナガンが通り過ぎよ

うとしていた

「クオヴレー!?!」

「やるべきことがまだあったようだ、それが俺自身に課す新たな任務…善か悪かは俺にも分からないがな」

「そうか」

「手伝ってくれてありがとう」

通信越しにララが笑うとクオヴレーは複雑そうな表情を浮かべた

「その無邪気そうな笑顔…懐かしい顔を思い出す。嫌、お前たちには関係ない話だ、忘れてくれ」

クオヴレーは首を横に振っていた、それをあたかも否定するように。その仕草の後クオヴレーの乗るデイス・アストラナガンは空中で立ち止まり両肩のエネルギー砲を展開させた

「メス・アツシャー、マキシمام・シユート!!」

その攻撃でユニクロンの細胞でできた壁は攻撃の範囲分破壊された、その先には闇と宇宙に浮かぶ星々で照らされた出口だった

「先に行け」

「お前が開けたんだ…お前が行けよ」

「俺は他の壁も壊せるが今のお前たちはそうもいかないだろう?俺は大丈夫だ」

「ああ…」

リトは急いでレンと通信を始めた

「レン、今から脱出する」

「分かった」

その言葉の後通信を切ったリトはクオヴレーの言うとおり先にルナティック号・Lと宇宙船でそこまで向かった、そして外に出てユニクロンを見回した

先程見たユニクロンと同じ、惑星の形に戻っていた、違いがあるとすれば一向に動く気配がないこと辺りか

「どうしよう、これ」

「私達、勝ったんですか?」

「いえ…」

ヤミは首を横に振り否定した

「あれが単純な勝ち負けが当てはまるようには思えません」

「じゃあ、ここはひとまず帰ろう」

作戦を練るにしろなににしろララ達も休まなければいけない、無理をしてまた身長が縮むのも困る。というわけでリト達は他の宙域にいる兵士達と共にデビルーク星に帰還を試みた

宇宙船で飛んだ時と外観は変わらずにいた、あの時からさほど被害がなかったとすれば良しと言えるがどうなっているのかを確認しなければと宇宙船を着陸させた

「ご無事でしたか!？」

兵士はリト達の突然の帰還に驚きつつ敬礼を始めた

「ああ…」

「今皆さんはどうしています?」

「出ている方々は皆疲弊しきっております、そちらは…」

リト達はユニクロンの内部に行った時の出来事を語った

「ではもうあれの脅威は…」

ないと言いたいが確実には言えない、動かなくなったと言うのはまたどこかで動くかもしれないという可能性を含んでいる、今そこにいるだけであれが人々に想起させる恐怖は計り知れないだろう

「ないとは言い切れない」

それを聞き落胆や気落ちといった表情を見せ兵士はがっくりと座った

「ごめん…」

「謝らないでください、これから俺は死ぬと言われているみたいで嫌です」

「そうならないようにするから、気を落とさないで」

それ以上言葉が続かなくなりリト達はその場所を去って王宮に向かった

王宮の被害も計り知れなかった、ネメシスが数時間前まで暴れていたのだという事を思い出させた、ユニクロンの攻撃がそれらの被害を拡大させた気もするが

「なあ」

リトは4人に向かって言った

「ネメシスは悪くないとは言えないだろうと思うけど、ネメシスがオレを刺した分は恨まないでやってほしいんだ」

ヤミはマジかよ、そんな事があったのかという表情を浮かべた、その話は全くしていなかったため反応としては仕方ないところではあった

「それで怪我は」

リトは笑顔で首を横に振った

「もう大丈夫」

さすがにこの場所で腹を見せるわけにはいかなかい、と考えてるとララのケータイから電子音が響いた

「はい」

「お婆様、元気ですか？」

「ココちゃん、私もあなたのおママも大丈夫だよ、そっちは？」

「ええ、弟とお父様のお家だった所に避難できています」

芽亜に科学研究部のスフィアの研究を手伝わされたおかげでぴよんぴよんワープくんの性能も爆速で向上した、目的地に必ず飛べデビルーク星から地球への距離も一瞬であり服なども何の取りこぼしのないんだか面白みが無くなるような代物だった。乗り物要らなくなるのではという意見に対しては前のと比べてリソースが高すぎたり何かに片足を突っ込んでいる気分になるし片手間じゃ年に数個作るのがせいぜいと答えるしかない。前のぴよんぴよんワープくんはぴよんぴよんワープくんでたまに使用していた、今回は確実性や子供の羞恥心のためすごい方を使ったと言うわけだった

「口ロによると真兄様が地球は青かったー!!とどこかで流行った台詞を口走ってたそうです」

全員ぴよんぴよんワープくん、強化されたので付け加えるならZで行ったわけではないので別々なのは仕方がない

「それじゃあ、ラズちゃんとミミに会ったらよろしくね」

「分かりました」

その言葉の後ココは電話を切ったようで何も聞こえなくなった

「ああそうだ」

リトも自分のケータイで通話を始めた、相手は臣下達だった、音量がララのと比べて小さいため周囲に内容は聞こえない

「ああ、オレだ。リトだ」

「この度の遠出お疲れ様でございます、さてあの星のようなロボットはいかがいたしましたしよや？」

「それも含めてこれから話し合いをしたいんだけど、王宮が今場所としては使いにくいから他とかどうかな」

「分かりました、場所は」

「こういう時はぱっぱと決めてしまおう」

リトは場所を提示した、王宮ほどとは言えないが人が集まるには充分な広さを誇る建物だった。ルナテイク号・Lからのちら見でしか見てなかったがさほど壊れてもいないように見えていた

「では、そのように」

「他の人達にも伝えといて」

そしてリトは電話を切った、その後疲れたと言い表すように肩を揺らしながら一息ついた

「おつかれ、リト」

「ララ達も、まだ終わってないけどお疲れ」

リトの周りにいる人達は安堵の表情を浮かべていた、せめて今だけでも、無事でいられたという余韻に浸るために。ただナナだけは浮かない顔だった

「どうしました？」

モモが不思議そうにナナを見た

「やっぱり話さなきゃいけないのか…と思つてさ」

「散々引つ張つたし、今話した方が楽ですよ」

ナナは腕を伸ばして距離を取ろうとする仕草を見せた

「良いか、こっちだつてそう思いたくなくなつたんだ。けどそうなんだつて言われたんだ。断定されてしまったんだ」

「もつたいぶらないでくださいよ」

「じゃあ、言うぞ」

ナナはそれをうなだれながら告げた

その日、王宮の空気は重苦しいものに変貌した
一方その頃

デビルーク星の反対側でもユニクロンの脅威は伝わっており、兵士たちの間で緊張が走っていった。難民を受け入れる手続きもそうだがこれからいつそんな存在と戦いに行かねばならないと気を張っていた、そして兵士は夜間でも見張らねばならない

「どうしよう?」

「何がだ」

「オレ達もあのニュースに出てくるロボットの所に駆り出されるのかな」

「そうはならないと思いたいね」

「噂だけど先代の王様があいつに向かって行ってまだ帰ってきてないらしい」

「変だな…そういうのすぐ済ませそうなのに」

「ひよっとすると…ひよっとするかもな」

「ちよっ嘘、マジでやめろって」

「そうになったら、オレ達…どうなるのかな」

あの御方がかなわないと言うのであれば誰が倒そうとすれば良いのだろうかと一方の兵士は考え、それを打ち消すように口走った

「王様なら死んでも化けてでてきてどうかにかしてくるって、それに王妃様達もいる」

「そうかなあ…」

いつまでたっても悩んでいる兵士にイライラした兵士はドツキリを仕掛けた

「あ、あそこに王様の幽霊が」

「ヒィっどこだよ…あれか」

兵士の指差す先には…翼の生えた見たことのない外観の人型の形を取る巨大な何か、悪魔である事を彷彿させる角、多少黄色が混ざっているが紅蓮のような真っ赤な瞳に他に類を見ないような威圧感

不意に見覚えすら感じさせた

「まさか本当に化けて出てきたのか!？」

「嫌、あんまり似ていないぞ」

「良いか!?地球行つた時の本棚に転生モノと書いてある本があつて」

「つまり何が言いたいんだ」

「あのようになまれ変わった可能性が」

その時兵士とその何かの目があつてしまった

「……………」

兵士は隣の兵士と目配せをしお互いにこくりと頷く

「で……で……出たー!!」

「王様に連絡だ、鬼神が魔神になまれ変わったから女神呼んでください……と」

「よーし、あ、あいつどこかに行つてしまふらしいぞ」

巨大な悪魔のようなものは邪魔したなどばかりに後ずさりしながら飛んでその場から去つた、身体を進む方向に向けつつ両方の手を身体と平行に伸ばしていた

兵士達はその様をただ口を開けて呆然として見つめていた

堕ちた果实編

第二十三話 舞い降りる者達

「なぜ、こうなってしまったのだろう。自分はただ、欲しいものを掴みたかった。掴めると思ってしまった、そして行動に移したんだっただけだ。」

覚悟はしていた、それは許される事ではないとは分かりきっていたから。そう、覚悟はしていたはずだった。だが甘かった、代償は予想とは違った方向から受ける羽目になった、謝って許されるだろうか？嫌、許されないからこそなのだろう…許されないから…今自分はここにいる

そんな風になってしまうのは、自分のせいなのだろうか？自分だけのせいだろうか？

…運命だったと言い聞かせる事で心の平穏を少しでも保とうとする自分がある、そんな自分に吐き気もしなくもない」

ユニクロンが動かなくなつて一週間後

その日の地球は空が雲に覆われていた、それはこれから雨でも降るのではないかと懸念させるには十分な程暗く重い灰色だった

そんな天気と重なるかのように沈痛な面持ちでララの発明品で分身したりトは会議に出たりユニクロンに警戒している自分や王族を除いて無理にでもついていくと豪語するヤミと動ける妻達を引き連れてとある建物の扉の前に立った、てっぺんにある十字架、傘のように上から覆うような屋根でなく瓦などは一切使われていないので傍目ですごい教会に関わる場所と分かる見た目であった。そこは彩南町から新幹線で一時間程移動するぐらい距離のある場所の町のはずれにあつた。そこには知人の親戚も知己もいるという情報もなく本来ならそこに行く理由は何一つない

理由は、ナナが言った言葉にあつた

「美柑は…もうこの世にはいない」

その日、それを聞いた誰もが最初啞然とした表情だった。そしてナ

ナはその言葉のいきさつを語った

行方不明になった美柑を色々な星に行っているが一向につかめない手がかり、ナナは途方に暮れ少し休むかとベンチに腰掛けた。その時一匹のカラスが電柱から降りて地面をきよろきよろと見回していた

「見ないやつだな、なにしてんだ？」

「決まってるだろう？ゴミ箱を漁りに来てるんだ」

そのカラスの言葉は一般人には「カー」としか聞こえてない、ナナの母親からの遺伝で動物と心を通わせる能力ゆえだった

「そっか…!!」

ナナはこのカラスに聞いてみようと思いついた、二年程前から行方不明の結城美柑について何か知っていないかを。ネットの情報では見つけきれなかったし他の星にはいないという結論だった

が、ナナは即座に一つの写真を取り出しカラスに問いかけた

「なあ、お前はこんな人間を見たことはないか？ここ数年での情報を知りたいんだ」

そのカラスは写真を見て

「知ってる、そいつの顔を見てからはあの辺りの残飯のレベルが上がったんだ」

と至福の表情を浮かべながらカラスは呟いた

手応えを感じたナナは身を乗り出して聞いた

「本当か？それはどこだ？」

「知りたいか？なら案内してやるよ、ついて来れたら」

そう言うとカラスは飛んだ、そして彩南町とはまた別の方向に向かった、人をまともに案内させる気のないカラスだとナナは思った

「だがなめるなよ、こっちだつて飛べるんだからな」

その言葉を聞いて振り向いたカラスはナナが空を飛ぶのを見て焦りつつ逃げ出すようにカラスは速度を上げた

カラスをナナが追いかける、それを日が暮れるほど続けているとカラスが空から降りて着地した

「……か？」

「ああ、用があるなら済ましてくんな、飯食うから」

「ありがとな」

カラスにまたねという意味を込めて手を振り、ナナは進んだ

進んだ先に目に付いた人に聞き込んでナナは情報を得た、そうだとその人の言う人物は写真と同じ顔かつとった対象と同じ名前と何から何まで一致していた、一年半程前だそうだと

それだけを信じる根拠にはできなかつたが三日前九条凜が天条院邸で現状についての相談をしていた時、それはやってきた

「!?沙姫、動くな」

「ええ」

九条凜と天条院沙姫の間に横から剣が飛んできた、こちらから動かなくなつたため壁に刺さるだけで人に対する危害はなかつたがそれはフェンシング用の剣の刃の部分を細く硬くしてさながらレイピアのようだった、ただし文が縛りつけてあり、それはきつと矢文の役割を果たしていたのだと言える

刺さつた剣の方向、吹いてきた風の向きから飛んできた方角は分かつたがそこを確かめてももう誰もいない、警報を鳴らして一定時間が経過しても何の手がかりも見つからないためその縛りつけてあつた手紙を凜は読んだ

「内容は、ふむ：『いつか君達がゆくであろう教会は救われぬ御霊が在り、呪いという祝福を授けている。子供や命を宿す身体を近づけてはいけない』」

凜はふざけているとその時は一蹴した、行くような事情は特になく、固有名詞がない以上その場所がどこかも分からずにいる。また一種の脅しともとれる内容はその種類の施設への妨害とも取れなくもない

とりあえず沙姫がその手紙を預かり、処分する事にし凜はデビルク星に帰還した、その時手紙の意味が分かつた

子供達や古手川唯には彼らにとつての祖父達の家や彼女の実家に待機してもらつていた、祖父達の邪魔をしてないか心配だったがここは大丈夫だと高をくくつてみる。リトにとつての父親と母親はもう

ナナに教えてもらっていったそう。彼女に説明すると非常識だが仕方ないと了承してくれた、彼女のために3人に分身しておくべきだったと今更ながら後悔している、分身しすぎると能力が落ちるからあんまりしてはいけないというのも分かっているが

リトは妻達の表情をちらりと見た、彼女達はこくりと頷いた。おそらくいつでもいいといった意味だと感じたのでリトは扉を開けた

内壁はほぼ白一色であり、右奥にパイプオルガンが備わっており自由に座ってくださいと言わんばかりにベンチもたくさん並べられていた、絨毯が敷かれており革靴でも床の硬さの変化を感じられた

光っているシャンデリアを手前から奥に見ていると左の奥にある扉から一人の女性が現れた、筆のスマミのように黒く首元ほど伸びた髪、紫にも映る瞳にいわゆるシスターの着るような服装を着ておりリト達より年下のようにまだ少女のような雰囲気を感じていた

女性はリト達に気がつくとすぐに駆け寄り、その場にいた凛はそれを見てとっさにリトを羽交い締めにした

「ぐはっ!?!」

「悪く思うな、保険だ」

女性はそのやりとりを見て警戒したのか少し後ずさりした
凛に捕まったリトはその態勢で本題に入った

「怖がらせてごめん、けど聞いてみたかったんだ。美柑は本当に…」
それを聞いて女性は口を開けて手で塞いだ

「師匠とはどういったご関係で…?」

「俺は結城リト、美柑の兄だ」

女性は目線を下に行き、しきりにリト達と目が合う事を避けようとしていた

「それで…」

「はい…師匠はもう」

その場にいる一同の空気が一瞬で重くなった、やはり伝聞とはいえない人が死んだと聞かされるのはつらい

「ついて来てください」

「ああ…うん、えーと…」

「美奈子、秋月美奈子です。この辺りでは秋ナスってあだ名で呼ばれています」

美奈子の案内の元一同は進んだ、左奥の扉を出てさらに左。扉を開けるとそこは墓地だった、周りは緑が生い茂り鉄柵が壁となり下に注目しなければ庭の一つと言えるようだった

美奈子はそのところにある墓一つを指差し

「あれです」

と指差した

墓には

「結城美柑、ここに眠る」

と書かれてあった

すぐにその墓碑に駆け寄り手でそれに触れた、なめらかな感触と冷たさが手のひらから伝わってくる

「ウウっ」

呻きがつい漏れ出てしまった、この中に美柑がいるのかと思うだけで胸が痛くなってきた

「リト君」

後ろから声をかけたのは春菜だった

「これ…」

春菜は花束を渡してきた、リトはこつくりと頷いてそれを受け取り美柑の墓の前に置いた

それをタイミングとし一同は黙祷を始めた、目に映るのは在りし日の美柑との思い出。料理を作る彼女、たい焼きを食べる彼女、毎度の事トラブルに巻き込まれる彼女、思い出すことに疑念が深まってきた。何故、彼女が死なねばならなかったのか？やっと思つかったと思えば結果がこうとは誰も思いたくなかった、と考えていると前が見えなくなってきた

「美柑…」

ヤミはぼそりと呟いた

黙祷を終えた後美奈子は唐突に語り出す

「師匠とは数ヶ月ぐらいしか一緒にいれなかったけど色々教わりま

した、料理の事とか」

「話：聞かせてくれないかな？」

リトの問いに美奈子はい、と頷いた

墓前から戻る一同の前に神父の服を着た男性が現れた、年はおそらく五十代に近く、丸い顔立ちで薄く生えた白髪混じりの茶髪で顎から髭を生やしていた

「神父」

美奈子は男をそう呼んだ

「…人が来ているぞい、デビルーク王はいるかと聞いておるがさあぱり分からね」

「本当ですか？」

リトは身を乗り出して聞いた

「ああ、もしやお主が？」

「どこにいるんです？」

「聖堂じゃ」

先ほど来た場所だった、距離としてはそこまでないが急いでその場所へ行った

聖堂の椅子に男は女性と共に座っていた。男には見覚えがあった、白を基調とした私服ではあったがあまり類を見ないツンツンとした銀髪

「シロ？」

それを聞いて男は立ち上がり、リトの方を向いた

「こんには、デビルーク王、リトさんの方が良いのか？」

シロは銀河警察の人間…だった、ヤミの事で自分達と揉めてそれが原因で離職させられたともっぱらの噂だった、その後何でも屋のような事をしているとも

「ああ、けど何で」

「色変わってるけどルナティーク号が地球に向かってるのを見たんだ、だから気になって追いかけてみた。こんな時にここまで来る理由とか知りたいから」

その言葉は内容とは裏腹に責めている訳でもないような淡々とし

た口調だった

「実はな…」

リトは事情を説明した、シロと女性は驚きのあまり口を開けて驚いていた

「そうか…」

シロは自分の周りに起きた出来事のように沈んだ口振りで呟いた

「死因は!?何か言ってたか?」

「分からない」

そういえば何でそうなったか…までは何も言っていなかった

「……」

シロは考えているのか黙り込んだ、元とはいえ銀河警察の一員だった人間だから仕方のない事かもしれないがあんまりそういう話題には入りたくなかった

疲れたのかもしれない、何か病気あったのかとか誰がやった…とかどうやって…とか何故…とか実際考えるときリがない、そう考えているとシロの隣にいた女性がシロの頬を引っ張った

「チヨ、痛い」

「シロ、その辺にしといたら?」

「……無神経だった」

シロは軽く会釈するように頭を下げた

「謝る程の事でもないけど、これからどうするんだ?」

「そっちの耳に障らないように聞き込みを始めるようかとは思いますが」

「そ、そうか…あ」

リトがドアの隙間を覗いた時、雨が降り出してきた。勢いはよくは分からないが音を立てる程にいずれなるかもしれない

「傘とか持ってきてるか?」

シロとチヨはお互いの顔をしばらく見てリトの方を向いてから顔と手を横に振った

「あー、じゃあここの人達には言っておくから少しここにいます?」

「さんせーい。そうしよう、シロ」

「異論はない」

その時春菜がやってきた

「春菜」

「リト君、みんなそこで待ってるって」

「うん、こつちも話は終わったところだから俺もそつち行くよ」

そしてリトは春菜と共にシロ達を連れて妻達のいる場所に戻った

一方そのころく

雨が降っている最中、教会に近い森でアサキムは一人教会を見上げていた。多少の雨除けには使えるがそれ以上に雨を防いでくれる事は期待できない

「咎人はこの地へ降り立った。自身の罪を」

逃れる為に、断ち切る為に、知る為に

「既に罰は降ったとしても僕はそれを掘り起こそう、確実にスフィアを…鍵を掴むために」

第二十四話 「彼女が来たその理由」

雨の降る中、シロ達は結城リトの厚意のもと教会で雨宿りをする事になった。結城リトがそこに用があったのかついでのごとく彼の妻にある一室に案内される、食事のための部屋なのか白いテーブルがあり大人数でも対応できるような大きさと広さだった

リトはすぐに神父と話し合っていた、おそらく自分達の事を話しているのだろう。と考えているとほどなくしてリトがこちらに向かって報告してきた

「大丈夫だったさ」

「そうか、すまないな」

そして軽く名前を名乗った後シロ達の分の座るイスをテーブルに設置してもらった、その後紅茶を出してもらった

ティーカップからお茶と砂糖の混じったような独特な匂いが立ち上っていた、ついさっきできたと言わんばかりの湯気も

それを見た瞬間シロの顔面は蒼白となった

「どうしました?」

ヤミの問いにチヨが返答した

「シロって食べ物自体の好き嫌いはないけど熱いのは舌をやられるからダメだった」

「そ、そうですか…」

「オレは、後で飲むよ」

シロは紅茶は飲まずにイスに座った、直後凜に

「しかし、探りに来るのに彼女連れとはな」

と言われた

「(彼女かどうかはおいといて) 悪いか?」

「君が自分の用事に彼女を付き合わせてるようにしか見えない」

「オレ一人で行くって言ったけど」

シロはちらつとチヨの方を見た

「女の子一人に留守番させるなんて、ねえ」

チヨは当然の事を言うようにさりりと云ったのけた

「という訳だ」

「なら、観念するのはシロですね」

「そうするか」

「ところでシロ、あなたの銃は…」

以前、シロはハーデイスを足や上着のポケットに携行していたがその大ききゆえにそれが目立った

「消えたよ、ゴキブリのような巨大ロボットを呼び寄せたのと引き換えにな」

「あれはお前が？」

「オレだけじゃなかったがな」

「ああ、ありがとう」

あのロボットにナナが助けられた事をリトは思い出していた

そのやりとりを終えた後、一人の人物について話し合った、現在のデビルーク王である結城リトの妹、結城美柑。シロも名前は聞いている、王になった人間の家族ともなれば嫌でも有名になる

まずはここの住人について聞かされた、おおまかに神父と養女である美奈子、良く分からないがここの教会は孤児院の側面も持っているようだった。後は一人の青年が三年前からいるらしい、一年半前なら怪しむ所だった。とても卑屈なひきこもりがちの人間だそうだ。失礼な人間で美奈子をおばさんと呼ぶらしい

「年間けば1歳ぐらいしか変わらないのに」

その青年からも話を聞きたかったがひきこもりがちな人間を引きはがせる程の大義名分をシロは持っていない

次に彼女のここでの生活ぶりを聞かされた、何のことはない、朝起きて植物に水をやり食事を作りそれをこのあたりの住人と共にし図書館で本を読み洗濯も少々するという普通といえ普通の生活と言える

なんとなく分かったが完全に圏外であるためケータイなどにある写真は見れなかった、そのためリトの妻である春菜から絵本のような大きめのアルバムに入った集合写真を見せてもらった

写っているのはほとんどが女性で白いシャツの上から薄いクリー

ムのような色の冬や秋に着そうな上着、首につける薄い緑のリボン。縦と横に白い線の入った濁った緑のスカートという感じの制服姿が割合の多い、後はもつと年若い女の子か教師、他校の人間だろう。シロは彼女達の上着を見てバナナミルクを想起し口に唾液がたまっていくのを感じた

結婚した時の写真ではないのは分かる、彼らが結婚したのはもう少し大人になってからというのがシロの知ってる記録だった

色々と写っている人達を見ているのに気づかれたのか

「ここだ」

と九条凜に指し示された

「どうも」

と礼を述べて写真を見てみた

一人の子供を抱いている、制服姿やスーツの中際立つ私服姿と背丈からおそらく十代前半になったばかりの少女。長く伸びた焦げた茶色の髪のとっぺんが跳ねた状態でまとまっているのが特徴的だった、写真でしか見てないが言い寄る人達がたくさんいそうと思える程にはその女の子に第一印象の魅力をシロは感じた。今から王と王妃が会って数年間の間に取った物と仮定するなら彼女はシロより年上だったかもしれない

「この人はどういう人だった？」

近しい人間に彼女がどう映ってたか：それも色々と解明するために一応知っておく必要があった

「料理が上手で、たまに教えてもらったかな」

「いっしょにいて落ち着く、気の合う親友でした」

「ここにいる奴にはもったいないくらい出来た妹だったよ」

「軽口や小言もあったけど大事な…妹だからってわけじゃなくてさ」

「師匠は私に化粧のイロハを教えてくれたりしてくれました、よく気がつく優しい人です」

「なるほど…じゃあその…」

「美奈子」

「美奈子さん、美柑って人との出会いの話を改めて聞かせて欲しい」
「そうですね、あれは一年と半年以上前の話です」
一年半以上前…

「ここには裏山があつて…神父が毎日朝の散歩に出かけてるの、まあ朝の散歩だからそんなに奥には行けないけど」

奥へ行けば樹海、そこまで行けば帰るのもそれだけ難しくなる

「ある日神父はよろよろと裏山を歩いている師匠を見つけて」

ほわんほわんほわんとどこかで音が鳴った気がした

『大丈夫か？お前さん』

『あ…』

その時美柑は倒れて神父に保護されたそうだ、連れて帰って気づいたが何日も着替えていないような臭いだった

「ひよっとしてそいつ美柑って人の体を」

「洗ったのは私です、リピート…洗ったのは、私です!!端から見てもう？」

その場にいる全員「だよな」という意味の相槌を打った、美奈子は咳払いをしつつ気を取り直して話し出した

それが美奈子と美柑の出会いだった

「その後料理を出すともものすごい勢いで消えていったので、やっぱりその間何も食べてなかったようです」

「美柑…何故…」

食べ終わった後美奈子は美柑に聞いた、どこに住んでたか…どうしてあんなところに行ったのか、家族は…友達…年が上だが近い相手に美奈子は興味を持った。美柑は家族や友達、住んでいる所の事は話したが他の話題ははぐらかしていた

それから数日して回復した彼女が今日は私がしたいと言いつ出した

「おいしかったー、師匠の作ったご飯」

比較する対象が少なかったが、どう味わっても、いつ作ってもらっても彼女の料理の評価は上の上でしかなかった。それから、美奈子は美柑に頼んで色々な事を教えてもらった。料理のコツ、都会の情報、流行

「美柑はあなたの先生でもあったんですね」

「はい」

そんな毎日を繰り返したある日の夜

爆発音がした、近くで身の危険を感じるような大きな音が

『何事?』

ベッドから跳ね起きた美奈子は懐中電灯を持って爆発した場所を探した、場所がどこかは一目瞭然だった。歩く道のど真ん中がごうごうと赤い炎で燃えその向こうは笑い声、高らかに笑い叫ぶ、そんな声。そこに行つたはずだがそれから先の記憶はない、それから先を教えたのは神父だった

「分かったのはあれで師匠が死んだって事」

「本当に、本当に死んだのですか? 勘違いじゃないんですか?」

ヤミが美奈子に質問を繰り返した、今すぐに否定してやりたい。そういう意図がにじみ出ていた

「勘違い…そんなわけない、だったら何で師匠はあの日から師匠の部屋にいないの? わたしだって何度あれは夢だった、悪夢だったんだって片付けようとしたか」

「と言ってるが神父は何も言う気は?」

「はて…?」

神父は首を傾げた

「とぼけるな、確かめたんだろう? 美柑って人が死んだのかどうか」

「うむ…嫌、あれは爆発の後何も…死体すら残らなかった。爆発する前に彼女がそこに立ち寄つたをみておるしの」

「止めなかったのか?」

「毎日通る道じゃぞ、わかるわけなからう」

「犯人について心辺りは?」

「ない、恨まれる人間でない事はそちらの方々 guarantees するだろうしの」

「ああ…」

リトが頷いた所でシロは立ち上がった

「そこに行つても手がかりは掴めない…か、じゃあ別の方面を考え

てみるか」

「何だ？」

凜からの問いを聞いてないかのようにシロはテーブルから離れて改めて指を差しながら答えた

「何故、彼女はデビルーク王達に黙って飛び出したのか

何故、彼女は縁もゆかりもないこの地へ赴いたか

何故、彼女は樹海の近くのようなところに足を踏み入れたのか」
こう並べてしまえば、素人目にもこう想像がつく。シロはその答えしか考えられなかった

「彼女は、このあたりで、死ににやってきたかもしれない」

その発言と共に場の雰囲気は一瞬で暗く、悪くなっていったのを感じた

「取り消せ…」

リトも立ち上がり、シロに近づいて胸ぐらを掴んだ、彼の妻達は手を伸ばしてそれを留めようとした

「憶測だとしても取り消せよ、今の言葉」

「今の所はやだね」

今のは仮説、可能性の内ではなく内容も不快なものだろう。だが分からない以上、それを捨てる事はできない

「お前に美柑の何が分かるって言うんだ!？」

「デビルーク王、それをあんたが言うのか？あんただって…美柑って人の事を分かりきっていなかった、だから一年以上も彼女を探す事しかできなかった!!」

その言葉でリトは先ほどの怒りがどこかに消えたように視線を下に向けつつ彼の手はシロから離れた

「そうじゃない、絶対に違うって言えるなら、最初…何故彼女があんな達の目の前からいなくなったか、思い当たれば聞かせて欲しい」

それを聞いてリト達は考え込む仕草を始めた

先に口を開いたのは凜だった

「私の息子のはじめてのおつかいの際、ファッション雑誌を頼んだはずがおもちやの雑誌を買ってきた事…」

一同を見るとほぼ全員苦笑いの表情になっていた

「はじめてだろう？ 買い物間違えたことぐらいなら言いふらさない方が良いと思うが」

「すまない、他に思いつかないんだ…」

「む、無理して言わなくても良いから…」

春菜にフオローされ、凜は黙り込んだ

「私は…自分のと間違えて化粧品を使ってしまった事かな」

「動機としては薄そうだな」

ちらりと美奈子を見ていると、少しずつ怯えの表情が顔から漏れ出していた

「デビルーク王…ヤミさん、何かあったら」

シロは今は見なかった事にして手のひらに何かを乗せたような仕草を相手に向けた

「いくらか気分が悪そうなくらいで、何かあるのなら相談して欲しかった」

「……………」

リトは考え込んでいた、その内に頭を抱え込む程…きっと何もなかったのだろう、彼女が自分達の前からいなくなる理由

「何も思い出せないならもういい、もう分かったから」

そのうちにリトはイスから立ち上がった

「リト君？」

「少し外に出たい」

「やめておけ、雨が降っている」

「頼む…頭、冷やしたいんだ…」

「お、おい!？」

凜の制止を振り切るようにリトはその部屋を飛び出した

「リトさん!？」

「オレが行くから、みんなは残ってくれ!!」

シロは急いで紅茶を飲み干した

「熱っ!!」

シロは熱さのため舌を思わず出してしまった、まだ飲むのが早すぎ

たと思いつつシロはリトの後を追った

一方そのころ、

教会の二階の一室で、青年は本棚にある本を数冊取り出して読んでいた

端から見れば顔全体に包帯を巻いた黒い神父服の男が本を読んでるように見えるだろう

特に何かに役立てようと思つて読んでいる訳ではなかった

ただ読んでいる時だけは時の流れを忘れていられる、逃げたかった、活字を読む間に開かれる世界の向こうに逃避をしたかった、想像力という翼でその先だけ行つてみたかった。それだけだった

、だから料理の作り方の本でも、童話でも、何でも良かった。報われない恋如何を読むことだけは真つ平だったが：無理を通そうとすれば何か歪みが生じる、その歪みに真つ向から立ち向かいそれを打ち負かせるのかと青年は登場人物に問いたくなるがその時心が黒く揺れ動く様を感じてしまうのが青年には耐えられなかった

読んでいる内に、物音がした。扉を開ける音、それもずいぶん勢いのある音

いつも住んでいる人達の扉を開ける音でないのは分かる、青年がここに住み始めてから一度も彼女達が立てた音ではなかった

来客：それも感情的になつている人間の仕業

「……まあいい、読もう」

読書を妨害され気分を悪くしたが気を取り直して再び本を読もうとした

再び音がした、今度はもっと力いっぱい開けるような音

「クソっ」

青年はたまらなくなり窓から外を覗いた、うるさい音を立てながら扉を開けた人間を見つけて何か文句を言いたい気分になつてきた

「誰だ？」一応静粛であるべき場所なのに……」

男が2人、教会から出て行くのが見えた。一人は傘をさしているがもう一人は止せば良いのに雨の中傘も無しに傘をさしている方を追いかけていた、肉眼で見えづらい位置だったため青年は本棚の上の望

遠鏡を持ち出し再び覗いた

「これは…ああ!!」

デビルーク王と、誰かがいた

それを見て不意に青年の心臓の鼓動が早くなつた。青年はどこかで自分が焦っていると感じ、思わず顔の包帯に手を当てた

包帯の感触を感じいささかの落ち着きを取り戻した青年はリトと男の会話を盗み聞きする事にした

第二十五話 変わるもの、変わらないもの

リトを追いかけた先にシロを待っていたのは墓地だった、おそらくリトは美柑の墓に行こうとしていたのだろう

気がつけば雨水を吸って泥と化した土が靴につき、そして衣類全てが雨水に濡れその分身体が重くなっていた

降り始めていくらかの時間が経ったため…もしくは雨が掻き消しているのかも雨の降り始めに匂う独特の匂いはしない

今のシロの目的は結城リトをあゝの部屋に連れ戻す事

進んでいくと美柑の墓の前でリトは立ち止まっていた、立って頭を垂れた状態でしばらく動いていなかった

「おい」

シロは淡々とした口調でリトに呼びかける事にした

「……ああ、シロか」

振り返ってシロに気づいたのは少し間があつてからだだった

「…ああじゃない、戻るぞ」

「俺は大丈夫、だから」

「大丈夫じゃないだろう？それに大丈夫だって言葉を伝えるべき人間はオレじゃない」

大丈夫じゃないからこそ…彼は今ここにいて、そうシロは感じ取れた

自責の念にでも駆られているのだろう

自分の妹が、自分達の前からいなくなるという選択肢を選ぶ程何かに悩んでいたのかもしれない、それが何だろうとそれに気づいてやれなかった自分を恥じているのだと彼の雰囲気語っていた

「それとさつきは悪かった」

シロは先ほどリトに放った言葉についていくらかの罪悪感を感じていた、リトが今ここで悩むのはけっこうな割合でその言葉のせいだと

「俺も急につかみかかって悪かった、だからおあいこ」

リトは傘を高く上げて来いという合図を送った

「ん？」

「これ以上濡れない方が良い」

シロはリトの言葉に甘え傘に入れさせてもらった、少し雨に打たれすぎて肌寒くなってきたのもあった

それから少し沈黙

勢いで飛び出して来たのはいいがシロはもう何を言えばいいのかわからなくなってきた、気の利いた言葉なんて一つも考えついていない

言えるのは、彼女の名前のみで体の一辺すらないこの墓碑を見つめてただ思いを巡らせてもどうにもならない事だけ。だが悩む自由というのも人にはあっていいと思えるしシロはもう少しぐらいなら良いかと思つた

「お前の言うとおりだったのかもしれない」

沈黙を破つたのはリトからだつた

「何がだ」

「俺は美柑の事を分かりきつていなかったのかもしれない、少なくとも俺達や親父の前からいなくなるような悩みに俺は気づけなかつた……」

「……………」

「これでも二十年は美柑の兄をやつてただけだな」

「年月经つたってわかんないものはわかんないさ、そういうのはフィルターにすらなると思うんだが」

年月をかけて相手を見てきたという自負は驕りに繋がり目を曇らせる、ものすごくというわけではないが少しでも曇りさえすれば…見えてない部分が生まれたりする

「俺、間違つてたのかな…?」

「何をだよ」

「ララや春奈ちゃん和其他のみんなとも一緒になつて、デビルーク王になつてから今まで俺は俺なりに王様を頑張ってきたつもりだつた」

「王妃と結婚したことを後悔してるのか?」

「そんなんじゃない、そんな気持ちは持つてないし持つてはいけな

いと俺は思う。ただ俺に何か足りない物があって、だから…」

美柑とガーランドを失ってしまったとリトは呟いた

「ガーランド君の事か。昨日ぐらいに噂で聞いた、王子や王女が騒いでたらしい、オレも悲しい」

「理由までは知らないんだろう？聞かせてやるよ、お前がどんな顔をするのか見てみたい」

リトはシロにガーランドの死因を話した

「嘘だろ…」

「嘘ついて何があるってんだよ」

何も無い、むしろ…

「本当なのか…」

「お前は どう思う？」

「どうって？」

「お前はヤミを逮捕しようとしていた、俺達は当然それを受け入れる気は無かった」

シロはそれでデビルーク王達と一触即発になりかけた、それが原因で銀河警察をやめる羽目になった、気にはしてないつもりだったが改めて言われるとあまり触れたくない話題だった

「だからどうしたんだ？」

「……お前は思っていないのか？確かに犠牲者はいて、その事で誰かは苦しんだ。自分が正しかったんだって」

だからあの時…という言葉を考えたり自分はその結果が見えていたという優越感をシロは抱く心の隙間は無かった、妻を庇う選択は何ら間違っていない。証拠はもう過去の物でもあったわけでありどうしようもない

「思えねーよ、すぐ引き下がったオレがそう思う資格なんてない。他に間違いがあったとすればその後貴方達は何もせずになんかそれだった事だと思う」

「そうでもない、あれからヤミは自分の生き方について考えてたんだ」

自分の手が血に汚れてた事をシロの一件で思い出させられたヤミ

はどうすれば良いのか分からなくなっていた、だが答えは出た

『『ここにいい』と言ってくれる人達、思ってくれる人達の力になる事…それが私のこれからの道標だと思います。リトさん、私は命を護るためにも戦います。兵器としてではありません、それが私に人としてできる事だと思うからです、だつてさ』

「だから内乱の鎮圧に加わったのか」

「あの時は要請があつて…」

彼女の行く道に死者は出なかつたと噂にはあつた、元々王様が殺すなど言っていたのもあり当然ではあるかもしれないが

「だが…」

築いた伝説が何で、どんな人間で出来ているかを知つて欲しかつた。賞金首もいたかもしれない、誰かにとつて邪魔な人間もいたのかもしれない、中には…何も知らない無垢な人間もいたはずだ。明日への糧が欲しいだけの子供もそうだ

惑星を両断したという事はそういう物だとシロは思う

シロははつと息を呑んだ

ひよつとしたら自分は忘れて欲しくなかつただけなのかもしれない、自らの刻んだ伝説を贖う道のりはまだ終わりではないという事を

「シロ？」

「…嫌、デビルーク王。一つだけ良いか？」

「何だよ？」

「貴方は自分の命を狙つた彼女を許せても他の奴らはそうとは限らない、貴方がもし殺されでもすれば周りの人間は」

「俺はやられなかつた、だから良いという訳じゃないかもしれない…俺も善処するよ、もう少し他の人達の事分らなきやいけない…俺からも一つ良いか？」

「ええ…まあいい」

「俺さ…ナナから聞いたり頭に浮かぶ何かしらの映像でしか美柑やガーランドの死を知らされてないんだ、自分の目で直接見たつて訳じゃない。だから…」

雨粒に隠れない程の滴が嗚咽と入り混じつてリトの両目から垂れ、

こぼれだした

「まだ俺はひよつとしたら目の前にさ…ひよつこり出てくるんじゃないかねえかって思ってしまうんだ、そしておはようって言ってる」

まだ認めたくはなさそうだった、もう会う事は出来ないという事、その手、その髪に触れるのはかなわないのだという事

「……………」
(難易度高いな)

「お前はどうぞすればいいと思う？」

「……………」

ありきたりの答えでは足りない気がする、それだけでは相手の心にも響かない

相手の死を受け入れるべきと言うのはあまりに陳腐に思えてならなかった

「前を向いたとしても下を向いたとしても上を向いたとしても時は進む。貴方がここに居る間も、あそこにいる貴方のお嫁さん達が貴方を待っている間も、絶え間なく」

「……」

「貴方は今まで通りでいれば良いと思う、オレと言い争った時のように…王妃や他の女性達が認めて一緒に生きようとした貴方のままで…だがどうするかは貴方の自由、だけどここで嘆いてもどうにもならない」

「分かってはいる…けど、俺はこのままじゃまた…」

「貴方はどう変わりたい？」

リトはシロの顔を見てきた

「どう変わるにしても失ってから変わるものに良いイメージはない」

「…そう言われればそんな気もする」

「という訳で貴方の嫁さん達の所に戻ろう」

「おい待てよ」

リトは笑顔でシロの肩に手を置いた

「話畳むの急過ぎないか？」

「他人分は喋った、続きは向こうで身近な人達とどうぞ」

「俺は…どんな顔して春菜ちゃん達の所に行けば…」

「それは…ハッ」

シロは何かの気配に気づき後ろを振り向くと教会を中にいたデビルーク王の嫁達がやってきていた

「デビルーク王…後ろ」

「え？あ…」

リトは彼女たちを見て目を色々な方向に動かしていた、あの飛び出し方のためいささか気まづくなっているのだろうと容易に推測できた

「シロ…人一人説得するのに時間かけすぎですよ、貸しましょう」

ヤミはシロに傘を渡した、受け取ったシロはすぐにリトの傘からでて傘を差しリトにぺこりと頭を下げた

「悪いな、だが代わりは」

ヤミの方を見るとヤミは手を傘に変身させてそれで雨をやり過ぎしていた

「心配しなくても良いですよ」

「あ、ああ…」

「それより…」

「リト君…」

「(あれ…いつの間にか?)」

春菜がリトに歩み寄って来た、あまりの速さにシロは少しだけ冷や汗を流さざるを得なかった

「春菜ちゃん…」

お互いがお互いを見つめ合うようになりまた沈黙状態となった

不意にその場にいることがひどく間違いに思えてたまらなくなりシロは気がつくのと足が教会の方へ動き出していた

その時教会の二階の一室から光と誰かがこちらを覗いてる姿が見えた

「(誰かいるのか…?)」

よく見ると顔全体に包帯を巻いたあからさまに怪しい男が部屋の窓から望遠鏡で覗いていた、だが望遠鏡で覗く分視野を狭くしている

せいかシロが窓を見ても何も気づいていなかった

「ごめん…」

リトが何か喋っていたので振り返って見るとリトが春菜を抱きしめていた

「もう少し…色々言つて欲しいな…リト君の今つらい事とか悲しい事とか」

「うん…」

「私も加えろ」

凜は後ろからリトに抱きついた

「一人にはさせないからな」

「ああ…」

「頭ががら空きですよ」

「ほぶっ」

ヤミはリトの頭だった

「私もまだまだ…色々ありますから、一緒にいてくださいよ」

「ああ、ああ…」

シロは自分が蚊帳の外のようを感じ苦笑いをしつつ空を見上げて
思いを馳せる

「(犯人がいるとすればそれはどんな奴なんだろうか?)」

話から察するに彼女のみを狙った犯行のように思えた、何故? 何のために? 王への人質ならまだしも(ただし相手が痛い目を見る)彼女の命が狙われるのは? 分からない、分からない事だらけだ。彼らも話が済みそうだし一旦戻ろうとシロは考えた

く教会の二階く

青年は望遠鏡を置いた、口元に笑みが浮かんでいた事に気づいてその表情を指で拭った。そして青年は床に座り込んだ

笑うのは随分と久しぶりのように思えた

あの二人が甘くまばゆいものに見えた、無論他の人達も

羨ましいと思ったが青年は遠くで眺める気しか起きなかった、そこに自分はいられない事は分かりきっていた

自分は汚れている、その言葉が頭を横切る、横切った言葉は埃のよ

うに頭の隅にこびりつく

先程リトの流した涙を思い出しつつ

「泣いたって何も変わらない、変われはしないんだ」
と呟いた

どれだけ泣いても運命というものは何一つ変わらなかった

もしそれを変えられるならどれだけ泣いても構わないとさえ思えた、枯れようと絞り出す勢いで流してもいいと

「変わるさ…」

突如男の声が聞こえた。たった数秒だけだが若く、耳心地の良い声である事は分かった

振り返れば男が一人、雨に濡れたような状態でこの部屋に立っていた、爛々と輝く赤い瞳と整った美麗な顔立ちと顔以外全て黒いローブやクロークのような衣装で覆っているのが目立った、

こいつは何者だろうとかどうやってここに入ってきたのだろうかと勘ぐる間を挟みせずに男は青年を見据えて語りかけるように先程の言葉の続きのようなものを述べた

「涙が変えるもの…それはいつだって心だよ」

知らない人間からそのように言われて青年は気味が悪くなり、問いかけた

「誰だ!？」

「君の罪を知る者と言えば良いのかな？」

「俺を罪を知っている!？」

青年の顔から冷や汗が流れた、こいつは俺の事を知っている。赤の他人のはずだがどこまで知っているのだろうか？神父は口外しないと約束してくれたはずだしオーナーも言いふらす事はしないと聞いた

「誰から聞いた？」

疑うのは、疲れるから青年は聞いた。分かっただけじゃ誰だ？という疑いによる負荷を自分にかけて済む

「黒咲芽亜」

青年にとってみれば意外と言えば意外な解答だった

「いたな、そんな名前の人」

「使わせて欲しいんだ、僕の望みのために君を過去へと誘ったデ
ンライナーを、君自身の罪を形作った力を」

第二十六話 「スファイアが変えた運命」

一年以上前の話

青年は時を越えて過去に降り立った

手段はそう、デンライナー。当然オーナーはそれはそれは反対した、要約すれば自分が何をしているのかわかっているのか？過去を塗り替える事はあつてはならない事だという意味合いの言葉を言っていた

だから青年はオーナーの言うことを聞くふりをしてチャーハンを作る際溶き卵の中に一服盛り込んでチャーハンを食べたオーナーをそのまま熟睡させた、ついでにオーナーが被っていた青色の帽子をオーナーの顔面に寄せ脛に光が入らないようにした。噂によればどのオーナーも同じ顔をしているらしい

眠らせる方法は青年にとつてはある人間への当てつけに近いものだった

過去に行けさえすればもうオーナーが目が覚めたとしても自分を止める事はできない、そう確信して青年は教会に降り立った

日付と時刻は知り合いの過去に関してあれこれと聞きその時の記憶を鮮明にさせてイメージする過去を調整してからバレないようにイマジンに取り憑かせた、契約完了したイマジンはまだ既に爆発しないように気をつけて倒した

教会でも何でも良かった。過去を変えられるならどこであろうと

時刻は夜、音が聞こえる程に風の勢いの強い日

旅行者を装って内部をうろつくには難のある時間帯だった

だが都合良く目標（ターゲット）は教会の外にいた

どこかに散歩へ出かけていたように手に電灯を持って歩いていた、しばらくここで暮らしていたようで一応修道女の衣服を身にまとっていた。

その目標は青年に気がつくとおそるおそるといった様子で電王の姿に変身した青年に近づいて、発言した

「ねえ、君。その姿じゃなくて顔…よく見せて…」

知らない人間が現れた事に怯えているような反応ではない、目標は何故か自分の事を知っているようだった、青年は言われた通りベルトを一旦外し変身を解除した

目標は青年の姿を見て、口を手で押さえて涙を一筋流した。それから目標は青年を見つめ口元から手を放し

「君…名前は？」

青年に問いかけた

「俺の名前は」

～現在～

目の前の青年は頭や顔全体を覆うように包帯を巻いているため眼光や口元しか見えないが露骨に動揺しているようだった、少し黙り込んだ後青年はため息をつきつつ呼吸を整え淡々と喋った

「ねーよ」

少し青年の答え方は納得がいかなかった

「…もう一度言う、僕に」

「もう、乗る資格は無い」

「失ってしまったのか？」

青年は目線をアサキムから逸らした

「俺の罪を知ってるのなら、何をしたのか…それがどれほどの事だか分かかって言ってるって事だよな？」

「ああ…確かに君はそれ程の事をやってのけたんだっただね」

青年は自嘲風に笑い声をあげた後に続けた

「俺は自分が特異点であること、電王になれるって事がどういう事かをあまりよくわかってなかったんだ、ただ望みを叶える手段が得られた、俺にとってはそれぐらいでしかなかった」

「だから…パスを剥奪されたという事か」

「嫌、壊しちゃった」

「ほう…!？」

青年が言うにはパスを変身している状態のベルトにかざしフルチャージと音声が出てくるのを気持ちが高ぶってしまい三回一気に繰り返した事で

『over charge』

という音声が出てしまったようだ

破壊力は上昇したが限界を超えたチャージにパスが耐えられなかったらしい

その後オーナーから見限られた

「君のためにパスを用意する気はないとき」

ライダーパスがあればなんとかデンライナーに乗れる可能性があったがそれは潰えた、仮にあったとしてもメアがやらせようとした事とこの青年のした事は似通ったもののためそれだけ難しくなるだろうが

「君は君自身のエゴに従ったせいで時の流れに取り残された哀れな道化という訳か」

「そうだ、あいつと同じように自分のエゴに従ったからこうなったのさ。笑っていい」

「…笑いはしないよ」

感情ゆえの行動をアサキムは嘲笑しようとは思えなかった、追い求めているスフィアのキーが人の感情であるならそれを笑う事はスフィアをも笑う可能性がある

「けど一応は止めなければいけないらしい、君が罪を犯さないように、または僕自身の目的のために」

「そうか…」

青年はポケットからカプセルを取り出しアサキムに投げ渡した、デパートなどにあるガチャのカプセルと形は似ていた

アサキムは肘を上げてキャッチし、カプセルを調べようとした

「これは…？」

「とっておきだ。迂闊に開けたり割ったりするなよ、中に人と契約すらしていない時に捕まえたイメージン入ってっから」

青年は使い方の説明をした、これはイメージンが契約前の状態で飛んでいる時に捕まえてそれを閉じ込めた物でカプセルを開いた人間を対象にイメージンが取り憑く仕様にしてあるらしい

「計画が失敗した時のための最後の手段だったはずだがな。もう必

要ないからやるよ」

だがこれは

「イマジンに随分厳しいね、まるで…そう、道具みたいだ」
だからなんだよと青年は吐き捨てた

「特になにもないさ、ありがとう」

アサキムはどこかにそれをしまった

「というのは方便、何故君のような人間が選ばれてしまったのだろうとは疑問に思うかな」

「選ばれた時は記憶が抜け落ちていた、その時は優しい人間の類にはいたと思っではいる。だからオレを見いだした人からも信用されてた」

それ程抜け落ちていた分の記憶が耐えられないものだったと青年の言葉からこちらに訴えてきているような気がした、少なくとも一応は元人間であり感情もあるイマジンを道具のように扱う言い訳に使用するぐらいには

「既に堕ちている者と見られていたからといって本当に堕ちる事もなかっただろう」

「オレは…どうしても過去を変えたかった、何をしてでも、何を利用してでも」

ほんの少しだけアサキムは自分を見ている気がした、目的のためならば手段は選ばないところ、それだけのものを見てきたという自負

「分かるもんか、オレの気持ちなんて…」

「その言葉は分かって欲しかった人間の言う言葉だよ、もつとも君の感情を理解した所で何ができるわけでもないけど」

アサキムはああと声に出した

「実を言うとね、本当は君の運命は少しだけ変わっていた。「知りたがる山羊」が示したんだ、君の事を」

「そんな!？」

「嘘だと思ukai?だが事実だ、彼女が言うにはだけけど」

「どのあたりが変わってたんだ?」

青年はアサキムに近寄り、答えるように迫った

「君の命が芽吹く場所、そして君の過去への旅路の結末」

「て事はあいつは何もかも知ってたつてのか」

「多分、そうなるんだろうね」

それを聞いて青年はしばらく黙り込んでしまった、デンライナーが使えないならもうここに留まっても意味はない

「それじゃあ失礼するでしょう」

アサキムは窓に近寄りここから出ようとした

「少し待ってくれ」

青年はアサキムを呼び止めた

「何だろう？」

「ついでに聞きたい。正しい時の運行ってどういうものなんだ？」

「なぜ：それを僕に聞く？」

「誰でも良いんだ、けどデンライナーに乗りたい人間に聞いてみたかった。それだけだよ」

他にも言いたい事が有りそうだがそれを飲み込もうとしていた

「それだけではないだろう、吐いてみると良い。そうでなければ僕は答えようとは思わない」

青年はうつむきながら答えた

「正しい時の運行って本当にそれが正しいんだったら、オレみたいなやつなんかいないんじゃないか？オレみたいに過去を変えきつたやつは」

「君は過去を変えようと思い、望みをかなえる力を手に入れ、それを成し遂げた。ならば間違ってるのは変えられる過去の方：そう言いたい？」

青年は首を縦に振った

「時の運行：それ自体には正も邪もないさ、こぼれ落ちる砂のように過ぎ去ってゆくもので、何を為したりする訳でもない」

けど人は違う、他の生物も多分

自身の意志や他人の思惑により、または本能でその時点において主観的に最良な選択をし、行動し、そしてたまにその行動について後悔をしてしまう。もはや同じようなものが先にたつてくれない後悔ば

かり。人が前に進むのは、それしか道がない事を心か頭のどこかで知っているからだ。

「罪の在処は、運命を侵す事事態にある。そして君は：問わずとも分かるはずさ、敢えて告げなければならぬのなら君は間違っている」

だが「楽しかったあの頃」、「運命の分岐点」、「後悔している事に後悔する前の時間」にも干渉できるならいったいどれだけの人間が干渉するのだろうか

「己にとって耐えられないものを歪めたいと願わずにはいられない人間はいるものさ、もし過去を変えたいと願った君が間違っていたとしてもそれはだれか他の人間も間違っている事になる」

「そうか…」

アサキムが何の気なしに振り向くと青年は天井を向いて呟いていた

「いつかはオレも許されるかな」

「許されるさ、君が悔恨の気持ち忘れずにいるなら：少なくとも…」

アサキムは窓を開けてそこから飛び降りた

「(彼はこれからも苦しみ続けるのだろうか？求めたから苦しむのか？いつそ何も考えない事が彼には必要なかもしれないね。考えを捨てる事で苦しみから開放はされる。苦しみから開放されるといふ点から見れば救われるという事になる、ならば諦め、放棄する事が救われるという事なのか？やはりそうは思いたくない。僕は…)」

究極的に言えば、時の運行は流れのままに何も干渉しないのが最も正しいと言える、イマジンなど過去に干渉できる力を持つ者に対してこれを迎え撃つためにデンライナーを使うのも干渉する事に変わりない、デンライナーを見ている人間も少しはいただろう

ただ、流れと勢いのままに任せる、そうしてくぐった道なら何かはどう違っても誤っているとは言い難い

だが過去に手を伸ばす、スフィアを手に行けるチャンスが遠のくと言うのなら。説得できる理由を言わねばならないなら命を守るため

…という事にしておく、過去に行つてヤミの息子の死を避けられれば
…ユニクロンがこの世界にやつてくる事を阻止できるかもしれない、
そうすれば…嫌、そうでなくとも彼女を救う事はできる

命を守る事が善であるなら善か悪かと、正しいか正しくないかは一
致しない

多数の人間が死を迎えるような戦い、それに対し人は何かしらの手
段を用いてそれが起こる寸前の時間に干渉している。それで救われ
る命があるならと

正しいかどうかは、この時二の次であろう、その時の場合都合の良
い過去の奪い合いに至らないからセーフかもしれないが

「僕や星帝のように世界を渡る者がいる場が正しき時の運行のまま
なのかな？」

飛び降りる最中にヤミ達が見えた、一行は教会に戻ろうとしている
ところのようだ

「前を確認するべきだったか」

いかに嘆こうと、いかに反省という行為に及ぼうとも

「!？」

一度飛び降りたし戻る手段はないので見つかるものは見つかる

「お前は!？」

「アサキム・ドーウィン!？」

アサキム面識のある人間以外は誰だこいつという表情を浮かべア
サキムを凝視した

「久しぶりだね。そしてようこそ、罪魂の住まうこの地へ」

第二十七話 再び、交える刃

「そういえばはじめましての人もいるみたいだね」

アサキムはぐるりと一行を見回した。

一人、二人、三人。

誰かに似ている気がするが知らない男が一人、後はだいたいリトとその嫁達と見て間違いはないだろう、一行の内二人は面識は無いことは無いが向こうは気づいてるだろうか

春菜に目線が向いた事に気づいたリトは春菜を守るように前に立った

「リト君、あの人はいったい誰？」

第一印象で人を見るのは良くないが夫と呼ぶべき人が警戒するよ
うな人間であるため、質問したといった所だろう

春菜の質問にリトは春菜の方を向きながら答えた、少し焦った様子
で

「あいつがスファイアと芽亜を狙って王宮までやって来たんだ」

それに付け加えるようにヤミも語った

「名前はアサキム・ドーウィン、自前で宇宙船でなくロボットを持っ
ています。いつぞやの鳥のような翼の生えた黒いロボットの乗り手
があいつです、そして見た目だけでなく特殊な能力を持っています」
見た目だけでなく、つまり見た目も特殊と思われるようだった。
アサキムは抗議の目線をヤミに向けた、この衣装は割と普通なの
ではないのか、と。だがヤミは春菜に説明するために春菜の方を向き
気づいていなかった

「見た目は確かに特殊だが能力とはなんだ？」

凜も話に加わった

「死んでもその度には分かりませんが復活します」

アサキムはそれらを聞き終えた後3回程拍手を送った

「説明ぐ苦勞様、だが僕としてはもうここに用は無いし君達にも用
はない。来るなら抗うけどここはさようなら、という事にしよう。お
互いのためにね」

アサキムはリト達と教会の方ではない所を向いた

「それとあれはシュロウガ、僕と共に永遠とも言える旅路を駆け巡る獄鳥の名はシュロウガだ」

そう言つて少し歩いた後段々とペースを早め走るような勢いに変わつていった、雨水を吸つて柔らかさを増した土は走つていくペースになると音を立てるようになった、肌を打つ水の勢いは減少し雨の勢いは少し止んだような気がした

その先にヤミが出てきてアサキムを通らせないように道を阻んだ、先回りをされたようだった。反射的にアサキムは後ろに飛んで距離を取つた

「僕はもう君達には」

「アサキム・ドローイン、あなたに無くても私にはあります。

第一にあなたは芽亜のスフィアを今でも持つているんですね？私にガーランドの事を知らせたあのスフィアを、芽亜の形見とも言える物を。」

次に美柑がいたというこの地へあなたはやってきた、あなたがこんなところまで偶然で来るはずがありません、あなたは何かを知っている。そうですね？」

「だとすれば、どうする？」

ヤミは手や髪などを一斉に変身させ身構えた

「洗いざらい吐いてもらいます」

アサキムも剣を召喚して身構えた

「それを知つて君はどうするのかな？」

聞いた瞬間、ヤミはアサキムに切りかかった。髪一つ一つの数がそのまま得物の数でない分無数ではないが手数に置いてはアサキムの比ではなかった

「どうするも何もありません、知らなければいけないんです。何故美柑が死ななければならなかったのか、何故美柑は私達の前から去つたのか。そうしなければ、納得がいかないんです!!」

ヤミの叫びを聞いて後、一閃

ヤミの刃と化した髪をできるだけ多く捌けるよう切り払つた

「知れば後戻りはできない。知るといふ事、その行為こそ人の在り方を最も変えるものとなりうるのだから」

一度戦った相手、二度目は彼女にして彼女にあらず。ならば今が凶らずも再戦となりうる。戦う事はこの場所では予定の内になく受動的ではあれど、剣を振るうならば勝ちたい、スフィアが絡めばこの勝敗は二の次になるが

「だからこそです、私が…私達だけが置いてきぼりにされる気はありません。美柑も何かを知った、きつとその事で美柑は…美柑だけを変えさせる訳にはいきません!!」

捌ききれずアサキムに届きそうな攻撃は後ずさりする事でよけた

「友への親愛が知への渴望を促すか、良いだろう。君の心が折れるその時まで、君の心がスフィアに届かないと思いついて知るまで、踊ろうか」アサキムは今度は自分からヤミに向かって走り剣を振るった

一撃目はヤミの髪の毛の片方を狙った、そこは攻撃の基点、不意打ちにも繋がる。伸ばしている分変身した時の刃物のリーチも長い

だが、避けられた。続いて切りかかった、これは紙一重で避けられた

なので次はできうる限り高速で移動し分身したように見せかけてから攻撃を仕掛けた…がカウンターで蹴り飛ばされた

「足音漏れてますよ」
ならば回れ

木に激突しかけた所を蹴って反動で飛び、体を回転させつつ剣を突き出してヤミに突っ込んだ。他人が見れば今のアサキムはドリルのようにだったかもしれない

その攻撃はヤミの髪が手の形となり受け止められた。十歩程後ろに下がらせたところで勢いを相殺されてしまった、アサキムは剣ごと投げ飛ばされた、上手く着地はできたが前回の戦いで色々と読まれてしまっているようだ

「ハア…ハア…召喚した剣で斬るといふ同じ手段の繰り返し、芸がありませんね。手の内は分かっています、これも知るといふ事でしようか」

「なるほど、じゃあ別の手段にしよう」

アサキムは剣を持っていない方の指をクイツと動かした

「……………!?!」

気付いた時には既に遅く、ヤミの踏んでいる地面から空間の割れ目のようなものができ、そこからシユロウガの片方の手が出てきて手のひらでヤミを上に乗せ飛ばした

「これは…!?!」

ヤミは翼を生やして態勢を立て直そうとしたがシユロウガの手がヤミのいる位置まで伸びてそれを妨害した

「つつ」

ヤミが足が当たって後尻餅をついたと同時にコロコロとシユロウガの手のひらの上で転がさせられた

「あ、このつ目が…回る」

車輪のように回転し、前転し、後転するヤミであった

「降参するなら早い方が良い」

「まだです、私は…」

決して、美柑の秘密を諦めない!!

そう告げると髪が拳の形を取り、それをシユロウガの手のひらに叩きつけた。その反動でヤミは飛び上がり、ついでに翼を生やした

「そうくるか、だけど…!?!」

アサキムに向かってヤミのいた方向から高速で何かが飛んできた、剣で防ぎ下に落とすと小粒だが硬い血の塊だった事が判明した

「あなたのせいだ…少しすりむいたんですよ」

ヤミは既に落下を終えて着地していた。そしてすりむいて赤くなっていた手を掲げてアサキムに見せてきた

「そう、悪いね。」

アサキムはヤミに向かって走った後跳び蹴りを放った

「けど僕も君に屈する気は露ほどもない」

ヤミもそれに合わせて蹴手繰りそれを防いだ

「何故ですか？私は友達の事を知りたい、今あなたに聞きたいのはそれだけのはずなのに」

アサキムは後ろにバック転し、着地した

「友という間柄だって、触れてはならないものもきつとあるはずさ。そこに無理にでも入り込むのが友達だとも言いたいのか？」

そしてヤミに走って近づき、切りかかった

「いいえ、いいえ、美柑がここにいてそれについて何も言いたくないのであれば私は何も聞く気はありません。ですが!!死んだと言われれば何故だと疑問を持つのは駄目なのでしょうか？」

「駄目じゃない…けど、僕がそれを知っていても伝えさせないで欲しいな」

「あなたにとって何か都合の悪い事でもあるんですか？」

「無い、僕はね。彼女の死に僕は関係ないよ、僕がこの世界に来たのは少し前でしかない」

「だからといってあなたは何も知らないとは言っていないですよね？」

金色の闇の妹と言える存在を狙った事でここまで粘着されるのは想定外だった、意地でも友について語らせたいようだ

「……………じゃあ一つだけ」

「もったいぶらないでください、全部」

ヤミがアサキムに向かって手を突き出していたがアサキムは聞き入れる気はない、アサキムは無視した

「あれは彼女が撒いた種だ」

「……………は？どういう事ですか？」

「彼女の選択が、この運命を引き起こした。というわけさ」

アサキムはそう言いつつ剣で後ろからのヤミの攻撃を防いだ
そのまま膠着状態が少し続いた

「思い返すんだ、彼女の行動を。掘り起こすんだ、刻まれた彼女の言葉。君でなくとも誰かはきつと抱えている。答えへと至る欠片を」
「美柑がどんな選択をしても、死ぬいわれなんてないはずですよ。ましてやそれ程憎んでいる相手なんて」

「あつたよ、少なくとも…」

言葉を重ねる毎に彼女の中に何かが渦巻いているようだった、ここ

であった事自体が彼女の心を黒く染めるには充分のようだ

「そんな事…ない、美柑が…誰かに恨まれていたなんて」

その上少し喋り過ぎていた事にアサキムは気付いた、さっきから彼女の死の原因が誰かにあるという事を匂わせる言葉しか言っていない

「そんな事…」

心臓の鼓動の音と共に黒い何かが、オーラのようにヤミの周りに吹き出す

アサキムは咄嗟の判断でヤミを押し出し、距離を取った

「ユニクロン…今ここに生まれ出でようとしているのか？」

思ったより早い再誕だった、よりによって彼女の中から

「星帝が選んだだけはあるか」

そう呟いている間にヤミがまたダークネスと化した、しかし感じる圧はこの前、宮殿の時以上だった、ユニクロンの中よりは感じないが「このままでは…」

星を断つ剣を放たれるかもしれない。そうなる余波がキツイ

「ヤミー!?!」

凜の声だった、ヤミは凜の声に反応しそちらを向いた、彼女の意識が出てきたのか生まれたユニクロンがまだ弱いのか黒いオーラも消えていく

「今だ!!」

アサキムは一瞬の隙をつきヤミの首に当て身をくらわせた、思いの外きれいに当たりヤミは倒れた。衣装は元通りとなったようで、一応アサキムは目をつぶる必要がなくその分楽に支えて寝かせた

「そいつから離れろ」

凜は木刀を手に取り、アサキムに向けた、気づけば木刀を持ち出しでも問題のない程に雨の勢いは弱まっていた

「離れなければ…」

「私が相手になる」

「試してみるか？」

「なめるな!!」

「ふっ」

アサキムは構えた凜に向かって武器を捨てて突っ込んでいった
「(この殺気は、沙姫様といた時に感じたやつか?)」

凜が木刀を振り下ろすのと同じタイミングでアサキムは飛んだ、飛んだ先は木刀の刀身というべき部分。アサキムは木刀に噛みつき、食らいついた。

「こ、これは」

「へんへひっひょうほひふはふはよ (先手必勝というやつだよ)」
奇をてらい過ぎた感もした、そしてやはりだがこの行動は凜の怒りを買った

「沙姫様から私への誕生日プレゼントに噛みつくなあ!!」

凜は木刀に食らいついたアサキムを振りほどこうと木刀を下から上に大きく振った、木刀はほどなくしてアサキムから解放されそして余波でアサキムは飛ばされた

「すまなかつたね、じゃあ」

「くそっ、くつきりについている。そんなあ、あ…なんだか真っ白に」

飛ばされながら見える範囲で見ると相当ショックを受けたのか何かが燃え尽きたように凜は真っ白になっていた

真っ向からヤミに挑んで勝てなかった、一度たりとも勝てていない。何故だか悔しさというものがこみ上げてくる

やがて地面に着地する衝撃がした、九条凜…彼女の怒りがすさまじかったのか数十メートルぐらい高い所まで飛ばされたようだった。死なないから受け身を取る事を軽く考えてしまうがアサキムは確信した、受け身は取るべきだと。そうしなければとても痛い

飛ばされた先にいるものは先ほどの男だった

「お前は!」

大声が耳に障ったので上体を起こし男を見た

「君は…」

やはり、似た人間がいたような気がするが関連性がつかめない

「誰だ?」

「シロだ、あだ名だが本名は知らない。金色の闇達をどうした?」

シロはそうやって右の人差し指をビシツと音を立てながらアサキムに向けた

「命には影響はない、今はね。けどここは雨に濡れた後でいささかだけど冷える、探すなら早くする事をおすすめしよう」

「そうだな、その前に」

シロはアサキムに向かってロープを投げた

「おっと、させないよ」

アサキムは涼しい顔でロープを斬った

「失敗か」

「君まで知りたいのか？結城美柑の秘密を」

シロは驚いた

「知ってるのか？」

アサキムは剣を持ってない方の手で顔を覆った

「なら君は知りたい？」

「オレである必要は無いが知らなければならぬ、そう思ってる。銀河警察にいた頃からの癖みたいなものだがそうしないと解決にはたどり着けない」

「悪癖だね、知というものは義務感だけではたどり着けないものさ。義務感だけで得たものは浅い」

「浅くても、知らなきゃ何も始まりはしないんだ!!」

「ならば君に少し教えようか」

アサキムはシロの周りを回るように少し歩きシロの耳元まで近づいて告げた

「先ほどの教会の地下倉庫に行くといい、面白いものが見られるだろう」

シロはとりあえずアサキムの方を見てきた

「これは金色の闇達には教えていない、君も言わずにいると助かる」
「どうしてオレに、オレだけに教えるんだ!？」

「知ってる事は、言いふらしたくなるものさ。かといって彼らに知られれば困る事もある、君はそこまで彼らと関係は親密でなさそうだし」

「本当にそんな物があるのか？」

シロは首を傾げた

「疑うなら確かめれば良い、ただし一人でね」

アサキムはシュロウガを出現させた、乗ってここを去る気のようにだ

「おい待て!？」

シロはアサキムに向かって手を伸ばしながら追いかけてやろうとした

「断る、君に僕は追えない。翼無き君にはね」

アサキムは発言と共に消えシュロウガは飛び立った

「……………クソツ逃がしたか」

追いかけていたが空を飛べない上、道に迷ってはまずいと思い踏みとどまった、踏みとどまるしか道は無かった。彼女たちを見つけるのが先だった

それから少し時間が経った

「おーい」

リトは金色の闇をおんぶしながらシロのいる場所に走ってきた

「金色の闇は?」

「無事だよ、けどその名前で呼ぶのはなあ」

「名前呼び合う間柄じゃないからな、悪い」

「…そうか」

「木刀…」

重苦しい声色を聞きびっくりしながらシロは声の聞こえた方を見ると一人だけどんよりとした空気を背負い凜は歩いていた、春菜という名前の人が苦笑いしつつその歩みに付き添っていた

「凜さん、しっかり」

「疑問なんだけど凜とは知り合いなのか？」

「まあそんな感じ」

「へえー」

意外そうな顔だった

「それはそうとアサキムを見てないか？」

シロはがっくりとしたポーズを取った

「逃げられた」

「そっか…」

少しリトは残念そうだった

「デビルーク王…貴方もあいつから聞きたかったのか？」

「まあ、あいつには色々あるしヤミの思ったように美柑の事も知ってるなら教えて欲しかった」

「リト君、美柑ちゃんの事知ってたかどうかあの時間じゃなかったのかな？」

春菜が話に入ってきた

「嫌、あいつは知っているか知らないか聞かれてもそのまま答えない類の人間のような気がする。だから追いかけて聞かないとダメだった、それに…ためらってしまった、芽亜の命を狙ったから美柑の事も関わってるって言いがかりをつけるみたいで」

「それもそうかな」

話を聞いている内にシロは寒気を感じた、そして自分が雨に濡れてしばらく時間が経っていた事を思い出した

「あの黒い男の事は気になるかもしれないが凜さん達は見ての通り、オレはびしょびしょ。一旦教会に戻ろう」

第二十八話 「彼女の秘密…それは」

シロをまいたアサキムは教会から少し遠くまで行ってシユロウガから降りた

「さて、どうしようか」

メア、彼女が望む過去へ飛ぶにはうってつけの人間は今教会にはいない、彼の言う時を固定させる手法はだいたい分かるが話題としては真実を伝える事だろう、そうすれば確実にリトに伝わる、彼に真実を知らせる気は起きない。真実を知った先から繋ぐ過去はどのような進んでも彼女の望む過去にあの惨劇は意志一つでどんな世界、どんな人間でも起こりうる可能性のある出来事であった、舞台はここであり、演じたのが彼女達であるだけで

それともう一つ…過去に飛ぶ時、ユニクロンは邪魔者以外の何者でもない、体はまだデビルーク星に存在していたから過去で色々とかえりても過去に出現してそうな感じもする

「彼女から新生したユニクロンのスパークを取り出して別の世界に追い出せばボディも後を追っていく…事ができれば良いけれど」

彼女の中からユニクロンを表出させるには、彼女に…できれば彼女だけに真相を教える事が手っ取り早い

「後は彼がどう出るか」

さすがにシロがいずれ見に行くであろう場所にある物だけでは正解には至らないだろうがそれでも彼らはショックを受けずにいられない

「仕方ない」

アサキムは、教会のあるべき方向を見上げた、わずかに見える建物が向かうべき場所を示してくれる

アサキムはもう一度教会へ向かった、ここを去る前にしなければならぬ事を心で思い浮かべ

?????
)

スフィアの中で未だ意識を保っているメアは呟いた、声になっていたかこの際どうでもいい。聞いている人間がいるわけでない

「甘いよ、呪われし放浪者さん、角砂糖でできたルービツクキューブより甘い」

忠告すればどうなるか、それをしなければどうなるか、メアはできればどちらも見えてみたかった。己の好奇心の向くままに…闇に心を全て食い尽くされるまでに

く教会　一階く

教会に戻ってから挨拶もそこそこにすぐシロは美奈子に頼んでシャワーを浴びに行った

そして数分後く

「お風呂終わった」

シロが先程リト達と会話した場所に戻ってきた

「やり直し」

イスに座っていた凜からダメ出しを受けた

「何だって!？」

凜は時計を指で差して言い放った

「時計をしろ、数分しか経つちやいない、そんなので温まったなんて言わせないからな」

「確かに、じゃあまた」

納得したシロは再び風呂場に向かった

「……………」

いつの間にかそこにいたチヨは様子をただ見ていた
「どうしたの?」

それを見て春菜は質問した

「またか…と思いました」

「ただと、まあそうなんだろうな…まったくあいつは」
凜がむっとしてしているとチヨがおそろるおそろる手を上げた

「あの…シロとそちらはどういった関係で」

「あ、俺も聞いて良いかなそれ」

ヤミをイスに寝かしかけたリトもそれに乗った

「あいつとは顔見知りだな、そう…あれはヒカル様の出産祝いをみんなが渡す日の3日目の事だった」

凜は語った

「天条院グループの面子もザステイン様の関係者も渡してくるから品物が多すぎてな、沙姫様やザステイン様の手を煩わせる訳にはいかないと私や綾が代わりに受け取っていたんだが…」

「ひよつとしてあの話に出てきたのがシロだったのか?」

「王様!？」

チヨは驚いた様子でリトを見た

「ああそうだ、あれから3年か…」

3年前く

天条院家の持つ別荘に、少年とも青年とも言えるような若い男が一人やってきた、白いシャツにズボン、上に青いコートを羽織り青い目と銀髪を有した姿はさながら擬人化した白猫のような見た目の男だった

「ザステインさんのお子さんの出産祝いを渡す場所はここで良い?」

「そうですね…」

そう言っている男が抱えている物は…箱ではあったが隙間から大きな瓶の牛乳そのものが5瓶ぐらい隙間から見えていた

「おい待て」

凜は男を引き留めた

「何です?」

「牛乳だな?」

「おいしいですよ」

それは何も考えてなければ思わずつられそうな程良い笑顔だった

「名前は?」

「シロ」

凜はふうーと息を吸いシロに箱を下ろすように促し、シロが箱を床に置いた後、木刀を持ち出した後シロの頭をチョップで叩いた

「痛い!？」

「送る対象と容器と、量が噛み合っていない。何だあの量は、一つだけでもヒカル様が1日分飲んででも数日で無くならないじゃないか」

「ザステインさんと沙姫様に飲んでもらえば」

「食べ物関係はデリケートなんだ、特に沙姫様やヒカル様にはな、分量とか何も知らないやつが持ってきていいものじゃない」

「誰も教えてくれなかったし…」

シロはボソツと呟いた

「何だと!?!……………ならこれから覚えろ」

凜は仕方無さそうにシロに言い聞かせた

「二応沙姫様にどうするか聞いてみない、凜」

「そうするか」

その日、天条院邸でたくさんの人が天条院家の人間を含め牛乳を飲んだ、牛乳自体はおいしい牛乳だったので好評を博した。その後天条院グループの中でシロの名は牛乳の思い出も添えて知れ渡った、そして後日シロは無知な事をお詫びしたいとぬいぐるみ「シロニヤークン」を渡してきた

「なんかシロから聞いたような気がする」

「ぬいぐるみは良いものだった、ポーズが招き猫だった事は気になるが」

凜はシロニヤークンの事を思い出した、それは白猫をモチーフとしたぬいぐるみに黒色の服を着せたようだった。伸びた方の腕の肉球にはコインが握られ服の胸部分には時計が、カラフルな色のローマ字による数字と両方とも黒い針、余白は白で描かれており生地は子供が触っても何も問題なく子供が抱きかかえられる程の大きさだった、一度触らせてもらったが反発が低く一瞬だけ思わず笑みがこぼれてしまった、首輪の鈴に代わる物が鈴並みの大ききでフェルトとはいえ英語でミルクと書いてある空き瓶だったのはどれだけ牛乳が好きなんだと聞きたくなるが

「凜?」

「何でもない、何でもないからな」

何かが表情に出ていたのか、次からは気をつけようと凜は思った

「けど…あいつは元だけ銀河警察の人間だった、教えてもらう環境とかは割と良かったように思うんだ」

リトはその事について疑問に思ったのか指を自分の顔に当てて考える仕事をしだした

「触れる機会がなかったただけなんじゃないかな？」

「春菜ちゃんと言った通りかもしれない」

「もしくは教える必要がなかった…とか？」

チヨは唐突に疑問を呟いた

「何をだよ」

「ヒカル様の件、そういうのシロはあんまり関わらなさそうだったから…てシロ!？」

シロはいつの間にか風呂から上がっていた、時間を見てみたが今度は大丈夫だった

「今度こそ終わった…はずだ」

慣れない事をしたと表情が物語っていた

「…………お疲れ」

長い時間お風呂に浸かる事に慣れてないようだと考えつつ凜は労いの言葉を送った

「フルーツ牛乳が飲みたい」

「我慢しろ」

ここでフルーツがつく牛乳がある確率は極端に低い気がした

「分かりましたよ、それで…凜さんはこれからどうするんです？」

「それは…」

デビルーク星に戻る事が一番望ましい、だが戻って何かできる訳ではない、美柑の事も知りたいが一番情報を持っていそうなアサキムは既にここから去ったためこれ以上何かつかめる訳でもなさそうだった

「俺はデビルーク星に戻る事にするよ、向こうの俺だけに色々ときせるのも悪いし」

「私は…」

答えが見つけれられないのか、凜の口は上手く動かさずそこから先が言えなかった。そうして迷っている内に

「チヨさーん、早く戻ってきてー」

美奈子の声が聞こえた、何かを作ってたのかここから離れていた所から聞こえてきた

「あ、まずいな…忘れてた、ちよつと」

チヨは何か大事なものを思い出して慌てるような勢いで立ち上がってすぐにどこかへ行つた

「さてと」

それを見てすぐにという訳ではないが少ししてシロもまた立ち上がった

「どこに行くんだ？」

「トイレ」

「何故さっき行かなかった!？」

こつちに来るまでに済ませてしまえば良かっただろうと凜はシロに言い放つた、気を失っているヤミに一応配慮をしたつもりだったがそれでも少し声が大きくなってしまった

「それはそうかもしれないけど…行きたくないのは仕方ないと思う」

シロは心苦しそうにボソボソと呟いた、お互いに沈黙が続いた後シロはトイレに行こうとした

「待てよ」

突然リトはシロに声をかけた

「なんだ？」

「あのチヨって女の子、泣かせるなよ。泣かせちゃダメだからな」

「何をしたらあいつは泣くんだ？」

そんな事はしないという自信のある言葉でもなく、本当に分からないような風でシロは答えた

それを聞いて啞然とした表情を浮かべて後、リトはシロの肩を叩き言った

「とりあえず無事でいろ、良いな」

「ああ…分かった」

シロはそこは分かったようで声に一切の疑問も迷いもなかった、そしてシロは扉まで行ってくるりと回ってリト達の方を向いた

「それじゃあ凜さん、王様以外の他の人も話の腰オレから折って悪いけどオレが戻ってくるまでに考えてくれよ」

シロは足早にトイレに向かった

「リト君、何であんなこと…」

春菜がリトに分からない事を聞くように質問を始めた、確かにリトがシロに言った言葉はトイレの前後に言う言葉じゃなかった

「なんだか…シロに黒いモヤモヤした物が見えてしまったんだ、だから…つい」

「だったら追いかけた方が良いんじゃないか？」

「本当にトイレだったらどうする？」

リトの問いに一同は黙った、下手をすれば他人のトイレの邪魔をする羽目になる。しかもここは自分の家でもないから怪しい動きは避けるのが無難だった

「お待たせー、嫌待ってなかったですよね、ところでシロは？」

チヨが皿に盛った玉子焼を持って戻ってきた

「トイレだけど…何してたの」

リトが説明と質問をするとチヨは頷きつつ答えた

「皆さんが外に出て暇だったので美奈子と料理の練習させてもらってました、一応ですけど皆さん食べます？」

「シロが帰ってきたらどうして？」

そんなこんなで一同はシロを待つ事にした

「そういえばシロは熱いものが苦手だが大丈夫なのか？」

「待つてれば冷えるので大丈夫…でした」

く教会 内部く

シロはトイレを終えて部屋から出た

「終わった終わった」

そこから先はどうしよう

リト達を呼んで大勢で地下倉庫を調べようか、アサキムの言う面白いもの…それをみんなが見せればどうなるのか

考えるまでもない、アサキムのような雰囲気の人間の言う面白いのは大抵当事者にとって面白くないものである可能性が高い…とい

うのがシロの少ない年数ではあるが銀河警察をやってきた経験から言える事だった

それが地球でいうパンドラの箱であるのならアサキムから言われた通りに一人で見に行った方が良いのではないのか。それが罠だろうと動かずに憶測だけを立てるよりは良い

「行くか」

シロはそう言ってトイレから地下倉庫に向けて出発した、無論聞こえないように足音を出さないようにしながら

だが途中ですぐ神父に出くわしてしまった

「おや、何をしているのかね？」

不審者を見る顔で神父はシロを見た、確かに教会で暮らしていた美柑の家族であるリト達と違いシロはほぼ部外者に近い存在だった

「………実は………」

シロは神父に外での経緯を説明した

「というわけで地下倉庫の中を調べても良いかな？」

「………良からう」

意外にも神父は快くシロの要求に応じシロに道案内を始めた

一度地下への階段に足を踏み入れると辺りが暗さを増した、地下にこそ明かりを付けなければいけないのではないかとシロは疑問に思う

「疑いはせんのか？初めて会った人間の言う事じゃぞ」

「あいにく疑ったり取捨選択をできるぐらいの情報を持つてる訳じゃないからな、その情報が罠だろうと踏み抜くしかない」

嘘か本当か、分からないがそれを確かめるためにも色々知っておかなければいけない

「その通りかもしれない」

とやり取りを続ける内に一つの扉の前にやってきた

「………じゃ」

神父は鍵を使い倉庫の扉を開けた

「………面白いか価値のあるものがあるとは思えんがのう」

「自分で言うのか………」

だが、もうこの場所は美柑のいた場所としてその道の人間に価値があるものになる

「ここにアサキムが言っていた『面白い物』があるのか…」

倉庫の中も薄暗く、明かりも最低限しかないのでシロは胸のポケットから万年筆のような物体を取り出し、スイッチを押した。すると万年筆のような物体は光を放ち出した

「便利なものを持つてるのう」

神父はすごい物を見たような表情だった

「ただの携帯用ライトだけど」

「すごい時代になったものじゃ…」

「これで驚いてたら保たないよ、神父さん…今は宇宙から人がやってきて溶け込むようなご時世だからさ」

「宇宙から人じゃと…?」

有り得ないという声色だった

「疑ってるのか?地球にも昔からちよろちよろ来訪してたらしいけどな、不時着したとも言うけど。モロに生態が違うから異端として扱われたという噂もない事はないし、そういうのって聞いた事はないか?」

「あやつ達の言ってる事は本当だったか」

神父の声色が沈んでいた。間違いなく過去に何かがあった、だがこれ以上その話についてあれこれと聞くのは酷のような気がした。神父自身が何かしたという訳でもないだろうし

シロは倉庫の中を本格的に探り出した

色々と目を向けている内に一つの写真をシロは見つけた

「これがアサキムの言っていたものか」

先ほど見せてもらった美柑の写真と彼女の髪型が変わってないおかげでどの写真がどれかなどがすぐに分かった、彼女はこの教会の中でそれなりに人気者だったのかもしれない、真ん中で座っていて修道女や修道士合わせてそれなりの数に囲まれていた、美奈子も彼女の隣に立って笑っていた、師匠と慕っていたのは嘘じゃないだろう。美柑自身は苦笑いだった、なにか悩みがあるのだろうかとうと写真からでも感じ

られたが違和感もあった

「これは…」

この写真に写っている人達の人数と今ここにいる人数とがかけ離れている事、次に美柑の事で気になるものがあった

彼女のお腹は服の上からでも分かる程膨れており、かつ顎は膨れていない。これが意味するのは…

「怪奇現象か？嫌、違うか…聞いた事がある、人は」

その時、ブツブツと呟く声と同時に小さな爆発音がした、それから異様な喪失感を感じた、今まで感じた事のない激痛と共に、痛みを感じる部分を撫でてみると左胸が開いていた。そして急に力が入らなくなつてシロは倒れてしまった、口から血が湧き出てくるのはいい気分ではなく気持ちが悪かつた

「ぐはっ」

「心臓を攻めたのに大した奴じゃ」

神父の声が聞こえた

「何故…神父さん」

シロは神父の声のする方向を見て呟いた

いや、違つたとシロは思った。さっきの写真が去年から一昨年の間撮つた写真だとするのなら、ここにいる神父も写っているべきだつた…が、写真の中に今いる神父はいなかった、写真の中に神父自体はいたがどれも髭の有無や髪の色、顔の骨格から生じる丸みなどの特徴はどれも目の前の神父にはつながらない、整形手術をしたと言われればそれまでだが

「違う…貴方は、だ…れ…だ…？」

問い詰めたくても、もう口が動いてくれそうにない、意識が飛んでいく感覚に伴う物理的な激しい痛みはそろそろ死ぬんだと確信させるには充分だつた

「これから神に召される君には何を言つても無意味じやろう」

神父は指で十字を切りわざとらしく哀悼の意を示す素振りを見せた、何か別に言葉を唱えてもいたようだがもうシロはそれを見れる状態ではない

「チ…ヨ…」

そう口から声が出た後、シロは何も考えられなくなった、何故その言葉が出たのかを考えるにはもうシロには時間が足りない

「おっとそうじゃ」

神父は例の写真を持ち力を込めた、すると写真は燃え、跡もなく消え去った

「ワシのいた時代にはなかったものじゃな、この写真とやらは」

第二十九話 「地から昇って天から降りて」

「悪く思わんでくれ」

神父はそう呟きながら動かなくなつたシロの体勢を整え手を組ませた

「わしは目の前で困っている人間を見捨てられなかった、それだけなんじゃ…あやつが存在があの人達に知られればあやつは…」

それだけで命まで奪つていい理由にはならないはずだった

「わかつておるわ、それがどれだけ罪深いかなど、だがわしはもう遅いんじゃ」

それから神父は語つた

自分の生まれた時代は争いもあつたという話、やはり地球でも銀河大戦の規模でなくとも争いはあるみたいだ

ここで生きている内に教会を守るためとはいえ敵対者を…といった話

「おかげで主の元に旅立つ事は叶わなかつた」

その言葉に行いを後悔していたという響きは感じられない、残念だとは思つていてもそのためになれをするべきでは無かつた、これをするべきでは無かつたとは思つていない様子だった。それはやるべき事であつたと考えていると見るべきだろう

「お前さんは何を見る？」

神父は何も聞く事のできないシロに向かつて唐突に聞いた、先程神父は主のいる場所と言つた…見るとは死後の世界と言うものについてなのかもしれない

「あやつは見たと言つておつた、話をしたと言つておつた。お前さんにまでそこにたどり着くのであれば叶わんのう、祈りによつてそこにたどり着こうとしたわしや同胞達は…しかし嘆かわしくもある…あやつは年若くして覗いたらしい」

そして神父は語り出した

「あやつは…」

死人に口無しだからなのかもしれない冥土への土産とでもいう体裁

なのか

そして、一通り語り終えたようで神父は一呼吸置いた

「どうじゃ？あやつを裁くべきなのは時間を司る者達、それか主であるという事が分かるじやろう？」

分かるかどうかはどうでもいいのかもしい、どちらにせよシロには選択権はない

それから神父は首を傾げていた、どのようにシロを処分するか検討をしているのかもしれない

神父が考えている間に、扉の前から大きな破壊音がした、どこかで、建物内の何かが壊れされたような大きな音、そしてそれはかなり近い所にある

そして扉が音を立てて開かれた

勢い良く開かれた扉から風が舞う、それらと共にやってきたのは黒い衣装を纏った男、神父はシロの話からその男がアサキム・ドーウィンである事が分かりそのアサキム・ドーウィンと思われる男を凝視した

しかし人違いであれば困ると、神父は一つ質問をした

「何者じゃ？お前さんは」

「ある者は呪われし放浪者と呼ぶ。僕の名前はアサキム・ドーウィン」

そう言ってアサキムはシロを見つめた

「まさか本当に一人で確かめに行くとは思わなかった、いくら僕でも少しばかり心が痛む」

アサキムは黙祷をするかのようにはばらく目を瞑った後、どこからか剣を召還した、その金色の柄から伸びた細身の刃は鮮血にも似た鮮やかな赤と輝きを表していた

狙いは誰が見たとしても神父ただ一人

「仕方あるまい」

神父はアサキムに向かってぶつぶつと何かを唱えた、それは詠唱のようでそれを唱え終わるとバスケットボール程の大きさの魔法の球がアサキムに向かって進み出した、それがおそらくシロに対して行っ

た攻撃だろう

アサキムはその球に向かって前に進み剣でその魔法の球を縦に一
刀両断した

「これは!？」

「魔を断つのは初めてじゃないからね」

神父はもう一度唱えようとするがアサキムはすかさず剣を持たない方の腕で神父の服の襟をつかみ剣を神父に突きつけた、そんなものは無駄だとしても言いたげにアサキムは神父に顔を近づけながら睨む

「祝詞は不要だろう？ 君は生ける死者ではあるけれど、不死なる者とは違うんだから」

「わしの事を知っておるのか？」

「無論その原因もね、特異点が自身の誕生に繋がる未来を阻む時生と死が反転する。まさか実物を見れるとは思わなかったけど」

「つまりお前さんはあやつを…来夢の事を!？」

アサキムは一瞬間まった後、全てを察したかのように笑みをこぼした

「運命だけでなく名前すら変わってしまったのか…でも仮面の内に潜む傷の痛みそのままに行く性質には変わりがない…と」

「あやつに何の用があるんじゃない!？」

「ここには彼らがいる、特に金色の闇がね、だから彼の事を教えるのも一つの手だと思ったのさ」

「そんな事、させはせん!!」

それを聞いて神父はアサキムに向かって膝蹴りを放った、アサキムは襟をつかんだ腕を伸ばして自身が後ろに移動する事で避けるのを試みた

だがそれが狙いだったようで神父はその伸びた腕をつかみ投げ飛ばした

背負い投げのようだが武道に基づく洗練されたものでなく勢いによるものが大きいため、アサキムは床にたたきつけられる前に足をバネにしてなんとか仕切り直しにもっていった

「何故あやつを…来夢の事をあの者達に教えなければならぬ

じゃ!？」

神父は隠し持っていたらしい儀礼用に使いそうなナイフ数本を取り出し、アサキムに向かつていった

「金色の闇：彼女があまりにも知りたがっていたからさ、そして彼女に潜む因子を引き出すには彼の事を教えるのが一番早そうだった」

神父はアサキムに向かつてナイフを振り回して突っ込んだ

「あの者達をここに連れて来たのはお前さんか!？」

アサキムは剣で神父の振るうナイフを防ぐ

「それは違うよ、僕がいなくても彼らはここに来た、むしろ感謝して欲しいな、来夢…の縁者をできるだけ減らしたんだから」

「縁者とは、どういう事じゃ?」

「知る必要はない、これから君は僕が彼岸へと送り返すんだ。他にここに住まう人間もね」

アサキムは剣は速度を増した

「他の人間も狙うじゃと」

「君達は生と死の反転という奇蹟の果てに何を為した?少なくとも君はシロを…」

しゃべり声より金属音の割合の方が大きくなっていった

「ならば安心せい、罪を重ねたのはわし一人じゃ」

「ならば君を屠つてから確かめようか」

「させんわ!!」

神父は蹴りを放った、アサキムは腕で防いだがそこから神父が攻勢に入った

「来夢には時が必要なんじゃ、自分を受け入れて心から笑えるようになるまでの時が」

アサキムもまたナイフを剣で捌き、丁度いいようになった所で一直線で全て受け止めた

「僕は彼を見た、嫉妬、哀れみ、その他を受けて育ちそれらが憎しみと成った彼は、その原因となるものに決着をつけてもそれらが晴れる事なく虚無へと堕ちていった、そんな彼が時だけでそれを払えると思っているのか?」

「いつかは晴れる、そう信じておる!!明けない夜はないんじゃ!!」

「日は昇ろうとも、それらは再び沈む。過去の痛みも、思い出も、人の心はすくい取るんだよ」

神父の一本一本の指と指に挟んだナイフとアサキムの剣が交錯し
一際うるさい金属音が鳴った

「心を語るなら何故それを踏みにじろうとする?何故あの者達に突きつけようとする?」

「必要があれば、心を壊しもするし導きもする、それしかできないなら僕は…」

「ならば、わしもこれしかできん」

神父はまた何かの詠唱を始めた、唇の動きからまた別のものを唱えているのが分かった

しかしぶつぶつという声は扉の近くの足音でかき消された、バラバラの音から察するに複数の人間達が勢い良く降りているような感じではあった、おそらくリト達だ、むしろ気づくのが遅かったなど言うべきか

「時はすぐそこまで来ている、だから君の罪に終わりをもたらそう」

アサキムは剣を一旦構え直し、叫んだ

「ランブリング・デイスキャリバー (ver2)」

何の呼称かと疑問に思った、だがそれが必殺技だと知るのにそう時間がかからなかった

アサキムは走り剣の柄の部分を神父に当てた

「ハハハハハハハハハ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

そのまま一閃、二閃、三閃、とにかくたくさん神父を斬りつけて最後はとどめと言わんばかりに神父を壁まで蹴り飛ばした

そこまでされたからか壁に激突した神父はもたれるように倒れて起きあがらなくなった

程なくして、チヨがやってきた

「シロ、どこなの?シロ」

それに続いてリトと凜、そして美奈子もやってきた、他の女性達はお留守番といった形だろうか

「!!シロ!!」

シロの体はすぐに見つかった、すぐにチヨが駆け寄り、無事かどうかを確かめる

「シロ!!しっかりして、シロ!!」

体温の有無はともかくとして心臓部がくり抜かれたようにぽっかりと穴が開いているので生存は絶望的だろう、すぐにチヨの感情が嘆きと涙に表れるのは分かりきった事である

アサキムはそれを見て思う所があるようですまなそうな顔であった

「シロは、あなたが?」

そう聞いているチヨはアサキムの方を見ていないが、それだけに怖さが増している。今は静かなものだが、徐々に加熱してゆく火種、彼女からはそれを彷彿させた

「君の想像に委ねよう」

素直に神父がやったと言えば話が進むはずだった、なのにアサキムはそれをせずに答えをはぐらかした。隠す理由があるかどうかはさておきその言動はリトの怒りを買った

リトはアサキムに近づいて言い放つ

「ちゃんと答えろ、アサキム・ドーウィン!!」

「悪いね、だけどそれが僕の答えだ」

「あの神父もお前の仕業か!」

「……………」

アサキムは笑みを浮かべながら、黙った

「答えてくれ、シロの事、神父の事、それにまだ美柑の事も教えてもらってない」

「知りたいな…君は何故、シロに行動を共にする事を許していたか、そこまで親しい関係でもないだろう」

「聞いているのは俺達だ!!……俺とシロとは昔…つっても美柑がいなくなった後ぐらいだけど、ヤミとの事で揉めてからの縁だった。あいつは銀河警察の人間でヤミを捕まえようとしていた」

自分の質問に答えさせるために答えているのだろうか

「色々言い合って、その後あいつは辞めさせられてその話は終わった、後で上から色々と釈明されたりもした…けどシロの叫びは、シロの怒りは、正しいって言いたくはないけど…いつかは向き合わなきゃいけないってのはヤミも言ってたし俺も分かっている。それに…シロは実力行使とか周りにいる人間達に危害を加えようとはしなかった。だからあの事でシロを敵と思って冷たくするのはするべきじゃないと思っただ」

「なるほど…だが何故彼は辞めさせられたんだろうね？」

「ヤミも王族って事になってるから…？」

リトが暗い表情になっているのが分かった、後ろめたさのようなものだろうか

「それだけで辞めさせられたとは思えないよ、媚びるために辞めさせられたならもう少し見せしめになるような方法があったはずだ、だが辞めさせられた、ただそれだけだ」

その言葉で美奈子以外は一斉に驚いた

「確かに…じゃあ次はお前の番だ」

「まだまだよ、次は」

アサキムは美奈子の前に立ち、美奈子の顎に指で触れ、クイツと自分の顔を見つめさせた

「あ、あの…」

少しずつ、美奈子の顔が赤くなっていくのが分かる

「君の名前は？」

絵図だけなら、女を口説く男のようだ

「秋月…美奈子…20歳、趣味は歌う事」

「なら美奈子、君は今ここに生きるものかな？」

先ほどの生と死の反転の話だろうか

「あ…はい、生まれてからずっとここにいます。」

望まぬ答えにアサキムは少し固まったようだ

「そう…ならば君は一年半前のあの日から今までどうしていたのかな？」

一年半前のあの日…結城美柑の命に関わるあの日の事だろう

その時チヨは銃を構えた

「早く答えて!!」

アサキムはその話に関しては口を開きはしなかった、それでチヨは銃の引き金に触れだした、少しずつ指に力が入り弾丸が発射するまで数秒あるかないか

「止せ!!」

叫んで止めたのは凜だった、その叫びにびっくりしたチヨは指を引き金から離す

「お前がどれだけ銃が上手いのかは知らんが今のお前では美奈子に当たる可能性がある」

チヨは下を向いて黙った後、銃を下ろした

「……何もしていません、ただ……師匠のお墓を作って、師匠が救われますように祈って……師匠のお……むぐ」

アサキムは美奈子の口にもう片方の手を当てて口を塞ぎ顎に触れた指を美奈子から離してから人差し指を伸ばしてアサキム自身の口に当てて黙るようにジェスチャーを送った

「ありがとう、君は罪を重ねていないという事はだいたい分かった、ならば君は道を踏み外す……己の手を血で濡らすような事のないようにね」

アサキムはそう言い残して扉に向かおうとした

「待てよ、まだ終わってない」

「待つてください、今度は私から……」

リトと美奈子は手を伸ばして引き留めようとし、チヨは先程の銃でアサキムを狙った

そして一発、二発とアサキムに向かって発砲した

天井に当たった後、アサキムに向かって飛んでいったそれはおそろしく跳弾の一種だろう

アサキムは振り返った、そして手から持ち出してきたのは剣ではなく、一つのベルト。3つ程コインが入るくぼみのあるベルト

そのベルトでアサキムは銃弾を全部下にはたき落とした

「知りたいなら、教えよう。ただし、僕が用意する舞台まで昇る事が

出来たなら…ね」

アサキムはそう言つて扉の外へ出て行つた

「木刀の恨みは、消える事はないからな」

凜もアサキムを追つて外へ出て行つた

「秋月ちゃん…なんともない?」

リトは美奈子に無事かどうか聞いてきた、聞かれた事を、あまりにも素直に語っていたからか何かをされたのではと疑っているのだから

その質問の直後美奈子は顔を赤くしてから手で顔を覆いだした

「私…あんなにいい声のイケメンにあんな事されるの初めてで」

要はときめいてしまったようである

「ええええええええ!!嫌…ごめん、でもあいつはもう少し様子見の方が俺はいいと思う」

「そう…ですか?」

「男の俺から見た感想で悪いけどさ」

美奈子は首を横に振つた

「それはそうとここを頼めるかな?凜だけじゃ心配でさ…」

美奈子は覆つた手を顔から離し手である方向を示した

「でも二人が」

言われて思い出したのか倒れているシロと神父をリトは見た

「シロ…」

リトはシロとシロを見て悲しんでいるチヨを見ながら神父に駆け寄つた、神父の衣装の上からリトは心臓の鼓動を確かめた

「神父の方はまだ生きてる…でも手当てしないとまずい」

リトは神父を抱えた

「何をするんですか?」

「ここじゃ暗いから」

それだけでなく割と冷えている、地下というだけあり暖かさなどとは無縁なのだろう、明かり自体がほとんどなさそうなものもある

それを見てチヨもシロを運ぼうとして、失敗した

「大丈夫?」

「体の半分は牛乳しか詰まってない癖になんでこんなに重いのか？
「そ、そんなに……？体に何かできてるかな？」

いくらなんでも言いすぎである、牛乳も水もたくさんあれば重いのは一緒、それにシロの体型は標準ぐらいのはずだ、その内美奈子もシロを運ぼうとした

「何？」

「手伝わせて」

「何であなたもシロを？」

何かを警戒しているようでチヨは美奈子をジロジロと見た

「人が困ってる時には手を差し伸べろって言われたり書いてあるのを見て育ったからじゃ……ダメ？」

一切他意のなさげに喋る美奈子に対して警戒心をほどいたようで

「……………サンキュー」

とチヨは礼を言った

美奈子とチヨはお互いにシロの肩を組んで運んだ

シロはこれを望まないだろう、死体……ではないが動かない体に触れたり運ぼうとしたりどうみても犯行現場を荒らしているようなものだった、心臓が欠損したのならシロはもう死んでいるのではと思うかもしれないが

運ぶ途中に彼女達は気づくだろう

シロの髪は銀から茶へと変色していくのを

第三十話 「拾い集めた記憶と虚憶」

聞こえる

先程誰かに心臓をやられもは何かの海のような水たまりに融けていくだけのはずの意識に誰かの泣いている声が聞こえてくる、その声は察するに若い女の子の声だ、何を言っているのかはよく分からない、発音は連呼しているので段々と分かってきたがその意味が分からない、何かの単語だろうか

声自体は聞いた事があるような気がする、それも聞き慣れている程のような…だが泣いている声は初めてだった風に思う

笑った声、楽しんでる声、失敗でムカついている声はよく聞いたはずだ

その女の子の声を聞いたのはいつからだったかおぼろげにしか思い浮かべられないが思い出してみる事にする

〈数年前〉

そうは言っても尊敬している人に初めて会った時とそう時期は一年しか変わらないはずだ

尊敬している人の名前は思い出せない、眠る寸前と同じようなものだから無理はないと言ってもらえればありがたい、だが思い出せないのは具合が悪いのでまずその人の事を思い出すべきだと思う事にした、順序は大切だろう

その人と初めて会ったのは初めてパトロールというものをしてみた日の事だった、場所はどこかの銀河のどこかの惑星、それじゃあ分からないと言われても自分でも分からない…ので惑星がどこか…名前は何か…の話はおしまい

まだ若いし免許も云々かんぬんという事で警察用の宇宙船に先輩が乗るのに便乗する形で乗り込んだ、その時の仕事はまず観察する事、宇宙船の運転を…ではなく外を観察し、ケンカ沙汰や銃撃戦など…物騒な光景を見かけたら報告する事だった

乗っているのは宇宙船、車両でないので横に移動して止まるなどの融通は効くので報告したものを先輩にリーダーなどで確認しても

らってから仲裁する、両成敗というパターンもあつたかもしれないが
そして見つけてそれを話して仲裁して場合によつては捕まえて：
を繰り返して、気づくとそろそろ交代の時間になろうとしていた
その時：向こうの様子が変わったから双眼鏡で向こうを覗くとど
うみても人だかりができていたのでその場所まで寄つた

事態は深刻な事になつていた、動物園から一部ではあるが結構な数
の動物が脱走していたのだ

人より大きなトカゲがたくさん、どういう種類かは人の名前すら思
い出せないので割愛する。おそらくトカゲを入れている檻、ケージも
しくはパークが壊れていると見るべきだ

すぐに自分の通信機に連絡用の通信が入る、指令のための連絡のよ
うで今いる場所を聞かれたが場所を告げると偉く上機嫌になつたよ
うな気がした。言うまでもなく行ってほしい所に近いという事だろ
う

群がる野次馬を自分達がたどり着くまでサイレンで払いのけた後
：麻醉銃を持つてこれの対処にあつた

省略して結論から言つてみるが危なく死ぬ所だつた。トカゲのサ
イズが大きすぎて手持ちの麻醉銃の弾を使い果たしても全ての数を
眠らせきれずふとした瞬間に尻尾で体ごと看板にぶち当たりそれが
貫通するまで吹っ飛ばされた

壁に当たり、痛みで動けずトカゲが近づいた時はもうダメと思つた
そう思つていると一振りの重い音が一つ、それでその動物達は倒れ
た、トカゲに触れてみたが脈はあつたので死んではない

いつの間にか近くには音が出る前にはなかつた人影が一つ

その音の主は、黒と灰色のゴツゴツとした鎧を纏う白髪の男、骨と
も見える鎧を纏い黄緑の光線じみた剣を振るうその姿は威風、または
畏敬の念を抱かせた

大丈夫か：と聞かれた

その他名前と所属を聞かれた、名前も思い出せないが先輩と自己紹
介を終えると

「そうか、私に来るまでに苦勞をかけた」

その人は握手を求めてきた、不用心…という訳でもない。その人ならばこちらが攻撃するのが早かったとしても応対で倒せるに違いはない、場数、力量、面構え、どれも自分とは違う事を感じさせた。そして男は己の名前を語る

ザステイン…と

その人のおかげでトカゲ共を無事保護する事に成功した

事件が終わった後に聞いたがその人は惑星デビルークの親衛隊の隊長をしているとか、そんな割と偉い人が何故こんな所に来たのかと聞ける時があったので聞いてみたら

「私の友のマツスルくん…グラ・ゴリラの一体がテレパシーで警告してくれました」

グラ・ゴリラ…智と力、聞くところによるといずれも優れているとある、この事を思い出せたので意識がはつきりしてきたのが実感できた、大抵は森と川ばかりのある惑星の深奥に住んでいる精霊寄りのゴリラと聞くが個体差で外に出る者出ない者がいるのだろうか、ちなみにテレパシーは種族全体で使えるそうだ

「私も戦いのためとはいえ星々を渡り歩いてた身、種族を越えた友の一つや二つできない事はありませんよ、一時期は争いましたがそうしていく内にいつしか会えば共にバナナとココナッツジュースを食い合う仲となったのです」

デビルークの先代の王様はその森ばかりの惑星は攻め込んでからの支配はしていないようなのでそのザステインの友達の外に出て行った方なのだろう

そしてその警告をどういうものか聞こうとやってきた後にザステインがナナ様と呼ぶ人の友達の一部が反乱を引き起こして…動物園の檻に穴を開けてしまいトカゲ共の脱走に繋がったようだ、そのナナ様と呼ばれる御方はその反乱を肉体言語一割と対話ほとんどによって解決（なかなかおり）したそうだ、開いた穴もナナ様がなんとかしてくれたようで動物園は平和になった、ついでにそのグラ・ゴリラはナナ様の友達になったそうだ…と言っても握手一つだけでデダイヤルに登録する事はなかったそうだが

「ところで何故友達という間柄の奴が反乱なんか引き起こしたんです?」

「他の友達がとっておいた好物を勝手に食っていた事でケンカ沙汰になった所をナナ様からそんな事でケンカするなと止められた事が原因らしいですね」

「食べ物への恨みは恐ろしいですね……」

余談だがトカゲの名前はハイパートカゲだった

何故その人を尊敬しているのか、それはその一件でカッコいいと思っただけによる

思い出せてスッキリしたので次に女の子の事を思い出そうとする事にした、というわけであらためて

↳数年前↳

その後免許を取る事に成功してから、どこかの非合法の組織…名前はマテイアスだったような気がする…主な活動は希少な動植物の乱獲…だから組織を壊滅させるために一人でアジトに乗り込む事になった。そういうのは特殊部隊の管轄なのでは? オレ普通枠だよともちろん聞いたが他の奴らの手が足りないとの事で仕方ないそうだ

実弾は使わないようにしつつ麻酔弾ばかりを使用した。麻酔弾はハーデイス用じゃないのでそれ用の銃もセットで

人を実弾、ビームを使って撃つのは抵抗があった、その一弾が当たった奴の自由を奪うのかと考えると手が震えてしまう

拘束、無力化を繰り返しながらアジト内を駆け巡った

そうしている内に一人の少女と、通路の暗がりでは鉢合わせをした動くのに邪魔そうな程伸びた長く黒い髪、黄色く足まで伸びたような裾のドレスを着込んだその姿は戦いの最中にいるはずなのにそれらしきとは無縁さを感じさせた

「君って警察の人間?」

「そうだ、だったらどうする?」

「じゃあ」

少女は手に持っている銃で下っ端の持つ銃を撃ち落とした、その隙

にオレは気絶させてから手錠をかけた

「味方って事で」

そんなこんなで少女とオレは一緒に戦う事になった

そして色々あって敵の首魁に手錠をかける事に成功した、だが作戦完了の報告を入れ終えた後戦闘員のなやつがまたぞろぞろと出てきて逃げなきやいけなくなった、どうやら取りこぼしがあつて警報ボタンを押されたようだ

「逃げよう」

「なにいつてる!?!」

「親玉捕まえるだけでも組織は壊滅させられるんじゃないかな?」

同意してしまったのが失敗だった

こっちの宇宙船で脱出するという事になり少女に停めてある自分の宇宙船まで道を案内した

宇宙船を起動するのは自分がやると彼女は言ってきた、オレの方が銃弾の雨の中でも無事そうという理由で足止めをする事になった

5分後

宇宙船はオレを置いて空へ飛んでいこうとした

「だましたのか?」

『じゃあ、追っ手の相手よろしくねえ』

囮にされてしまった、そんな事より

宇宙船はみるみる遠い所に飛んでゆく、首魁も内部にいらてる状態で

「オレの宇宙船返せ!!免許獲得祝いなんだぞ」

『ゴメンゴメン、次会うまでに使えてたら返すから』

メガホン機能を使っているようだった、自分が使い方をよく覚えていないのに取っていった向こうがすぐ使えるのは余計に悔しさがこみ上げる

手を伸ばしてもそれより遠く、早く宇宙船は去っていった

ショックで両方の拳を地面に叩きつけた

「オレの宇宙船を…あの泥棒ネコめがあああああああ!!」

賞金稼ぎを信用した挙げ句宇宙船と捕まえておくべき人間を取ら

れてしまった事への自他に対する怒り、ここまで我を忘れて自分勝手にムカついたという感情は今後抱かないだろう、補足すると金色の闇とかはあいつ罪人だから許さねえとしか思わなかったが

すぐに敵の戦闘員がやってきたが心のブレーキが効かずに足で顔を蹴ったりしてしまった、戦闘員の数だけやったので6回程…

終わってから通信を行って救援してもらえたおかげで無事に帰れたし下っ端は捕まえる事ができたから良かった、そうでなければ…

後、帰還後に一部から何故か失望の目線を受けた、その時は宇宙船を取られた事によるものだと思われ個人的に納得していた、後大声で叫んだり敵とは言え顔を蹴った事は反省してる

数日後

上司：警部にとある惑星の船の売り買いをする場所に仕事扱い（私服）で行く事になった。売られるかもしれないというのとそうでなければどのようなのが売られているのか見ておけとの事、早い話知識を増やせということのようだ

2時間程うろろとしたが名前だとか部品だとか訳が分からずにいる、ここには円盤型や戦艦型、小型艇型の宇宙船があるってことぐらいは分かった。だが残念な事に車両型はない、ロボに変形するバイク型もない。5体合体で銃になるようなイカしたジェット機型もない

飲み物を買おうと自販機によるとチョコを見つけた、その時はいかにも旅をしている商人のような服装で歩いていた。いつもなら彼女が背負っているどでかいバッグの中にある荷物はどんなものが入っているのかなどを思い巡らす

「待て」

オレは虫取り網と手錠を手に持ってチョコを追いかけた、網を頭に被せて手錠で捕まえるために

案の定それを見たチョコは一度スルーした後驚き逃げ出した

「待てー」

「ちよつと落ち着こう、ね」

「落ち着いてられるか!!取ったやつを返せー」

息が続く限りの追いかけてこだった、その末に根負けをってしまったのはチヨではなくこちらの方

もう追いかけれられない、そう思うと自然に体が壁に寄りかかっていた、呼吸が荒い、息を忘れたかのようなという言葉が添えられるような走り方をしたのがダメだったのかもしれない。手も、足も動かさず脳も実は働けてなかったように思う。したくなかったのはただ休む、それだけ

そのうちチヨがやってきた、それから疲れにより座り込んでしまったオレに合わせてかがみながら話しかけてくる。疲れて動けない体なので安心しておちよくりにも来たのか

「早かったね、足」

その時のオレは褒め言葉と受け取った

「褒められた、やった、ハア：じゃない。返すもの返してもらわないと」

しゃべる事のできる程には回復した

チヨは考え込んだ様子を見せてから思い出せたように指を鳴らした

「あの時の警察君か、生きてたんだ」

「まあ今疲れてるだけでピンピンだ」

「名前聞いてなかったね、名前なんていうの？」

自分の名前を聞かれたので自分の名前を語った

「私の名前はチヨ、うん、じゃあ行こう」

「どこへだ」

「返して欲しくないの？宇宙船」

「ぜひとも!!」

我ながらだまされやすいと思う。よくそれまで宇宙船以外の事で損をしなかったなども

だがその時はそれはまた騙そうとしてるとは考えてもない、なのでチヨと宇宙船のある場所まで行く事になった

「そういえばあいつどうしたんだよ」

組織のトップに位置する人間の事を聞いてみたつもりだった

「あいつ賞金首になってたから」

捕まえられて賞金にされたのだろうか

「こんな所まで来てオレの宇宙船をどうするつもりだった？」

売られる可能性が頭をちらついた

「あれ使いやすいすかったから売る気なくしちやった、あの時設計図の方手に入ったからそっち売るのも良いかな…なんて」

その時ちらりとこちらを見てきた、一応だが警察官にしている会話ではないのは分かっている

「きちんと返してくれるんだろ？逃げても良かったのに…恩を仇で返したくはない」

だから今回は捕まえる気は起きなかった

「まるで温室育ちだね」

「？」

何を言っているのか分からなかった、温室育ちという言葉を後に蔑みの意味で言われる事をまだオレは知らない

「褒めてるんだよ、うん。シロはシロの宇宙船取ったやつの事を信じるんだし…ね」

それからオレの宇宙船に到着した、傷ができたとかはなく状態は良好だった…見た目が警察の所有っぽい色や見た目でないようになっているのを除いては

「ありがとう…まだいるのか？」

「返したからついでにある星まで乗っけてくれると嬉しいなくなんて」

絶句中…

「宇宙港から乗るの金かかるし…お願い」

「…仕方ないか」

それからチヨの目的の場所まで乗せる事になった、幸い休暇中だった

もちろん警部に伝えたのは伝えたが

「シロも大変ね」

という言葉で終わった、それ以上何もなければ肯定されたとみて彼

女を乗せた、他になにかやってた事が分かれば容赦はしないというスタンスで

「ああいう事、他の奴にはしてない？」

「あれはチヨが初めてだよ」

「だったら他の奴らにはしないでね、あれされるのきついから」

「もうしねーよ」

さすがにあのテンションで追いかけるのは疲れる、それからもう返してもらうものは返してもらったのでやめる事にした

そして彼女の目的の地へ着いた

「勘違いしてしまいそうだったんだ、色々。このまま勘違いしても良いかな？」

それを言われた際頭の中に？のマークが延々と浮かび上がった、が「勘違いならしていいもんじゃない」

と言ってみた

「……………」

「何がどう勘違いしたか分かんないけど勘違いでもし取り返しのない事になったらきついのはチヨだからそうならないよう、嫌、もう遅くても相談には乗るぞ」

チヨは振り向いた後

「……相談はいいや」

と言って宇宙船から出た。少しだけ寂しさのようなものを含んだ笑顔はどこかしら心がゾクリときた

それが彼女との縁のはじまり、それから今に至るまでそれなりにちよつかいをかけられたように思うがやはり彼女が悲しんで泣いているのは初めて見た、今までの言動の中でそうだったのがないのはそれに至る原因となる因子が揃っていないからだ、一番それっぽくて分かりやすいのは俺が倒れているから……俺も逆だったらそうなる気がする。だがないと思いたい、だってチヨだし……けど

「泣かせちゃダメだからな」

デビルーク王の言っていた言葉が頭の中でこだました、どうやら先程の様子から見るにひよっとすると俺は彼女を泣かせてしまったと

いう事になる

ああ：さつきと起きないと…と思った。人を泣かせたら謝るのは当然の事だ、と教官にも言われている、起きて謝らないと…

「自分自身で飛んで見せろ、できるだろう」

誰の声か知らんがやってみるか、と飛ぼうとするとだんだん頭と感じられる部分が痛くなってきた

↳教会の一室↳

リト達は先程の場所に戻り母校の保健室の先生に連絡してみようとしたが電話ができなかった

「やっぱり圏外だからダメか…」

リトはいつの間にか銀髪が茶髪に変貌しているシロを見た、シロは今イスに上着、シャツを剥がして寝かせている

「シロ…」

シロの事を悲しんでいるような表情を見せつつもリトはぼつりと
眩く

「こうして見ると微妙に誰かに似てるんだよなあ」

「知り合いに似たような人いたかな？」

「はつきりとは思いつけない、けどこんな顔の人間とどこかで会ったような…そんな気がする」

リトはちらりとヤミのいた方向を見た

「(ヤミ関連だったような気がするけど)あれ、そういえばヤミは？」

「ヤミちゃんはリト君達が降りていく後に目を覚ましてヤミちゃんもそつち行つたはずだけど」

「入れ違いか…凜と合流してアサキムを追ってるのかな…」

階段のあつた方向より上から物騒な物音がした、アサキムは剣で戦う事が分かっている。ヤミなら心配はないが凜は得物を持ってない
分心配だ

「…シロを置いてはいけないし」

「行つてください」

「チヨちゃん!？」

「シロは自分のせいで何か支障が出るのを嫌がるだろうから、行つ

てください」

「待てよ」

シロの声が聞こえて4人は驚き、振り向いた

シロは掛けられた上着を床に落としてつつも立ち上がり歩き出した

「シロ!!無事だったのか!?!」

有り得ない事だが、シロは生きていた。しかも欠けたはずの心臓と

胸はシロが数秒手で胸をなで下ろした途端元通りになっていた

そしてシロは言い放つ

「そこから先は、進ませねえぜ!!」

これがさつきまで死んでいた男なのか?違う、よくよく思い返せば体温が失われるような様子は、ゆっくりでも冷たくなっていくような様子はなかった。ならシロはいったい何者か:

一方そのころ

二階に住む青年はベッドに横たわりながら母の事を思い出していた

だが思い出そうとすると憎悪ばかりが溢れ出しそうになる

憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い

全て母のせいだ

一度でも背負ったものは何をしても容赦なく心にまとわりつく

それを頭を抱えて抑えながら疑問だけでも一つこぼしてみた

「母さんは…なんでオレがこっちに來るの分かっててオレを生んだんだ?オレが何をしに來たかも知ってたくせに」

第三十一話 「Transformation」 「トランス・カムバック」

4人はシロが急に生き返った事に困惑していた、シロが生き返ったか否かだけの問題ではない、話の展開についていけないような困惑の仕方だった

その展開に追いついたのかチヨは真っ先に叫ぶ

「シロ!!」

そう言つてチヨはシロを抱きしめた

その抱擁はなくしたものを掴むように力強く、命を確かめるように優しく、なんだか服越しになにか柔らかい何かが伝わってきた。そして今自分が上半身が裸である事にシロは気がついた

「えっちい!!じゃない、痛い!!ストップストップ」

「良かった、グスツ、良かった」

チヨは再び涙を流していた、その涙は悲しみではなく嬉しさがこみあげているようだった

「すまん、嫌、さつきはごめんなさい」

シロは申し訳なさそうに背筋を丸めながら謝った、彼女の泣き顔を見ていると罪悪感を刺激される

自分が余計な事に首を突っ込んだ結果だった

アサキムの言う事に従った報いだった

とはいえアサキムはシロをだました訳ではない、彼のいう面白いものは既に目に焼き付けているのだから…また彼と神父がつるんではない事も分かってきた

その様子を見てカリトは安堵したかのようにため息をつく、良かったと付け加えて

「じゃあ俺はヤミ達の所に行くよ、シロ達はそこにいて神父さんを…」

シロは待ったとかけるように声をかけた

「デビルーク王、まだ話は終わっちゃいない」

きよとんとした表情でリトは振り向いた

「とりあえず上着着ろ」

男の裸体なんて見たくもなさそうに困惑した様子

気持ち分かるシロはチヨから離れ上着を着直した

「ちよっと」

「続きはまた後、わりい」

チヨはがっくりと気落ちした様子を見せた

リト達の目線が厳しいものになっていくのを感じながらシロは下を向いて苦々しそうに告げた

「デビルーク王…アサキム・ドーウインを追うこと、彼女の事を知ろうとする事を止めてくれないだろうか？」

突然のシロの言葉にリト達の心に雷が落ちた

「シロ、お前はあそこで、地下室で何を見たんだ!？」

お腹のみ膨れた結城美柑の写真、とは言えない。言えるわけがない

「何も見てない!!俺は、何も見ていない!!」

シロ力強く否定するがリトも負けじと突っかかる

「嘘だ、お前は嘘をついている」

「決めつけるな、デビルーク王!!」

「だったらお前は何で泣いてるんだ」

シロは自分の頬に触れた。頬を伝う雫に言われて初めて気付くシロ、だがそれらを拭うより早く口が動いた

「…俺だって分かんないんだ、どうすれば良いのかとか、どうすれば彼女達は自由でいられたのかとか、俺は!!俺達は…何もできないのか…」

「何の事だか分からないけど、それが美柑の事だっていうんなら俺達も一緒に考えさせてくれよ!!」

シロは腕を横に振って拒否する姿勢を見せた

「俺は嫌だ、あんなもの、貴方達に知られたくない!!」

神父の言っていた言葉が肌を通じて脳裏に刻まれた。ある男の人生を、その男の抱えた痛みを、そのために男が犯した罪を

ならばそれを基に男を捕まえれば良い、これまでもそうしようとし

てきたように

だがそれで良いのだろうか？

その男はおそらく存在を知られるだけで波乱の種となれる、そう
なってしまうっては彼らはどうなるのか？

気にはしてはならない、目を瞑れ、自由の先にある不自由に飛び込む
のもまた自由だ、当人達の問題だ

違う…違う、違う、違う、違う!!そんなもので片付くような軽いも
のじゃない

今まで考えなかった事を考えたため

シロはこんらんしはじめた

「ハア…ハア…」

「言いたくないなら言わなくてもいいけど俺は、俺達は知らなきゃ
いけない。それにヤミ達があそこにいるんだ、だから上に上がる」

リトがドアを開けようとすると、シロは全速力で近づき阻止した

「言ったらろ？進ませねえって」

シロはリトを両手で引つ張りドアから離れさせた

「おっと」

リトが態勢を整えるのを見てからシロは左腕を掲げ力を溜める

「…!?」

く一方そのころく

クオヴレーは宇宙中をデイス・アストラナガンで飛び回り存在をア
ピールしてまわっていた、ユニクロンの喜ぶ感情を最も集められる手
段である戦争への抑止のために

そうする理由と因子の一つであるギド・ルシオン・デビルク、彼
の嫁に面会を求められてしまったのがこの宇宙を駆け回っている中
で一番のピンチだった、彼の怨霊というスタンスで銀河中を駆け回っ
ているため会わないわけにはいかない

人気のない場所で会う事にしたが彼女の顔が偶然にも見えてし
まったので心が何か支配されるような気になる、咄嗟に自分を気絶
させて事なきを得た、彼女にもある程度察してもらえたから良しとす
るが

「(感じた事のない高揚感だった、あの感覚…どうということなのか誰かに聞くことができれば良いんだが…)」

仲間達と一緒にいた頃に抱いた感覚と違う、それはどの女性にも抱かなかった感情の発露のように思う

言葉で表すなら「好き」とか「仲良くしたい」「もっと仲良くなりたい」「一緒にいたい」そういうのを介さずただ「欲しい」、といったところ、一緒にいたいと考えて2人、仲良くしたいと考えて3人、もっと仲良くなりたいと考えて1人程頭をよぎったのは何故だろうか

「(その感覚の事が分かれば俺ももう少し成長というものができるとのかもしれないな…)」

そう考えていると何かを感じデイス・アストラナガンの歩みを止めた

「シロ、お前が因子を行使する時が来たのか」

クオヴレーはシロの事を考える、彼に接触し彼の銃を使ってこの世界に出てきたから、感じるのは当然かもしれない…傷を受けた痛みまでは分からないが因子の励起は大きなエネルギーの爆発が起こるようなものだから分かる

「お前が自分の因子を省みる時、俺はともかくキャリコ、スペクトラのようにオリジネーターの影に怯える事がないよう俺は願おう」

クオヴレーはそう言ってデイス・アストラナガンで移動を始めた

〜教会〜

「はああああ」

〜シロの子供の頃〜

何故だか分からないが警察学校の補習という名目でとある偉い所の学校の講師から直々に色々と教わった

名前はフローラ・ベルフェルディ

心理学の先生らしいが少女漫画から抜け出したようなすらりと伸びた長い手足の女性でいつも科学者の着るような白衣を着ていた。衣服にシワが寄っている様子、水色の髪から寝癖のあった日はないから身だしなみにはよく気をつけていたのかもしれない、髪型をたまに

イメチェンしたかのように変えるなど若いような素振りを見せるが百年は生きているとの噂である

換気の悪そうな密室の心に関する話ばかりの繰り返しなのはまだいいが兵器である事についての内容の授業はどう人生を振り返っても一番つまらなく、その授業に対してだけは怒られる事が多かった。それまで授業で怒られるという事自体なかったのに10回は怒られた程だ

兵器は感情を抱かないと言われてもだからなんです？と答えた事もある

色々と悶着のあった結果その授業は無くなり代わりにこういう事を言われた

「シロ、今から君は自分の体の変化を想像してほしい、君はそれを現実にできる力を持っている…と聞けば試す？」

言われた通りに自分の体の変化を考えてみた、テレビで見るロボットのアームだったり、手錠だったり

だが結果は上手くいかなかった、想像したって、念じたって、どうにもならない

「…すいません…」

「何故…」

講師は机を手でバンツと叩いた

「何故お前はいつもいつも私達の望んだ通りに動けないの!!」

その言葉に腹が立ち、ついつい言い返した

「それが人になにか教える態度ですか!?!人違いかもしれないじゃないですか!!」

シロが反論すると講師は急に笑い出した、あまりの切り替わり様にシロはどうしたのかと不安になってきた

「人：ははは、人、人か：『人はどうあがいても人にしかなりえない』か」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、目は覚めた」

そう講師は言っても元気にはなっていない、納得はしたがそれで満

足したわけではないようだ

それからは補習授業はなくなった

講師は

「私達のやっていた事は間違っていた」

と言って元の職場に戻ったそうだ。それからは彼女に会う事はなかった、後に上司となる人間からは

「フツ…嫌われたわね」
だそうだ

～現在に戻る～

今なら、できる

そう思う気持ちは確信ともいえるくらいに大きかった

「うおおおおお!!」

シロの左腕は瞬く間に別の金属の物質に変化した、長い砲筒のようになった腕を見てシロも驚いた、チヨも美奈子も驚いていた。種も仕掛けもなさげに腕を金属質に変えられればそうなるのも無理はない、本人すら驚いているのだから。だがリト達もつと驚いていた

「何だって!?!」

「シロ君もヤミちゃん、芽亜ちゃんにネメシスちゃんと同じ変身能力が使えるの!?!」

「え、嘘だろ!?!」

春菜の予想外の返答にシロは困惑した、ヤミの能力がどういうものは資料で知っている。変身と書いてトランスと読むその能力は体中を武器に変質させる事ができるとか

しかし、まさか

自分が同じだなんて、一度は伝説と言われる程に人の自由もとい命を奪ったのを知った事で目の敵にしていた彼女、その妹、その他と同じと言われるなんて…思いもしなかった

「まあいいや今は別にそんなことどうでもいいんだよ」

シロは回り込んで部屋の窓を全開させて戻った

「俺達にとってはどうでもよくないんだけど」

「その話題は後だ後、寝そべってる猫でもこいつは飛ぶぞ」

元の位置に戻ったシロは変質させた左腕をリトに向けた

「リト君!」

「てめえ…撃つのか?」

「俺の思い通りの形にできたなら、痛くはないはずだ」

「なあ…芽亜の言葉を借りるなら俺達一応義兄弟って事になるのか
もしれないし…」

それはおそらく争いたくないという意味で口走った言葉だろう、だが

「イヤアアアアア!!」

「話し合う余地とかもう少し…:てっああああ!!」

今まで他人だと思っていた人間から急に家族認定された事により

シロはますますこんらんした

そして砲筒のようになった左腕から一発何かを発射した、それは竜巻や台風のような形をとって回転しつつ一直線に突っ込んだ

「驚いてばかりじゃられないか?春菜ちゃん、危ない!!」

「きやつ」

「秋月も」

「自分で行けますよ」

リトは近くにいた春菜をできるかぎり遠くに押し出した、美奈子は自分で遠くに行った

「大丈夫!」

「あゝれゝ目が回るゝ」

風はリトを巻き込み、なおも直進を続けた

事前に窓を開けたのでリトは窓から追い出される格好で外へ飛ばされていった、だが空まで飛んでいったわけではなく外の森ではない原っぱの辺りで風の勢いが弱まりリトは着地させられた

「星のようにはキラーンとはさせられなかったか」

それらを見届けた後シロは左腕を元に戻した

次の瞬間、目眩がシロを襲う

それは気を抜くと意識を失いそうになるほど激しかった
「ウツ」

シロは膝をつく

「え…嘘、大丈夫？」

「頭がクラクラする…」

頭を小刻みに揺らしながらシロは春菜を見た

「春菜さん…春菜さんの恋人はあつちに行きましたよ、シツシツ」

シロは春菜にあつちへ行けという手振りを示しながら告げた

春菜は迷ったようにきよろきよろと周りを見るとシロを見てから
言った

「どうしても地下の事教えたくない？」

「はい」

シロは頷き、肯定の意思を見せた

「君はこれからどうするの？」

「凜さん達を止めに行きます」

「そう…」

「止めないんですか？俺を」

「君が美柑ちゃんについての事で何かを知って泣いてた、だからその涙を信じてみようと思う。それにリト君が無事かどうか知りたい」

春菜はドアを開けてから外に出る素振りを見せる

「でもチヨちゃんには話してあげてね、何を見たのか…後無理はし
ちやダメだから」

春菜はそう言い残して部屋を出た

シロは告げる

「目眩はもう治った。チヨも美奈子さんもあつちに行ってくれ、す
ぐにでも」

チヨはその言葉を聞いて不機嫌そうに黙り込んだ

「チヨ？」

「なんでそうなるのか教えてくれないんだ」

「後で話す…じゃだめか？」

「だめ」

そう言ってる最中に美奈子はチヨの手を引っ張った
「美奈子さん？」

「ここは一つ、言うとおりにしよう」

「待って、待ってったら」

チヨが連れていかれるのを手を合わせながら見届けるとシロは神父に近づいた

「さてと」

シロが寝かされた神父の隣に座ると神父は口を開いた

「お前さん、何故あの娘に言わなかった？」

「今言ったらチヨにまで心臓に穴が開くかもしれないだろ？俺も助かるなんて思っちゃいなかったがチヨが同じように助かるとは限らない」

神父は自嘲ぎみに笑う、後ろで驚くような声が聞こえてきたのは気のせいだろうか

「あの娘と共に仕返しをしても良かったのじゃぞ、お前さんが右で娘が左。どうじゃろう？」

「俺は、憎むのはできる限りしたくないし憎まれるのも憎ませるのも嫌なんだ。憎むなって言っても止まらないものは止まらない」

それに…

「アサキムのせいで神父さんはもうすぐ再び天に還るみたいだしな」

神父の目が大きく開いた、シロの言葉に驚きを隠せないようだ

「何故知っておる？」

「神父さんの言ってた事は聞こえていたよ」

「聞こえていたのか…全部？」

「ああ、さつきから全部…体中に刻まれたみたいにな」

「ならば聞かせてくれ、お前さんは来夢の事をどうしようと思っておるんじゃない？」

しばらく考えた、だが出たのはどれも似たような結論ばかり

「そいつとデビルーク王達を関わらせちゃいけない…とは思う」

「そうか、お前さんもそう思うか」

シロは頷いた

「ただし神父さんのように胸に穴は開ける気はないがな」

「お前さん、根に持つとるじゃろ？」

シロは違いないと思いき笑いをした

「泣けそうなくらい痛かったからな、というかそんなにしやべって大丈夫なのか？」

「どうせわしはこれから再び主に裁かれに行く、美奈子に伝えておくれ、だましてすまなかったと：だがくじけないで欲しい：と」

くじけないで欲しいという言葉にシロはぼかんと口を開けつつ疑問を持ったが次第に一つの仮説が立ってきた

「まさか美奈子って人も：!？」

「主よ、迷い子達の罪によるものなれど再びの生を受けた奇跡に報いる事のできなかつたわしを許したもうな、人を欺き、命まで奪い、あげただ一人の少年の心すら救えずに終わるわしを許したもうな」

やはり神父の証言は嘘と見ていい、本当は別の神父：この時代に生きていた神父が今いる神父の証言通りの行動をしたのだろう

一人の少年の心を救えなかつた

それはきつとその少年に関わってきた大人達に非がある：とシロは思えてきた

大人達は少年の苦しみを取り除く事ができなかつた、現在（今）を受け入れられないという思いを変えられなかつた

神父はそいつらのやりきれなかつた分を埋めようともしていたみたいだった

先ほど聞いた話で方法は間違っても少年を救いたいと願った気持ちに嘘はないと分かっている、神父は少年を救おうとしていたのは間違いないのだからそこは汲んで欲しい：と考えていると

神父は身体全体が砂もしくは灰とも言える状態と化した、どちらにせよ砂時計に使えるような物質となった

さつきから聞こえた所によると神父の命という時計の針はずつと昔から止まっていたらしい、だが一年半前のある日を境に再び動き出した、そういった奇跡と引き換えと言えば説明はできる

一度終わった命が戻るべき場所に戻ったと考えれば納得できる
だが

「神父さん…」

シロにとっては今日の前で終わった命だった

少なくとも一年半からさつきまで生きていた命だった

存在自体は歪んでいたものだけれども、彼は再び過去に取り残されてしまった。

もうそれと向き合う事は叶わない、と考えていくにつれて惜別の気持ちがかこみ上げ涙へと変わる

「確かここだとこうするんだったっけ」

シロは指で十字を切り、二階を向いた

「デビルーク王とあいつは関わらせちゃいけないんだ、だから俺が捕まえてやる」

そう呟いてからシロは階段へ向かうためのドアを開けた

第三十二話 「Question」その顔は誰に似ている？（前編）」

くちよつと前く

「待て!!」

階段を上る途中でアサキムを追いつき、凜はアサキムを呼び止めた
「何か用かい？」

先程の出来事にも留めないような白々しい笑顔でアサキムは
凜の方を向いて聞いた

「そうだな、木刀の恨みだ」

「はは…僕は選ぶべき選択を間違えたか」

「だがそれだけじゃない」

凜はアサキムの頬に一発殴打した、その際アサキムはその拳の軌跡
に抗うように顔を押し込んだ

「沙姫様とお茶を飲んで今後の相談をしていた時にお前、刃物を投げ
ただろう？下手をすれば沙姫様が無事ですすまなかった、今のはその
分だ!!」

そして凜の拳が顔から離れてから頬に軽く触れた後、アサキムは薄
ら笑いを浮かべた

「ご明察だ、さっきの出来事で僕の負念《マイス》を読み取ったとい
う訳か…それはそうとあの時は彼女の名前を呼び捨てで読んでいた
ね」

「二人きりの時や綾も混ざった時は呼び捨てで呼べとの仰せで…も
ういいだろう!!何故だ!!」

最上階…二階についたのもあり、凜はアサキムに向かって蹴りをい
れてきた、アサキムは腕でそれを交差させるようにしてそれを防ぐ

「君達に縁があり、僕という存在を気取らにくい場所はあそこだつ
た」

「なるほどな、だが何故あんな内容なんだ!?救われぬ御霊だと書いて
いたが」

あの手紙の内容は美柑の秘密に関係しているものと凜の直感が告げていた

「誰かの取った行動は原因となりそしてそれは結果へと変わりゆく、そうして時という流れは形作られる」

このままの攻撃は無意味と判断した凜はアサキムから一旦距離を取る

「何が言いたい?」

アサキムは移動を再会しながら

「ある人間の行動は、ここ二帯の現在と過去の命の有無を反転させた。今を生きる人間全ての命の物語はそこで終幕を迎えたんだ、嫌、終幕という一幕すら彼らには降ろされる間もなかっただろうさ」

「そうだったのか…」

凜は追いかけてつづつ考えた

抽象的な言葉のせいで分かりにくかったがそれは、友や子供、好きな人間と過ごし、ご飯を食べ、映画に鑑賞し、今を生きる。そうやって何気なく当たり前のように過ぎていくはずだった毎日が一瞬で、誰かに踏みにじられた事になる。痛みや感情が沸き立つ間もなかったらしいのが救いかもしれないが

「確かにそうだとすれば悲しい話だ、だとしても…それは子供や妊婦は来るなどという意味にはなりはしないはずだ。後ある人間とは誰だ!?!」

アサキムは二階に到着をして足を止めた

「それからは己自身で見つけるんだ、答える時間はどうやら残されてはいないからね」

アサキムがそう唱えた直後、ヤミが近くまでやってきた

「おはようございます、九条凜、そして」

ヤミは髪でできた刃物で一足飛びで凜の前に立ち塞がるようにしつつアサキムに切りかかった

「アサキム・ドーウィン!!」

アサキムも剣を持ち出し応戦しだす、多少低いが金属のこすれあう音が辺りに響きだす、そういうわけでヤミと凜は合流してアサキムと

戦った、といつても1対1の状況で自分から加勢する気がさらさらない凜は見ているだけなので実質ヤミとアサキムが斬り合っているだけだ

「いい加減にどういう事だか吐いてくださいよ、美柑は誰に恨まれているのか」

ヤミは腕を長剣に変身《トランス》させアサキムに向かって振るう、アサキムはその刃の黒く触れても切れにくい部分を蹴ってそれを防いだ

「君の友を想う気持ちに僕の想像以上に強いみたいだ、僕もそろそろその想いに応えなければいけないと思わせる程に」

それを聞き、ヤミは希望が見えたように顔が明るくなったがそれは長く続かない

「どういう風の吹き回しなんですか？急に話す気になるなんて」

「でも黙っていて欲しいのなら僕はそうするよ」

「冗談!!」

ヤミは髪でできた拳でアサキムに殴りかかった

「今なら引き返すという道を選ぶ事ができる、と言ったら君は何を思う?」

アサキムは自分が手に持てる程の大きさに調整したディスクヤリバーで横風に振るって受け流した

「美柑が死んだって突きつけられた時点で取り返しがつくもつかないもないんですよ!!事実なら尚更です!!」

「そんなにも絶望を喰らいたいか、ならば僕は道標となる道を選ばざるを得ないな」

アサキムはそう言ってヤミ達の前から後ろを向いて走りだした、おそらくT字の通路をヤミ達から見て右に曲がりながらどこかへ向かっているようだった

くここからが現在く

「行きますよ、九条凜」

「ああ」

ヤミ達がアサキムの後を追おうとする時

「ちよつと待ったー!!」

シロが階段を上ってヤミ達の所にやってきた

いつの間にかシロは髪の色が変わっておりそれを見て彼女達は戸惑いを隠せない

「シロ!?無事…嫌、シロなのか?」

そしてヤミがとっさに口走ったのは今ここにいない男の名前

「クロ?くっ?!」

ヤミは頭痛によるものか頭を抱えた

「知り合いか?」

「分かりません、クロとはいったい誰なんでしょうか」

「俺はシロだ、俺を忘れるな」

「忘れてないから用件を早く言え、私達は今忙しいんだ」

シロは凜に指差して

「俺は、今から凜さん達の邪魔をする!!」

と宣言するように言った

「何故邪魔なんかするんです?」

「この件からは手を引いた方がいいって思ったからだ、特に金色の

闇達は!!」

「ちなみに手段を聞いても良いですか?」

シロは少しの沈黙の後答えた

「……………腕づく」

「良い度胸だな」

凜はシロに近づきながらアップを始めた

「ヤミ、お前は先に行け!!木刀の分の一発を私の代わりに頼む」

「九条凜、頼みます!!」

ヤミはアサキムを追いかけた

「また暴走を始めたりはするなよ」

「待てよ!!」

シロは左腕を鎖と大きな手錠に変身させてそれを飛ばしヤミを捕まえようとした、その手錠の大きさは人を驚掴みできそうなほどであった

凜はそれを見て鎖を掴んで床に叩きつけそれを阻止

「驚いたな、まさかお前が変身《トランス》できるとは」

「なんですって!?!」

ヤミはUターンをするように戻ってシロを見てきた

「まさかあなたもエデンの!?!」

「知らねーよ、俺は俺だ。そう思って生きてきた。物心ついたのは保育施設だ。銀河警察の人に拾われてからそこで育ったらしい」

「それを聞くのは二度目でしたがなるほど…ですが積もる話は後にしましょう、今は私の邪魔をしないでください」

ヤミはアサキムに逃げられた距離を取り返すように勢いを強めて走り出した、シロが後を追おうとすると凜が通せんぼをしてきた

「どいてください、凜さん」

「却下だ、さつきまでこちら側だった人間が何故私達を妨害してくる」

凜にはシロの行動が不可解だった、シロが何かを掴んだ証拠にはなるが

「美柑って人の事で犯人がいるんだったら俺が捕まえる、だから通してくれ」

「滅茶苦茶だ、私達にそんなに言えない事があるのか?」

聞いてみるとシロは目を大きく開きだした、あまりに分かりやすい反応でありそれだけに突っかからざるをえない対応だった

「警察でなくなった人間に過去の罪を捕らえる事ができるのか?仮にお前が警察のままだとしても何かを隠ぺいしようとするやつを捕まえる側として信じられるか」

「うっ」

シロは意志が折れたように後ずさりをする

「そんなので私達の邪魔だと?できるわけないだろう!!今のお前は私一人だって退けやしない」

凜は右の人差し指を動かしシロに対して挑発する姿勢を見せた

「それを証明してやる」

シロは身構えた

「…本気でいきます」

「そうでなければ困る」

シロは凜に向かって走りジャブを繰り出す

それらは全て凜にキャッチャーがボールを受け止めるように止められた

「シロ、迷いが拳に出ているぞ!!一度決めた事を何故迷うんだ?」

「そうだ、俺は迷ってられない!!この力だつて遠慮なく使つてやる」

シロは左腕をマジックハンドのような大きめの鎖と手錠に変身させた、その途端急にシロの動きは止まり変身をしていない方の手で頭を抱え苦しみだした

「ううう」

よくは分からないが大きいうめき声、それらを見かねた凜はシロに近付いた

「……少し休め」

凜はシロの肩を手で抑えた後もう片方の拳を握りしめ、シロの腹部めがけて渾身の一発をおみまいした

「ぶふえええああああ!!」

シロは光線のように乳白色のキラキラした粒子を口や目から吐き出していた、凜の肩はシロの首の下の位置にあるためかかったりはしなかったが

「……………これは……ナノマシンか!？」

シロは叫び声が続かなくなってやっと倒れた

「さつき心臓やられていた癖に無理をしすぎなんだ、おかげで一発で終わったが」

凜はまずシロが息をしているかどうかをチェックした、叫んだ後なので随分と早くなっているが脈拍は機能している、口元に手を当ててみたが息が当たってくるのでおそらく生きているだろう、とりあえず手持ちのティッシュでそれらを拭いた後ティッシュをゴミ箱に捨てた

「さて、どうしようか」

と凜が考えていると何やらガチャガチャという音が一階から聞こ

えてくるではありませんか、それらを聞き凜はしばらく目を覚まさないであろうシロを一階に降ろす必要性を感じ倒れているシロを担いで一階に降りた

↳一階↳

「あ、シロ!!」

チヨは運ばれているシロを見てびつくりしていた

「おそらく変身能力を使用した反動がきているみたいだから眠ってもらった、だが生きてはいるから安心しろ」

凜はシロを寝かせた後辺りを見た、何か問題が起きているとは思ってたがどういものかは言われる前に把握しておかなければいけない

「何かあったのか?」

物品は風に巻き込まれたように直線状に散らかっている、それ以外があるのか確認してみようとしたが他にはなさそうだった

「さっきの話になるんですけど…」

時は先程に遡る↳

美奈子は部屋の外に出て座り込んで聞き耳を立たせる事で事情を把握する魂胆だった、それはチヨにとつては大成功だった、シロを攻撃したのは神父でありそれをシロが庇い、神父がライムという人間を気にかけてる。ということが分かった

チヨはシロが神父を庇った事に対して若干の怒りが湧いてきていた

「ひそひそ (加害者側を庇うとかないと思うんだけど)」

「ひそひそ (慈悲深いってのは良いことっていうのがチヨさんの顔見て今揺らぎかけてきたかも)」

「ひそひそ (後で王様とやることが似てた事についてからかわないとね)」

「ひそひそ (ところでチヨさんとシロって人どういう関係なんです?)」

チヨは驚いて美奈子の方を向く

「ど…ひそひそ (どうしてそういう事聞くのかな…)」

ひそひそ話を続けている内におそらくシロであろう足音が聞こえ

てきた、身軽さと無遠慮さの混じったような軽快な足音が階段で二階に向けて動くのが分かる

「シロって人をあんなに気にかけてばかりだからひよつとして…」

「……悪い？」

美奈子は首を横に振りそれを否定する

「悪くないよ、悪くないから上手くいくように祈っちゃう、だからついでにどの辺が良いのかとか教えてくれると嬉しいな」

「他の誰か友達にそういうのしたことない？ だったら言うけど会って1日もなくてそこまで仲良くなつたつもりもない人になんかさかけ出せないから、そこまで」

チヨはその瞬間自分が美奈子に悪態をついてしまった事に気がついた、言葉の内容ではなく、声色が若干イライラしたものになっているのが分かったから。シロにさらけ出そうとしてもつい婉曲化してしまう部分を易々と気づかれ、踏み込まれる事に恐れが生じたのかもしれない

「他の友達：私にそういうの気軽に聞ける友達はいなかった……でも誰かいたような……あれ？」

美奈子はチヨの顔から何も無い方に目の向きを変えた

「でも誰かはいたよ、いたみたいなの、でも誰か分からないの」

美奈子は頭が痛み出したように頭を抱え込み、そしてそのまま倒れた

「ちよっ大丈夫？」

チヨは美奈子の首に触れた、勢いで首の方を触ってしまったため額の方を改めて触れてみると熱っぽかった、汗も少しずつだが噴き出している

「熱っ、どうしよう」

く現在に戻るく

「あのシスターがか…やむを得ない、熱があるならただ椅子に寝かしくと訳にもいかないな、毛布でも探しに行こう」

その時ドアの開く音一つ

「ただいま、話は聞かせてもらった」

やってきたリトは脱いで露わになったカッターシャツ以外いつの間にか泥んこまみれになって帰ってきたという言葉が当てはまるようなそんな姿になっていた、頑張っ取り払ったような跡は見えるが泥は染み込んでいて一度帰って、帰らないにしても洗ったりしてどうにかしなければいけない部分がちらほらと見える

「おかえり、随分汚れてるが」

「外にシロの能力の風で追い出されて結局地面に転んだからな、顔だけで春菜ちゃんのハンカチ全部汚しちゃった」

気にしないでどこかから聞こえる春菜の言葉に苦笑いしつつ

「俺も毛布探しに行くよ」

と喋ってリトはどこかへ歩き出した

「春菜も頼む、あいつの事だから見つけて帰ってくるとは思うが」

「うん、分かった」

そう春菜に告げていると美奈子がリトの進んだ方の反対側からゆっくりと歩いてきた

「はあ…はあ…」

美奈子は息を荒くしながらも目を開いたり閉じたりしつつ状況を確認するためかあちこちを向いていた

「気がついたみたいで良かった、具合はどう？」

「もう大丈夫です」

凜達は揃って訝しんだ、そんな短時間で熱は冷めるだろうか

「熱は…」

「あれはストレスによるものかもしれませんが、今は落ち着いた気がします」

美奈子は頭を下げた

「それと私は皆さんに言わなければいけない事があります」

その言葉に各々違った反応を見せる一同全員に語りかけるような仕草を取りながら彼女は息を吸った、凜は彼女が苦しそうになるのを警戒した。大丈夫と言っているが油断はできない

「思い出しました、私はあの日に一度死んで生き返ったんです」

第三十三話 「Question」その顔は誰に似ている？（後編）

あの日とはあの日、結城美柑の死んだとされる日の事に違いない
「爆発音がして起きたのは本当の事なんだけど、ただその時目が覚めたのは階段の前で」

自分が死んで生き返っていた？階段の前で目が覚めた？馬鹿げた事を言うなど一蹴したかった、今日の前にいて喋っている人間が実は一回死んでいましたと言われても普通信じられはしないだろう、幽霊がこの場所にいると言われる方がまだ納得しやすい、幽霊の例えは該当者を知っているからなのかもしれないが

だが、どんな名医、例えば凜達のいた高校の保健室の先生だって診察して治療に取りかかる事はまずしないだろうと言えるような肉体の損傷、というより心臓部まるごとの欠損を短時間でそっくりそのまま通りに再生させたらしい「兵器」、ただし在り方や振る舞いは「人間」そのものだったが、それとちらとは別の世界に住んでいそうな程中二病全開な存在を目にして間もないので凜の心の中にそんなものもあるかもしれない、と納得しかけていた

それにアサキムが言っていたのはこの事も含めていたのだろう
「さっき言ってた事と違うところがあるという事を言いたいんだな？」

ここに来て教えてもらった彼女と美柑の出会いからあの日までの話に何かズレがあった…と見るべきか、根本的な間違いが

「はい、率直に言っただけあの神父はあの日まで会った事もない方でした、師匠を森で拾ったのは別の神父なんです、私…あの神父に記憶をいじられていたみたい」

彼女は語った：美柑の周りに集まったのは自分だけでなく他の男女問わずたくさんだった、彼女の料理に舌を唸らせたのもまた自分だけでなかったと

アサキムの言葉を基にすればおそらくあの神父は過去の人間とい

う事になるようだ

「なら他の人は？どこにいるのか教えてくれないかな」

春菜の質問に美奈子は答えようと口を開きつつそれをためらうようにオロオロしながら閉ざす、分からないならそう言ってしまうと良いと凛は思った、一度死んだという前提を踏まえてそれらが逆転したとなれば生きている人間は悲しいがそういう事になる。ナナの言うカラスはおそらく量の事を気にはしていないのだろう

とするならばその日生死を反転させる原因となった何らかのアクションが起こるまでに彼女は死んでいた事になる、それを思い出しているのだろうか

凛は春菜の肩に手を乗せ首を横に振った、春菜も察したのか暗い表情になりつつ顔を下に向けた

「ごめん、嫌な事聞いて」

「なら美奈子ってゾンビ…じゃないか、おデコの熱さは生きている人の感じだったし」

「そうだ秋月、君は自分が死んでいたと言っているが、体は生きている頃と同じように動かせるだろうか？それにほら」

凛は美奈子の手に触れた

「暖かい、生きている人間の暖かさだ、だから君は今生きているんだ、それで良いだろうか？」

「ありがとう…ぐすっうう…」

泣きじやくる美奈子の頭を凛は撫でた、彼女は今人が最後に経験するであろう痛みを経験した事を思い出した、楽に喋れるようになるまでこうしておこうと思った凛だった

くあの日く

あの日、冷たさを感じゆっくりと眠り足りなさを感じつつベッドから起きた、その日に雪が降るとは誰も言っていない、自身の年の功をひけらかすようなお天気おじさんですら、だがどこかは間違いなく凍っている風に感じられた

美奈子はドアに掛けてある電灯を取り出しスイッチをいれて冷たさを感じた方向へ向かおうとした、廊下の灯りをつけるスイッチは近

くはないので後回し

正直に言えば眠気で電灯をつけても見えていなかった、そこで止めて戻っていれば避けられるものもあったはずなのに

一階から誰かの声がした

「おばさん、寝ぼけ眼でこんなところろつくくな!!夜目も利かないくせに」

その言葉は自分に向かって言っていた事は良く分かった

「私…まだ18なんですけどー」

美奈子はむつとした表情に変わった、その時美奈子は卒業間近のチピチの女子高生である、女子高生ではあるが高校はバリバリ田舎である事と教師が気にしない人間ばかりであるため流行とかには疎かったが…

そのまま階段を降りようとしたが確かに眠気で頭がクラクラとしてしまい階段が今何段目なのかも分からなくなった、そういえばこんな時間に起きている事自体初めてだったという事に美奈子は気がついた

「ダメ、眠くて見えない、きやあ!!」

階段を踏み間違え一瞬で危険な状態になった

「おばさん!!」

その声はすぐ近くにまでやってきた。聞いた事のない男の声だが助けてくれる、そのために来てくれたと思えば安心しきっていた、だが頭にぶつかった痛みと、人体が何も触れられた感触がなかった事で助けてくれなかったと察するのに時間はかからなかった

「どっ…っ…っ…」

向こうも向こうで苦しそうな声で話しかけてきた

「ハア…ハア…おばさん、しっかりしろ、おばさん!!」

おばさんと連呼されるのも気に食わないし助けてくれなかった事にも腹が立ってきた、だが何よりも痛い

「痛いよ…痛いよ…」

ああ…もうすぐ死ぬ、そう思った、頭から抜け出る何かの感覚がそう思わせるには充分だった

「ハア…おばさん…オレのせいだ、ごめん。だからせめてお静さんのようにならないように」

『マリスアブソープ』

別の男の人の声と一緒に額に手で触れられた感触と共に何かですうつと引いていく気がした、手でというより手袋をしたようなザラザラした手で、何かは何だと言われれば助けてくれなかった男への噴き上げる炎のようなもの、お静という聞き覚えのある一昔前の名前を言つてたがちようどその頃に有名だったと聞く幽霊…その原動力、恨み、見えないがきつとそこにいる男が自分より先の時間を進むであろうという事への妬み、負念、それらは言い換えるなら原因への、悪意

悪意が無くなる事で誰かを恨む事、誰かのせいにする事はなくなるかもしれない、だが無くなつた事で痛みだけが残つたのも忘れられない、悪意に有用性があるならそれは痛みを和らげるためにあるのだろう、その痛みは誰かのせいだという答えが必要なのだ、そんな答えがあれば痛みではなく答えに向き合えば良くなるから

その答えを取り上げられ、痛みばかりが続いていった、この痛みから逃れるには…考える事を放棄して、寝ようと美奈子は思った。

今は寝てる時間だ、自分は何故起きてしまったのか、もう考える必要はない。

でも、何かの拍子に美奈子は目が覚めてしまった。先ほどの男の笑い声が狂いそうなほど高らかに、叫んでいるように聞こえてくる中、これは悪夢だ、先程の出来事は全て悪夢だと心の中で納得し、眠った。目が覚めれば話の種にはなるはずだと思った、だが身重の体の美柑の耳に入るからやめておくべきだとも

〜二階〜

ヤミはアサキムが見えるまで全速力で走り、アサキムの後ろに来るまで追いついた

その瞬間、互いに振り下ろす剣と刃の交差する金属音が辺りに響いた、もはやアサキムと出会い頭に斬り合うのは挨拶となっていた

「君の執念の深さにしては少し遅かったね」

「シロが邪魔をしてきました」

そう告げると若干アサキムの目が丸くなっていた

「彼の命には続きがあるんだ、そうか」

そう言っているアサキムの口元に笑みを浮かべていた、だからこんな奴でも生きている事を喜んでいるのだと思いたくなくなった

「その時クロという名前を思い出したんです。クロとはいったい…」

会った事のない誰か、でも不思議とその響きに懐かしいものを感じた、アサキムはそれを聞きヤミに言い放つ

「忘れたとは言わせないよ、任務で動いていたにせよクロは君を樂園の名を持つ檻から開放した人間じゃないか」

「…やっぱり分かりません、そういう名前の人間との接点はないはずですが、後エデンを潰したのは…ああ、そういう事ですか」

「世界が違えば齟齬の一つ二つはありうるか、でもその名前は君の魂に刻まれた名前だ、答えにはいずれたどり着くだろう」

「今はそれより美柑についての答えを探す方が先です」

「慌てなくても開かせてあげる、君が絶望を望むならそれがパンドラの箱でもね」

言い方は気に入らないが教えてくれる事は期待していいとヤミは思った、それからアサキムは攻撃をくぐり抜けながらある部屋にたどり着くとその部屋のドアを問答無用で開けた

「!?!」

一瞬見えたのは青年が一人窓を見て黄昏ていた所、青年と分かったのは手の肌のツヤのみで顔は包帯を巻いていて表情は掴めない、おそらく美奈子の言っていた失礼な青年だ、アサキムがドアを急に開けたため彼の行動を邪魔する形になってしまった

「悪いね、今は君が必要なんだ」

そしてアサキムは流れるような動作で青年を気絶させた、まるでそれが目的だったとしか思えないような迷いのなさが垣間見えた

「その人に何を!?!」

「知りたければ来るといい、君自身の翼で」

アサキムはヤミの方を向きつつ青年を抱え窓から後ろ向きに飛び降りた、急いで窓の下を覗くと青年を掴んだシュロウガが現れて教会から離れていった、シュロウガから挑発ともとれる指の動きが見えた

「その挑戦、受けて立ちます!!」

ヤミはダークネスに変身し、空を飛んだ

〜数分後〜

リトは毛布を取りにやってきた

「ここなら有るよな…」

そして辺りを探し回り、毛布を持ち出した

「後で洗って返すからちよっとお借りします」

何の気なしに窓辺を見てみると、曇り空の下なのに金色の輝きが見えていた、おそらくヤミだ

「ヤミが戦ってる!?!俺も急がないと」

リトは一階に向かった、美奈子の話を聞きリトも驚き、彼女を気にかけるのは先の話

シュロウガを追うヤミを見て黒いロボットを黒い天女が追っていると騒がれるのもまた別の話

〜空〜

ある距離までアサキムとヤミは高速で追いかけっこをしていたがそれを越えるとアサキムはシュロウガのスピードを弱めた

「見るがいい、雨は止めど未だ晴れる事のないこの空を

結城美柑の魂の嘆きを、この空が鏡となりて映しているみたいじゃないか」

そう言われれば話のシチュエーションとしてはあるあるの光景だった、主に悲劇の話にしか当てはまる事は無いが。

何でもいいが物語のキャラクターにとって大切な仲間、恩師や恋人との悲しい別れの時には結構な割合で雨が降り出す、単なる演出だと思ふ時もあるが天気の変動で流す涙の印象が実際変わるからそう思えない時もあったりする。

晴れた日に流す涙は感動したり、嬉しくなった時に流したり、悲し

くて泣いている時でも希望はあるように思える、雨の日に流す涙は…絶望しかない風に見える

だとすれば美柑は何を嘆いているのだろうか？とヤミは考えた…ただ、知りたかった、そして…最もその事について知っていそうな人間がここにいる

「あなたは美柑の何を知っているんですか？」

「彼女の罪と…罰を」

それでも美柑に非がある、そういう風な事を言われるのは腹が立った、認めたくなかった、ならばせめてそれがどういう意味だったのかを知りたい、でも…明言だけは避けているみたいだ

「聞き飽きました!!」

ヤミはワームホールを駆使し、生やした翼の内の羽根の一本一本で攻撃を仕掛けた、アサキムはシュロウガの手で振り払うが青年を掴んだ手を動かして青年を盾にしようとする素振りを見せていない

「いけえ!!」

ワームホールから髪でできた黄金の龍を出現させ、シュロウガに噛みつかせた、シュロウガはバックするように空を移動しながらそのワームホールと龍を一直線に見つめ

「ならば…射抜け」

アサキムが言うのとシュロウガの額から緑色の光線が発射された

「!!」

ヤミは飛びながら髪を分解し数匹の蛇に変え、ついでにワームホールも畳みまた別の位置に出現させたワームホールから蛇達をシュロウガに向かわせた

「尾の無い蛇は…穿つ!!」

シュロウガはワームホールから飛び出す蛇目掛けて蹴飛ばすように足を突き出した

「縛りついて!!」

ヤミが伸ばした拳をぎゅっと握ると、シュロウガの伸びた足に絡みつき、または噛みつきシュロウガを捕らえた

「今です!!」

新たにワームホールを複数作り出し、そして同じだけ刃物に髪を変身させシクロウガを攻撃

「ならば…魔王剣!!」

アサキムもシクロウガの片手でデイスキャリバーを召還し、それらを全て切り落とすように振るった

「!!これは…」

突如ワームホールが五つ集まった状態でデイスキャリバーの軌道上に出現した事でアサキムは少し驚いていた、だがまだ早かった、驚くには

そのワームホールから刃物が同時に出現したことで、刃物でできた手と表現するのにふさわしい見た目となった、それでデイスキャリバーを掴みデイスキャリバーを引き抜いて放り投げた

「どうします? 剣は使えませんよ」

ワームホールを一つ出現させ、そこから髪でできた刃物を振り下ろす

「トラジツク・ジエノサイダー!!」

アサキムが叫ぶとシクロウガの手から鳥の形をした紫の炎が飛び出し、ワームホールに向かっていった

「熱っ」

ヤミは思わずワームホールを解き、シクロウガを解放してしまっ

た。
「しまっっ!!」

シクロウガは足のもほどいたのか飛び去ろうとしていた。

その時のシクロウガの飛び方が地上すれすれの低空飛行かつスーパーヒーローのそれだった、狙ってくださいと言っているようにヤミは感じ、ならば遠慮はいらないと右手を構えた

「ならば(っ)を(っ)としてですね…」

ヤミはワームホールを作り上げてシクロウガの背中付近に発動するようにし

「惑星断刀!!」
プラネットスライサー

と叫び手を光の剣に変え、ワームホールを介してシクロウガの背中

にそれで突き刺した

「まさかそんな使い方が？」

シュロウガは地面に激突し倒れ込んだ

「ククク…」

まるでどう転んでも自分の思い通りにいくとでも言わんばかりの笑い声で反感より先に不気味さが湧いてきた

青年はシュロウガに掴まれていたが地面に激突したショックでシュロウガが握った手をほどいた拍子に空に飛ばされた、とりあえずヤミは急いで元のヤミに戻り空中で青年をキャッチし、真っ直ぐ行つてゆつくりと地面に着地を始めた、泥と化した地面を踏むからでもあるがダークネスのようなえっちな格好の状態で人前に入るのは確かに自粛しておいた方がいい、アサキムなどを相手にする際は勢いで押し切るが

「……………ああ」

やがて青年は目を開けた

「大丈夫ですか？」

結果的にお姫様抱っこをしてしまったヤミは青年の安否を確認した、だが答えは彼女には意外なものだった、青年は若干引きながらヤミを見てこう言う

「おばさん、オレから離れて」

その一言でヤミの額に血管が浮き出る

「秋月美奈子の言う通り失礼な人間ですね、私はまだおばさんと言われる程老けた顔をしている覚えはありません!!」

親の顔を見てみたいですねと吐き捨てるように言い放ちながら青年をゆつくりと地面に下ろしぷいと機嫌の悪い表情のまま青年からシュロウガの方に顔を向けた、シュロウガはいつの間にかいなくなり代わりにアサキムがこちらまでやってきていた

「良いのかな？そんな言葉を言って」

「どういう事です？」

ヤミがアサキムに近づくとアサキムは手に持つ剣を振るった、シュロウガの振るっていた剣のミニチュアのような。

空を切っているようで何をしたいのか分からなかったが剣の軌跡からいわゆるカマイタチのような風の刃が形成され、それが青年に向かっていったところでようやく掴めたといったところ。早い話青年が危ない

「させない!!」

ヤミは飛んで青年の手を握って直進する事でそれを避けた、握り心地が誰かに似ているような気がしたが今はそれを気にしている場合ではない

「大丈夫ですか？」

「ああ…けどおばさんは」

「またおばさんって!!……………気にしないで良いですよ、軽い方ですし」

ヤミは左肩を触れてみた、負傷しているが本当に軽い、アサキムの攻撃は皮一枚に切れ目をいれる分の威力しかなかったらしい、この程度なら完治に二十秒もいらぬ

そんな攻撃を放った意味とは…考えていると青年の顔に巻いてある包帯の端が顎の部分から垂れ下がっているのが目についた、空中での戦いが多かったせいだろう、ここは一旦包帯を引き剥がして巻き直した方がよい。そう思いヤミは青年の顔に手を近づけた、青年は驚き怖がるようにヤミから離れようとした

「包帯が取れそうですよ、今巻き直すので辛抱してください」

「嫌だ、嫌だ」

青年は映画やアニメ、マンガなどでよくある今から自分に命の危険が降りかかる事を怖がるような後ずさりの仕方の後ずさりした

「嫌がっても無駄です」

「知ってるけど!! (ボソツ)」

実の手はフェイント、本命は変身での髪の手、こっちの方が泥の影響も少ないのもある

ヤミは嫌がる青年を捕まえ包帯を髪の手で引っ張り一度全部引き剥がした

露わになった青年の肌は火傷などの肌を壊すような何かの跡はな

くむしろニキビもないきれいな方だった

「火傷はしてなさそうですね、これなら包帯をしていない方が肌のためにも良さそうですけど……!!」

見てはいけないものを見てしまったかのようにヤミの心に衝撃が走った、目の前にいる青年の顔は髪は髪が生え方こそ多少の差異はあれど伴侶である結城リトに似ている、他に違いがあるとすれば目つきが悪く覇気のようなものが感じられなくなったかどうかぐらい、そして髪と目の色は美柑と同じ色

そういえばさつきから青年はヤミに言っていたし、美奈子にも言っていたらしい

『おばさん』と

もしその言葉が年齢から来る見た目を指している意味合いではなかったとすれば

不意にヤミの頭をよぎるのはこの惑星で都市伝説並みの知名度を持つ『時の列車』…デンライナー、過去や未来を旅する力を持つ列車、そしてイマジン、電王…どれも実物は見ていないがいるという噂は絶える事はない

「まさか…まさか…」

ヤミは青年から思わず後ずさりを始めた

「君ならどういう事か言わなくても分かるはずだ…これこそ、君…君達の探し求めた答えそのものだよ」

ヤミはもう一度青年を見て聞く

「あなたは…いったい…」

青年はヤミをすまなそうな表情で見返す、それを見ていたたまれなくなりヤミは崩れ落ちた

「美柑…あなたはそこまで…」

どこを見るでなく、ヤミは空を見つめた、次第に雨粒が再びヤミの顔に当たるようになっていった。アサキムは言った、空が美柑の嘆きを映していると…今、どこかで彼女は悲しんでいる？聞いてみたかった、他ならぬ彼女自身に…でも、彼女はここにいない

「言ったよ、僕は伝えさせないで欲しいと、誰かが知るから、悲劇は

悲劇として刻まれるんだ。」

第三十四話 「過激な嘆きにクライマックスを」

目の前にいる人間は、おそらく美柑の…気のせいじゃない、この場所にいる事と顔の関連性から他人の空似ではない、何よりそっくりな人間がいたとしても見分けがつく程には彼女と触れ合ってきたはずだ、こうなる可能性を考えられなかったと言われれば何も言えなくなるが

何故ここにいるのか？理由は簡単な事だ、そしてとびきりの残酷な事だ

「あなたは…」

あなたはなんでこんな所にやってきたんですか？とは聞きたくてもそれが口に出ない、分かり切っている…が聞けない

そうさせた理由も…

どうすればいいのだろうか？

確認を取ってから責めるのが良いかそれ以外の方法を考えるか

「憎めばいいさ、金色の闇」

悩んでいると隣にいつぞや会ったミラーが立っていた、見た目は無機質なロボットだがそれを除けばだいたい人間そのもののような声と仕草だ

「ミラー…」

そういうとアサキムも青年も驚きの表情でヤミを見ていた、いつぞやの折リトも気づいていなかったからミラーはヤミにしか見えないようだ

「あの時以来ですね」

「あの時お前の前に現れたオレはユニクロン様の意思が自分を復活させるために生まれた端末でしかなかった、本来のオレは撃ち貫かれて消えてしまったしユニクロン様の魂も因果律の番人に消されてしまった…だがボディが残っている、何故か？それは因果律の番人がお前たちの為にお前を巻き込まないようにユニクロン様を消そうとした、支配から逃れられただけでお前の中にはまだユニクロン様の残滓が残っていたんだがな…破壊と闇をもたらすユニクロン様と混沌を

もたらず破壊兵器として生まれたお前、それらを繋ぐパイプと言い換えても良い……残ったユニクロン様の残滓とお前のダークネスの因子による闇の概念と負念（マイス）からユニクロン様は再び生まれたのだ、そしてオレも……お前から生まれたのだからそうだな、ママとも呼んでおいてやるか」

「ママと呼んでいいのはガーランドやリトさんの子供だけです」
そう言うともミラーに鼻で笑われた

「つれないなあ、まあ勝手にママと呼ばせてもらうが」

「用件はなんでしょうか」

ミラーは青年を指差した

「ママ、あの男を殺そう……ママなら何のことはない」

「私の子供を名乗りたいなら物騒な事を言うのは控えてください」

「見てみるよあの顔」

ヤミは言われた通り青年の顔を見た

「曇りきった目、覇気のない顔って言うんだなあ……自分は今絶望してるって感じをさらけ出している、ママは許せるか？こういう奴らに大切な人間を二人も奪われたんだぞ」

一瞬ヤミの息子の顔も思い浮かんだ、もう既に故人だが「知りたがる山羊」の力で知ったヤミの息子の仇も似たような人間だった気がする。

相手の気持ちは分かろうと思えば分からなくもない、息子の仇の方はヤミがその人の家族の仇であるという大前提がある、まだ調べてはいないが殺し屋系の人間に見えたのでそこに身を落としたといった感じだろう、その人の妹の方が息子に関与していなさそうなのと心身に影響を与えた分申し訳ない気がするが

そして今日の前にいる青年は……見ればある程度の経緯は察する事ができる、おそらく物心つく時から性格が歪む程長い間異端視され続けていたのだろう、原因は……認めたくないがアサキムの言う通り美柑にある、美柑の夢がこの事態を引き起こしたようなものかもしれない

だが分かったところで青年と青年を歪ませた周りの人間を許して

はならないと思う気持ちは変わらない、誰だつて好きな人と一緒に生きたいと願う権利はあるはずだ、相手次第でそれを否定してはならないはずだ、後ろ指なんか指されていいはずがない、ましてや殺される理由などにされて良いはずがない

「許せません…」

そう口に出すと何かが高揚している気になってきた

「そうだ、やれ…やれ…」

ヤミは青年に向かって、髪を刃にして青年の顔に向けた、だがリト、そして美柑に似ている顔なので髪が震えて上手く狙えずにいる

「おばさん…」

向けられた刃に対し何の危機感もない、むしろ受け入れようとしている、気にくわない…と思っているとアサキムが後ろから剣を振るって攻撃をしてきた、ヤミは振り返りつつも髪を手に変身させ後ろから受け止めた

「アサキム・ドーウィン…邪魔しないでください」

「僕が君に彼の事を教えたのは復讐劇を綴るためじゃない、君の心に棲むユニクロンを舞台へと引きずり出すためだ」

勝手な事を言う男だとヤミは思った、目の前にいる青年は十中八九親友の命を狙った、アサキムの開示した情報はそう示している、それからどうするかを決めるのはこつちだ

「軽くあしらってやれ、ママ」

言われなくてもそのつもりだった、なのでヤミは剣ごとアサキムを上に戻り投げた後振り返り先程は一本の手だったのを二本に変身させてからアサキムに向かってラツシュを仕掛けた

「はああああああああああああ!!」

一通り殴り終わるとアサキムは100メートル先まで吹っ飛んでいった、一度倒れたがアサキムは立ち上がりながら言う

「彼に断罪の剣を振り下ろすのか? どういう人間かは分かっているんだろう? 君自身が後悔する事になる」

「分かっています、ですが!!」

今日の前の青年が美柑を…と考えると色々と抑えられないものが

ある

「結果だけが残り君は己自身を憎む事になる、そうなれば…：そうか、己自身に向ける憎しみもまた混沌への鍵となるのか」

自分自身の発言で何かを悟っているアサキムは放っておいてヤミは改めて青年の顔に変身した髪の刃を向けた、やはり上手く狙えないので胸の方に刃を向けた

「もしあなたが美柑と関係ない、美柑の事を知らないならそう言うてください」

「……………」

青年は口角を上げていた、何がおかしい!?と声を張り上げかけたが目元は笑っていない、しかし気が狂った訳でもない、これ以上刃が青年に突き進めば取り返しがつかない事になるのに

「なんで…：そんな顔ができるんですか?」

「ごめん…：おばさん…：デンライナーを使えばガーランド兄さんやネメシスさんを助けられたのに…：オレにはそうしようって思えなかつたんだ、人間ってさ…：自分の痛みで精一杯だろ?オレも言っちゃ悪いけど既に過去である人達のためには動こうって思えなかつたんだ…」

青年の謝罪で十中八九でギリギリ止まっていた仮説の信憑性が確実なものになった、残りの一二だったものは違っただけ、ひよつとしたら別の答えがあるはずだって心のどこかで信じていた…：言うなれば願望

「オレの存在する未来を変えれば…：誰にも迷惑をかけずに済むと思つたんだ…：そうすればみんなオレを変な目で見ないし、オレの存在をダシにして王室の地位を揺るがせようもしない、兄さんや姉さんが羨ましくなって憎いつて思わなくていい、でもこうなってしまうからもう仕方ない、仕方ない…：か…：おばさん…：オレを殺してください」

その言葉を聞いた途端、ヤミの頭は真っ白になり変身を解いてしまった、報復しようと思う気持ちは限りなく小さくなってしまった

「ママを泣かせたか…：加減なんか不要だ、やれ」

「?」

それから青年に近づきヤミは青年に一発ビンタした、威力は抑えたが正直二回目にはダークネス化した時を思い出し懐かしくなった

「なんて事を言うんですか!? あなたはまだ子供でしょう? まだ学校に行って遊んでもいい年ですよ? 友達となくこれからの事についてだべってもいい: そんな人が自分を殺してくださいだなんて言わないでください、悲しすぎます!!」

青年はぶたれた方の頬を手で押さえた

「おばさん…」

「ヤミさんと呼んでください、ヤミちゃんでも構いません、でもおばさんは無しですよ: あなたは?」

青年は指を自身に指さした

「オレ?」

「あなたの名前を教えてください」

「来夢: 来るの来と夢って書いてライムだ」

「未来への夢: という事でしようか? いい名前ですね」

「未来からの悪夢: とも読む事もできるね、犯した過ちが産んだ影、やがてそれは時を経るにつれて黒く濃くなり: 産む者、育む者を含めて全てを喰らう」

ヤミはすぐ後ろまで来ていたアサキムを睨んだ

「アサキム・ドーウインは黙っていてください、だいたい分かりますから…」

アサキムは言われた通りしばらく黙り込んだのでヤミは来夢に問いかけた

「来夢、あなたは両親の事は好きですか?」

「好きだったさ、でもそれ以上に……」

それから先の言葉が出ないようだ、無理に聞き出す必要は無い、聞けばこっちも保たない

「何をしているんだ、ママ!」

「私は好きですよ、大好きです、ティアの事、今まで育ててもらった時も離ればなれだった時も: そう思えるだけの愛をもらったからです、さつき好きと言えたならあなたにだってきつと……」

「オレには…愛をもらう資格なんてない」

「資格とかそんなものじゃありません」

ヤミはそのまま来夢の頭を撫でた

「だから自分の事をあんな風に否定しないでください、あなたの事を認めている人間が、泣きます、悲しみます」

「こいつは自分自身を認められないんだぞママ、自分自身を認められない奴が誰かから認められてる事を感じられる訳がない、はつきり言って害悪なんだよ」

ヤミはミラーの方を向き睨んだ、ヤミにとって害悪なのはミラーの方だった、悲しい、悔しい時にいつも顔を出して自分に対して煽り立ててくるから

「ヤミ…さんはオレの事憎くないの？」

「憎んで欲しいんですか？」

「……………」

来夢は下を向いて黙り込んだ、少し意地の悪い質問だったかもしれない

「私はあなたを憎みたくはありません…だから」

ヤミは教会でないどこかを指さした

「だから…私達と会わない場所まで行ってください…あなたの行きたい所へ、そして生きてください!!良いですね…?」

来夢は少し考えるように黙り込んだ後、意を決したようにどこかへ走り出した

「それができたって許してあげませんから…」

これで良いとヤミは思った、来夢とリトが会ったところで感動の対面とはならないはずだ

「彼の事を許しはしない、でも憎むのはやめる…か」

アサキムは話が終わったのを見て近づいてきた

「どれだけの悲しみを振り払ってその答えにたどり着いたのか…僕が測るべきではないだろうね」

「そうですね、あなたに理解されて寄り添われたくはないですし…それはそれとしてアサキム・ドーウィン…頼みがあります」

「……………僕に頼みか、聞こう」

「あなたの望み通りユニクロンを引っ張り出してください…そのためにあなたはあの子の事を教えたんですよね？」

第三十五話 Farewell さようなら、ミラー

ミラーもアサキムも信じられなさそうにヤミを見ていた

「振り払った君の激情に代わる物は…ある？」

「憎いと思う感情が必要ななら条件は揃っている筈です、私は今自分が憎いと思っていますから」

親友の仇をみすみす見逃してしまつた自分に対する憎しみというものを思い浮かべてみた

「甘いぞママ、そんなものお、足りない足りない足りないあい!!そんなものでユニクロン様（私）を引つ張り出すのは不可能、奴をかばおうとしての事はバレバレだ、何故あんな奴なんか」

ミラーの言う通り仮想的な感情は通用しない、そうかもしれない、だが

「あの子は私の（ボソツ）かもしれません、いえ、きつとそう、そんな子から自分を殺してなんて言われたら憎い…とか殺意とか考えてられないじゃないですか」

「そう…君はその道を選ぶんだね…」

アサキムは剣を召還し、構えた

「彼への答えに誘つておいてなんだけど君がその選択を選んでくれて良かったとは思ふよ、あのままなら更なる悲劇と共に君自身がユニクロンになる所だった、その瞬間を狙えば良いだけなんだけどそうなるのは僕としてもさすがに心苦しいものがある」

切っ先をゆっくりとヤミに向ける

「待つてください…刺すんですか？」

「僕から敵意を向けた方が君もやりやすいと思うからね」

「……………仕方ありません、上等です!!」

ヤミが頷くとアサキムが突っ込んできた

「避けるー!! ママー!!」

ミラーが叫んだ、するとその叫びに突き動かされるように無意識に

体が動きアサキムの剣を横に逸れるように避けてしまった、アサキムは一度後ろに飛んでヤミを観察しだした、避けないとでも思われてたのだろうか

「言い忘れてました、さつきから息子を名乗るミラーというロボが色々言ってくるんです」

「子供を名乗る…そうか…なら君はそれ以上その声に抗う必要はないよ」

アサキムは剣で斬ったり突いたりしてヤミに当てようとしてきた、全部かわしているが

「無駄な足掻きだと、そう思わないか？ママ」

「もつと早く、もつとだ!!…嫌、それよりも」

アサキムはヤミを狙うのを止めて剣で空を斬ろうとする、それを繰り返すたびにちらちらと目線がヤミへと向かう、明らかにヤミの反応を伺っている

「危ない危ない、どうかかしてくれよママ、当たってしまおう」

ひよつとして： アサキムの狙い ミラー

ヤミは髪を変身能力で手に変化させ、アサキムに近づいてアサキムの左腕を握り邪魔をした

「そういう事ですか、卑怯者!!もう少し手段選んでくださいよ!!」

「僕は手段を選ばないんじゃない、目的のために時と舞台に相応しい手段を選んでいだけさ!!それを卑怯と叫ぶならそれでも良い、こうして君と僕を隔てる間は無くなり、君の怒りでユニクロンの魂は輪郭を成すのだから」

その言葉の前半はただ単に「目的のためなら手段を選ばない」という悪党のお題目よりずっと悪質な気がした、子供やリト、そして美柑を含めた知り合いに化けてくるような事をしていない分まだマシだが

「黒き風の一閃に、呑まれるが良い!!」

その言葉通りアサキムはデイスキャリバーでヤミを斬りつけてきた

「今…僕の刃は…届いた!!」

ルナテイク号がそう言う一台の小型車がルナテイク号にくつつき尻尾のような突き出た部分が動いて宇宙船のビーム砲のようになつた、変わってしまったのは見た目のカラーリングだけではないのか

『テイルレーザー!!』

そしてルナテイク号はビームを一発撃つた

「僕と彼女のこの有り様を見れば昏き炎に身を焦がすのも領ける、だがそのために今ここに大切な人間がいる事を失念しちやだめじゃないか、そら」

アサキムはどこからか伸びたシウロウガの腕にヤミをつかませて上空へ投げ飛ばした、ビームの範囲外に

『あ……………ヤミちやーん!!』

ルナテイク号は急いで投げ出されたヤミにきりもみ回転で近づいてドアを開いてドアから乗せるように回収した。

『じゃあ、ナイスキャッチ!!』

「今、彼方への扉を開く!!」

アサキムの声を聞き、ルナテイク号・Lはアサキムのいた所を見てみた、アサキムはビームによって消えたのかもそこにはない

『やったか?嫌…死んでもやってくるあいつの事だからそんな訳ないか』

くデビルークの会議場く

王宮があれなので臨時の会議場を決めた後、(分身してるので仮にリトBとする)リト達はもう一度ユニクロンの元に行く事にした。今度は兵士達を連れて

「ではもう一度ユニクロンの調査に行くという事にしましょう」

締め言葉を言おうとしたとき、随分と大きく無遠慮な足音が聞こえてきた、間隔も早いから走っているんだという事は分かる

「王様、王妃様!!」

「どうした?」

「どうしたの?」

「どうしたんだ?」

「どうしたんですか？」

ララとナナとモモはほぼ同時に自分達が似たような言葉を言ったため笑ってしまった、リトBはこらえたが

「王様方、そのようにイチャつかれると泣くほど羨ましく思っています、いえ私が見なければ良いのですが…ああそうだ、ユニクロンが、突如発光しております!!」

「マジでか!？」

リトBはカーテンと窓を開け、空を見た

「本当だ…白く、光ってやがる…」

ユニクロンは白く輝いた後、部分的に消え始めた、やがてそれは全身にまで及んだ

「消えた…?」

ユニクロンは、消えた。何が原因としてそうなったのかという疑問だけ残して

「何が起こったんだ？」

「良く分からないけど俺達のやる事は一つだ、確かめに行こう、みんな」

「教会の外」

分身してるのでここはリトAと呼ぶ、リトAは白いルナテイク号が見えたのでそれを目印に近くにやってきた

「ルナテイク号、ヤミは?」

『おせーぞ、こっちだ!!』

白いルナテイク号はドアを開けてリトAを迎えた、そして脇腹を刺されて横たわったヤミを見てリトは急いで駆け寄った

「刺されたのか!?ヤミ!!しっかりしろ、目を開けてくれ!!」

『ヤミちゃん、死ななくてくれよー!!オレを残して逝かないでくれよー!!』

それらの嘆きを聞いてヤミは寝覚めが悪そうに目を開いた

「うるさいですよ、リトさん、ルナ、痛いのでそっとしててください」

「ヤミ!!生きてる…良かった…」

ヤミはさつき刺されたところを撫でた、痛みはあるが、大分傷はかさぶたになっっている

「これくらい変身能力を治療する事のみで使用すればどうって事はありませんよ、まあこれ以上傷ついたらどうにもなりませんけど」

「あいつがやったのか？そうだ、あいつは…」

きつとアサキムを探そうとしているリトを見てヤミは首を横に振った

「もう…アサキム・ドーウィンを追うのはやめましょう、リトさん」

「……………ヤミは、それで良いのか？」

「はい…」

「ひよつとして何か分かったのか？」

「いつか話す…で良いでしょうか？話しきれない所があると言いますか…」

来夢について話すにはまず電王はいるという仮定から始めなければならぬ、そして極めてデリケートな話に手を伸ばす事になる

「ヤミが言えるまで俺…待つよ」

それを聞いてヤミはリトにハグした

「すみません、しばらくこうしてて良いでしょうか…」

「うん…」

「ありがとうございます……………」

リトに触れた事で美柑の事、来夢の事を考えて涙が出てしまった、リトはその涙を見てか優しくヤミにハグを仕返した

しばらく経った後、春菜達はやってきた、そしてやはり刺された傷の事で心配された、その経緯（来夢の話は除く）を話すとヤミはみんなからよしよしやつらかったら付き合えるだけ付き合うとかの励ましの言葉をもらった

「色々あったな…」

「うん…」

「一旦ここから出よう、確かめたい事もあるし、言わなきやいけない事もあるし、知りたい事もあるし」

そういう訳で、リト達一行は教会を出る事にした、シロとチヨ、美

奈子と宇宙船2隻を頭数に加えて

いつの間にか夕方になりかけており、雨雲も少なくなっている、星も少しずつが見えるようになっていた、建物も少なめな分良く見えている、ひよつとしたら、美柑ともまだ星などを見れた自分がいたのではないかと思うヤミだった

果実は、既に堕ちていた。

だが堕ちたとしても生きていれば、月日あればやがて種を成し未来に夢と命を繋ぐ。

果実から生まれる花はどんな色だったのだろうか？

どんな風に咲き誇っていたのだろうか？

もはや察する事しかできない、だから察する事…曲がりなりにも育った花の行く末を想う事くらいはやらせて欲しい、だって在るといふ事を知ってしまったのだから

「これで良いんですね？美柑…」

「????」

「呪われし放浪者さん…やっぱバラすんだ、来夢君…結城来夢君かな？もしくは苺悟（イチゴ）君の事。あれ卑怯だよね、顔見せたらそれだけでなんとなく分かる人には分かっちゃうもの…それは良いとしてヤミお姉ちゃん刺した事は覚えといてね、過去行ったらちよつと実験台になつてもらおうから」

第三十六話 美奈子ルート 師匠の望みってなんだったんだらう？

「次元の道を開き、マイクロンとルナテイク号の力を利用してどこかへ星帝の魂を押し込んだのは良いけどさて、どうしようか」

美奈子の様子を見に行く↑

来夢の様子を見に行く

「彼女に己が何者なのか示すべきか…目覚めれば混乱を招くのもあるかもしれない、少し確かめてみよう」

アサキムはリト達に見つからないか警戒しつつシユロウガで空を飛んだ。

〜一年とちよつと前〜

『師匠は、どうしてそんな体であんな所にやってきたんですか？』

私、生まれは知らないけど田舎の教会育ちの美少女（最近外の世界を知って美しき、かわいさのインフレを感じている）、秋月美奈子はあゝる時、なんだかんだあつてしばらくここに住んで、私が師匠と呼び慕う結城美柑のお腹を指差してこんな事を聞いた、膨れたお腹に耳を近づけると分かる命の鼓動、はつきり言えば彼女は妊娠していた、そんな体で裏山に行っていたのかと思うとその事について聞かすにはいられない。

『安静にしてなきゃだめな時期じゃないですか!?ここまで出っ張ったお腹だったら…はっ8ヶ月!!師匠に初めて会ったのが4〜5ヶ月前、判明だけはしてもおかしくない、何があつたんですか?…はっ、まさか師匠男に捨てられた!?うわーん、誰よこんなハイスペックな美女を捨てるような野郎は!!』

『えっと……』

『その話、私にも聞かせてもらえないか?』

関係性と言えば兄に近い、修道士が話に加わってきた、名前はデレンセン・カールスクラッドだって

『兄さんも加わるんだ…』

『そいつの特徴を聞かせてもらいたい、神の御言葉をいつまでも聞かせて悔い改めさせよう』

しつこさもといえりがたさで乗り切れる訳ないのに…変な兄さん

『誤解しないで、男に捨てられたとかそういう訳じゃないから…』

『ならなんで…』

『ナスビちゃんとデレンセンさんは、一番つらい望みの否定のされ方ってどんなのだと思う?』

他の人からのあだ名は秋ナスだけど師匠からはナスビちゃんと呼ばれてた、その師匠の言ってる言葉は質問の答えとしては繋がらないような気がして、聞き返そうと思ったが師匠のあまりにも真剣な目に私も答えなければならぬと思ってしまう

『大勢の前で暴露されて笑われる時?』

『武装込みで突かれながら否定される時か?』

『兄さんそれももう死んでない?…』

『どれも嫌だよ、そんな事されるの、でも』

師匠は一呼吸して間をおいた、そうでもしないと上手く喋れなさそうな程『でも』の声がぐずついて、聞くほうも聞いていられない感じだった

『一番つらいのはね、それでめいっばい苦しんでる人がいるって知らされて否定される時なんだ』

言っている事がどういう事なのか分からなかった、言えたのはただ一つ

『…良く分かりませんが師匠程の人の望みを否定するなんてひどい人もいますね、そんな奴を見かけたら私が師匠の代わりにけちよんけちよんにしてやりますから』

修道女の服装に相応しくないようなシャドーボクシングだったけど私は兄とは違うのであまり服装にこだわりはない

『苦しんでる人がいるならその人にできるだけの事をすれば良いんじゃないかと思えます、できるだけ手伝わせてください』

『………気持ちだけで良いよ………ありがとう』

師匠の望み……それが何だったのか、もう確かめる事はできな

い。だってそれから1ヶ月もしない内に師匠は殺されたらしいから、本当……誰よ師匠の望みを否定するとかそんな事する奴は!!

〈宇宙船内部〉

一度死んで生き返った体がどういいうものか調べてもらおうという名目で私は師匠のお兄さん達の宇宙船に乗せてもらっていた、目的地は偉い先生のいる所……ついでにヤミさんとシロ君の治療と経過観察も兼ねて……でも偉い先生曰わくデビルーク人の患者が多すぎて難しいから、助手と友人に代わりを頼むんだって……その友人はヤミさんと多分シロ君には詳しいらしい、師匠から聞いた事あるけど師匠のお兄さんは王様で伴侶がたくさんいて……その中に傷のだいたいを治したヤミさんがいる、昔見てた特撮の主役もいて実はその内の一人は体が分裂した二重人格者の内の片割れなんだって、そんな人達と繋がりのある師匠はやっぱりすごいな

一応師匠のお兄さんがルナティーク号?の端末を使つて警察への通報もした、現地とそれと銀河がつく奴を。現場を荒らした事で叱られたけど、関係者扱いで私ができる事を言ってみたら警察官の人頭を抱えていた、「信じたくない」だって。信じればその捜査は畑違いの領域となるから、とりあえずは一番何かを知っているシロ君の目覚めを待たなければならぬらしい

「……………それで来夢がですね……」

「そ、そうなんだ……」

記憶を取り戻した後の会話が殆ど特定の人間の愚痴になってたせいで春菜さんは苦笑いばかりしていた

「おい」

しまいには凜さんに止められてしまった

「愚痴は一言二言ならまだ良いがそれ以降は聞く方が不快になるからな……そろそろやめてくれ」

「すみません……」

なんだか申し訳無くなって私は頭を下げた、忘れていた………人の宇宙船に乗せてもらつてる事をすっかり

「分かったらもう気にしないで、そのライム君って人が怪しい人間

なんだ」

「あの時は適当な事言ってしまったけど本当は師匠の死んだ後に来夢は居座ってきました、部屋はいなくなったみんなの分があるから余裕で足りましたけど」

適当なのはライムの居座った時期ね、後あの日私どうしてたかとか「そして一緒に暮らしてたのか、愚痴ばかりだがどんな人間なんだ？」

「そうですね……まずはあの日まで遡りますか」

「聞かせてもらいましょうか」

ヤミさんモニター越しに聞き耳たててる？…まあいいや

〜一年前〜

寝てる間に記憶に何かが起こったようで目の前に知らない神父がいても特に何も疑わずに朝の挨拶をしてしまった、そして神父は苦々しそうに師匠の死を告げてきた、三度くらい嘘いうなって言って、本当の事らしい気配がしたから嘘だって叫びながら彼女の部屋を覗いた、だって認められないじゃん、まだ20代後半の師匠が死ぬなんて、でも誰もいない。今度は外へ飛び出した、見るといつの間にか新しく墓標が作られていた、「結城美柑、ここに眠る」と書かれてあるのを見て呆然とした

『本当に……？』

師匠と呼び泣き叫ぶが美柑の声は聞こえない、何故師匠のような人間が死ななければならぬのか分からなくて、泣いた、泣いて、泣いて、墓石に抱きついて師匠と叫んだ、その時……後ろから、声があった、若い男の人の声

『泣いたって何も変わりやしねーよ』

『ヒック……うるさいわね、泣かなきゃやってられないのよ、他にできる事なんか無いんだから』

『そうか、なら渴くまで泣いてくれ、おばさん』

『おばさん!?私はおばさんじゃない、あなた……誰?年はいくつ?』

『来夢、17』

存在しないはずの記憶をたどり来夢の事を思い出した、彼は3年前

より教会にやってきて今まで住み着いてた、引きこもりがちな人間で
師匠とはそう会話をしていないようだった：

『ああ………来夢私は18よ、どう間違えてもお姉さん、お姉さんだ
からね』

振り返ると包帯を顔中に巻いた神父服の男がそこにいた、体つきは
自己申告通り同年代で少し背が低め、それでも私より少し上だけど同
じような年の中にはもつとゴツくて背が高い人がいっぱいいるイ
メージ。まあ少しだけ違和感があった、この年の人間とは女の子とし
か一緒に住んでないような気がして、それでも目からこぼれるもの
の感触は疑いようもなく目の前にいる男は現実と受け止めるしかな
かった

『ああそうだ、これを受け取れ』

来夢はかごいっぱい梨とミキサーとなにかの型を持ってきた、多
分お供え物だろうけど器具については意味が分からなかった

『なにこれ？』

『アイスクャンディーの基だ、溶けるとあれだから欲しいなら向こ
うで作っとけ、なんなら直接食っても良いって伝えといてくれ』

渡して伝えたいものがあるなら自分自身でした方が喜ぶだろうと
思って反抗した

『自分で伝えなさいよ』

そう言うとき来夢は一式を墓前に置いた後包帯越しでも分かるよう
なニンマリとした気持ち悪い笑みを浮かべて走り去った

『あ、待ちなさい!!………』

追いかけても間に合わない早さで走ってて、追いつけないので来夢
の代わりに師匠に伝わるように祈った

『師匠、ライムの野郎がこれ食うか使ってアイスクャンディーにし
てくれだって………この言葉が独り言になってくれますよう
に』

すごくイヤミを感じるけど分かったって伝えといてね

なんか聞こえてきたから師匠が本当に死んでるような気がしてま
た涙が出てきた、どこを向いても師匠はいない、あの茶色い髪に、知

識の多さに、優しい声に、触れる事はもう叶わないと突きつけられるようだった

『へー梨大好きだと思ったんだがな、それ欲しさに人から取ろうとしたりするしさ』

師匠の言葉（仮）を伝えた時の来夢の言い分だった、師匠が来夢の分の梨を取った事があるようにその時は聞こえた

『師匠がそんなキャラな訳ないじゃん、人の食べる梨に手を伸ばすとか……でもちよつとかわいいような気もしてきた』

『……………おばさんがうらやましいよ』

『今なんて？来夢今なんて言った？』

そこから先はただの乱闘、単なるじゃれあい、語る言葉はありません

〜現在〜

「そ、そうか……………彼女は梨はそこまで好きでは無かったように思うが」

凜さんはそう言うけど確かに梨の話題はそこまでしなかったような気もする

相づちを考えてたら春菜さんは首を傾げだした

「うーん……これだけじゃ分からないか、もう少し教えて欲しいな」

「いつも自分の部屋に籠もりっぱなしで……たまに外に出て犬に懐かれると顔を覆ってそっぽむき出すような奴です」

〜半年前〜

自転車での買い物帰り、見知った顔が目についた

『来るなー!!』

『来夢!』

一緒に教会に住んでる間包帯を巻いた顔ばかり見てきたからそれが顔という認識になっていた、来夢は散歩をしている人が連れてくる犬に懐かれ、それを怖がっているようだ。必死にうずくまってから包帯に頭全体を覆っているくせに両手で顔をふさいでいた

『どっしたの?』

私は自転車から降りて押しながら来夢に近づいた

『その声はおばさん、犬が、犬が後ろに』

来夢の後ろを見ると犬がじゃれついていた

『またおばさん……………そんなに怖がってたらわんちゃんがかわいそうでしょ、ほら……………ごめんね、このお兄ちゃん怖がりだから』

自転車を止めてわんちゃんを引き離してから私は来夢にもう大丈夫って言った、そして帰り道―

『来夢も外に出るんだ、意外』

『オレだって本を借りるし返しに外に出る』

『へえー、ていうか普段虫とかクモは怖がらない癖になんてわんちゃんを怖がるのよ』

『あの純真な目で見られたらいたたまれなくなるんだけど……………ならない?』

『残念、私はわんちゃんに見られて困るようなやましい事はしてないから』

『まあおばさんはそうだろうけど』

『……………火傷が治ったら包帯取って見たら?少しは楽になるかもよ』

『そうは思えないだろうな、オレは』

『……………何かに怯えてるの?来夢』

『オレ自身の全て、てところだ』

く現在く

『そうですか……………』

ヤミさんは妙に暗い声で相づちをうっていた、人がオーバーに言っただけの言葉をそんなに重く受け止めるなんてヤミさんは優しい人だと思う

『でも無駄に器用な奴だとは思いますが、パイプオルガンでマジカルキョーコの主題歌を演奏してたので』

来夢が弾いたその日は遠方からの来客の受けが良かったのは覚えてる、懐かしいと思ってたのだろう、私だって本編は見てた記憶あったし

「変な事する奴もいるもんだな」

そうそう、変なの。懐かしいとは言ってもパイプオルガンだと無駄に荘厳になるからなんか違うの、せめてピアノだったら……と思うけど

「料理も上手い方でしたよ、師匠には及ばないけど少なくとも私以上の腕は持ってます」

「何か作ってたんですか？」

「オムライスを11月に作ってもらいました」

（11月3日）

『今日は師匠の誕生日か：はあーあ』

師匠が生きてたら盛大になんか作って祝いたいけどもういないからそんな気分になれない、て腐っていると台所からガチャガチャと音が聞こえてきた

『ミルクよミルク♪こぼれ落ちるな、こぼれ落ちたら臭うもの』

見てみると来夢は何かを作っているようだった、既に割ってある卵6個と牛乳と多めのケチャップと玉ねぎにベーコンとご飯と塩こしょう、なんとなくだがオムライスを作ろうとしているのは分かる

『ええ、来夢…料理できたの？』

来夢が料理をする所を見たのはこれが初めてだった、いつもは私が同居人のよしみで作ってたから……

『……………すぐに終わるから待っててくれ』

慣れているような手付きでの調理でありすぐ終わらせるとい言葉に嘘偽りを感じさせなかった

言葉通り来夢と私と神父の分、すぐ出来上がった。でも最後のひと手間だけ妙に長かったんだよ、つまようじにあらかじめ切つてある色紙を付けて…旗を作つてさ。模様は白い紙に赤い十字架……病院!? 赤い紙に黒くて真ん中に穴のあいた歯車っぽい物、後青い紙に黄色い三日月を書いてオムライスに刺していった

『おいしい、これおいしい』

そうしてできあがったオムライスは想定外のおいしさだった、オムの部分の割つた時の半熟っぷりもさることながらライスの部分の優しい甘み、ケチャップだけではない何か、玉ねぎか……珍しがってる

のか食わずに色々な方向から見てる神父を余所にながらついて食べてしまった、来夢が神父に食べ方を教えているのはさすがに加勢するべきだったかと反省してます

『知り合いのおじさんはさ、旗倒したら負けだっていう遊びやってたよ』

来夢が食べている時にそう言ってた、食べ物で遊んじや駄目って大人は言うのに……それはさておき

『私が作ったのよりおいしいじゃん、それになんか師匠の作ったご飯に味似てるし』

何か似ていたような気がした、師匠からオムライスを作ってもらった訳じゃないけど……作ってもらえればこんな味だった、そんな気がした。師匠のご飯が懐かしいなと思った、ただそれだけだったがその言葉を聞いて来夢の様子は一変した、急に食べるスピードが早まった、まるでこちらのお話を一方的に打ち切るように、食べ終わるといってくださいやごちそうさまの合図も出さずに走り去って部屋を出て行った、そういえばこの時からかな？ひきこもるようになったの

『ちよっ、ごちそうさまぐらい言つてよ!!』

『ごちそうさま!!』

仕方ないと思つて食べるのを再開した

『やっぱり旗立ってるやつ食べるの難しいな』

旗が邪魔で右から左へ食べる事ができなかった、仕方ないので周りから食べて……

『あ』

スプーンに旗が当たり旗が倒れた、数秒後旗を引っこ抜き、食べてしまった

その頃ライムは部屋の中一人でアイスクャンディーとプリン独り占めしてた事がゴミから判明してそして私も食べさせてもらった

〜現在〜

「ひよっとしてライム君って美柑ちゃんの知人？」

「あからさまに関係者ムーヴしてるぞ」

「アイスクャンディー食ってますもんね、師匠の好物」

「オムライスもですよ、プリンは違う気もしますけど」

え？ 師匠オムライス好きなの？ オムライスは初耳だよお、がっくり

「他に何かないですか？」

後は…

『8月21日か…』

そういつてライムはぼけーつとしてたっけ

「8月21日…って何かありましたっけ？」

「何もないかな、ヤミちゃんはどう？」

「何もないですね」

「ああ、大方そいつ自身に何かあるんだろう」

何かある… ……何かあると言えば誕生日？ 誕生日と言えば

… ……あ

「どうした？」

「来夢はよく誰かのためにパイプオルガン演奏してるらしいんですよ」

ふうーごまかせた、師匠の子供の産まれる予定日だったなんて口が裂けても言えないな… ……病院に予約は入れてたけど… ……師匠

「10月16日、25日、12月24日、3月6日、5月3日は…パイプオルガンを30分程弾いてました、2月末と3月3日と4月1日と5月10日と7月7日と8月8日と9月21日と11月8日と12月5日は一時間程延々と」

「…何を弾いてた？」

「メロディーに関してあまり詳しくはないですけど生誕を祝う唄…とかの類だったような… ……無学ですいません」

「じゃあ…」

「ライムは料理上手で顔に包帯を巻いて私達の誕生日を知ってるひきこもりの男という事か… ……誰だ？ 私は知らん」

この人達の誕生日だったんだ… ……うん？ てことは師匠に対して弾く気はなかったって事になるよね… ……次会ったら問い詰めて弾かせよう、師匠の… ……私の師匠のために!!

『そろそろ着くぞ』

「わあー」

大きな洋館が見えた、良いなあ、私もこういうの欲しいなあ…教会って住居部分のほとんどがシェアハウスみたいなものだし

師匠のお兄さんもついて行きたそうだったけど

「くっ」

「リト君!？」

「大丈夫か?」

「限界か…：俺にこれは越えられないみたいだ」

目を回して倒れてしまった、発明品の副作用で急いで帰らないとまづいらしい、そういう訳でみんなは私とシロ君ペア、ヤミさんと宇宙船をそこに降ろしてからお兄さんだけ回収して別の所に行っちゃった、夜近いしここにお邪魔するしかないか、と思つて扉に近づくと

「ヤミちゃん、大丈夫!？」

急にヤミさんそっくりのメガネをかけた金髪ストリートロング美女がやってきた!!そして走つてここにやってこようとしたせいで道につまづいてこけちゃった、何も無いところでこける人初めて見た気がするけど

「危ない!!」

お顔を地面に激突させるのだけは防ごうと私はかがんで両手を伸ばした、少しはクッションになれたみたい

「助けてくれてありがとうございます」

ペコリと頭を下げられたからつられてこつちもペコリと頭を下げてしまった

「私はティアーユ・ルナテイクです」

「私は秋月美奈子です」

「あなたが美奈子ちゃんね、あなたはこつち」

そう言うと金髪美女はヤミさんのいる方に向かつていった、あの慌てようから察するにあの人ヤミさんは肉親なのだろう、あ…：…：また転んだ、仕方ない

「あたたたたた」

「大丈夫ですか？」

「重ね重ねすいません」

「落ち着いてください、本当……落ち着いてください、特に階段では」

「ごめんなさい……」

階段のくだりは私個人の経験からの意見だよ、一応死因だし

「見てられないのでついて行きますよ」

と、言うわけで私は目の前の金髪美女に付き添った、まあ白い宇宙船まで早歩きでついていけば良いから楽だった

「では」

「すいませーん」

オレンジのシャツと青のジーンズ姿で上から白衣を纏った同じ年ぐらいの女の子が走ってこっちに來た、サラサラしてそうな藍色の髪、人当たりの良さそうな雰囲気、なんだか清楚な感じがすごかった

「ティアーユ先生は……」

「もうなんか始めたみたいです」

「そうですか……ではついて来てください」

屋敷に戻ってどこかに案内されて、ほんの少しだけ待たされた

「どうぞー」

「はい」

扉を開けるとさっきの女の子が待っていた

「改めましてこんばんは、私は村雨静です、静先生と呼んでください」

「こんばんは、よろしく願います、静先生」

それから血を取られたり、熱と脈を測られたりした

「血の方はもう少し待ってくださいね、他は生きている方と何も変わってはいません……」

静先生は急に下を向いて黙り込んだ

「静先生？」

どうかしたのかと私から立ち上がったって静先生に近づいたその時
「ばあー!!」

急に静先生が上半身だけ幽霊の仕草で飛び出してきた

「きゃあー!」

驚いて尻餅をついた、静先生はかわいい糸の女の子だから怖かったかって聞かれたらそうでもなくて勢いで押された感じだった、さっきのはこれが目的かと理解したのと同時に何故こんな事をされるのかと疑問が湧いた

「やっぱり幽霊とは違うみたいですね、すみません、立てますか?」
静先生は手を差し伸べてきたのでその手を借りた、その時頭がぐらぐらして気づいたら少し時間が飛んでいた

「美柑さん、妊娠してたんですか!」

「え?なんでバレたの!?何も言わなかったのになんでバレたの!」

「良いこと聞いたんだブーン!!」

知らない声でしたから振り向いたけど誰もいない

「誰か、います!」

「……………どっ!」

「上です!」

静先生の指差す方向を見ると童話に出てきそうなシルエツトがサッカーボール並みにデカくてゆるい感じの丸い蜂がそこにいた、糸のような腕で糸のようなあんよ、かわいい!!ハチの妖精のようなそいつは目が合うと逃げ出した

「あつ待ってくださいー!」

私と静先生はハチの妖精を追いかけた、ジーンズ姿の静先生はともかく私はロングスカートだから走るのがきつい、こけないように注意しないと

「デビルーク王室じゃなくてぽつと出のあの小娘を見張っておいて正解だったんだブーン、スクープスクープだブーン、これで女王たまたも褒めてくれるんだブーン!!」

「虚、または真を謳うならその前に一つだけ」

「!?ナニモンだブーン!!」

「ある世界ではね、狼に乗った三匹の猿の神像を以てこんな言葉を贈るんだ、ミザル・トウバル、イワザル・トウバル、キカザル・トウ

バルと」

扉を開けて外に出ると黒い格好のイケメンが剣を持ってない方の人差し指を口元に当てて黙るように促す仕草をした後

「それを破る者には悉く狼が口を開けて飲み込みに行くらしいねえ!!」

剣を振るって知らない蜂の尻尾を突いた

「痛いんだブーン!!助けてほしいブーン!!」

泣き叫ぶ事ができたからそこまで深くはなさそう、だけど

「目に映る姿と同じように肉体も柔らかいか、柔らかすぎて僕も少し焦る所だった」

知らない蜂は地面に激突して泣いた、まあ今静先生が虫取り網で捕まえたからいつか

「大丈夫ですか?」

「怖いんだブーン!!」

ハチの妖精はうずくまっちゃった、震えてる所を見るとなんかよしよししたくなってきたかも

騒ぎを聞いて金髪の先生も宇宙船越しに見てきた

「今の言葉は君達にも言える、もし言えば……分かるだろう?」

イケメンは剣をしまってから今度は私達に向かって語りかけてきた

「分かった、もうこれ以上死にたくないし」

「へえ……思いだしたんだ、己のたどった運命を」

「うん……」

「分かりません、はっきり言ってください」

「用は済んだ……でも君がさっきの事を伝えようと思うなら僕は君の魂を飯の器ごと散らす事になる、こんな風に……ね（眼力）」

イケメンは静先生に一睨みをしてきた

「ぴゃっ!!」

静先生!!

ああ、間に合った……倒れて後頭部が床に直撃するのは避けられた……あれ?静先生が2人いる、片

方透けてて、和風の白い衣服に身を包んでるその姿はまるで

『びっくりして出てしまいました』

「えーーーーー!!!」

静先生、幽霊だったの!?

「思ったより簡単に剥がれた……少し足りないんじゃないかな? 己を器に宿す力が」

黒い格好のイケメンって静先生が幽霊だって事知ってるの? そんな言い方してるけど

「その力を求めるなら人ならざる者と相争う者に会う事を勧めよう、隠世へと妖魔を祓う術を知るなら常世にてその魂を縛る術も得ている筈だ」

と言いつつイケメンは去ろうとした

「待って、あなたがヤミちゃんに怪我をさせたの?」

金髪ストレートロングの美女が宇宙船から外へやってきた

「そうさ、でも認める事を望んじゃいないんだろう? 僕が君の望むままにしても彼女は喜ばないよ」

改めてイケメンは去った、急に現れて急に去っていった、突風が通り過ぎていったような余韻を残して

「とかなんとか言ってるあのイケメン、静先生をその人達に押しつけようとしている感じがダダ漏れなので気にしない方が良いと思います」

「わ、分かりました」

私達は保健室に戻った、金髪ストレートロングの美女の手伝いもあり蜂を網から出して手当てして、金髪美女は戻っていった。それから静先生の事について教えてもらった、彼女は本当に昔から幽霊で今の体はバイオロイドらしい、よくわかんないけどそのバイオロイドmg wrてこと?」

「それから……」

糸のような細い腕でコップをつかんでストロー越しにジュースを飲んでる蜂に話を振った、子どもの書いたお絵かきのような顔で蜂特有のあの顔に寄ってないから見やすい

「あなたは誰ですか?」

「お姉さまがそう言うならそうかもしれないブンね」

ふうー、一件落着……じゃない、謎が解けてその先で行き詰まった感じ、師匠の望みはおそらく、大好きな人と一緒に生きる事、師匠はお兄さんの事が大好きだって事、真偽はともかくとして師匠のお腹の子供がお兄さんとの子供だって言われたらみんな信じるぐらいには……本当にそうだとしてもまあ良いんじゃないかとは思う、それで師匠に対する気持ちが変わる訳じゃないし、現に今そうと考えてもうわ気持ち悪、態度変えようとは思えない。人の己と違う所を下に見てから否定する、そういうのはあつてはならないって私達を今まで育ててくれた方の神父が言ってた、創立以来の教会の家訓、すなわち教訓だそうだ

だが問題はそれでよしとしない奴らだろう、そいつらの内の誰かが師匠を否定した……？誰だろう、師匠の心を折る程に師匠の夢を否定をした奴は……それが分かればやる事は一つなのに

「それはそうと幽霊でいるってどんな感じですか？」

「昔は寂しいと思ってたんですが、今は未来の友達ができて楽しいです」

幽霊って本を読んだ影響でもっと暗くてドロドロしたものだと思ってた、死ぬ前に心に抱え込んだ暗いものをまとって現れるから怖いものになる、だから人に危害を加える、そんなものだって。でも静先生が幽霊って分かって例外もいることが分かった

「だから一度死んだとしても、それで友達を作ったり、未来に目を向けたりするのを諦める必要はないと思います。それにあなたにはあなただけの体があるんですから」

自分だけの体……か、そう言われると気が楽になってきた、都会行って住んでみるのもありかな？

「そうですか、そう言われるとなんだか気が楽になってきました。ありがとうございます」

「それはそうと美柑さんの子供の件は言わないんですか？」

「師匠のお腹の件は黙っておいた方が良いと思ったんです、師匠だけでいっぱいいいっぱいなのに子供までって……」

「それはダメだと思えます」

「……………急に静先生の表情が真剣なそれになった

「言わない限り、春菜さん達の中でその子は存在しないのと同じになります。寂しくはないですか？本当はいたのに、いかなかった事にされるのは……………」

地雷、踏んじやったかな……………なんだかそんな気がした、例外とはいえ幽霊だもん。死んでまで気にする事の一つくらいあるよね、そして静先生は寂しいまま死んでしまったと見た私だった

「まあそう……………かも？」

「そうですね、寂しくないと思うように育ってしまわない限り……………きつと」

「でも言ったら静先生に私達散らされるんでしょう？あの黒い格好のイケメンに」

黒い格好のイケメン、名前は確かアサキム・ドーウィン。格好と髪は黒づくめでさつきは暖かかったけれどいつ冷たく突き刺さるか分からない秋の風のような人、それでいて綺麗な赤い瞳に脳をとろけさせるような甘い声が全てを肯定したい気にさせる、正直あのマスクとボイスは卑怯

「う……………そうでした」

「あのお兄たまひどいブンよ、ボクの体に剣を突き刺したんだブン」

「よしよし、痛かったね……………今度から狙われないように行動しようね」

そう言っただけ私はピースケ君の頭をなでてみた、頭の触覚、その間の部分がある感じがごくモチモチしてて、まるでぬいぐるみのような感触、いやされるゝ

「小娘に慰められても嬉しくないんだブーン、お姉たまゝ」

なんとなく分かった、このハチは年上好きだ、直感で判別できるくらいこのハチは年上好きだ。

「よしよし……………」

「ブーン」

静先生に撫でられるとピースケ君は気持ち良さそう、なんか違う

のかな？年の差って……嫌、多分心の問題かもしれない、ピースケ君の。

「……………」

……………どうしよっかな？みんなに師匠のお腹の事を言うの……殺されたくはないなあ、一度死んだ命だから惜しくはないと言える人もいるだろうし惜しいと思う人もいる、私は後者、前者みたいに言えるのは一度目すらそんな風に扱った、それかそういう風に扱える可能性のあった人なんだろう。かといって話さないのは静先生の言葉を聞いて良くないように思えてくるのも確かだ、迷って良いかな？もう少し、私の望みが叶うまで……自分の目で都会とか、外の世界を見れるまで、奇跡がくれた私の時間を使いたい。

第三十七話 美奈子ルート シロ編 答えを病室で
言わせないで

（3日後）

夢を見ていた。

少し、現実に近い感覚の夢を。

ほんのり、現実離れた光景の夢を。

初めはある気持ちの発露、目の前にいる奴があれこれ気にいらぬ事ばかりを言う、うつとうしい、聞きたくない、という言うなれば：反骨心。

それが湧き上がると共に、夢の中の自分は胸から何かを引っ張り出し目の前の筒を壊していた。

そして見渡す限り、だけではなく歩いてても歩いてても走っても目の前に見えるのは研究施設、それと何かを言いながら逃げ惑う白衣の人間達。

色々な言葉が聞こえてくるが共通して言っているのは

「助けて」

「死にたくない」

という怯えの声。

両手を見るとそこにはどろりと赤い液体が垂れていた。後ろを見てみると、同じような液体を流して動かなくなった人間達ばかりが床に転がっている。

どこか清々しく、気分が良くなっていく、敵を倒すつてのはこういう事かと覚えてしまう。

敵、夢の中の自分の敵………どうい奴らなんだろう？なぜ敵とみなしたのだろうか？考える暇があるなら進めと言われたかのよう、ただ施設を走った。

走っていく内に一人の金色の髪の女の子が見えたが無視していた。気づかなかった訳じゃない、凝視して別の方向を向いていたから意識して避けているようであった。

それから、一人の人間と対峙した。

服装が白衣か黒衣かもそうだが今までの登場人物とは全く違う雰囲気を持ち、ハーデイスを手を持った長髪の男。

そいつは目の前にいる自分を珍しいものを見るような目で見てきた。

ああ……こいつは俺の命を狙う

確認を取るまでもなく男は自分に向かって引き金を引いた。

く????
く

俺は見知らぬ一室で目覚めた。

「んあ」

当たり方から見て真昼の陽光がカーテンを突き抜けて眩しい、そんな所で良く眠れたなと思うが、それは大した問題ではない、見知らぬ場所で眠っていた事こそ問題だった。

「どこだよここ」

分からない、窓から覗いてみるとそれなりに広い場所だったのは分かるが……

「気持ちわりい」

おでこもいつの間にか濡れている、クーラーは効いているからその内引くかもしれないがなんで汗なんかかいたのか……

さっきの夢のせいか？ひどい夢だった、夢の中の俺は、多分たくさんの科学者達を殺していた。そして誰かに撃たれて……

その夢に意味や引き金があったのかと考えてみた、夢にはなんかあるらしいからな……分らない、あるとすれば俺が金色の闇と同類（意識）つて言われた事、か？俺の髪も言われた時辺りから茶髪になってるし……きれいってみんな言ってくれた銀髪よ、なんの挨拶なしに行ってしまったやがって……

「あ、起きた」

知っている声が聞こえてきたので振り向くとナース服のチヨが見えた、何故か長い髪を結び上げてポニーテールにしているため気づくのが遅れた。

「夢だよこれ、もっかい寝れば起きるな」

俺はもう一度眠るよう毛布をかぶった。

「私を見て急に寝るな!!」

チヨから毛布を引つ剥がされ渋々起きた、布団を剥がされた時に当たった風は現実味を帯びていた

「この風当たり……これは現実でチヨは本物だな、悪かったあ!!」

「ん………:よろしい、喉渴いたでしょ?ほら」

チヨは自販機から買ってきたような紙パックの牛乳を渡してきた。

「牛乳だ、サンキュー!!」

「気にしない気にしない、私とシロの仲じゃん」

チヨからもらった牛乳をストローを刺して一気に飲み干した、ぬるい気もしたがそれだけ俺は眠っていたと思えば仕方がない。

誰かにどういう仲なのかと聞かれたとすれば一緒の部屋で寝て起きた後牛乳を飲む仲だと答えるだろう、カレカノとは言われるが手も口も何も繋いだこと無いから俺的にそうは思えないな。

「汗かいてるね、じつとしてて」

今度はおでこの汗を拭かれた、おでこだからまだましだけど近いですよ

「そういえばここはどこなんだ?」

「実は」

「ああ」

「ティアーユって人のお家兼研究所だって、本当は別の場所だったけど調べるにはこっちの方が良いってさ」

「ティアーユって……あのティアーユさんか……」

ティアーユ・ルナテイク……金色の闇もといヤミさんの親みたいなものだそうだ、厳密に言えば、ヤミさんは人工の生命体で遺伝情報はティアーユさんから得られたものなんだとよ。

なーんて言ってみると俺や赤毛のメア?にもいそうな気がした、そいつは絶対にティアーユさん以外の誰かだろう、そうでなければ俺の顔も黒咲芽亜の顔もヤミさんに似ているだろうし……二人がなんか通り名持ってるから俺も白猫のシロっていう通り名をつと思っただが微妙な気がしたので却下。

ティアーユさんとはヤミさんを捕まえようとした一件の後少しだけ会話したんだが口を膨らませて拗ねてた顔をしてたっけな……

「シロはティアーユ先生の知り合い？」

「まあな」

「ふーん」

チヨは明らかに目つきの鋭さが増し怖い顔になった。

「なんで拗ねてんだよ、デビルーク王の言葉通りならお姉さんのママつまりオレのママかもしれないだろう？」

「あんな若くて美人のママがいてシロがうらやましいですねー」

「？チヨもティアーユさんの事をママって呼んで良いんだぞ」

別に呼称を改めるだけだし……

そう言うのと動きを止め、間を置いてチヨは顔を赤くし始めた。

「そ、それってどういう事力ナ……!?!」

なんだか手も普段と動きが違って、動揺している事が分かるが何故そうなのかは見当がつかない、言えるのは一つだけ……顔赤くしているのを見てからその手つき見ると

「ゴクッ」

やたら興奮してしまう……ほっぺたが熱い!!抑えよう抑えよう

「それはそうとなんで教会の時ああゆう事したのかな〜!!」

数分後、話題を変えるようにチヨが詰め寄ってきた、割と怒ってるのが分かるぞステイステイ

「ごめん、悪いとは思ってる」

まさか地下倉庫の写真集見ただけで心臓くり抜かれるなんて思わないだろう？俺の不注意が招いたってのもあるけど

「悪いと思ってるなら何を見たのか教えてよ〜うりうり」

チヨは地球の猫じゃらし草（野生）を俺に向かって振ってきた、こんなので釣られるとも思ってるのか？手触りは………悪くない。い。

「一応聞くんがなんでそんなに知りたいのさ」

「身近な人が危険な目にあってそれが何故なのか知りたいうって変な事？」

じゃない、とは思う。そう思っただけでも知らせないのは俺のわがままなのか？

春菜さんに言われた事を思い出した、心配かけたのは分かるし仕方ない、俺が見たものと奴の事をいう予行にはなるかもしれない、悲しい話にはなるから……………

「じゃあ耳貸せ」

女の子の耳に当たるか当たらないかまで近寄って言葉しゃべるのは恥ずかしいが……………

「ぎつとこんな所だ」

チヨは口元に手を当てた、話にくい事を話したから感想は一つくらい欲しい所だがそれに関して何も言いたくないのも分かるからやめどころ

空気が重くなりながら時間が経っていくのを感じた、思う所はあるよな、俺も一回泣いちゃったし。

例えるなら……………色恋沙汰のリスクそのN+1番目だからな、色恋沙汰……………ああやだやだ古今東西において事件の発端となるジャンルNo.1め!!まあ嫌いじゃないけど。

かわいいそうだと思う、被害者と加害者両方な。

と考えてるとドアが勢い良く開いた。

「シロ君!!調子はどうでしょうか？」

声に驚いてチヨは猫のような飛び方で俺が寝ているベッドから離れた

「失礼、あいさつが先でしたねこんにちは」

ザステインさんが果物セットを持ってやってきた、少し俺を見てびっくりしていたみたいだ、まあ知人の髪の色がそっくり変われば俺だってびっくりする。

「は!?ザステインさん、ユニクロンの件はお疲れ様です…それと」

ユニクロンはよく分からないデカイ惑星が変形したロボットだった、王様がそう呼んでいたのでそれを引用する事になっている。

次にやってきたのは隠しきれないお嬢様オーラを放つドレス姿のご婦人、多分ザステインさんの奥さんだ。

「お〜ほっほっほっほっほ（お見舞いバージョン）、お見舞いクインこと天条院沙姫ですわ!!」

「うわ、まぶし!!」

思わず目をつぶってしまった、二人が一緒にいると二人共光っているような錯覚に陥る。

「外で綾も凜もいますのよ」

取り巻きもいるのか……綾って言えばメガネのあの人だな、赤ちやんの誕生祝いの時にいた……凜ってのはこの前俺の腹にきつい一発をくれた凜さんの事で決まりだろう、その件については俺が悪いけど。

「そんなにたくさんさんの面子……何か御用でしょうか？」

「色々あったと聞いて様子を見に、それと……」

「ぐくり」

「君が美柑様について色々知っているとリト殿からお聞きしました、それが何なのか教えてもらえないでしょうか」

やはりそれについて聞いてこない訳がないか

「嫌です、ザステインさん達には言えません」

「どうしてもですか？」

「どうしても」

言ったらちよみみたいにショック受けるだろうよ、ていうか凜さんに聞かせられないじゃないか。

俺が拒否した瞬間ザステインさんの目が光り、そして叫んだ。

「吐かないなら吐かせてみせる!!」「アイスの刑」で、沙姫様!!」

「ええ………よろしくてよ、ザステイン様!!」

仲が良いですね!!

〜数分後〜

「シロ君、おいしいですか？」

俺はこの時のためにやってきたかのように凜さん達（ついでに美奈子ってシスター？も）に手を押さえられてアイスをたくさん口の中に突っ込まれた。

「ミルク味最高です、あむ、うむ、おお……やっぱりバナナは王道」

「おっほっほっほっほ!!天条院家御用達のアイス、存分に味わうと良いですわ!!」

口の中にクリーミーな甘みが広がる幸せを感じつつザステインさんが近づけるスプーンに乗ったアイスを俺は食べ続けていた。

これが尋問ならなんて良い尋問なんだと思ったその時、ツケが回ってきた。

「ああ、頭がー!!」

額の辺りに迸るような冷たさの混じる痛み、言うまでもないがアイスを食いすぎたせいだろう。

「そろそろ効いたな」

「どうです、吐く気になりましたか?」

「ああ……………でも言ったら色々やばい…」

「吐かない限り止めませんよ、あーんしてください、アイスナツクルボールですよー」

スプーンが、口の中に向かってきた

「タンマア!!」

心から、避けようと思った。そうすると口の上から、鉄っぽいマスクが生えてきて口元を覆い、スプーンを妨害した。それを見てザステインさんと凜さんはすぐに沙姫さんと綾さんと美奈子さんを自分の後ろに移動させ身構えた。

「目で見るまで半信半疑だったがリト殿の言った通り君も変身兵器だったのか」

変身兵器……………金色の闇、黒咲芽亜、ネメシスが該当する変身能力を使える奴……………だったっけ?確か体中を好きな物質、凶器に替える事のできる……………どうして俺にも急に使えるようになったのか……………元々使えたのがどこかで使えなくなつて、神父さんに心臓をやられた時をきっかけにまた使えるようになったと見るのが自然か

「だったらなんだって言うんですか?フレイム星の奴らが炎を扱えるのと別段変わらないと思います、使う奴の問題でしょう?」

「二理はあるかもしれない、シロ君、不必要に警戒をすまみせん……………」

良かった、害はないって思ってもらえた……

「と、いうにはまだシロ君はその力を制御しきれないように見受けられますが」

そんな………

「高ぶらなければ発動していないので今は大丈夫かと思えます。」

「よし、アイス再開」

「ノー………!!」

やめて高ぶっちゃうー!!

って言い掛けると金色の闇がドアを開けてきた

「静かにしてください、後集まりすぎです、起き抜けの人に変な事しないでください」

「すみません……」

ザステインさん達はヤミさんに謝った、それを見届けてからヤミさんは俺の近くまで寄ってきた

「調子はどうでしょう？私の……弟？」

「まだよく分からない」

あまり驚かないところから見てもみんなそういう認識が広まってるって事なんだろう、金色の闇の弟か。

「ティアが調べてくれて分かりました、あなたは、本当は私達と同じ……エデンで産まれた変身兵器、あなたの体の中のナノマシンがそう示したようです。」

「そうだったのか……」

同じ卵のアニマルって事か、なるほどなるほど………じゃないな、おそらくだがその事実が判明したって事はデビルーク王の仲良くしろしろオーラ攻撃が始まる事を意味する、三度の接触で金色の闇は良い人かもしれないと思っただがそれとこれとは別だ、惑星を斬り、たくさんの命を奪い去った悪い奴だと思っていたのは容易には拭えない………がそう言い切れるのは俺次第か、さっきの夢のせいだ

「お前も同じだ」

って誰かから言われているような感じだ、もしあれが本当に起こっ

た事だったら………怖い、まあいい、風聞で作った壁
ぐらいは取っ払うか。

「ですがティアからの情報で開発時期が芽亜や私より前なのに芽亜
から弟と言われましたがどう思います？」

チヨが手を上げた、俺が寝てる間デビルーク関係者と友好でも結ん
でるのか？

「生まれたのが後だから？」

「まあそれが無難でしょうね」

何を以て生まれた日と言えるのだろうか？まあ誕生した日はい
つって話なんだが………母胎、卵、試験管、そのどれかから出てきて
肉体を外気に晒す日か？それとも自分っていうものを自覚した時か
？

どれも一定期間ずつと中に閉じこもってる事が前提だがその期間
は考慮するのかしないのか………そういう話題に入ると顔色
が悪くなるシスターが出てくるから気をつけたい。

そうしてザステインさん達は一旦帰った、去り際に話したくなつた
らいつでも受け付けると言われた、変にプレッシャーかけられると、
重い

「どうです？変身能力は」

教会の時はなんとなくてやってたけど………

俺自身今まで銃を持ってない状態で金属探知機に引つかかった事
はない、なのに急に腕を金属質にできるんだ、奇襲には悪くないな
………金色の闇、ヤミさんが伝説と言われた訳か

でもあんまりポンポン使うと指が動きづらくなる危機感がある、例
えば指とかには神経が張り巡らされてるよな、腕を剣にする時は一度
バラして再構成する、その時神経も一緒だから急に指の感覚が無くな
る、慣れてないと違和感が芽生える、戻す時は同じ事をやればいいけ
どそんなのを交互に繰り返していったら脳みそがバグリそうだ、金色
の闇は翼を生やしてたが神経が保つのか？ていうのを感想として
言ってみた。

「そうですね………加減はおいおい知っていけば良いと思います」

「もうあんまり使う予定はないけどな」

「え!？」

「ええっ!？」

金色の闇は目に見えるほど驚いていた

「良いだろ?別にもう使わなくても……使わなければいけない理由なんてなし、使っていつて気分が悪くなるの嫌だし」

「それは……………そうですね」

肯定はしてくれたが渋々を付け加えなければいけない、不満ですよと顔で訴えかけている。

「オレにメアやネメシスとかの代わりはできないからな」

「そうしろなんて言っていないじゃないですか」

「いずれはそうなるって感じの目をしてるから釘は差しておく、息子、親友、妹、立って続けに失ってまいつてるのは分かるけど、そいつらの接し方を期待されてもちよつとな。俺は腕を刃物に変えて派手に斬り合うのは嫌だ」

彼女達が汗を流す感覚で斬り合うのはデビルークの宮殿周辺をうろつけば聞く話だ、一般人は危険って意味で、後見せ物じゃないから見物不可だが

「嫌でしたか、じゃあ仕方ないですね(ため息)、その代わりお姉ちゃんと呼んでくれますか?」

「ねえや」

突然ノック音がしたので、ヤミさんは受け答えをした。

「はい」

「あら、お邪魔しちゃって悪いわね」

「警部」

警部が花を持ってやってきた。

「元氣そうじゃない、心臓をやられたって聞いたから焦ったけど、無駄な心労で良かったわ」

「ありがとうございます、でもどうしてここのへ」

「教えてもらったのよ、お見舞いしたいって言ったら王様からね」
デビルーク王……不用心過ぎない?まあ良いけど

「ちよつと待っててください、たい焼き持ってきますので」

ヤミさんは俺が今いる部屋から出て行った、ちよつと早いスピードだったからカスタード味か生クリーム味を頼みそびれた

「いつの間に仲良くなってるわね、ところで髪どうしたの？」

「それがですね……」

警部に髪の色が変わった経緯を話した

「なるほどね、体は大丈夫かしら？」

「ええ、まあ」

「でもシロとは呼びますづらくなるわね」

確かに俺がシロと呼ばれてるのは銀髪だったからだ、でもそうじゃなくなったらってそう呼ばれてたのには変わらない、何より俺はシロって呼ばれたいんだ。

「俺はシロです、これからもそうでありたいと思います」

「いいわ、ところでシロ」

警部の何か聞き出したい事がある時の顔だ、目に圧が増す、相手に早く吐けといつも目が口ほどにものを言っている。

「なんででしょう」

「デビルークの王様の妹君の事、私に教えてもらえないかしら？」

ああ……またか、もうその話題から離れたい

「嫌です」

「変わったわね、シロ、昔のあなたはどんな事情があっても事件の犯人を庇う真似はしなかったわ」

「俺が真相を究明しようと思うのは被害者の家族の心の自由のために判明した事柄のせいですがんじがらめになると分かれば躊躇もするって先日分かりましたよ、それに一応神父さんと約束があるので……」

「あなたがおねるのは勝手よ、でもシロ……あなたはデビルーク王の行動を阻害し、調査にも応じようとしなさい、彼らがそう思っただけで敵対したと見られてもおかしくない事をしてる」

それってまさか……

「あなたが尊敬してるらしいあの親衛隊隊長が敵になるわよ、私達

もあなたを全力で捕まえるのも辞さない」

「ザステインさんと警部が、敵……………!!?」

そう言われた時何かが折れた気がした

「だったら」

「ス…………ストップストップ、泣きそうになってるってば、シロをいじめないで、いじめて良いのは私だけなんだから!!」

言ってる事がどういう事だかさっぱりだがそもそもいじめる事自体ダメだと思う、というかチヨ急にやってきたなあ

「まあ、まあまあまあ、そこまでとは思わなかったわ…………よろしくねお嬢さん、その白猫は温室育ちの飼い猫で、でも噛みつく時は噛みつくの、王様とか」

人の事を飼い猫とは言うが俺を飼って良いのはこいつになら飼われても良いって思える人だけなんだぞ、そこんところよろしく!!ちなみにチヨはまあまあだ、今あんな事を言ってるけどムチとか口撃とかひどい事はしてこないしな

「うん、知ってる」

その時ヤミさんがたい焼きの袋を持ってやってきた。

「随分取り込んでますね、どうぞ」

「姉さん助けてー(棒)」

「都合良く親の仇みたいに敵視してた人を頼らないの」

「うっ」

ヤミさんは急に気分が悪そうに倒れた

「金色の闇、あなたからも何か言ってくれないかしら?親友の事について聞かせろって…………大丈夫!?!」

「警部!?!」

俺は警部の肩を叩き耳打ちした

「ヒソヒソ(何言ってるんですか、彼女は自分の息子を殺した犯人の親の仇なんですよ)」

「あ…………悪かったわね、自分の部屋があるならそこに戻ってなさい」

「そうします、では」

「ごめんなさい」

ヤミさんは俺に向かってサムズアップをしつつ部屋を出て行った
「どうしよう……神父さんにああ言った手前言えないんだよな」
両手の人差し指を突き合わせながら迷った。

「そんな指してかわいく見せたってダメなものはダメ」
そんな……

「(モグモグ)……どうせなんか判明すれば署で色々吐かされるんだから今吐いた方が楽なのは変わらないわよ」

「今そういう流れなんですか？」

「そういう流れよ、さあ……言うの」

「場所変えましょうよ、ここじゃ声出して言いづらいです」

「良いわよ、場所はどこ？」

「俺の宇宙船」

「分かったわ、具合が悪くなったら通信で言って頂戴」

警部は満足した様子で出て行った、ああ言った後俺が言わないとは思ってなさそうだな。

「すみません、神父さん……」

俺には、覚悟とかはない、例えつもりでも敬っている人間達を敵に回してまで秘密を守るとかの覚悟はない、1対たくさんじゃあ、勝ち目はない。

「どうして？」

チヨはいつの間にか怒っている、感情のシフト速すぎなんだが

「どうして自分に危害を加えた奴なんかに謝る訳？」

「頼まれたんだ、あいつの事」

「それは知ってるから、もっとうこう」

知ってたのか、そっか

神父さんは俺を殺そうとした、そんな人間から頼まれた事……ライムを頼む、一蹴してしまうべきだったのかもしれないけど

『目の前で困っている人間を見捨てられなかった』

そう言っていたのを思い出すとそうはできなかった、間違っではいるんだ、人の命を奪うなんて、でも何のためにやったのかっていう想

いだけは尊重しなければいけない。

「神父さんは間違っている、でも他人のために動いてた、そんな人に頼まれた事をやりきれなかったんだ、悪いなーとは思わないか？」

「私は思わない、そんな結局大した会話もしてなかった人の気持ちより、私にはそいつがシロの仇になってたかもって事の方が大事」

「チヨはチヨで正しいと思う、こういうのは一度でも分かっちゃまったら負けなんだ。」

「私のももつと分かって欲しいのにな」

「へ？（ぽかん）」

「んーん、なんでもない、たい焼き食べよう」

チヨは俺の口にたい焼きを突っ込んできた、熱……………くはあるが舌を焼かない程度だからいいか、クリームのもつたり具合に感謝、ん？カスタードクリーム味だ、やった

「やっぱり地球のお菓子おいしーい」

「その言い方、さては俺が寝てる間に食ったな」

そう言いつつ俺達は滅茶苦茶袋の中のたい焼きを食った
〜数十分後〜

「行くんですか？もう」

警部に連絡するのも終えたから俺達はヤミさんに挨拶に行った

「体は動くしたい焼きはおいしいからもう大丈夫だ、多分」

腕を回してみたが問題はない

「なら良かったです」

「姉さんは親友について知りたい事とかは……………？」

一回も知れたそうな顔でこなかったから聞いてみた。

「聞いても、言わないでしょう？」

ヤミさんは笑顔で応えた、しかしちよつとばかり顔の特に目の辺りに曇りや陰りのようなものが見えた。

どの程度かは知らないけどある程度気づいているんだ、そう悟るのに時間はかからなかった。

「ああ、そうだな」

俺はヤミさんに手を振りながら玄関を開けた。

「顔、また見せに来てくださいね」

「約束はできない、だから待たないでくれ。その時は連絡を入れるから」

「ならちゃんと入れてから来てください、あの人もアポなしだと出てこれない可能性大きいので」

デビルーク王もセットか……一度目口論、二度目は吹き飛ばし、バツが悪いというか、今度直接会ったら謝ろう。今は警部と合流するのが先決だ。

一方そのころく

く高級車の中く

「まったく師匠の事教えてもらえなかった」

美奈子はがっくりと落ち込んだ、シロに美柑の事をあれこれ聞こうとしてティアーユ宅にやってきたが収穫はほぼ0、むしろお叱りの言葉だけしかもらずに今車に乗せてもらっている。

「知りたい事があるなら根気は必要だ、焦るな」

「ところでザステイン様は」

「行くところがあると言っていましたわ」

「大丈夫でしょうか、一人で行かせても」

「待つてなさい、ええ……」

ナレーション風）天条院家の現当主、沙姫は地球でよく迷子になる夫のためナビゲート用のアプリをケータイに搭載しているのだ、人工衛星を利用してそのため上からの指示になる。

「見つかりましてよ、ほら」

「流石です、沙姫様」

「流石です、沙姫様」

「ナビゲートクイーンの座は私がいただきますわ、ザステイン様は………ひつついてますわ、シロの宇宙船に………ひつついているザステイン様、見事ですわ（うつとり）………でも、落ちてしまったら、ザステイン様ー!!」

「すぐにヘリの手配をします!!一番近い所は……」

く一方そのころく

俺達の宇宙船にひつついているザステインさんを見つけた。

「ザステインさん……何をして」

鎧姿のまま宇宙船にひつついているザステインさんはさながら季節も相まってセミのようだった、こんな雪化粧をしたようなセミがいてもあれだが、嫌、いたような気もする。どこの惑星だか忘れたけど

「ムッ」

ザステインさんは俺達に気づくと飛び降りてこっちに向かっていた。

「すみませんシロ君、なんとしても知らなければならぬと思います……」

「ああ……」

ザステインさんに知られたら、王様にも行き着く。それだけは避けたいのにな、けどもう引つ込みがつかないから仕方ない。

「仕方ないですね、警部とその事について語る予定でしたが、」

「是非!!」

「宇宙船の中」

「なるほどね」

警部は俺を待っている間扉付近でピザパンをかじっていたようだ、ポケットには袋が見えている。

「私も参加させていただければ」

「デビルーク王室親衛隊隊長、あなたの事はそのかわい白猫と同僚から聞いているわ、せっかくだしあなたも加わりなさい。ただし部外者に広めてはダメよ、デリケートなデリケートな話をするんだから」

「心得ております。」

「どうぞ」

コップに水を淹れて警部達に渡した、後でよく洗っておかないと……

「あらありがとう、思ってたより気が利くわねえ」

「身振り一つ教われれば身につきますよ」

「彼女はどうしたのかしら?」

「ベッドで不貞寝するそうです」

「そう、じゃあパパッと吐いてちょうだい、あなたが見たもの、あなたが誰かを庇いたくなるようなものを」

「シロ君、頼みます」

始めるか

「そうですね、俺が見たのは彼女が身ごもっている事が分かる写真です」

「それを見てあなたは心臓を攻撃されたのね、でも疑問があるわ、子供の父親は誰？知らないなら知らないで良いけど知ってそうな顔だから」

「誰でもないかもしれないですよ、ひとりでに……………なんて」

「茶化さないでください!!」

ザステインさんに怒られちゃった

「これはあなたが悪いわね」

仕方がないか、ここまでできて濁すのも不自然だし

「美柑様の健康状態は宮殿の方達によつて把握していましたが、また地球人の生態も勉強しております、よほどの突然変異を除いて我々と同じように男女一对、また人工的な方法でなければ産まれないと、例外はあつても女性しか産まれなかつたりすると」

「なら少し更新が遅かったですね、お腹の子供の父親は……………王様、デビルーク王だそうです」

「!!」

ザステインさん驚いてるな……………そりやそうか、そりやそうだろ。

「本当……………なのですか？」

「俺の耳……………じゃなくてナノマシンが聞いた感じだとそうです」

「ならシロ、犯人はそれを知つて彼女に恨みを持つようになった誰かかしら？例えば……………王様のお嫁さん達の内の一人……………とか。そういえば第二王女が先に来たつて言つてたわね、それつてひよつとして……………」

警部がそう言うつとザステインさんは警部を睨んだ。

「下手な憶測はやめていただけですか？言つて良い事と悪い事があ

ります」

「そうですよ、あのタイプの女性は悪い事考えたりしたりすると顔に出ます、むしろそういうの双子の妹君の……」

「ザステインさんは無言で苦笑いして俺を見てきた。」

「やりそうな事ですが俺の印象だと色恋沙汰においてはただれた方をお好みのようなのでないと思いまーす。」

勢いに任せて言い切っちゃった

「シロ君……」

「すみません」

元第三王女に知られませんように

「話を戻すけど、悪いわね……でもやめないわよ、色々な可能性を模索しないといけないの、私達それが仕事だし。自分に注がれるはずの愛をよりにもよって彼の妹に取られる、それを羨んでの犯行……という所かもね、逆も然り……彼女に言い寄る男達の誰かが自分になびいてくれない理由がそれと知って……」

「どれも外れです、警部」

「あらやだ」

「彼女を殺した犯人はやがて産まれるはずだった子供です、成長した彼女の子供が未来からやってきて彼女を殺したんです」

それを言うのと周りはいしんと静まり返った

「本当……なのですか？」

「らしいですよ、神父さんの言うには」

「やっぱり時間警察の管轄なのね」

「思った以上に核心に迫りかけていたか」

急に今ここにいる俺達とは別の誰かの声と通路を歩く誰かの音が聞こえてきた、ちよっぴり鎖と衣服が小刻みにぶつかるような、鎖を足に巻いている奴が歩いているのが分かった、侵入者？

「良いだろう、僕も語る時が来たという事にしておこう。」

「!？」

アサキム・ドーウィン!?!いつの間にか？

「アサキム・ドーウィン!!金色の闇の一件、覚悟してもらおう」

ザステインさんは奴の名を叫びながら剣を持ち、奴の方へ向かっていった

「ちよつと待つてくださいいよ、変な事したら俺の船がー!!」

「む、すまない。」

ザステインさんは剣を振るおうとするのを止め、さっきいた場所に戻った。

「ありがとう、さすがにここで狙われると逃げ場がないからね。」

「人の宇宙船の中に忍び込んでまで何の用かしら？」

「まず一つ、シロ……だったね？君が生きていたと聞いて、君が倒れている時僕の仕業だと思って銃を構えて叫ぶ子がいたんだ」

「チヨ？………マジか、今更だが余計に悪い気がしてきた

「迂闊だったね、と言つてもう一つ。僕も君達の話に混ぜてもらいたい、答えを知りたいんだろう？」

「何故今更なのだ、リト殿達は聞いてもはぐらかすばかりだと」

それについては多分また知ってる事を話したくなってしまったのだろう、真実を究明する側からすれば一応助かるけど

「君が黙っていればいい話さ、そう思わないか？」

アサキムはザステインさんの肩を叩き、にっこりと笑みを浮かべた。

「そうかもしれないがシロ君、証拠は………あるのですか？」

「神父さんは……ちよつとな……」

神父さんが過去の人間だつて話が事実かも知らなければいけないし

「時の砂を解き明かせるなら良いけど、そうはならない。何せ名前すら分かってないからね、でもデビルーク王……彼の息子……ライムと言つたっけ？賭けにはなるけど役目を終えた彼の秘密を守りし包帯、そこから因子を採取できるはずだ。」

「ああ……今王様の故郷は夏だ、汗をかかない訳がない。頭全体を巻いてるんだからかゆくなくなるだろうしいつも隠さなければいけないって思ってるやつなら上からかくかもな、後は包帯とデビルーク王からDNAを調べれば」

だから、クーラーをつけてないと動きが鈍る

「既に現地で見つかったっているわ、ありがとう、これで調べられる、どの組み合わせが正解なのか分からなかったもの。協力者は付着物を解析して調べるっていうやり方を、ご存知ないみたいね」

協力者か……神父さんはまあ協力者であって共犯ではない、はずだし

「彼は過去を生きた、今は亡き人間だ。己から知ろうとしない限り過去と未来の叡智の差を埋められる事はない」

「息子の方もそこまで頭が回ってないみたいだ、あ……特にこの辺秘密裏に頼みますよ」

「分かってるわ」

「教えてくれ、何故リト殿の子とあろう者がそのような恐ろしい事を」

「一言で言えば禁忌への拒絶だろうね」

禁忌………確か話に出てきた奴は結城美柑の息子、デビルーク王の息子、つまり………

「デビルークの法は知る由もないけど、同じ血を汲む者同士の間で命が産まれるのはタブーと見られているんじゃないかな」

「だからと言って才培殿達はそれで孫に対して態度を変えるような人間では」

「そんな風に産まれたんだって知った時、産まれた子供は果たして己を保てるだろうか？」

俺がそうだと仮定してみる……立ち直り自体は早いと思う、親の問題だ、俺が産まれる前の親の選択なんか面倒見切れないうって、俺がヤミさんの弟かもってデビルーク王夫妻に言われた時だってそんな感じで切り抜けた、けどこの手の問題は2つある、一つは自分が理不尽を感じた時の答えになつてしまう事だ、もう一つは、その事実が心に刺さる事、強烈なストレスになつてしまう。

どれもそれが悪い事だって刷り込まれてるからそうなるんだがそれだけに参る奴はとことん参る、そんな自分にふさわしい所に堕ちていくんだって結論づけたら、その現実から目を背けようとしたら、だ

いたい心に傷ができて自己否定に陥るだろうよ。

「それはそうとあなたは知ってるの？彼女が去った理由、おそらくだけど発覚を恐れただけじゃないわよね」

少し、昔話をするとしよう

「そのくだりは必要なのでしょうか」

「必要さ、この場合はね」

昔々、地球のある所に仲のいい兄妹が住んでおりました。

兄はある日、好きな女の子に告白するかしないかで悶もn

「長そうなのでカット」

兄は大人になると他の星のお姫様と、好きな女の子、その他の女の子達とも結ばれるのでした。

「その言い草ではまるでララ様が二番目みたいじゃないですか、後お姫様”達”です」

「良いじゃないか、恋で二番目になっても愛で一番になれば、お互いに愛を注ぎ合えて幸せならそれでいいの *satisfaction* !!」

「言われてみればそうですね、ララ様、ナナ様、モモ様の結婚式は流した涙と共に魂に刻んでおりますとも、あの心からの笑顔、そこに偽りは無い」

「今そういう案件じゃないのを忘れないで欲しいわ、それをできるハードルがもう少し高い子の話よ」

「では、続けよう」

妹は、それを悲しみました。だって妹は兄の事をめおとになりたいとおもうまでにすいていたのですから

「き、気づかなかった」

「噂でよく耳にはする話だけどな」

妹は一度はあきらめようとしておりました、ですが兄と結ばれた女の子達が幸せそうにしているのを見ていつしか自分とも…と思うようになっていくのです。

「前置きが長いわよ」

「あまり急かさないうで欲しいな、そして彼女は一服盛るんだ、邪魔が

入らないように、後はいいだろう」

そして…時が過ぎて

「美柑って人の腹が膨れるんだな？」

「まだそこまでいかないよ、そこまでいなくても分かるんだろう？」

「ええ、分かるわよ。一応調べられる」

彼女に命が宿ったのでした

「何故分からなかったのだろうか？」

「デリケートな問題よ、本人が誰の手も借りず自分だけで調べたのなら分かりつこないわ、それに彼女は実質ですらまだ結婚した訳じゃないでしょう？」

そうなった彼女はある日までは兄と本格的に結ばれる希望と、両親との確執という絶望を抱いていました、でもこれで良いのだ…いつかは受け入れてくれるだろうと、思っていました。

ある日の事でございます。

妹は兄の嫁の一人とアトランティスの遺産の展覧会に行く事になりました、希望と絶望は同じだけあるぶん身動きは取れない状態でしたので遠くに行つて心の整理をするためです、親しすぎる人間とは行動しにくかったのです。

「黒咲芽亜だな」

「そうだね」

絢爛豪華な物ばかりが辺りを彩る中一際目を引くと言って兄の嫁はある球体に近づきました、妹もそれに近づきました。

触れたその時球体スライテの光と共に妹と兄の嫁は見てしまったのです。

妹がこれから生むであろう命が歩む道を、その命が自身の生まれに苦しむ様を、何度も苦悶の叫びを伴いながら消えたいと願う所を、いつしか自分を妹ごと消すために過去へと遡ってくる瞬間を

「というのが結城イチゴの話」

「俺が聞いたのはライムなんだが」

「魂、そして器自体は何も変わりはない、ただ産まれる場所が違っていた」

産まれる場所が違う、極端に違う場所なら名前を考える人が変わり、それと同時にデビルークのぶ厚いボディガードが最初から無い状態を意味する、もし命を狙われているなら運命は変わる。

「イチゴはやられたのか？」

「少なくとも、イチゴは望みは果たせない」

妹はいたたまれなくなり、兄達の居場所から消えました、ひどい悪夢と片付けても心に響いた息子と思しき男の子の叫び声が心にのしかかったのです、相談する気力が湧かなくなる程に。

「君が今持つているであろうスフィアの力か」

「そういう事さ、あまりにも突然の接触だったから黒咲芽亜もスフィアに順応しきれなかったみたいだし、何よりそれが未来に起こりうる出来事だとは分かりきれなかった」

『嘘だと思つた、それに私の知っているのは何故彼女は出て行つたのかであつてどこに行つたのかはわかつていない、そんな状態で言つてしまえば余計な風聞が付くだけ………変に空気を悪くする訳にはいかないし、でもガーランド君の一件で本当の事だつて証明されてしまった、スフィアの示す通りに行けばガーランド君の仇の妹と会えたから』

「覚醒に至つた時、もう事は起こり手遅れだったそうだよ」

「大好きなお兄ちゃんと結ばれようと願つてした行動が否定されるつて訳ね…：よりもよつて子供自身に、王様はそれを知つてるの？…」

「何を知つてるつて言うんだい？彼女の想い？それを遂げた事？知れば受け入れるだろうさ、彼女の想い、彼の存在を、彼らはね…：でも彼らは知らない、受け入れられない者達の心を」

知つてても、どうしようもないものもあるつてか、受け入れるのに必要なものがライムには無かつた事になる

「ライムつて奴は他にたどれる道は無いのか？」

「イマジンを率いて時の運行を引き裂く道、失意に吞まれながら腐る道、自身が王となるまで兄弟親族もろとも命を狙う道、それかそうするフリをして自分の命を狙わせる道、どれだと思う？人外に至る

というのもあるかも」

「聞くの間違えた、ザステインさんが憤死しそう」

「何故、そんな道ばかり!？」

「時の運行は不条理すら束ねるからね、自分を認められないから、自分だけの居場所が欲しいから、そうは言っても兄弟達の代わりに自分が王になるなんて無理だ、そうだ自分が消えよう、そうすればいいと思ったから、後は目立つから、いつそ人で無くなれば心が楽になると思ったから」

目立つと言われれば確かに目立つかな、悪がつくほうだけど。

「推論なら語らないでくれますか!？」

「そうならない保証はある?」

アサキムとザステインさんはその発言の後にらみ合った。

「でもその息子が犯人とは言いづらいわねえ、包帯の持ち主がデビ
ルーク王の隠し子、と判別はできてもその子が犯人である証拠って言
える凶器がないもの」

「え?そういうオチ!？」

「結論は君達に任せよう」

アサキムは部屋から出て行くこうとしているのかもたれている壁か
ら離れた

「行くのか?」

「話す事は話したからね」

「アサキム・ドーウィン……情報提供は感謝する、それが真実とすれ
ばだが、嫌、耳に入れたくない事も混ぜられていたような」

「夢や幻と断じてても良い、全て塗り替えれば、その境界に意味は無く
なる」

「!!それってどういう……」

事か?と言い切る間を与えずにアサキムは出て行った。

「とりあえずハッチは開けとくか」

言葉通りとりあえずハッチを開けた、空気抵抗が凄まじくなるから
数秒で閉めた、確認してないが無事に降りたと思っておこう

「ザステインさん、どうします?」

て意味合いもあるんだな………と結城イチゴ？ライム？の存在から学んだような気もする、ハーレムが男の夢とすれば結城ライムは叶った夢という光に潜む暗い影、両親の歩く道はある程度子供の物になる、それは感謝できれば嫌に思う事もある。

嫌になった奴は大抵は諦めるけどお前は違う、時を遡れる事のできる力を持ってたって聞く。

だからお前は歪んだ方法で望みを叶えようとした、お前の痛みには寄り添うべきかもしれないが何であれ俺達はお前のやり方はを否定しなればいけない、過去そのものを変えようとするのがまかり通つてしまえばいずれ自分に都合の良い時間を賭けての椅子取りゲームが始まるから。

自由って、難しいな………

第三十六話 ライムルート 過去、回想!!オレ、演奏
!!

「次元の道を開き、マイクロンとルナテイク号の力を利用してどこかへ星帝の魂を押し込んだのは良いけどさて、どうしようか」

美奈子の様子を見に行く

来夢の様子を見に行く↑

「結城美柑、そして彼の王の罪の証たる忌み子よ…今君は何を見て、何を思う?」

アサキムはシュロウガから降りてリト達を警戒しつつ来夢を探した

「?????
」

「お前、来夢って言うんだな…」

そんな言葉と共に、一人の異星^ナの王妃^ナは立って歩くか否かの幼い肉体を抱き上げた、相当慣れていたのか子供の動作に慌てふためく様子はない。

「よろしくな」

その時を皮きりにオレの記憶と時間は刻まれていった、命を慈しむような優しい…それでいてどこか困惑の入り混じった表情、後から来る女の人達も話しかける言葉こそ違えどそれはあった、周りの大人にも…その困惑の正体を知った時、オレは…

↓教会の内部↓

夜、本格的に出て行く前にオレは自分の服とあるものを取りに教会に戻っていた、自分の部屋に隠していた一着、それはあの日着ていた服だった、黒のズボンに赤いシャツ、それとポケット付きの黒ジャケット、黒色のブーツ、隠していたのは調べられれば製造された年がばれてしまうからだった、裏をめくると分かるがどれも今から14〜16年後に製造されたという情報が載っている、暑いのでジャケットを除いてそれらに着替えて、昨日まで着ていた服を洗濯機の中に入れてスイッチを入れた、服が少しだけ窮屈なのはあの日から成長してい

たという事だろう、心ではなく体が、一応ベルトもあるがパスが壊れたから無用の長物感があるし放置。

「あれから一年と一ヶ月か」

あの日…星がきれいに光るあの日、本来はある修道士が誰かに嫉妬を覚える日、今……：て言い方はおかしいが今は母親である結城美柑を腹の中にいる己ごと殺した日

「本来ここにいるべきオレはいるとすれば1歳になるかならないか…だったな」

一応当時の出来事は記憶に刻んでいる、オレの記憶だと今から1ヶ月程しておじさん達がやってきてオレは母親と共にデビルークに連れてかれる、気になるって言うてくつついて来たシロさんはオレの事で騒いでたな。

リピートタイム（この会話はライムが余計な事をしたためライムの記憶にしか存在しない）

『デビルーク王、その子と貴方の妹はここに置いていった方が良い』
『どういう意味だ』

『いないものとして扱う、それがその子にとって一番だ』

『そういう訳にはいかない、こいつが誰の子だと思ってるんだよ!』

『分かってる、だから言うてるんだ。その子がいつかその事を知ったら、その重さで心が歪んじゃまう、そうになったら……その子は……』

『テメエがライムの運命を決めつけんな』

『貴方なら決めていいとでも?』

『そうは思っていないけど、無視できる訳ないだろ?こいつを』

『それはそうかもしれない、だがそうしないとその子の世界は暗くなってしまうのは分かりきっている』

『信じてくれないのか?そうはならないって、きつと大丈夫だって』『信じるだけでできると思うな、それだけじゃ何も変わりはないんだ、後手後手に回っても知らないからな』

『うるさい方々はほつといて向こうへ行きましょう、ライム。』

リピートタイム、終了

それでシロさんは、結局折れちゃった。

ばあさんじいさん？母さんが生きてても死んでもショックで数日考え込んでたな、原因はオレがいたから、父親は誰かって話になるだろう？聞きたいか？教えねーよオレの情緒のためにな。

オレはあるもの……ブラデイクスをマトリョーシカのように詰まった箱から取り出し、ブラデイクスの刃を覆っている包帯を外した、他は外さないように刃の部分の包帯だけ外してハサミで切った、グリップの部分は丸くなるまで包帯を巻いていたから握り心地は良い。

「やあ、ブラデイクス、お前まだ死んでない？」

この剣は名残だ、あの日からずっと包帯で包んでベッドの置き場に放置していた、オレが電王であった名残。血をエネルギーとしている都合上吸わせていない今は餓え過ぎて動けもしない動物と似たようなもんか、他がエネルギーでも同じだけど。

「ああ…そっか、意思がないからどっちみち何かをいう事ができなかったな、ごめん。」

この剣はおじさんと凜さんの馴れ初めになったブラデイクスじゃなくて、開発者の記憶から過去に行ってイマジンと戦っている最中どさくさに紛れて設計図をコピーして作った 作 電王ベルトのブラデイクスだ、持つのにてこずったけど一度持ったら酔ったように何も言わなくなつたんだ。

凜さんにすら接触してはないから安心……じゃないな。

「刃は……こぼれてないか」

この剣の赤いピカリ具合を見ると思い出す、電王として戦った記憶を、デンライナー越しに宇宙を飛び回った思い出を……まあ使命を放棄したオレにはもう関係ないけど。

一旦オレは顔を洗った、ずっと包帯を巻いていたからこそ際立つ開放感と爽快感を味わいながら……

そして洗濯を終えて衣類を干した後教会の聖堂にあるパイプオルガンで曲の演奏を始めた、脳内や、心に刻まれた旋律に則って弾いてみただけなので曲名はない、分からないと言いかえてもいい。

センスはここで産まれておじさん達に連れて帰られるまで、それか

ら11の時までたまに遊びに来る時に磨いてきたから外れた音程は出ていない。

教会の人も母親も自分の事を黙ってくれて、それか適当にごまかしてくれていたらこんな事にはならなかったと思う気持ちはあるにはある、オレの知っているおじさんはオレの存在を知れば迎ええない訳がない人間なのだから、それがスキャンダル火種の火種になる爆弾のようなものであっても。

その判断はやがて悲劇に繋がる。

「あの曰く」

「オレの名前は…来夢だ」

苗字なんて思い出したくもない、だが忘れてる訳じゃない、気にしないように気にしないように考えて結局気にしてしまうのと似ている、それはさておきどうしても名字を言わせたい人間相手にはこう答える…結城…結城来夢と

「^{イチゴ}苺悟じゃなくて…ライムなんだ」

名前が違うみたいだけど来る事を分かっていたのだろうか、目標はあらかじめ組んでいた段取りのように近くのベンチを指差し会話を促してきた。

「座って話そう、良い？」

言われるままに、ベンチに座りあれこれと喋ってしまった、今でも何故だろう…と悩んでいる。どれだけ憎んでも母親だからなのか…？好物はプリンで自分でよく作って食べたりオーナーに振る舞ったとかの話や愛読の料理雑誌の話にはぐいぐい乗っかって来た、プリンは良い、甘くておいしい子ども頃自分で作ったらララさんも春菜さんも他の人達もみんなおいしいって言って食べてくれたしみんな好きなんだよ、きつと。

その反面住所と通ってる学校の話をするにつらそうだった。どっちも彩南じゃないしこのあたりじゃないからな、オレ…：目の前にいる母親と住んでる訳でもない、記憶喪失って事で面倒を見てくれた人がいてその人達と住んでいる。

「オレの周りの人間で本当の事を知ってるのは真兄さんと他校まで

来て王様気取りのヒカル様と教育実習生の風夏姉さんで充分だよ、それ以上は、イライラしてしまうんだから」

ヒカル様とは小学校までは一緒だったがおレに色々あってな……高校の文化祭で再会した、他校からだから一般客だけど……真兄さんはヒカル様と一緒にいたりいなかったりする自由人だ、あの親達からどうしてこんなのが産まれたのかと周囲から疑問に思われている。

「……………」

なんの因果かおじさんと春菜さんの娘、風夏姉さんはオレの高校に教育実習生としてやってきた、オレの顔を見てびっくりして放課後とか色々聞いてきたな……その時は記憶喪失真つ最中だから良く分かって通した、みんな心配してるから帰ってこいとは言われたがおレには無理だよ。

「リトは……元気？」

「姉さん達から聞いた所だとまあ一応はそうらしいね、顔実際に見てないから知らないけど」

本来これってダメなんだよな、未来の話するのは……嫌違う、未来から来た奴が未来の話をするのは……例えばだ、一組の男女がいるとする。

そいつらはどっちか、あるいはどっちも相手に片思い真つ最中だと考えるとそいつらに未来の事言ったらどうなると思う？成就しないと伝える分にはまだいい、まだ嘘だって突っぱねてくれるかもしれない、だが成就したと言えば緩む可能性が捨てられない、安心感がその未来を掴むかもしれない、一生懸命必死に振り向かせたいと頑張って頑張って成就させたなら尚更だ。

子供がいるなら成就するしないを言う事自体アウト、だって何かですれ違うだけで子供の特徴、能力、容姿そして未来すら変わるからね……何？そこまで考えてられないだど!?考えよう、考えないとオレみたいなのができるから。

なら何故彼女に言ったかって？宿ったんだから確定事項、それにアウトな所まで踏み込んだつもりはないしよく言うだろう？死人に口無しって

「ライム、今日はもう遅いし……寝よう？ 続きは明日」

明日になれば他の修道士達の目にオレはつく、それじゃあ今やってきた意味は無くなる。

「ここで覚えたレシピ、まだ試してないから、感想教えてくれたら嬉しいな」

何作られても感想なんか言える訳ないだろう、オレは目の前にいる奴が何年か後に振る舞う料理食ってるんだぞ!! 多分そのレシピ数年後作るだろうして先入観が入れば当然比較対象はそこになる、時間が人の手腕を洗練させるなら過去に対してはオレはダメ出ししか出せないんだよ。

「前から予定していた奴か？」

「……………違う」

「だったらお断りだ、用は今済ませる」

「ライム!!」

じりじりと迫るように近づくオレを彼女は制止した。

「ねえ、止めよう、リト達がいじめてくる訳じゃないなら……」

「オレは、あそこにいたくないんだよ」

出生の事を知ってからいつも心臓辺りが痛い理由と目線にイコールがついた、そしてそのイコールは一度つけば決して離れない

姉達からは1歳頃の出来事をあんまり引きずつちやダメ、そもそも他の女との子供だなんて最初にちよつとくらい関わり方を迷わないわけがないとは言われるがこっちは繊細で傷つきやすい人間なのだ、あんな事を知ればみんなにそっぽを向かなければ耐えられるものじゃない。

でも、そっぽを向かせずに向き合わせようとするばかり、嫌だ、受け入れたくない、受け入れられない。

「私だつて嫌に思った時もあった、本当はここには死にきたんだ……どうして良いか分かんなくなったから、博物館で球体に触れてあなたの叫び声を聞いて、あなたが私を狙いに王宮にやってくるのを見て……あなたにあそこまで否定されるのかつて……でも……それでも受け入れてくれる人がいてももしかしたらそうはならないかもつてここ

に来て思えるようになって……………」

「そうなったからオレが今ここにいるんだけど」

「分かってる、でも……………でも私のお腹にはライム、あなたが!!」

「今更なんだよ、オレの事なんて、オレがどんな目で見られるか、どんな嫌な思いをするかなんてお腹にできるまで何一つ考えてこなかった癖に!!」

オレが産まれるような事をする前にちよつとでも何を抱え込むかとかを顧みれば思い至ったはずだ、そうでなくても、濃くなつて腐るものがあるっていうのに。

『自分の母親にそんな事言っちゃダメじゃない!!一緒に行くから謝りに行く?』

華姉、オレはあんたのようにはいられない。謝つて済むのは精神的な問題だけで済むからであつて、オレみたいな親の欲望の排泄物ができたらもう取り返しはつかない。

『ラブコメ×ハーレム物にそれを言っちゃおしめえよ。登場人物の子供である僕達自体異物なんだから、まあ異物つて言葉じゃあ僕が一番だろうけど』

真兄さんめ、さっきのセリフを叫んだ時に一人だけ怒るでもなく叱るでもなく慰めるでもなくあんな事言いやがつて。どこか他人事のような、俯瞰して見てるっていうかオレ達とは別の視点から見下ろしている人間からの言葉というか。

「!!」

「親の選択つてのはな、全部子供にぶち当たるんだよ!!育て方、産み方、誰を相手に選ぶかとか、生き方とか、それらは全部烙印になれるんだ、同じ血が流れてる、だからお前もそつち側なんだつて!!」

「ライムは、やつぱり……………私じゃ嫌?」

親のどつちかが違つていればこんな風には思わなかつただろう、周りと争いなんて起こさなかつただろう、自分を愛情を受けるにふさわしい人間として見られただろう、嗚呼、興奮で手首がうずく。

「親つてのは子供がそいつの事を語る時、誇らしくなるような人間

「……………」

アサキムはアツパーカットでオレを吹っ飛ばした後じつと睨んで黙り込んだ。

「ハア……ハア……なんのつもりだ!？」

「やはり未だに囚われているようだ、己の宿命から解放されるためにこの時代にやってきたはずなのにね」

「だったらもう放っておいてくれ……」

「そうもいかない、よくよく考えれば特異点の記憶を持ち込んだままで未来を変えられるか少々不安になってきたしね」

そういえば目の前にいるこいつは過去を変えたんだった、それを聞いてオレは奴にイマジンを閉じ込めているカプセルを渡したんだったつけ……何故か?気まぐれのようなものだ、オレがカプセルを割ってイマジンに取り憑かれて過去改変をするとちよつとした矛盾を起こすだろうから奴に使ってもらう方が成功率が高いと思っただけかな、オレの記憶の中で一番鮮明なのは10年後、母親の秘密を聞いた瞬間だろうし、その時ミミ姉さんも兵士達もいたから振り返りにあつておしまいだろうな。

昔契約してたイマジンの事が懐かしくなった。

オレが自分の過去をつぶした事でデンライナーの中から消えてしまつて、出会わなかつたつて事にされたらしい、そして特異点であるオレだけは改変を受けずにここにいる。

それはそうとしてベルトがやってくるよう念じた、今まではそうするとやってきたから。

「来い、来い!!………来ないか、やつぱり」

パスのないベルトはコントローラーのないゲーム機、嫌、本体のないコントローラーみたいなものか、それがないともう何も動かす事はできない。

「パス、壊れたんだろう?」

「はは、悪意の神様ももう……力を貸してくれないみたいだ、パスとベルトに宿つてそれぶつ壊したからかな」

オレの心に宿つた悪意の神様の事を思い出した、おそらくは宿つて

いた……

人の心に神が宿るのは導いて欲しいからなのかもしれない、それなしではたどり着けない、それかたどり着けても実行に移せない結論に踏み込むための超然とした何か、安心させるための何かに

11歳の時にオレは異世界とやらに行ってきた、詳しくは割愛するけど逃げたかったからだ、あそこは目立つ、オレみたいな人間がいる所じゃない。それっぽい神様に会ったから頼み込んだけど断られて、叱られて、叱られて、それでいじけて飛び出して、知らない所に行き着いた……会った人の4割が耳にメカをつけていて、その人に話しかけるとデータ照合不可能って言って警察に通報してきた時もあった。

でその時デビルークの王族……モモさんやナナさん、ミミ姉さんにコ姉さんの礼服？普段着？を着ている謎のお姉さんに遭遇した、その人は他の人ののは青いのに赤く発光したメカを耳につけていてオレを見て保護者面をしてその場を切り抜けた後どこかへ連れて行って嬉しそうに話しかけてきた。

『分かるよ、あなたの心に大いなる悪意が宿る』

『お姉さんは何を言ってるの？』

お姉さんはおもちやを一つ渡してきた。

『あなたの結論が決まった時にこれを使うの』

白と赤と黒の……黒い容器に詰まった日の丸弁当を思い起こさせるようなおもちや……オレは一旦もらおうとする手を引っ込めた。

『ごめんなさい、オレお金がなくて』

『気にしなくていいよ、お金はいらないからほら受け取れ受け取れ』

お姉さんはかがんでオレのポケットにそのおもちやを突っ込んだ。それから対になるベルトっぽいおもちやをもらう寸前でどこから飛んでやってきた異母兄である九条真の振るった謎の武器により両断されてしまった……彩南高校の制服でもなく、執事用の服でもなく、社員とかが着るスーツだったのは謎だった、大学の受験シーズンでも就活中でもないはずなのに……言動と顔はほぼ本人だったから信用してたけど、今考えれば怪しい気もする、赤い鳥人っぽいのが空か

ら飛んできた後、俺は兄さんにどこかへ連れて行かれた。

『帰ろう、「元の世界へ』』

その時ごねた結果オレは記憶を消された、手段はよくわかんないけど兄さんの判断にはありがとうと言わざるをえない、元の世界に帰った後でも穏やかに過ごせたから……電王になった時から戦いが多いからそう言いづらいけど。

ただそれは記憶が戻る17歳までの話、急に戻ってきたオレの記憶の事が分かるのかおもちゃも発光した、まるでオレの痛みを感知したように。オレの存在を利用しようとする奴にムカついた際おもちゃのボタンをいじくったら起動音、強烈なエラー音、「時間と共に積み上げた悪意はやがて時を越える」という意味の英語の音声がかえってからおもちゃは液化化してパスに入り込みパスとベルトの色が変化した、まるでおもちゃのデータを全部パスとベルトに移植したかのように、どんなおもちゃであれ音声付きならそうするためのプログラムやデータはある……はずでありそう考えれば不思議ではないが……そのパスとベルトで変身すると普通じゃない変身になった。

「君自身の怨を向ける先はもうない、君に悪意を向ける人間、悪意の根源とは君が決着をつけた、そして君自身を知る人間は殆どいない、そう君自身が思っているなら君の言う神が何者だろうと……」

力を貸してはくれないとアサキムは言った、言う通りではある、一度悪意を晴らした以上ダメだってオレ自身分かっていた。

「まあ一旦その話は終わりにしよう、それより僕はあまり見れなかったんだ、彼女の眠るとされる場所」

「案内しろってか………来いよ」

オレはブラディクスを回収してから奴を母親の墓まで案内した。そこで何か悪い事はしないだろうと思った、する必然性も目的も見当たらない。オレがアサキムだとすればだが

「……ここがあいつの墓だ、ていっても中には箱に入れた髪留め用のゴムだけしかないんだがな」

遺品として使えたのは母親が家出してきた時に身につけていたものだけだった。使わせてくれた部屋の中に一つだけ、家出の時の服は

なんだか………て感じだし、土の中に服入れるのってどうなんだ？箱詰めしとけば良いのか？

「ばあさん、じいさんには言ったがアイスクャンデー系統は溶けるし腐るしたかるしおすすめはしない、果物は早めに回収しなければいけないし、おすすめは梨の花だ」

梨の花、梨の名前を冠する人間の事を好き人間へ送る精一杯の皮肉、意味はばあさんじいさんには気づかれていないはずだ。

「僕は彼女に捧げる物はない、それより一つ聞きたい事がある」

「何かあんのか？」

「大切な事さ、君の目から見て彼方へと旅立つ彼女は苦しんでいたかな？」

「ばあさんじいさんからも聞かれた奴だそれ……」

「まあ苦しいだろ、普通ならまだまだまだ余裕で人生を謳歌できる内に死ぬんだから」

「そんなありふれた言葉では僕の心は満足しない。思い出すが良い、あの日、君自身の目を見た彼女の最期を、君が己ごと葬った母親の様子を」

やつの事を思い出した、あくまで一瞬でケリをつけられるように、一応できるだけ苦しめないように必殺技を撃ったから体の痛みはないだろうと思う、だけど心の方はどうだろう？あいつはオレが来る事を知っていた、てことはオレがこうなるって知ってたはずだ。

だったら苦しいだろうな、禁忌に触れてまで欲しかったものを手に入れた代償が未来からの息子の襲来、だから。

の炎はやがて子供へも……

しかし、懸念すべきはそれだけじゃない、禁忌に踏み込んだ結果が自分であると知る事、そして事実であると知る事。それは子供自身の心突き刺す、それだけで………壊れるものもある。

怒りで導いた答えはこうだ。

自分の欲望だけを優先して伴侶に、周囲に、自分に望まれない子供を産み出すような奴達に、それ以上の時間はやらない………過去にそうしてしまった、する事が予測できる奴はどれほどの遠い過去に行ってもそうする事が確定した瞬間に壊してやる。

というのを実行するには、人数が多すぎると電王に変身する時悟った。こぼれ落ちた砂を全てすくい取るようなものだ、必ず、取りこぼしが出る。

一生かかっても終わらない、それに八つ当たりに近い。

時の運行って奴は遠い過去になればなる程少し何かを変えるだけで多岐に影響が出てしまう。

だから狙いを色々削ぎ落とし、答えを結論に変える。

できるのは、原点………

それを消しつづす事だけ。

オレは手に入れた力でオレ自身を消す。だけどそのままのオレは狙えない、だから結城美柑……オレを産む前の母親の命を狙う。

こうすればもう、八つ当たりじゃないだろう？

そう決めたある日、いつか見た女の人が夢に出てきた。ライダーパスを持って寝たのは失敗だったのかもしれない。だいたいはこちらだ

『それがあなたの結論？つまんないの』

服装も、顔も時の流れを無視しているように全く変わっていない。

「つまらないもなにもないだろう」

『せっかくアーク様があなたを選べば過去から未来、そして宇宙を飛び回って人類を滅亡させてくれるって予測したのになー』

「オレは別に人類まで滅亡させたいなんて思っちゃいない、オレがいなくなればそれで良い」

『あなたはそう言うけど、この子はなんて言うと思うっ？』

「?.....!!」

女の人はいつの間にか男の子と手を繋いでいた、目の前の男の子は………無造作に跳ねて、たれ落ちない程度に伸ばした黒に近いボサボサの茶髪、黒、緑、茶による迷彩柄のジャンパー、膝の辺りが擦り切れているズボン、おそらくこの子の見た目はオレだ。

『お兄ちゃん……滅ぼそうよ。人間なんか、いなくなってしまうば良いんだ』

目の光はもう消えている、こいつはおそらく人生で一番叫んだあの日に死んだ、人間としての自覚を持ったオレ。

『オレの存在を同じものだって扱ってくれない人間の方が悪いじゃないか、母さんだって父さんを好きだったから父さんを選んで、父さんはそれを受け入れた。なのにそれでよしとしない奴らがいる、直しようの無いもので責め立ててくる奴らがいる。父さんは遠い星でも、王様だ、だから選択が間違っていたとしてもよっぽどの事がない限り下手な事は言えない。その分オレに向く、しかも目線とかの形の無いものばかりでだ、そんな卑怯者達の目線が大多数だけでオレは産まれながら悪になるんだ』

「今なら分かる、あいつらはみんな憐憫と愚かしさ、その他諸々の感情と悪意でフィルターをかけて見下しているんだって」

『それを当然のように振る舞う奴らを野放しにして良いわけがない』

「オレもそれは賛成だ」

『だからみんな壊そう? もらった力があればどこからでも、壊せる』

「でもそれはできない」

『どうして?』

理由は一つ

「オレがオレを見下しているからだ」

オレがオレである限りオレはオレ自身を認める事ができない。オレがこんな思いをする事も分からずに、それか考えずにオレをお腹に宿すような事をした母親もだ。

「オレがオレを見下している限り見下す人間も、見下されるような

事をする人間も憎む資格が無くなるんだ」

それは心のブレーキになつてしまう。」

「それにお前はオレじゃないだろ?」

オレは目の前のオレぐらいの年から結城リトの事を父さんとは呼べなくなつた、もう一生そうなんだろう。

『じゃあこの子は意味ないとして……』

女の人がそういうとすぐ男の子は消えた。

『復讐あてつけが望みなら派手な方が良いと思わない?』

女の人はオレの背後に回り、肩に首を乗せた。

『あなたの母親の選んだ道の先にオレがいるんだって、見せつけてやるの。あなたの母親の周りの人間かな、たくさんの悲鳴を母親に聞かせるの。きつと楽しい光景になるよ』

「思わない、世界には無関係な人間が多すぎる。矛先を広く向けたらそいつ達まで巻き込まなきゃいけないなくなる、それにあそこはオレを否定ばかりするけどララさん達が笑って暮らしてた場所だ。文字通り台無しにはできない、消えるのはオレと奴だけがいい」

女の人はそれを聞くとオレから離れて吹き出しながら手を叩いた。
『やっぱり悪意より別のものの方が大きすぎる人間はダメだね』
せつかく宿つたアーク様をみんなに届けてくれないもの、データのひとつとしては面白かつたけど、私も忙しいからあなたとはこれまで。』
女の人の企みに乗らなかつた人が一人以上いたんだろうか?」

力をくれた事、神様つていう道をくれた事に対するお礼を言う暇を与えないまま女の人は姿を消した、見限られたという事なのかな。変な夢だろうか?」

くあの日の夜

「オレは不要なんだ、おじさんと、ララさんの居る場所には!!」

自分の存在に何の困惑も抱かずに愛情を注いでくれた王妃とモモ、友達と呼んでくれるヒカル、そして眩しく、羨ましく、それ故に憎いと感じてしまう兄弟、姉妹達の平穏を願いながら震えた手でライダーパスを取り出した、両親の秘密を知って、死のうとして、記憶を無くして、思い出して、結局こんな自分を大切にしてくれた人達のために

生きよう…ではなく、こんな自分を大切にしてくれた人達のために消えようと思つてしまった、ただ死ぬのではなく、存在自体を無かつた事にする形で。

ベルトを腰に巻いてから真ん中のマークが血のように赤いライダーパスを祈るように片手で額にかざし、そしてベルトから聞こえてくる重苦しいメロディー、叫び声を一通り流してパスを落としてベルトにかざした。

そして、感情が液体のようにあふれるのと同時に、同じように言葉が口を伝つて漏れてくる、子供が母親に重々しい態度で決して聞いてはいけない言葉、何度かはばかられた言葉、漏らす度に周りの怒りと悲しみと哀れみを買つた言葉。

「ねえ…：…なんでオレを産むの？…なんで人の規範を踏み外したあなたの人生に、オレを巻き込むの？」

「!!」

「変身!!」

『アークフォーム』

音声と共に、ライダースーツを身にまとつた状態になり、アーマーが回転してくつついた後黒いぐるぐると回る電車でできた円環から黒と赤の混じつた液体が垂れ流され、流れ終わる頃には仮面が付着した感じの変身になった。

「終点はオレだ、停まられると思うな」

「そこまで？」

母親は大粒の涙を流し始め、怒りとも悲しみともつかない言葉を漏らした。

「そこまで…：…嫌？…そんなに…：…私のリトへの気持ちを否定するの!?!あなたの命まで」

「あなたの気持ちに、オレという結果がついてきた。これが宿命だ」
「グレるだけならまだ良かった、いつかこんな子に育つなんて見せられてもそう思いたくなかった。避けちゃダメなの？」

「ここに来るために、オレは美奈子おばさんを死なせてしまったんだ、あなたのついでにオレの味方してくれたのにな、オレは!!思つて

しまった、頭から声がしたんだ、殺せつ殺せつて、どうせおじさんと同じで受け入れるようにしか言わないから殺せつて、だから階段から落ちるおばさんを助けずに見殺しにしちまった。もう遅い、避けられないんだよ、あんたが、オレを産んだ瞬間からなあ!!」

「その先には何かがあるの?」

「何も無い、何もかも無くなるんだよ!!オレの存在も、オレが疎まれる未来も、オレがあんたを恨む理由も!!」

恨む、その言葉に偽りなくオレは彼女の事が憎いと思っている、オレの痛みは全て彼女の望みから始まった。

『美柑を、恨まないでくれ!!』

おじさんは言った、自分の母親を恨むなと言った、だからこそなのに。でも、言うとおりにするならどうすれば良いのだろうか? 兄さんや姉さんを? 弟や妹を? ただ羨ましいだけなのに!?! それともおじさんを? 嫌だ、後押しになったかもしれないララさん達まで一緒に恨まなきゃいけない。だったら、自分自身を最大限呪えば良いか。邪魔者として産まれてしまったオレ自身を、でもそうすればおばさんとかが泣きながら必死に止めてくるんだ。なんで? オレはデビルークの王家に必要なモノを消そうとしただけなのに、母親の欲望の排泄物を消そうとしただけなのに。そうとしか思えなくなつたのは母親の選択のせいなのに、ほら……やっぱり母親を恨まなきゃいけないんだ、オレが絶望した分だけ、オレは奴を恨まなきゃ。ああうんざりだ。あの両親の組み合わせで産まれたつてだけで異端扱いする奴達が目線が。逃げたい、逃げられない。逃げたい、逃げられない。逃げたい、逃げられない。

「全て無くなるんだ」

「ねえ、約束してよ、ライムがこの後も生きてたら、未来に目を向けるつて……そんな姿になつてまで誰かと同じように私を否定した分!!」

オレは腰の分割されたデンガツシャーをガンフォーム用に組み立て、ベルトから同じ物を2つ作つた。

「ああ……あんたの未来にオレがいなきゃ良かったのに」

そしてパスをベルトにかざす。

「これ以上の時間はやらない」

『full charge』

もう一度

『full charge』

もう少し勢いを強めるために

『over charge』

撃て!!それで全てが終わる、オレが生まれなかった事にするために
「ツツあああああああ!!」

そしてベルトと赤いプラズマで繋がったデンガツシャーを彼女に
向けて引き金を引いた、3つの銃口から放たれるエネルギー弾が寄り
集まったから威力も高い。

「ごめんね」

そう聞こえもしたがもう遅い、止まらない、止める気はない、狙い
が逸れたって当たればよほど頑丈じゃない限り一撃で終わる。

強烈な爆発と得体の知れない感覚、それらと共にオレは後方へ飛ば
された、その時パスに修復不可能な程のヒビが入って。

「あっはあっはあっはあっはあっはあっはあっはあ!!」

目に強烈な痛みを感じながらオレは笑った、オレはデビルークの間
題を片付けて、やつと苦しみから解放される、そう思った。自分が生
まれるという過去を潰して…しがらみから解放される…と

だがいつまで経っても、何も変わらない、痛みも何も…目から流れ
る液体を口にし、鉄の味を感じて吐き気を催しても…何も変わらな
い。

「はあっはっははは………はあ………」

そういう訳でオレの望みは叶わなかった、そして母殺しの罪だけを
背負った、あるかないかとかやるかやらないかの二択で迷ったり悩ん
だりしてる時より終わった後だから前より楽にはなったかな。

ところで罪人が罪人になるのも時の運行に沿ってるのかな?だつ
て何かやらかす人間にだってやらかす背景ってものがある、原因があ
る。オレには「母がオレを産んだ事」っていうのがあってその事で一
生もののトラウマを背負わされたからだ、母がそうした原因としては

「兄の事がずっと大好きだった、だから結ばれたい」だ、間違ってる事が罪なら間違った事をさせるまでの原因も潰せば良いのにそれこそ悪い事として見られる、だったら罪人が罪人である事は時の運行には正しいって認められてる？だとすれば時の運行は正しいのか？止そう、結局オレを逃がしてくれないからこうなった、逃がして欲しかったが結論だからな。

く教会く

「奴は、泣いていた……」

オレが奴を撃つ直前、泣いているのを見た……のかもしれない

「そう」

アサキムはそう言つて墓に一步近づいて、そして屈んだ。彼女に捧げるものはないとか言つてたけど心は対象外なのか、嫌、こいつは祈つてすらいない。

「仕方ないよ。人はその重さを感じて、初めて命というものに向き合うんだ。誰だろうとその前に想う事なんてしない、せいぜい自分か相手の愛の証が良い所さ。王妃だつて例外じゃないよ」

「ララさんを愚弄するな!!」

………愚弄しているのはオレか？

「言つたろう？命の重さを感じた時に向き合うつて、誰だろうとそこから始まり。そこから一個の命として見ていく事になる。彼女は始まりからは間違えようとはしなかった………と思うけど」

『ライムくはい、あーん………おいしい？良かった』

『プリン好きなんだ………母さんがたくさん作っちゃうからね』

『また仕返ししてきたんだ、それでケンカになって、よしよし………つらかったね、よしよし………』

やっべ、最後の所のせいで胸の所がドクンつてなって苦しいな………声につらさと申し訳なきが感じ取れて憎む憎まない関係なくオレが消えれば良いんだつて思つてしまう。ああ………奴とおじさんがくつつくのは勝手だ、けどオレはそこに産まれたくなかったな………産まれるべきじゃなかった、産まれるような事をするべきじゃなかったのに。

「ハア…………ハア…………スタート前に問題があつたらどうしようもないだろう」

アサキムは立ち上がり、オレの方を見てきた。なんだ、やるつてのか？ここで一喝されても虚ろな目をして蓄えてた考えも何も無くなった人間が残るだけだぞ？

「どうあつても堕ちる道しかないのも彼女への試練か……………君は堕ちて何を得た？」

「ん？……………」

「答えられないなら」

アサキムはオレに切りかかってきた。

「君の罪に終止符を打つ!!」

オレはそれを屈んで避け、距離を取った。

「オレを討つて良いのはヤミおばさん達だけなんだよ!!」

ただし敵として、結城リトの子、彼女達の望んだ在り方の汚点、膿として……………ではなく憎き結城美柑の仇として討たれたい。顔を見せないままが良い、顔を見られてララさん達を悲しみの淵に沈めさせるのは嫌だ、もう既に悲しませてるつて？自覚はしてる、義妹が死ぬのと義妹の子供が死にたいつ死にたいつ泣き叫ぶのを聞くの、どっちがっらいんだろうな？

「つくづく君は…………彼女達の心を抉る事しかできないみたいだね」

「だから消えようと思ったのに」

拳で攻撃を試みた。

「と言つても君が引き金を弾いちやダメじゃないか、因果一つあればそこに縁、存在の痕跡をつけるつてね!!」

だがそれはアサキムの剣を持たない方の掌で防がれたのだ。

「誰かの価値観に心を染めた、それが君の運命を決めたんだよ。」

「誰かと繋がつてでしか人間は生きられないんだつたら、染まらなきゃいけないだろ!?言葉だつて音の塊だ、一人一人が好き放題音を出しても意味を分からせられない。誰かに染まるからそこに込められた意味を読み取る事ができるんだ、そうやって人は生きてきた!!」

「君は人を語るが、君は人間かな？それとも」

何を言えば正解なのか分からない……だが人間どうかなら答えは一つ

「オレは人間じゃない、そういう風に見られてきた、だからオレは人間だっで見られたいんだよ!!」

でもオレじゃダメなんだ。

アサキムはつかんだオレの拳を放すと今度はオレの胸ぐらをつかんで叫んだ。

「ならば君は戦わなければならなかった、君と同じ人間が安心して生きられるように、君も人間の可能性だと認めさせなければならなかった!!」

味方か……ララさん達だけじゃ足りない、もっとたくさん、目の前がそれらで一杯になるぐらいの味方が欲しかったのかもしれない。でもオセロみたいに対から味方に変えるのは苦手で……抗うとか、戦うとか、気力が湧かないよ、オレのようなのが敗者になるのは時間が、歴史が証明してるから。

「そのために、君は親と呼べる者を手に掛けた。強く固いモノを切り裂いた。問おう、それで君は何を得た!？」

「それは……」

得たものに関して何も言えない、言葉が口から出ようとしない、文字の羅列がたくさん並んで、頭の中で推敲を繰り返しているけど、戦っている最中で3文字で取り消される。

「答えられないか、ならば君が君自身を肯定できるまで守ろうとした神父の罪は無駄になる……」

無駄？神父のやった事が無駄……？

くあの日く

神父との出会いはパスが壊れた後だった。

気がつくくと墓地で人の話し声が聞こえてきたからオレは墓地に行ってみた。仕方ないだろう？まるでお祭りみたいな騒ぎ声をしてたんだから

「ワッハッハッハッハ!!」

「あほくさ……」

でもすぐに飽きてさっきの場所に戻ろうと思った、人の話に加われる程の凶々しさもなく、勇気もない。

「随分生気の抜けた子羊じゃのう」

「誰だ？」

突然声をかけられたから驚いて振り向くと目の前に一人の老人の神父が、いた。戦国時代や江戸時代とかの古くさい服装で丸顔の……「誰だとはこちらの台詞じゃ、見たことのない服装じゃがお前さんも宇宙人とかいう奴か？」

「二応親は日の本で産まれてるが」

今のは対過去の人間用にそれっぽく言ってみただけだ、それっぽくな……

「真偽はつかんが信じよう、少し話をせんか？」

「なんでだ」

「自分は罪を犯した……そういう顔をしておる、自覚のあるなしに関わらずそういう人間は常に邪気をまとっておるからの。話してもらうぞ、今日の本がどうなっておるかなどの話のついでとして」

神父って人達は人に説き伏せるのも役割の内だからそういう人の表情とか雰囲気ってのを読むのが上手いんだろうな……

促されて、色々と吐かされた。懺悔室の場所をまるで我が家のように案内してたからここに詳しい人だ、多分……時間がかかったけど説明はした。

「そうか……」

神父の口からため息が漏れていた、未来では飢饉も防げるようになったのは良いけどまだオレのような人間がいる事を知って落胆しているようだ。

「生きていられるならそれで良いとは思うがの、飢えで苦しんで死ぬ人間に信じるものを否定される人間、他にももつと色々な事で悩む人間だっておる、それらと比べれば……」

そしてまた、オレはキレてしまった。

「ちっぽけだっけか？誰かの受けた傷の方が深いっけか？あんたもオレの周りの人間とおんなじか!?結局みんなそうだ、自分とか誰かの

受けた痛みを誇示して、突き放して、放置して、しまいにはそれを受け入れろだ。反吐がでる」

その時は……イライラしていた、どうにもできなかった。オレが消えるのはできなかったし

「比べられる人間はいいよ、比べられる余裕があつて、自分の痛みでいっぱいになって他人がどうこうとか考えられないんだ」

「……………ふむ」

神父は言うだけ言ったオレの言葉を否定するでも、怒るでもなく頷いていた。怒られるのはたくさんだったからその沈黙はありがたかったよ。

話す事が無くなったから懺悔室を出て、散歩する事にした。

「入り口に倒れておる奴がおるぞ!!」

「おばさんか……」

もう……血を出すくらい頭を強打してるから生きてる訳がないと確信していた。

「話に聞いたお前さんのおばさんか？」

「ああ……………」

「様子を見にいかんか？」

そう言われて渋々神父の後を追った。

「息をしておるぞ」

「なんだって!？」

あの時、実際に確かめるのは怖かった。嫌な感情の渦に吞まれて、下手をしたら確実にとどめをさすかもしれない。今はそうでもないかもしれないけど、ちよつと怖い。

「寝ていた場所へ運んでおけ、興奮するなら話は別じゃが」

あんなに後頭部を強打していたのに生きてる事は不思議だが、良かったと思う。興奮……………は正直していない。だから運ぶ事にした。

「オレは身内には欲情しないんだ、誰かと違ってな」

誰かって……………誰だろうね?それで神父は悲しそうな顔でオレを見てきた。言いたい事は分かる、その誰かといつ比べてしまった

事、年頃の女の子の無防備な姿を見て年頃の男の子が興奮しないと言った事。例外は多々あるだろうけどオレがそうなら既に神父にそう言ってる。

「じゃあ」

おばさんと教会の連中の事は神父に任せようと思って教会を去ろうとした。

「どこへいく?」

「奴が昔行っちゃって場所だ」

自分の運命を終わらせるには最適な場所だ、森の中で誰にも気づかれないってのが高ポイント。問題は奴の話だとゆるキャラ然とした変なのがいるってだけで……

「それで良いのか?」

「なにがだ」

「お前さんは確かに罪人じゃ、それは自分が死を選べば償えるものではないぞ」

「償いって何をしろってんだよ……」

「まずはお前さんが罪を背負ったその先で何をしたかったのかを確認する事じゃ、人が悪い事をしてしまうのは欲望、欲求のためじゃからの」

それっぽい答えはでなくて、やっと口に出せたのは

「………何も無くなる?逃げたい?」

「そうじゃったな、それは生きてはできないのか?死ななければできないのか?一度死ぬとそこからはどこにもいけはせん」

「………分からない、オレは………」

考えようとは思った、考え続けた。でも何も思い浮かばない、いなくなる事だけが最善の答えだと思えずにいた。

「お前さんはまず生きてみる事から始めなければならぬようじゃな、お前さんが命を奪った人間も、そやつと親しい人間もその姿ではただ苛立たせるだけよ」

「………」

突然ドアの叩く音がしてきた。

窓の粗さで分かりにくい人がたくさんいた、教会の中に入ろうと
しているのか。

「なら今日は眠っておれ」

言うとおりにした翌朝、外でたくさん人間が倒れていた。後で
オーナーに聞いて分かったけどその犠牲者は全て数年から数百年の
間に一度死んだ人間達らしい。

「死んでる!?!」

「お前さんを認めようとはせなんだ、それに過去の人間はできるだ
け少ない方がいいじゃろう」

「聖職者の癖に人殺すのかよ」

「聖職者として人よ……必要があれば、しなければならぬなら殺す、
じゃが同じような顔を人かそうでないなどより分けて理由を付け
て殺す、より性質が悪いかもしれん」

「……………」

色々あったんだろうとその時思った、オレの年……当時オレは17
だからおそらく3〜4倍程の時間を神父はかけている。

「お前さんには時間が必要じゃ、お前さんが生氣を取り戻すまで悩
まなくなるまで、あの女性も含めてわしが守ろう」

言葉通り神父はこの一年と少し目の前のオレとおばさんを守ろう
としてくれた、救おうとはしてくれただ、そんな事しなくても良
かったんだ。でもやった、そこにはどんなに手段があれでも人を救い
たいって思いがあった。だから無駄には終わって欲しくない……
オレは結局変われなかったけど、無駄とは言いたくない。オレのエゴ
がそうさせているとしても…………

オレはアサキムを睨み、叫んだ。

「無駄じゃない、無駄であつてたまるもんか!!」

ジタバタして、振りほどいてアサキムの胸部分を蹴った。

「……………答えは出せたか?」

何もでない、何も。結局それは変わらない、生きてみる事では解決
しないみたいだ。アサキムの言つてたみたいに命を感じるつてので

何かつかめるのか？

命を感じる、か……ああ、そういえばもうすぐ……

「いつか見つける……それに、妹が産まれるんだ。オレがおじさんに見つけられる少し前に、もうすぐだ。もうすぐ……：……：……こうなった以上オレ自身でその瞬間を見てみたい。オレのように生きてるだけでみんなに迷惑をかける事のない、かわいい妹だ。愛される事に何のためらいもいらぬ、姉さん達の妹だ!!」

「答えは未来にあると言う訳か……良い顔だ、その道のりが故に否定しなければならぬのが残念だよ。」

親指の肉を噛み、血をブラディクスに染み込ませる。多少輝きが増してゐるから元気がその分戻ったって事だ、でも今からその元気以上の事をやってもらう。

「お前にこれ以上の時間はやらない!!」

ブラディクスを選んだ理由、それは相手の時間を止めるために傷口から相手の血を操って凍らせるためだ、それとイマジンを切り裂いた箇所から血を行き渡らせて凍らせる、輸血する感覚で。

パスのない状態じゃ、ごっこしかできないだろうけどやるしかない。

「フルチャージ」

言つたら？ごっこしかできないって、セリフも言わないと。

「でやああああ!!」

「良いだろう、その答えがどれだけのものか」

でも、もしこれも防がれたら……：……：……そう思っていると変な鳥が木の上に乗つかつてるのが見えた、オレンジ色の布を着込んだカラスのように見える鳥、色は暗闇だからよくわからないけど多分鳥

『エア―アギヤ―』

オレの方を向いて鳴きやがったが不快な感じはしない、むしろ湧き出る安心感があった。赤ん坊みたいな鳴き声はよく聞けば心臓に悪いが。

「でえりやああああ!!」

「はあっ!!」

決まった、そう確信できた。腕の部分を斬られたけどそこから出る血はブラディクスに塗りたくっておこう、まあ奴とは痛み分けって事で。

「これは!？」

「どうだ!？」

アサキムの腕を切り裂く事に成功した、瞬間傷口から凍りついているのが薄い氷で段々と覆われている一部始終から見とれた。

「じゃあな!!」

洗濯物を取り込むのはやめとくか、外に出よう。出て、どうしよう？

暗闇の中走っていると、マスコットみたいな奴らが見える。半透明になったり、鮮明になったりして、しまいには見えなくなったりと不気味な奴らだ。

いつも目が会うとすぐ顔を背けて逃げだすから、慣れてるけど少々不快。

オレがオレ自身を認められなくなっただからだ、こんなものが見えるようになったのは。オレが生きてちゃダメだと思ってる時が一番よく見える。

そのことで誰にも相談はしていない。目を背けられてるだけなんだからな……：……：……：そういうのは信用できるしかるべき人に会えたらつて所か……：待つてるよ異母妹、その顔をたっぷり拝んでやる。祝福がお似合いだから、その通りに、その通りに。

〜数十分後〜

シユロウガは舞い降り、凍りついたアサキムに対して光線ラスター・エツジを放った、その熱で氷を溶かし、アサキムはそれによって解き放たれる。

「危なかった、シユロウガに意識を移さなければ凍りついたまま動けなくなる所だった」

血から凍てつく感触は確かに時すらも止まるように思えた、そしてある程度の脱力感……：血を吸い取られたのは明白だ、だから生きていると感触がつかめてアサキムはほっとしたのか肩を上下させ深呼吸

をした。

「贖うとしてもそうでないとしても、これで彼も少しは前を向けるだろう。嫌、そうでもないか……彼が案じていたのは妹だった。デビルークで聞いた話が本当だったのは良いとして、自分を認められない心はそのままという訳だが」

アサキムは地面を見下ろした、布を巻いた鳥がアサキムを見つめている、大層大層憎らしそうに。

「まあいい、それより君が今構うべき相手は向こうだ、そのために産まれたんだろう。

僕を相手にするのは、後で良い、後が良い。

僕が過去を目指す限り、必ずその時が来る、それまでに餌を見繕う事にするよ、だから君も本懐を果たすと良い。そうだろうか？ 確か………」

………

鳥も領いて飛びたち、アサキムも出ていき、そして教会には誰もいなくなつたのでした。

「知りもせず、拒みもしなかった。故に大切な人間を失つた。

禁忌と言われる道を欲した、故にその先から死を贈られた。

痛みからの解放を試みた、故に未来を狭めた。

罪が罰を産み出すなら罰もまた罪を産み出す、僕も似たようなものか。己の大罪故に無限獄に堕ち、またそのために罪を重ねようとしている。」

話は変わるがつい口走つた言葉の意味はなんだろうか？

「危なかった」と、そうアサキム自身は言った。

いつそこで凍りついてしまえばスフィアに頼らずとも時が止まるといふ擬似的な「死」を得られたはずだろう、だがそれは違うみたいで

「溶ければまた動ける、それは再び僕の歩みは続く事になる。だからこれは違つと、そういう事だろうか？」

シユロウガはアサキムに寄り添う、でもアサキムの疑問に答えてはくれない。

「答えてはくれないか……どちらにしろやるべき事はある」

時の列車編

第三十九話 妖怪、何か用かい？

ユニクロンがいなくなつて2週間経つた、あれから惑星デビルークは傷ついた町も人も少しは癒えたみたいだ、だが舞台はそこではない、デビルークの王様の故郷、彩南町の病院の一室

「ムフフ…（小声）」

覗けよ覗け、病室を

今日は誕生日、今日は祝いの日

可愛い妹の生☆ま☆れ☆る☆日、めでたい!!フウー!!

お祝いしましょ、そうしましょ♪

ケーキにしましょ、プリンにしましょ♪

あらあらそれじゃあよくないの♪

それより一つ、言いたいの♪

お疲れ様って言いたいの♪

大変だったねお疲れ様♪

二人目だってねご苦労様♪

でもオレじゃ言えないよ♪

言う人もうすぐやってくる♪

旦那がとつととやってくる♪

子供の父親やってくる♪

ほらほら父さんやってきた♪

奥さんに会いにやってきた♪

娘を抱きにやってきた♪

姉も覗きにやってきた♪

邪魔者とつととほーいほい♪

とう!!

「……………!!」

開けても無駄さ、ほほほのほい

オレは逃げるぜすーいすい

「あなた、どうしたの」

「嫌、なんでもないよ、唯」

「しっかりしてよ、パパ」

記憶に刻むぜこの瞬間

オレは消えるぜこの病院

いつかの鳥も見ているぜ

じっくり見るなようらやましい

でも、なんにもわかんない

結局なにも、わからない

b y 道化師

〜1週間後〜

彩南町の公園にて

ラズは異母姉の風夏、そして護衛と一緒にベンチで座っていた。

「アイスうめえな」

「食べ終わったら戻りましょうよ」

「ええー戻ってもオレもうやること無くなっちゃったよ」

妹の顔を見る、話しかける、名前を聞く、それらは終わったが両親

達の会話が全く終わらない。

「そこは私も同意見、色々あつて話すネタは尽きたわね」

ラズ達が妹の顔を見に行くまでにネメシス、弟のガーランド、ラズの祖父のギド・ルシオン・デビルーク、後2人の叔母である結城美柑の葬式があった。叔母に至っては死んだという実感は少しも湧いていない、なにせ全て又聞きでしかなく骨も見えていない。警官の話にもそういったのではない、だからまだどこかで生きてるとさえ思えてくる。

「だからこそもう帰ってママ達にくつついていた方が良いんじゃないかしら?」

「その通りです、早く戻りましょう。あまり遅いと心配されます」

ラズはアイスを飲み込んですぐ頷いた。

「確かにな、あれ?」

他のベンチに隠れるようにして一人の法師が望遠鏡を使って何か

を覗いていた、編み笠と衣装などの格好でそう思っただけで本当にそうなのかは分からない、ついでに顔も分からない。透明人間みたいに見えるのだ。首の部分にチョーカーを巻いているのも不思議だった。

「ちよつと何してるか聞いてみるか」

その珍妙さに興味を掻き立てられ戻ると言った自分の言葉を忘れラズは法師のいる場所に近づいた。

「あー!!ラズ様、知らない方に無闇に話しかけてはいけないと王様や王妃様に言われてないんですか!？」

護衛の注意を余所に大胆、というよりも年相応の無邪気さでラズは法師に話しかけた。

「なーしてんだ?おぼろさん」

『見張っているのです』

チョーカーから若い男の声がした、その道を進む人にありがちな柔和そうで諭すような声。

「何をですか?」

風夏もその話に乗ったので護衛も半ば諦め、何かあればすぐに対応する方向に考えを改めた。

『妖……この世界の妖怪を』

「へえー」

妖怪、ラズと風夏の頭の中に父方の祖父のマンガでそういうものがあったような覚えはあった。

『見てみますか?』

望遠鏡がラズの所に寄ってきたので、ラズはそれをとって覗いてみた。しかし望遠鏡で見る風景は目で見る景色と、変わりはない。

「なにもみえないぜ」

『少し流そう』

肩を触られる感触を覚えた次の瞬間、公園の木や色々な場所に小さな生き物があるのが見えた。

「なんだあれ」

「こいつ達が妖あやかし、小さくてかわいいでしょう?それであれが……」

今度は肉声が聞こえた、法師の指がはつきりと見える。ラズは横目でちらりと見ると顔も見えていた、法師は結びきれない程長く髪を伸ばした青年のようだった。凶器になれそうな程尖り、伸びきった爪に視線を移すと法師は慌てて手を隠してもう片方の指でその方向を向くよう促した。隠した手の爪はいつの間にか普通の人間のサイズになっていた。

法師の指差す方向には一匹、比較的暗い所から鳥が誰かを見つめるように突っ立っていた。日笠のように被り物をし、何かのスペースを作るように布を巻いてる姿は着せ替えをさせられた動物のようだ。

「姑獲鳥^{うぶめ}、お母さんになる直前でなれなくなった人の心が産んだ物の怪です。しかも昼まで活動しているとは……危なっかしいから日除けをかぶせてみました」

法師は風夏に聞いた。

「見たいですか？」

「私は……いいかな」

『お静ちゃん似のクアワイコちゃんはこういうのは苦手かな？』

「……………はい」

ラズは望遠鏡を法師に返した、法師が手の離れる感触の消えた後法師の手や顔が見えなくなった。

「春菜姉ちゃんの友達だからよく会うもんなあ」

「余計な事は言わない」

『!?まあ良い』

「ええい、私も見せてもらっても構いませんか？」

『悪魔なら自分で見れるんじゃないのか？』

急に声のトーンと口調が、ぶっきらぼうな人間のそれになった。そっちが素なのかと勘ぐる事がまだ幼いラズと風夏には難しく、態度の豹変にただ驚くばかり。

「はあ……………」

護衛は何を言っているのか分からず気の抜けた返事しか出なかったが、その意味が分かると己に生えている尻尾を揺らしながら否定した。

「いえ、多分貴方の仰る悪魔と我らデビルーク人は違う種族、異なるモノであると思われれます。」

『宇宙人という事ですか、失礼。宇宙・妖すべーす・あやかしには気をつけてくださいね』

法師は編み笠を外した、衣が謝ってる体勢なので謝ってるようだが詳細は全く分からない。全く見えないから。

「なんで私達には見えないの?」

『みんな怪異なぞ見えないのが、いないのが当然なんだと思っっているのです。』

「ならば今見えないあなたもそうだと?」

護衛の呟きを聞いて法師は笑った。

『はっそこを突かれると弱い、その通り……ですが無闇やたらと襲う気はないのでご勘弁を、おしろいを塗れば見えないのはどうにかできますが今切らしているので……』

「続き、お願いします」

風夏の発言を聞いて法師はわざとらしく咳き込む。

『だからその意志に押し負けて姿を認識されづらくなってしまうている、存在強度とでも言いましょうか……人の持つ魂魄の内魄あやかししかない妖はそれが人と比べて低い』

急に訳の分からない話をされラズは考える氣力をなくした、代わりに近くにある風船が目についた。

「姉さん、あそこで風船配ってるぞ」

ラズは風船を配っている所に向かって走った。

「あっコラ!!すみません」

風夏は法師に頭を下げ、ラズを追いかけた。

「お待ちください!!」

護衛も追いかける中法師はラズが置いていった望遠鏡でラズ達に行く先を見ていた。

『難しかったかな?……あ』

その先にいる道化師は姑獲鳥の視線と一致していた。

「見た感じは男性……」

姑獲鳥が色々あつて男を恨んでいるのかと疑問を抱くには充分だった。

「探り、入れてみるか」

「公園の広場」

「はい、ドウゾ」

煌びやかなマントを羽織り、赤を基調とした派手な服に仮面をつけ、さらに肌を雪のように白く塗った道化師は空を飛べそうな程に束ねた風船を一つ一つ、近くを通る人達に渡していた。

「なあ、オレにも……………たくさんくれ!!」

そんな道化師にラズは風船をねだった。道化師は怯えにも似たような驚きを見せつつ右手に持っているぶんを全てラズに渡したのだった。

「ラズー待ちなさいよー」

「姉さん、たくさんもらっちゃったぜ」

「そんなにたくさん持って帰るの？」

「おう、父ちゃんだろ、母ちゃんだろ、妹だろ、唯姉ちゃんに」

「分かった、手伝うわよ。後お坊さんにごめんなさいって」

「そうです、つまらないからといって勝手に抜け出してはなりません」

風夏とラズはいつの間にかそこまで来ていた法師に驚いた。

「あ、さつきはごめんなさい。ぼうさんにもはい」

「ありがとう、知り合いに見せれば喜ぶでしょう」

風船が一つ、ラズが抱えた束から宙に浮くように飛んでいった。衣装に近づいているから法師が取っていったのだろう。

『ここからは拙僧の時間です、拙僧もその男に用があつてきたのですから』

法師は道化師に近づいた。

『まあ用というのは……………これです』

法師が道化師に一つの石ころを渡してきた、握れば少しはみ出る程の大きさの石だった。表面はつるつるしているが一部苔がついている、むしろ人は人の頭を連想させた。その石は手に持つとそれに呼応す

るかのように一つの地蔵に変貌した。

「地蔵？なんでマタ……」

道化師は地蔵を抱き上げた、地蔵は背も、格好も、赤ん坊のそれである。

「どういう事なのか、調べさせてもらおう」

法師はラズ達に見えないように印を組んだ。

く
く
????

「ここは……」

暗くて、暗くて、そこがどこだか分からない。足元を見れば辛うじて水たまりが見えるだけの場所。

だがどこなのかを熟考する前に、地蔵に異変が起こった。

「!?」

抱いている地蔵がいつの間にか赤ん坊の姿に変わる、道化師にはその顔に見覚えがあった。

教会にあつた写真で見た赤ん坊の頃の自分、結城ライムとして産まれた自分。

「……………」

「オンギャー!!」

赤ん坊はすぐに泣き始めた、その泣き声は恨めしそうに闇にこだまして、道化師の全身を震えさせた。

「悔しい？産まれられなくて残念？生きてみたかった？ないな、オレの叫びはお前の叫び、オレの悩みはお前の悩み、だから分かる。お前はそんな風に前向きには育たない、オレがお前にした事だっていつかお前もそう望むようになる、消えたい、いなくなりたい、オレは彼女達の住まう場所で生きちゃダメだって、人生開始10年で悲観し始めるんだ、違和感を感じるのには一年と少しあればいいか。」

それに人間は惜しまれる内が花と言う、それと似たようなものでなんでも惜しめる内が良い。

「泣くか、泣いてしまえ、遠慮すんな、オレはそんな理由で泣けるお前の事が羨ましい。羨ましいけど、お前の望みは叶えてやれない」
道化師は気づいてしまった。

これでもうあの事で泣かなくていい。

これで産まれの事で消えたいと泣き叫ぶ自分じゃなくなった、確実に自分と同じ出自で泣き叫ぶ人間が一人減った。

「そうか……収穫は、あつた!!」

道化師は高笑いを始め、それを見て赤ん坊は泣き止み、引いたような呆れたような顔になった。

「赤ちゃんでもそういう顔するんだな……でもいいや、これからはお前が、お前の存在がオレの生きる意味になる。お前は両親を喜ばせられるお前のままでいられるんだ、ただ単純に母親の事を大好きなお前のままで……いられるんだ……」

道化師は赤ん坊を抱きしめる力を増やしてしまった、答えは得た。客観的に見ればそれがどれだけ狂っているのかは分かり切っていた、だが、それが救いになってしまったからもうどうしようもない。

「だからこれからお前の分、オレが堕ちていけば良いんだ」

そう言ってから気がつく、公園に戻っていた。立ったままだから夢のようなものでも見ていたのかもしれない、そして赤ん坊の自分には見放されたのかもしれない。法師が急に道化師に謝ってきた。

「悪かった、今の術でお前の体を赤ん坊が食い破らず、そして姑獲鳥が便乗せずに活動時間帯の限界を越えて、今拙僧に噛みついてくる辺りそういう事なんだろうな……お前、母親を弟か妹を腹に宿した状態で両方亡くしてるな?」

道化師には鳥が確かに法師の腕をくちばしでかじっているのが見えた、そして法師の腕に蛇の鱗のような模様が浮かび上がった後鳥はかじるのを止めてどこかへ行ったのも。

「……………」

「言いくい事だろう、話す必要はない」

道化師はこの法師は何者だろうと今更ながらに思った、何かしら力は使えて鱗を生やしているから人でないのは明らか。

「あんたはいったい何者?」

「お坊さんだよ、悪徳坊主と知り合いは呼ぶ」

「坊主の衣装着てる癖に髪長くして、いかがわしいもの風呂敷に

突っ込んでればそう言われてもおかしくないですね（小声）

「!?」

法師は驚きを隠さないまま道化師を見た。

「……………やはり見えてるのか？」

「ウロコが見えました。」

「じゃあ……………」

法師は自分に向かって右の方向を指さした、小さな種々雑多な者共はライムを見て怯えを隠さない。

「ええ、目が合う度にあのようには避けられています」

「……………見えるようになったそれは生まれつきで？」

「いえ、11から。見えたり見えなかつたりします」

「そうですか」

法師は思った、この男はかなりやばい所に片足を突っ込んでいると。

現世には妖が生まれながら見える人間と生きていく内に見えるようになる人間がいる。前者は常識に捕らわれる事のない魂を持つ人間、それと代々妖を祓う家系にある忍者……祓忍、生まれつき持ち合わせた強い魂に加え輪廻転生を自覚する事で研ぎ澄まされた魂を持つ妖巫女。人ならざるものと関わる生業であるシャーマンや先祖に妖怪が混ざっている人間など力を受け継いできたもの。後者は命2つ分の魄を背負う妊婦。それと心身の不安定な人間、チャンネルないしは波長もしくはは靈感が、例えば心身に死を望む程のダメージを受けた時に怪異とかと繋がりやすくなる。

「よ……ぶじ……………れた……」

「あの？」

道化師の耳にはだんだんと法師の言葉が聞こえなくなってきた。

「姉さん、ぼうさんとマスクの人は何ぼうつと突っ立ってんだ？」

「しっ私達が立ち入っちゃいけない事よきつと、だから早く終わって欲しいな」

「同感です」

道化師と法師が向かい合うその様は近くにいる3人にも不思議な光景に見えた。それまでに法師の自己紹介が終わって以降、法師が何を言っているか分からなくなったのもある。

『つらい事があれば遠慮してはいけません、隣町の水族館のお姉さんとかが相手をしてくれるでしょう』

今度は3人にも聞こえた、そして法師は道化師の元を去る。

「ふっ……………」

姑獲鳥がどんな存在か一応知っていた道化師はあれこれと見てみたが今度は見えなかった。だがどこかで見ているのは確定している、見られていると思うと気が重くなった。だが以前ほどではない、あのことで苦しまずに済む自分がいると考えたら……………

く公園く

『帰っても良かったのですよ』

法師はついてくる3人に尋ねた。

「あのまま帰ったら失礼な気がしてさ……………」

法師は礼をした後ベンチに座った。

『拙僧が相談に乗れば良いのにと思っているでしょう?』

「……………そうか?」

「あの人の事、実は苦手だったの?」

『そんな所です、正解者にはこれをあげましょう』

法師が風夏に渡したのは一枚のお札だった。

「お札?」

『これを体に付けると取り憑いて主導権を乗っ取ろうとしてくる奴から身を守ってくれます』

「ありがとうございます」

風夏はお札をファイルに挟んでから自分のからっているバッグの中にいれた、黄色いひよこの絵柄があるそのバッグはサイズもそうだがおそらく大きくなるにつれてそれを用いる事に抵抗を持つようになるだろう…………と法師と護衛は見た。

「ぼうさんも好き嫌いあるんだな」

『ありますとも、拙僧だけがあれを嫌いとは思えません。』

若干開き直ったように威張りながら法師はうちわで顔部分を仰いだ、まだ季節は秋寄りの夏なので暑い。

「お二方、そろそろ帰らなければ」

「そうね、帰りましょう。」

「またなー!!」

ラズ達は法師に挨拶をしてから病院に帰った。別れる際、彼の衣も左右に振れていて法師も挨拶をしていたようだったので、だいたいか分からないなりにラズと風夏は嬉しくなった。

「病院の前」

「んじゃあ、先行くぜ!!」

ラズは風船を抱えたまま駆け出した。

「あつ待ってよー」

「走ると危険です、止まりください!!」

その結果、室内でラズは灰色のスーツを着た青年にぶつかってしまった。

「あつごめんなさい」

相手の足に巻かれている鎖がもろにラズに当たり、衝撃で座りこんだ。それだけでは収まらず風船がラズの手からこぼれ落ち、散らばった。

「ごちらこそすまない、痛かっただろう?」

相手は謝った後、屈んで手を伸ばしてきた。

「……………」

「泣いても構わないよ」

「ガマン…………だぜ」

「よしよし、いい子だ」

相手はラズの手を掴んでゆっくりと立ち上がった。子供が自分でも立ち上がれるような間で、ラズはそれに乗っからずに自分の足の方で立ち上がった。ラズはふと風船をこぼした事に気づき、風船を拾い集めた。青年も手伝ったので時間はかからずに済んだ。

「ありがとう、おにいさん」

「次は離さないようにね」

「そういえばおにいさんどつかで会わなかったか？この前もぶつかったような気が……」

「気のせいだよ」

相手は少しうわずった声となり棒読みになった、だがラズは信じ込んだ。

「マジか……」

「そんな初対面の僕で悪いけど頼みたい事があるんだ、解放しなければならぬ人間がいる、そのために僕は君の母君の叡智が欲しい。」

く旧彩南高校校舎く

法師は壁しかない場所の前に立ち、その壁を押した。すると壁は回転し、先に通路が見えるようになった。

「さてと」

そこは地下への入り口、階段への扉。下りていく先の大きめの扉を開けると一つの部屋があり、中に入るとそこには木箱が一つ

「形代は」

木箱の中にある紫の折り紙で織られた雛人形を手にとった。

「最近穢れが少ない……あの子達の母親の友達って言ったっけ？結構結構」

法師は雛人形を取り替えながらつぶやいた。いつか別れが来る、寂しさを募らせることを懸念しながら……

「確認も終わったし、帰ろうか」

法師は道化師の事を思い出した。

「奴の事が怖いと言えば怖い、奴の抱えてる心がな」

道化師は見てしまう程心身が不安定になっていた、ムラがある分まだマシだったのかもしれないが。

人や動物にとつて死は恐怖だ、自分というものが無くなる、その先が分からない、などなど。だが幽霊や冥府、黄泉などのあの世という抛り所はある。だが妖には死への恐怖はあってもそれは無いとどこかで分かっている、魄しかない妖はそこにたどり着く事は有り得ないから。行けるとすればそれは魂だけだから、だから消失への恐怖は一段と大きい。そして自分から消えたいと願う奴は見た事がない、魄の

強いのは大好きだ。

一方で人間の中には自分から消えたいと願う奴がいる、瀕死の人間が「もう楽にさせてくれ」なんて介錯を頼むのもそうだし心身への負担でそう願ってしまい命を絶つとか。

理解や共感をする必要はない、だがその分否定をしてはいけない。その考えに至った、結局はそこだから。

そういう人間は妖あやかしから見て死とか虚無の思念しか揃っていないからそういうのから産まれた者達を除いては恐怖の対象でしかない。

そしてそういう人間の魄から産まれる妖は摂理面をして死を押し付けてくるようなものばかり。

「産まれるべき子供と一緒に自分がいなくなった後、あんな風にお兄ちゃんが育つなら母親も気がないだろう、姑獲鳥も産まれ出てこざるを得ないか。仕方ない……明日もう少し様子を見てみるとしよう」

そして……見極める、彼をどうするべきか……

第四十話 妹、そして放浪者

〜2日後〜

九条真はドアを叩く音で来訪を知らせ、相手の了承を得てドアを開いた。ドアを開いた先に見えたのは白に近い明るい色の部屋で古手川唯が子供を大事そうに抱いている所とそれに付き添っている異母妹だ、ただし産まれる月や年は数ヶ月程の違いしかないから年はあまり変わらない。

「おはようございます、唯さん、華、そしてはじめまして…妹？弟？」

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう、真君。この子は妹よ」

そう言つて子供をあやしている時の彼女の聖母感は7歳の子供の口では言い表せなかった。

「凜さんはどうしたの？」

「もう少しすればやってくると思いますが」

部屋の窓の隅には風船がくくりつけてあった。

「まさかもう……」

大部分の人間が訪問した事になる？

「うん、後はキョーコだけ」

「なんであの魔法少女が？……」

特撮番組、「爆熱少女 マジカルキョーコ 炎ーフレイムー」の、もう完結したはずの物語の主人公が何故ここに来るんだろうか？と真は疑問に思った。

「唯さんは向こう側から祝ってもらう程徳を積んでたんですね（曇りない眼）」

「真君…ひよつとして忘れてる？」

「何をですか？」

「お兄ちゃんもさwいい加減認めなよw」

何を認めなければならぬのかと真は首を傾げた。

「良い、お兄ちゃん？キョーコは」

華は真に耳打ちした。

「パパのお嫁さんだよ」

真にとつてその情報は衝撃の事実だった。そのため認めたくないと拒絶反応の頭痛が起きた。

「うっ頭が……!?!」

だが言われてみると真の記憶の中になんとかマジカルキョーコに似たお姉さんが父の嫁達の中にいたような気がする。

「だ、大丈夫?真君……」

「そうか……そうだったのか……」

「そうそう」

真は病室を一巡し、落ち着いてから別の質問をした。

「名前は決まってるでしょうか?華の妹だからコハ……いえ、なんでもございませぬ」

「名前はそう……彩、彩ってよんでね」

あや、古手川彩ということだろうか?

「はじめまして、あやちゃん。これからよろしく」

真は彩に向かって挨拶をした。

「抱いてみる?」

「ちよつと怖いですわね」

落としたらと思うと、やってみようと思う気持ちは真には湧かなかった。命を抱き上げるには、小学1年の真には重すぎた。

「そう……」

「妹と言えばペケちゃんの妹?分をララ様が作る予定らしいですわね」

ペケちゃんとは……デビルーク星の王妃自作の万能コスチュームロボットで、色々なコスチュームに姿を変えられたり、人格を持つているので自分の意思があつてそれで動く事ができ、一応攻撃行動もできるおそらく彼女の最高傑作である。ぬいぐるみ並みの大きさから人を覆えるように流動的に形状を変化させる事とそんな機能と人格を持つ事を両立させているという点で超AIや人工知能とかに詳しい一部の天の声はいっぺん調べさせると意気込んでいたりする。

「名前は確かカイって名前だったわね、色は黒いペケちゃんって感じ」

ペケの白い部分は黒くなり、目の部分の黒いわずまきは白になって……簡単に言えば色違い。他に違いがあるとすれば人格ぐらいだろう。

「お忙しい中だから片手間になるそうだけど、待ち遠しいよ」

カイは、今から作ろうとしているので真達を守るために作るのだろう。纏えば飛んだり好きなコスチュームになったりと色々できるパワードスーツになり、そこにいれば相談相手になる。持ち主、それが主人になる人間はおそらく身内の中で一番危なっかしい人間だろう、今の所はラズになる可能性が大きいだろう。ねだったら使わせてくれるだろうかと真は疑問に思った。

「それはそうと」

真は勢い良くドアを開けた。

「母上ーまだですかー」

開けた先に、スーツ姿の男が徘徊している姿が見えてその男が妙に真の印象に残った。

「あいつは……」

男から不思議な何かを感じ、真はドアを少し開けたままにしてじつと覗く、覗かずにはいられない。

「お兄ちゃんがテレビのヒーローでもない男に興味を持つてる!？」

「覗きなんてハレンチな行動は止めなさい (小声)」

「あの人は……たぶんマジですよ」

「へえーそうなんだ……」

「僕、行つてきます!!」

「真君!!」

ドアの音が目立たないようにゆっくり閉めた後、部屋の外に真は飛び出した。

それからしばらくの間、真は男の動向を探ってみた、受付の所で考え込む仕草を見せた後、別の階層をうろついている受付の所に戻るを繰り返していた。

「何をしているんだ? (小声)」

「どこに行くか分かんなかったりしてね」

「看護婦さんに聞けば……………って、華、どうした？（小声）」

「ママに連れ戻して来いって言われたけど面白そうかなって、お兄ちゃん、私も混ぜて（小声）」

「いいよ、くつつくだけだし（小声）」

華と一緒に男を監視して10分後

「いったいいつまでそうしているつもりなのかな？」

やんわりとした声色で男は聞いてきた、ずっと相手は気づいていたのだ、その事で真と華は驚き、お互いの顔を見た。

「後ろから見てるだけじゃダメだよ、用があるなら己自身から歩まなきゃ。」

男は後ろを振り向き、真を見て近寄ってきた。

「ふうん……………」

「華、近くににいる強そうな大人の人を呼ぶんだ、それまでこの人は僕がなんとかする」

真は華から離れ、孫の手を取り出し目の前の灰色のスーツの男に向かって構えた、特撮ヒーローの武器のおもちやの方が硬くて当たると痛いから良いと常々思っているが周りからの反対もありそれは止めている。

「う……………うん」

真のシリアスな雰囲気に押され、華はその場から退去した。そして真は男の顔を見る、男も真を見る、お互いにふと思った。

「まだ幼いが故に己が何者であるのかを理解しきれていないのか…でも黒咲芽亜を除いて」

「（この得体のしれない感じ、ネメシスさんに似ている。不敵で素敵なメンタルを持ってそうな所、寒色か暖色のどちらかに寄ってる違いはあるけれど服や髪の色がだいたい黒い所も絶対に閥属性である所も、だけど）」

『間違はなく、こいつは僕と近い人間だ』と真は感じた、相手もおそらくそう思っているだろうと確信が取れる程に。どの程度近いかと聞かれると同じ幼稚園の出身とかその程度のような気がするが共通点は絶対にある。

「(どうする……?)」

真は思った。先手を取ろうとしても、軽くあしらわれて自分が悪い事にされる、嫌……孫の手を使ってチャンバラで遊ぶ子供とそれに乗っかり付き合ってくれているお兄さんという構図ができ、生暖かい目で見られるだけの可能性の方が大きい。デビルークの兵士100人単位で固めてるならまだしもここは一般病院、知らない人がほとんどだ。

「しょうがない」

注目を集めるならいつそそつちの方が良い、それで相手の身動きが取れなくなるのなら。

「はああ!!」

真は孫の手を振るった。

「ふっ」

真の予想通り男は真の振るう孫の手を掴み取り、あしらうように掴んだ手をあつちこつち動かす。

「くっこのっ」

完全に遊ばれていた。

「感じる……黒の英知の片鱗を、やはりそういう事か」

聞き覚えのあるような、ないような単語を聞き、今自分が何をしようとしていたかを忘れて真は聞いた。

「くろの……えいち?」

男は質問には答えず、笑みを浮かべながら真に迫った。

「だがまだ幼い、その時には至っていないんだ。だから何も刻まれてないようだね……」

「くろのえいちってなに?」

「いざれ分かる、その時君自身はどの道を選択するのかな?」

「意味分かんないです」

「今はそれでいい、それより君に頼みたい事がある、この前の子供では食いつきが悪いみたいだから、僕自身が向かう方が良いと思った。その案内をしてもらおうか」

「どこの案内をするんですか?」

「デビルークの王様の……縁者の居場所」

男の目線に、真は戦慄を覚えた。その目の放つ光は間違はなく、獲物を捕らえようとする者の目。教えられた事はないが「これだ」と判断するには十分な熱意がこもっている。

「僕、デビルークの王様なんて知らないんだなーこれが」

とつきに出た言い逃れに近い、嘘八百。震えた声で言ってしまった事で信憑性は限りなく低い。

「それはないよね、一応面影はある。」

「言われる程父上に似てる所ありますか？髪とか？」

真がつぶやいた瞬間、男はその人自身の悪辣な部分を現すような邪悪な笑みを浮かべた。

「引つかかったね、僕が言ったのは王子の事だよ。王子に似ていると言おうとしてたんだ」

真ははめられた事に気づいた。

「子供をはめて、楽しいんですか!？」

「この際そこはどうでもいいんだ、誰の腹からかは知らないが君が彼の子だと分かればそれで良い。何、助けてと叫べば」

その時、男の後ろから翼が急に生えたように見えた。その悪魔を思わせる翼には見覚えがあった。なので早速

「助けてー!!」
と叫んだ。

「ははっ早速か、気がはや……」

「私の子供に何をしようとしているのかな!？」

男は王妃、ララ・サタリン・デビルークに後ろからげんこつをぶつけられて倒れた、あまりの衝撃か男の頭には顔程もあるたんこぶができ、動きが震えていた。

「悪魔の星の王妃か……君の子供ではないとは思うけど」

「リトの子供なら、全員かわいい私の子だよ!!」

「そうか……君の愛の深さには正直感服するよ、倣う気は全くないけど」

やがて男は動くのを止めた。

「真君、この人はママに用があるんだって」

ララはたんこぶを生やして倒れている男を引きずりながら手を振ってどこかに向かっていた。真も手を振りもう大丈夫だと安堵の表情を浮かべた。だが一瞬、引きずられる男の顔から笑みがこぼれていたのが見えた。目的は果たしたという笑み、真も買ったゲームをクリアした時に似たような表情を浮かべた事が有るから分かる。嫌な予感がしたが

「まあララ様なら大丈夫だろう」

高をくくつてみた。ペケちゃんを着ているし何があっても死にはしないだろうという確信の方を真は信じた。

「真」

「あ、母上」

真の母親の凜が声をかけてきた。

「遅くなってすまない、だが知らない人間を監視しようとするのは関心しないな。見つかってひどい目にあったらどうする？」

ひどい目にはあわなかつたが、怖くはあつたので凜の言う通りだった。

「ごめんなさい……」

「分かればいい、それでそいつは？」

「ララ様に連れていかれました。」

それを聞いてから凜は真を連れて唯のいる場所に向かい言い聞かせた。

「ここであつてろ、いいな」

凜は早歩きでどこかに行く、王妃を追いかけようとしているのか。

「は」

真は敬礼のポーズを取り母を見送った。既に戻っている華も便乗して敬礼する事にした。

第四十一話 巨大化!!ペケVSシユロウガ

く屋上く

道中、謎の浮遊感も感じつつ男はララに病院の屋上まで連れていかれた。

「あの時はありがとうね、アサキム・ドーウィン」

そう、男はアサキム・ドーウィンだったのだ、顔は変えてないので見る人が見ればバレバレであるが。

「あの時?」

「ラズちゃんに春菜、リトの事、そしてヤミちゃんの事」

「礼を言われる程の事をした覚えはない、あれは君の妹君の下僕（しもべ）がした事で、星帝の思惑に乗ってしまったのが癪だったからでもある、それに僕は他の事で色々あったじゃないか」

「うん、そこは許してないから」

お互い会話に少しずつトゲが生えてきたがそこは笑顔でごまかした。

「はい」

ララは一つの機械をアサキムに投げ渡してきた。

「二昨日ラズちゃんに頼んだんでしょ?これ、ばいばいメモリーくんね」

「あの時か……」

く一昨日く

「君の母君の叡智が欲しい」

「母ちゃんのh?母ちゃんや姉ちゃん達は父ちゃんに対してえっちいって掃除の人は言ってるぜ!!」

アサキムはラズに向かって慌てて人差し指を口に当てて制止した。

「君がそこに足を踏み入れるのは早い……………羞恥という思いをくべた炎が君を焼き尽くさない内にその話は闇に葬ろうか。記憶を消せるような力だ、僕はそれを求めている」

「何に使うんすか?ごはんのつまみ食いにつかってももしかられるだけだったような」

アサキムは片手で頭を抱えつつ補足説明をした。

「記憶というものは人の姿形を描くしるべであると共に在り方を縛る枷となる、解き放たなければならぬ人間がいるんだよ」

ラズはよく分からない人間からのよく分からない説明に目が虚ろになっていった。だがやってほしい事は察したのかすぐに目の光を取り戻した。

「おれ、今から母ちゃん達にこれ渡してくるからその時に言うよ」
突き出してきたのは風船、だからといって渡してくれる訳ではなさそう。

「頼むよ、その時は僕の顔も君の語れるまま語り尽くすんだ」

「分かったぜ」

「ラズ〜!!」

女の子が一人男と一緒にやってきた、王子を追いかけていたように、男は余裕そうだったが女の子の方は急いだのか息が荒くなっていた。

「追いかける人の都合も考えなさいよ、後病院って本当は走っちゃダメなんだから」

「たはは……………ごめんなさい」

「分ければ良いわよ……………少し顔赤いわね、人にぶつからなかった？」

「ぶつかっちゃったぜ。あつそうだ、姉さん姉さん、このお兄さんが母ちゃんに用があ……………いない」

〜現在〜

「衣装を変えるだけでもある程度は隠し通せるんだね」

アサキムはスーツ姿を脱ぎ捨て、元の黒いローブを纏った姿になった。

「聞いたよ、リトから美柑ちゃんの事知ってるかもって、知ってるなら教えて欲しいな。」

「君に告げる真実はないよ」

「知らないなら知らないって、はっきり言おうっ」

「……………あれは、君と結城リトが結ばれた事による結果だよ。」

いいや、結局の所縁はできている。君と彼が出会わなければあんな悲劇は紡がれなかった。強き光程昏き影を産み出すのさ、それこそ意識の外に、思わぬ方向に」

「でたらめを言わないで!!」

そう、出会わなければ良かったは実際のところであらう、彼がどんな道を選んでも結城美柑が諦めなければイチゴもしくはライム、両親の事で苦しむ子供の運命に繋がる。付け加えるとイチゴには弟妹どっちかがいるかもしれないがライムにはいない、「知りたがる山羊」がイチゴの絶望する瞬間を暴露した事で彼女の心を折ったためである。

「まあでたらめだ……として、なら今度は未来についての話をしよう。」

「未来？」

「ガーランドだったね？あの子は金色の闇の伝説の礎になった人間の子供に殺されたとか……さっきの君の言葉だところも言えるよね、君の家族は君達の守るべき民に殺された」と

「!？」

「そして知れば噴出するだろうさ、残された者達の怨念が、王家に刃向かうからと、抑える事しかできなかった感情が、それを機に寄り集まり奔流となる。同じ苦しみを知ってしまった彼には真つ向から抗いきれず、それでもその感情に晒される金色の闇は守らねばならないと動くだろう。ククク、その道の果てには何が待ってるだろうね？いずれにしろ君が、嫌、君達が惹かれた彼の美点は影に潜む」

王妃は驚いてから意味ありげに目をつむり、アサキムの言葉を聞いた後に目を開けて語った。

「忠告はありがとう、でもそうはならないよ」

「どうしてそう言い切れる？」

「私が、私達が側にいるから。そうならないように、私達が一緒にいてリトやヤミちゃんを支えるから!!」

「眩しいね、それでこそだ」

「それはそれとして今から君を捕まえるね!!」

ララはアサキムに向かって指を差す。

「僕にはシユロウガがある、君には何がある？」

「私にはペケがいるよ」

ペケはララの作ったコスチュームロボット、今彼女が着ているのならそれを外せば……

「確認しよう、それは何も問題ない？裸になるような、何か不祥事は……」

ララは自身のコスチュームとして纏っていたロボット、ペケを解除した、反射的にアサキムは目を瞑った、瞑らざるをえなかった。

「……………」

おそろおそろ目を開けると、衣服を着たララとペケがそこにいた。彼女はペケの下に服を着ていたのだ。

「二応着てるよ、リト以外に見られないようにしなきゃって思うし」

「そうか……」

アサキムは安堵した、これで彼女の裸体に興奮して血を流す事態、方向転換しなきゃいけない事態だけは避けられる。

「じゃあ、いっくよーペケ!!」

『アイアイサー!!』

「!!」

ララの呼びかけに応じ、ペケが、なんと、ぐんぐんと、巨大化した。

「良いだろう、始めようか」

アサキムはシユロウガを召喚し搭乗した。

「ここか!？」

九条凜が入れ違いに屋上へ上ってきた。

「あっ凜、アサキムはあっちだよ」

ララの指差す方向にはシユロウガ、もう戦いは始まるうとしていた。

「くっやはり大きすぎるな、仕方ない」

凜は手持ちの、シユロウガ用に準備したミサイルを構えた。既に許可は得ている。

「当たれよ!!」

凜はミサイルを発射した。

く彩南町 市街地く

「何故その力を今まで使わなかった!?」

『サイズ感が良くなかったってのと色々あったので……』

ビルの角が巨大化したペケの足に食い込んでいた。渦巻きの形の目に白が基調のゆるキャラ然とした胴長短足で低めの等身、巨大化して建物に触れた事で掻き立てられた柔らかさ、その愛らしさに戦意も揺らいできている。

『ジロジロ見ないでくれませんか?』

その時、シュロウガの顔面を狙ってミサイルが飛んできた。認識した途端命中し、シュロウガの頬の部分を通じてアサキムに衝撃が走った。衝撃、ただそれだけではあるが、結果的とはいえ頬を殴打された情景を思い浮かべてしまう。

「誰だったっけね……………」

『はい?』

「場を移そう、少し気が散る」

シュロウガとペケ、両方翼を用いて空を飛んだ。

『はあっ!!』

ペケは剣を持ち出し、シュロウガに近づいてそれを振るった。

「僕の（魔王剣）より太い!!」

シュロウガの手からディスクキャリバーを召喚し、アサキムは応戦する。

「僕の（魔王剣）より硬い!!」

質量の違い、素材の違いで捌ききれない。

「僕の（魔王剣）より凶暴だ!!」

シュロウガの足でペケの振るう剣を蹴り、さらに上空へ舞い上がる。

『ちよっと黙らせてやりましょう』

ペケはメガホンを持ち出して、シュロウガに向けて構えた。

『ララ様の音波データ、味わうと良いのです』

メガホンから放たれるのは、宣言通り音波。

『ソニックメガホン!!』

「王妃の叫びを再現したか……厄介だが」

その攻撃手段が音波である以上、拡散は免れない。後退しつつ逆に一点のみへの攻撃をすればそっちが通る可能性の方が大きい。

「その果てを穿つ!!」

シユロウガはラスターエッジ、額のクリスタルから光線を放った。

『おっと』

ペケがバツク転する事で簡単に避けられてしまった。

『まっすぐだと、分かりやすい!!トウ!!』

ペケはジャンプをするようにさらに高度を上げた、それを見たアサキムがついでに太陽を仰ぎ見る程である。

「ほう……………」

『大・天空×字拳!!』

両腕をバツの字に交差させ、シユロウガに突っ込んでいった。

『くらえー!!』

その交差させた腕を武器にシユロウガ目掛けて突っ込んでいった。

『いっけー』

シユロウガはその態勢のままペケによって山に激突させられた。

『トドメです!!』

ペケは剣を二本持ち出し、宣言どおりシユロウガにトドメをさそうとした。

「南無三!!:と言う訳ないじゃないか」

シユロウガの腕をペケの頭まで伸ばし、頭をつかんだ。

「さあ、黒き獄鳥の贄となるがいい、トラジツク・ジェノサイダー!!:」

シユロウガの体の部分にある何らかの発射口から、鳥の形をした何か飛び出す。

『おっと!!』

ペケはトドメを差す事を諦め、シユロウガに蹴りを入れて突き放した後距離をとって鳥のような何かを避けた。

「そうくるか、だが君はこれからは逃れられない」

シユロウガはペケの近くに寄り、ペケを蹴っ飛ばした。

『ぐうっ』

無事山にペケをぶつけた。だが、スーパーボールのようにバウンドしてペケはシュロウガに突っ込み腹部にパンチを当てた。

「君の力は、僕の想像の上に行くか」

『まだまだ!!』

ペケはシュロウガに向かって、剣を振り下ろす。

「そうこなくては、ね!!」

その言葉を皮きりに、ペケとシュロウガは消えた。嫌、スピードが早くなり、王妃や凜といった一部の人間以外の目に映らなくなっただけだった。

空に響き渡るのは剣と剣の擦れる音。物体が物体に当たる鈍い音。高速で移動しながら戦っている2体のロボット達の位置を示すのはその音だけとなった。

「ハハハハハハ、ハハハハハハハハハ!!」

『戦っている最中に笑わないでくださいよ、慣れない速度でいっぱいっばいなのに』

「叫びは必要だよ、魂を揺り起こすのに必要な言葉には差異があるだろうけど」

『楽しんでいませんか?』

ペケの剣をアサキムの駆るシュロウガは受け止めた。尚移動は続く。

「かもしれない。今ここにはスファイアも、目的も、崩壊も、全て関係ない戦いがある」

『こつちには目的がある!!美柑様の事、まだ何も分かってないのです』

「それで良い、知る事によって墮ちるものもある。彼は正にそれだ」
『え?』

「その先は勝負に勝つてからにしよう」
シュロウガの膝蹴りをくらい、ペケは吹っ飛んだ。

『ええい!!』

ペケはシュロウガにメガホンを向けて、超音波を発射した。

シュロウガは超音波の中心部をくぐるように突っ込みペケにディ
スキャリバーで突き刺そうとする。

ペケは後退して避けて、無防備になったシュロウガに回転しつつ体
当たりをした。

「まだ、飛べるはずだ」

応酬はしばらく続いた、だが終わりの瞬間というのは、いつも予期
せぬ所で訪れる。

『はあ!!』

ある時、アサキムには剣を振るうペケの手が少しずつ縮んでいくの
が見えた。

「……………」

それを見たアサキムの乗るシュロウガは白けたように動きを止め、
ペケに背を向ける。突然のシュロウガの行動に今まさに剣で攻撃し
ようとしていたペケは肩すかしをくらった。

『アサキム・ドーウィン、勝負はまだ終わってない!!』

「いいや、この勝負は君の負けだ」

『何を言って……………あ』

「あ」

「あ」

ララや凜すら驚いた後、ペケの充電は切れ元のサイズに戻った。

『あああああああああああ!!』

元のサイズに戻った事で、地上との間に距離ができ、有り体に言う
と地面に向かって落っこちた。

「最後まで立っていた方が勝利だという、もう……………君はしばらく戦
えない」

翼を動かす程の充電はなさそうでもそのまま歩道に激突した、が、柔
らかそうにバウンドした後今度は華麗に着地した。

『後で覚えててくださいね!!』

ペケが着地して、渾身の叫びを聞いた後アサキムはシュロウガから
降り、ひとつ飛びでララの元に降りた。

「ごめんね、ペケ。後は私がやるから」

「いいや、私がやる」

凜はアサキムの前に立ちふさがり、木刀を向けた。

「エンブラス・ジ・インフェルノ!!」

主のいない筈のシクロウガが黒い炎を凜の周りに放射した、その炎はドームの形を成し、凜の行動を遮る壁、牢屋と化す。

「僕の直感だが、君の起源は時を遡る時期としては微妙なんだ。悪いね」

「!!」

「無駄だよ、普通の火より熱いからね。スペースはとった、大人しく数分息を止めていればいい」

「なら凜はじつとしてて、必ず助けるから」

凜は口元を手で押さええて頷いた。それを見ていつでも来いと言いたげに身構えるララに対し、アサキムは質問を繰り返す。

「今、君は幸せか？」

「……………へ？」

突然のアサキムの質問にララと凜は驚いた。

「幸せでないとは言わせない。今、愛する人間と共に生き、健やかな子も成している君に」

「リトの事は認めるけど子供がいるから幸せっていうのは違うと思うな。」

「ほう？」

「子供がいるから幸せって言うのは一方的すぎだよ、子供自身の事だつて見なきゃ」

「そうだね、だけどそこは今抜きにしよう。ではなぜ君は結城リトと共に道を歩めるのか」

「それは、リトが私に結婚して欲しいって言ったからだよ」

「何故結婚して欲しいって言ったのかな？」

「私はリトの事が好きで、リトは私の事が好きだから」

「君が好きになったきっかけは？」

「そこまでは話さないよ、敵にはね」

「結構、やはり君にとって彼との思い出は特別のようだ、ならば行き

着く先は原点となるか」

アサキムはララにカプセルを投げ渡した。

「なにこれ？」

ララはカプセルを捻りながら開けた。

「すまないね、さっきまでの言葉は全てこのためにある。異なる星の人間にも取り憑くか、今こそ試そうか」

カプセルから飛び出したのは黄色い光。

「あ、イマジジンだ」

「!?」

その光はすぐにララめがけて突っ込み、入り込んだ。そしてララの体に灰にも似た砂粒が散らばる、王女であればサンドリヨンと表現したくはなるが、彼女は王妃だ、子供もいるから少し遅い。彼女が見初められる側でなく見初める側である事は突っ込んでではならない。

「成功だ、ククク……ハハハハハ!!」

そして、砂粒は上から見て下半身、上半身が分断された怪人の姿をとる。姿を形容すると魔女の帽子やマントを着込んだ人型のネコ、ペケを見た前後なのでもう少し等身が低ければ可愛げがあったかもしれないと思わざるを得ない。

「お前の望みを言え、どんな望みも叶えてやるう。お前の払う代償はたった一つう」

第四十二話 イマジン、接触

アサキムは、カプセルを用いてララにイマジンを取り憑かせた。当のイマジンも早速とばかりに、ララに対してどのイマジンがどの宿主にも唱えたお決まりの言葉で、望みを口にするよう促す。

「お前の望みを言え、どんな望みも叶えてやるう。お前の払う代償はたった一つう」

「……………」

だがララはそれについて何も答える事はなく、その代わり拳を一発、まだ形を整えきれしていないイマジンに当てた。

「あぶっ」

一つの衝撃で脆く崩れる砂の城と同じように、イマジンの肉体は軽々と消し飛んだ。

「今その話ではできないんだ、ごめんね〜」

思わず許してしまいそうな、心を射抜かれてしまいそうな、罪作りの笑顔で手を合わせてララは謝った。

「確かに今は……そうだね、だが君はもう既に贖となった、だからもう逃げられない」

目的は果たされたようで、アサキムの浮かべる笑みは屈託のない、楽しげなものだ。

現在アサキムは凜を見ていない、動きを阻害するために炎で結界を作ったつもりかもしれないがその制御はいわば、お留守になろうとしている。ララの方へ注意が言っているためか炎は少しずつ揺らぎ、薄くなっていた。

「(待っていた、この瞬間を!!)」

凜は木刀を渾身の力でもって振るう、空を切る一撃は風を切り、その勢いのまま炎をかき消した。そして途切れた炎をかいくぐるようにジャンプしてアサキムに向かう。

「(とった!!)」

「!？」

突然の凜の攻撃だが、アサキムは動じる事なくバック転をして避け

た。

「届きはしない」

その勢いのまま、アサキムはそのままどこかに行こうとしていた。
「どこに行くの!?!」

「また会おう、その時僕は扉の前に立つ。鍵がこの手の中にあらずとも、きつとそこにたどり着いてみせる」

アサキムはある方向を見ながら満足そうにどこかに消えていった。

「ハア……ハア………もう来るな」

凜は今まで息を止めてた分の呼吸をしながら吐き捨てた、そしてイマジンは凜の体に触れる宿主の前に再び姿を表し、待ってましたばかりに口を開く。まだ砂だから、かき集めればなんとでもなるようだ。

「邪魔者は去ったな、じゃあ……お前の望みを言え……」

イマジンはすぐさま凜に木刀で叩かれた。

「ったあい!!」

屋上の見えにくい所から覗く人間がいる、道化師………ライムである。ペケとシユロウガが戦っている間に忍び込んで屋上まで来ていた。そして今、ライムは物陰に潜んでいる。

「やりやがったよあいっ……」

アサキムがイマジンを取り憑かせた相手、ララ・サタリン・デビルークはデビルーク星の王妃。そしてライムの父親の正妻。その関係で接点があった。

イマジンについて元電王のライムが分かっている事をまとめる。

取り憑いた人間の記憶を基に体を構築する、姿は童話とか……何かしらの物語に登場した動物がほとんど、彼女の場合は彼女の好きな特撮番組のネコだ、多分。ゴ丁寧にその特撮番組の主人公のコスプレ風に。だからその気になればエセでも炎を吐けるだろう。

そしてイマジンは取り憑いた人間の望みを叶えようとする、自分の裁量で。ここまでは聞こえは良いかもしれないが野蛮人然とした性格を持つのが多くを占めているため、当然手段も性格に反映されると言えばどうだろうか。

「どうする……」

止めなければ……彼女の大切なものに危害がかかる。ライム自身がかけたのは一旦柵にあげるとして……

だがこうも思った、過去に飛んでいった先でひよつとすると結城美柑の行動を阻害してくれるかもしれない、と。

どうせもう何も力はない、おおつぴらに王妃の前をうろつける胆力も最初から持ち合わせていない。関わろうとするだけ無駄だ、ならいつそぐちやぐちやになるのを終わるまでそのままにしておくのも悪くないと。

やはり自分が最初から存在しなければこんな風にはならなかったと、全て自分が産まれてこなければ蒔かれなかった……そもそもアサキムがララにイマジンを取り憑かせる事ができたのはライムがアサキムに手段を渡したからだ。

「……………」

ライムは胎児のままこの世を去った自分と邂逅して、きれいさっぱり抜けたような気がした感覚に再び見舞われた。心……それにつられて全てが重くなっていくような感覚、何をしても楽しいとは思えない感覚、神父、母親への憎しみ、デビルークの人達、何かしようとした時に止めてくれるカイ、親や親類に関係なく接してくれるイマジン、それはもう縁の途切れた事によりもう何の意味もない……だからブレイキにあたる存在はいない。だから………死んだ方がいいかもしれない。

だがやはり赤ん坊の自分の事を考えればそうもいかなくなっていく。赤ん坊の自分が、成長するにあたって必ず遭遇する出来事に遭わずに済むのだから、自分が殺した記憶というものを保持していないと………最後のブレイキが死んだ赤ん坊の自分になるなんて露ほども思わなかったが。

「大丈夫ですか？」

女性が一人、声をかけてきた。今は緊急事態だが、善意で声をかけてくる人間を無視するのはあんまりなので、ライムは声をかけてきた女性を見た。

声をかけてきたのは、西連寺春菜だった。ライムの父親の妻の人、それなりに優しくしてもらった事はある。

「……………はい、大丈夫です」

「そうですねか……………悩みがありそうだったので……………大丈夫なら良かった」

こんな道端にふさわしくない風体の自分に優しく声をかけてくれるんだと思うと、ライムは心が暖かくなると同時に申し訳なさでそれを打ち消していった。

イマジンが暴れられると春菜にも被害が及ぶ、もちろん他の人達にも……………

それはあつてはならない事だ、だから。

「待ってください」

「はい？」

「言いくかかったのですが……………先程王妃様がイマジンに取り憑かれました」

「え？」

「なので電王に連絡を取りたいのですが……………」

先程は考えるのを止めてたが力がないならないなりに、ある者に頼れば良い。だがライム自身で頼みに行くのは駄目だ、別人だろうがオーナーに知られてしまう。

ライムは、衣服を手でさすり何も無い事をジェスチャーでアピールした。そもそもライムの着ている道化師の衣装に何かを突っ込むためのポケットはない。

「スマホ、ないんですか？」

「お恥ずかしながら……………」

ついでに財布も置き忘れてきた。

「私が連絡しましょうか？」

「メモとかもあれば……………」

見ず知らずの野郎の言葉を信用してくれる人間に対して凶々しすぎるのもいい加減にしろよとライム自身は思ったが

「はっ」

「すみません」

春菜はすぐさまボールペンも一緒に渡してきたのですぐに書き上げた。

「彩南じゃなくてえっと……」

手袋が厚すぎて書いている気がしないので、ライムは手袋を外した。素肌が露わになった時、春菜は興味深そうにライムの手を見つめた。

「なんですか？」

「あなたの手、リト君みたい」

結城リトの手の形をそこまで把握しているのかとライムは仮面の下で驚いた。夫婦だからというのもあるがよく見ていると感心せざるを得ない。

「親しい方ですか？ そうなのでしょね」

「ええ……私の大切な人」

「そうですね……ならずと仲良しでいられますように、では」

ライムは手袋を再び着用し、春菜に手を振った。心の中で、何度もライムは謝った。一般論的に大事な部分は全く触れてもいけないが。

『何が正解か……分からないけど、挫けないようにね』

幻聴が聞こえてきたような気がした、過去に言われた事をただ反芻しているだけだが。

「ふん」

春菜はライムの手がリトとそっくりだと言った。本当は手だけじゃない、一応顔も体型も……それもそのはず、誰の腹から産まれたとかいう話題は一切禁句として結城リトの因子を一番継いでいるのはライムに他ならない、だが同じ能力が起きるかと言われればそれはないと即答できる、そもそも環境が違う。

片や惑星の王女達、それと美少女達に布一つすらない距離のスキンシップを取り、なおかつ湧き上がったものを溜め込み似たような事の繰り返しを経たりト。

片やそんな体験もなく、両親の秘密を知って以降それを忘れない限りリビドーが湧き上がらなくなったライム。

よしんばラツキースケベを起こせても、無表情のままであろう自分を想像し、ライムは自嘲的に笑った。

「白けるな、ははは……」

腕を噛まれる感触、痛みで我に返ると……

スケボーのような車輪の転がる音が、聞こえてくる。

どんどん音が大きくなっていく、つまり原因が近づいていく。

ライムは反射的に電柱に隠れた。

原因は遠のいていく、後ろからなら良いかところそり覗いた。

シロだ、元銀河警察のシロがローラーズケートを履いて春菜の所にやって来た、春菜を見て急に足が靴に替わったので変身能力を使用したのだろう。変身能力……腕をナイフ、シロのように足をローラーズケート、髪を蛇の形に変えるなど体中の構造を自在に変化させる事のできる、体の構成素材がナノマシンの人間だから持てる能力である。変身能力の所持者は今のところヤミにメアとネメシス、シロぐらいだ。共通点は……ある組織で作られた生命体といった所。

「チヨちゃんは元気？」

「落ち込んでいるのも収まって、元気にやっています。そっちは？」

「それが……」

春菜はシロに近況を説明した。

「つまり……子供を産んだ友達の方に付きつきりで自分も自粛してたらそれで王様成分が足りなくて悶々とした気持ちを散歩で沈めようとしたら、王様と似たような手の形をしたピエロの人に会ったと。そしてなんかペケと黒いロボットが戦って避難しようとしてた……とああ……ハーレムってその辺大変アスネ!!王様に言わなきゃ」

シロが回れ右してどこかに行こうとすると春菜は赤面しながら慌てて引き止めた。

「だ、大丈夫だから……後で（ボソツ）」

「まあそこはお二人でなんとかしてもらおうとして、イマジン?の件は一回確かめてみた方がいいと思いますよ?」

「それもそうだね」

シロの助言を受け、春菜はスマホを慣れた手つきで操作していた。

おそらくララに連絡を取るつもりだろう。

「ララさん、もしもし：あ、ララさん：実はね……ピエロの人からイマジンがって……：本当なんだ、ありがとう。じゃあ私は電王を探しに行くから、じゃあね」

春菜は電話を終え、スマホを直した。

「本当だったみたい」

「探すのは良いですが電話関係は個人でやっちゃダメかと……：そいつの知らない間に引越して外れを引いたりとかありますし、相手次第で干渉されたりとか」

盲点だった、電王の先輩の住所を春菜に伝えたのは良いが……：未来だとその住所だが今は別の所に住んでるかもしれない、という事を見落としていた。

「という訳で帰って出直しててください、噂だと取り憑かれた人連れて歩いてると良いみたいですネ」

「うん」

春菜はシロに促されて、どこかへ行つた。それを見届けてしばらくの沈黙の後、シロは声を出した。

「誰だ、そこにいるのは」

ライムは即刻手を上げて、敵意のない事を示すためにゆっくりと歩く。

「……………」

「名前は何？」

言いたくないので、ライムは黙秘する事にした。

「……………」

「お前のそれは地か、それとも仕事服か？にしても相應しい場所と違うものがあるだろう。一人で道端をほっつき歩いているとか……」

「道化に相應しくない場所なんてありませんよ」

「喋ったな……質問を戻す、名前は？」

放っておけば無限に繰り返す気だという事がある程度悟つたライムは適当にごまかす事にした。

「プリン・ティータイムと申します」

「そんな適当な名前………あるのかもな、わりいわりい、俺はミルク・ビン」

シロは相手が善人か悪人かという問題がなければ話は通じる方だ、だからある程度ごまかせると思いたい。向こうも同レベルの偽名を使っているのどつちもどつちと解決させられる。

「実は俺ライムって人を探しているんだ、この辺りでそういう名前の人間を知ってるか？知人にそっくりな顔がいるって聞いたんだが」「会ってどうしたいんです？」

「うーん、まず聞かなきゃいけない事があってそれをはつきりさせるだけでも言うか」

母親の一件だろうと察しはつく、神父がおそらくバラしたのだろう、とも。

「とうかさっきの春菜さんの言ってたピエロってティータイムさんじゃないのか？」

シロが急に核心に近づいたのでライムは驚きのあまりフリーズしてしまった。

「電王の住所をある程度知っていて、デビルークの王妃と彼女が繋がりにある事を知ってる」

フリーズが溶けたのでライムは反論した。

「こつちだけの特ダネをばらまいただけだし、ララさんと春菜さんの事だつてちよつと宇宙のニュースに詳しい人ならみんな知ってる事じゃないか」

「さつき春菜さんが言っていたのもあるし俺が話で聞いたライムも実は電王関係者で……」

「うざったいな……シロさんは割とそういうところあるよな、触れないで欲しいものを軽々と触れようとするんだ」

ライムははつと気がつき仮面越しに口に手を当てた。今シロはミルク・ビンだったのだ、追究が始まるかもしれない。

「なんか随分俺の事知ってる素振りだな、だが俺はお前の事を全く知らない。失礼」

「あ」

シロはライムの仮面を取った後、変身能力で指一本をパイプのような円い筒の放水銃に変えてからライムの顔面に発射した、流れるような一連の動作に対応できず、そのため化粧が一気に剥がれ落ち、素顔が露わになった。もうごまかしは効かない。いっそのこと、開き直って対応しておいた方が良いレベルだ。

「その顔……………」

シロは驚き、ライムを凝視した。髪や目の色がデビルーク王の妹なだけでほぼデビルーク王の顔だから……

「シロさんお望みのライムっていう奴の顔だけど？」

第四十三話 血の刃

「お前が……結城ライム……」

結城ライム……アサキムはイチゴであると言っていた。確かにデビルークの今の王様と、その妹にそっくりである、血縁関係である以上当たり前であるが。ただ……小さく開いているのか王様より目つきが自然と人を睨みつけるような感じになっている。

「はじめましてで悪い、確認するが、デビルーク王の妹を殺したのはお前か!？」

「神父か、さてはシロさん一回死んだ？」

死んだか？と聞かれればそうなのかもしれない。シロは神父の攻撃で死んだ、そのおかげでいとも簡単に神父から情報を引き出せた。だが変身能力の副次作用か生き返ってこうしてここにいる……

「かもしれないな、で？どうなんだよ」

「ああ、そうだ。オレが殺した。おかげでいらぬ人間が自分自身をいらない人間だつて認識せずに済んだんだ」

そう言っている時、ライムの語気が異様に強まっていた。その時だけ、口角がっり上がった……自分と母親を殺したつて話をして……笑っていた。

「人の命を、人の自由をなんだと思ってるんだ!？」

命が無ければ、人は自由を味わう事すらできない。自由が無ければ、人の生命に意味はない。

「自由なんて宇宙のどこにあるんだよ？オレ達がそう呼んでるものの全ては欲求や欲望から支配されての行動だろう、それとき、自由には責任がつきものつて言うじゃないか、とってもらったんだ」

シロは激昂した。母を殺した事を、当然の事をしたとばかりに爽やかに言い放ったライムの言葉に……

「テメエの母親を殺しておいての言い草かあ!!」

「母親、だから面倒なんだよ。オレの存在が、禁忌を破った奴の罪の証だという事実を、ずっとずっと突きつけられながら生きていかなければならなかった気持ちが分かるか？」

分からない、当事者にしか分かり得ない。でも……

「だからって……お前の犯した罪だつて許されない、王様達も謝つたつて許さないだろうが償わせてやる。その人相だけは邪魔だが」

「謝るか……じゃあさつき春菜さんに会つて思つた事、「産まれてごめんなさい」「こんなオレが生きててごめんなさい」「問題になつてごめんなさい」「死にたくなつてごめんなさい」「迷惑をかけてごめんなさい」「申し訳ありません、お父様。貴方の素晴らしい（→）奥様方、子供達を裏切る真似をさせてしまつて、貴方が無条件で赦そうとするお母様の代わりにお詫び申し上げます」

その言葉を畳みかけられた途端、吐き気がした。

「もういい、もう……たくさんだ」

そして胸が苦しくなつた。ライムの今の言葉を聞いていると、例えるなら……虐待された人間の叫びのように聞こえてくる。自分を否定した、もしくははされた事を至極当たり前のように感じているような、そんな叫び。

「周りに春菜さん、ザステインさん、デビルーク王、王妃、姉さん、その他いい人達がいっぱいいる癖になんでそんな事が言えるんだ!」

「王族に近く産まれると、王妃や妾が何もしなくてもその他からがうるさいんだ。他の女ならまだ許せるが、相手が妹君なら勝手が違ふと。だから言ってくる、お前は王室の汚点だつて」

やっぱりそう言われるのは確定なんだろう、王様が王妃と結婚してなければ、他人ごとで済むが結婚しているからそうも言つてられない……そんな訳ない、デビルーク王が、王妃の婚約者となつていた時点でもうライムの存在している時点で悪目立ち確定だ。

「オレを通して、奴とおじさんを攻撃してくる。ララさん達が庇つてくれても雰囲気だけはそのまま。逃げるのも許されない、数が多すぎて抗うのも馬鹿馬鹿しい。原因を憎む事も肉親の情とかで封じ込めてくる、ただ……生きているだけで責められるオレ自身を受け入れさせようとしてくる。後少し年月があれば気が狂う所だつた」

「だけど、お前のやつた事は間違つてる」

「間違つてる……だつたらどうすれば良い? 答えを教えてください、そ

れ以外が間違いだってんなら」

「!?……………」

シロは答えられなかった。今もって答えが見つからない、ライムをどうすれば良いのか？救うべきか、放置するか、それ以外か。

間違つてると両断するには、やはり何かが足りない。

「やっと見つけたんだ、オレの答えを、それをかき乱される訳にはいかないんだよ。」

ライムはそう言うと、手持ちのフェルトでできた鎌を分解し、中にある黒色の剣を持ち出した。刃以外の殆どが黒く、刃は血のように赤黒い……そんな特徴を持つ剣を知っている、それを伝記や昔話、都市伝説、記録、最近頭の中に浮かんだ情報ではこう呼ぶ……ブラデイクス。

「ブラデイクス!?ブラデイクスだ!!」

かつて宇宙で猛威を振るい、最近だと九条凜の精神を乗っ取って暴れようとしたが黒咲芽亜を筆頭とした変身兵器として産まれた者達により阻まれ、その果てに折れた魔剣、ブラデイクス。

宇宙は広い、どこかにもう一本二本?一振り二振り?あつてもおかしくはないかもしれない。

「止める、自分が自分で無くなる!!」

それよりブラデイクスには誰かの精神を乗っ取る能力がある、乗っ取って、人を斬って、エネルギー血を採る。それこそ誰かが死つかえなくなるぬまで。ブラデイクスにとって人間は自身のエネルギーを溜め込んでいる容器であり、自身のエネルギーを効率よく摂取するための道具だ。

「そんなもの、オレには関係ない!!」

シロの言葉もおかまいなしにライムはブラデイクスを構えた。その際何やら意識して力んでいるようでもあった、絶対に何かを仕掛けてくる。

「はあ!!」

ライムはブラデイクスで横風ぎに空を切った、すると、ブラデイクスから赤い色の何かが放たれた。

「これは!」

その赤い何かはブラディクスで描かれた軌跡をトレースし、真つ直ぐにシロの方へ飛んでいった、それはいつたいなんなのか……至近距離まで寄ってきた所で答えが分かった。

「この臭いは、血か!？」

鉄、またはそれを含むものの持つ独特の臭気、そして暗さすら含んでいる赤み……おそらく、血だ。

血に何らかの圧力をかけて血を飛び道具に変化させたのだろうか？

その攻撃をシロは飛んで避けたが、シロの後ろにあつたゴミ箱は真つ二つになつた。察するに殺傷力は高そうだ。

「前言に偽りはないみたいだな」

ブラディクスは血を求める、エネルギーとしてなのだからさながら人が、動物が食物を求めるようなものだ。

そうしなければ生きていけないのだろう、九条凜の一件など取り憑いた人間を所有物と見なさなければそれなりの理解はしようと思う、その上で叩き潰すか使い道を考えるだけだが……

だが今の攻撃はそうやって得たものを吐き出す。そんな行為が、血をエネルギーとして採っている存在にできるだろうか？できる訳がない。こんな事ができるのはブラディクスが本体じゃない、つまり意識を持ったブラディクスの使い手以外ない。

「扱いが悪そうではあるけど」

ブラディクスが自我を持っていると考えたとそれはそれで不憫な気がしてきた、何があつたかは知らないが主導権は完全にライムが持っている。

「もう一度!!」

ライムはブラディクスを構え、振るつた。またあの攻撃が来る。

「だが血なら都合だ」

シロは変身能力で腕をマグカップに変化させて、その攻撃をすくいと取った。

「よし」

すくい取った血を別の手持ちのビンに移し、上着の中にしまった。

これを調べれば捜査は進むかもしれない。

「なんだと!？」

「跳ね返せないだけマシだ」

「なら直接……」

ライムがシロに直接切りかかろうと、シロが腕を刃物に変えてそれを防御しようとしたその刹那……

雷のようにジグザグと、そして素早く人がシロとライムの間に入り込んできた。その人は法師の衣装を纏った青年で、法師なのかと疑いたくなるような黒く長い髪が特徴的だった。

『物騒な事をしていますね……双方』

シロの方は錫杖で抑え込むように、ライムの方はどこから持ち出したかおよそ脇差程の大きさの刃物で受け止めていた。それを恐らく着地した瞬間に済ませる手際の良さからシロより、ライムより、戦い慣れてると見れる。

「いつぞやの坊さん、それと馬……そして多分カルラ天、こんな訳分かんなくて強そうなのは無闇に関わりたくないな……」

ライムはそそくさとその場を立ち去った。

「待て!!」

坊さんはともかくとして馬とカルラ天とやらはシロには見えない、そこは置いといて、このまま逃がすのは面倒だった。

『おい』

追いかけようとしたシロは法師に襟を掴まれた。明らかに地球人の握力ではない、下手に抵抗すれば破けるので抵抗は諦めた。

『何故あの子と戦っている?』

肉声ではなく何らかの装置を介しての……例えるなら電話越しに声を聞いている感覚がした。

「その前に、名前は何です?」

知らない人間と話すにはまず名前を知ることからだろう。

『黄蛇上人……それか八雲、好きなのを……見えていますか?』

「シロです。なんの事かは分かりませんが……八雲さん、あなたは宇宙人ですか?」

『信用できそうな魄に免じて教えましょう、拙僧は日の本出身の妖
です』

あやかし……妖怪の言い換えとすると……悪魔デビルクに妖怪……なんでも
ありだなと思うとシロは頭に痛みを感じた。

「あいつが何をしたのか知ってるんですか？」

『聞かせてくれますか？』

「……………人はいなさそうだな」

シロはお坊さんとお互いの情報を交換しあった。

『はあ……自分の産まれを恥じて、母親を殺した未来人……と、人間つ
て面倒ですなあ、NO混血NO収束。そこにさしたる違いはない、自
分達と違う所がある……それだけで責める理由になる。それと少数
派の倫理観を持つ者から多数派の倫理観を持つ者が産まれればこう
もなるか……かくいう拙僧も元々は人間であり、人間の嗜好を持って
いるつもりですが……引き止めてすみません』

「軽く言ってしまうえば妹ルートのバッドエンドの一つって事になる
けど、妖怪産むとか……」

『妖として結実した以上美柑殿本人とは言えませんがね、色々と逸
脱してまで欲しがったものを否定された、証自身に……そして条件は
そいつのせいで整った……出るな』

「とうるかピエロ姿の奴に会っただけなのによくライムだつて分か
りましたね」

『そりゃまあ、拙僧は一応妖だから……魄でものを見てるっていう
か』

「すげー」

『それで？』

法師はシロを見てきた、その目を見てみると、自分が蛇に睨まれた
蛙のように竦んでいるような気がした。

『そなたは何のためにここへ？拙僧は妖の望み、それがあんなら叶
えたいと思ってここに来た。さしあたってあの子の心が満ち足りて
いない風だったからそれを埋めればいいと思っただが……修行が足り
ないみたいですか』

決まりきってはいる。

「奴を捕まえたい、捕まえなければならぬ」

『だが迷っている、拙僧にはそう見えた気がした……あのまま硬直しても根本的な解決は見られないとも』

「仕方ないだろ……」

ライムの叫びを聞いて、その言い分に対して敢然と否定できる言葉と心が足りない。

「俺だってそれで良いのか？ って思ってしまったんだ」

ライムは人を死なせた、それも自分の母親を。だが因果を辿れば彼なりの絶望があつて、それは彼女が原因らしい。そこを考えるとシロにはその事を強く否定しきれなくなった、以前金色の闇相手に突つかれたのは、数が多すぎたからだ……

だったらライムがデビルーク王を殺したのは認めるのか？ それもダメだろう、彼女の死を悲しんだ人間がいる、彼女の死で心が囚われている人間がいる。だがライムの事を知れば……そっちの方でも囚われてしまう……

シロが事件の犯人を捕まえようとしてきたのは、それで被害者が救われると思ってるからである。だがこれは解明する事で被害者がさらに傷つく案件だった、だからずっと迷っている。

『迷い続けるだけなら、拙僧が決める。乗れ』

法師がそう言うと、何かに上空まで引つ張られる感触がした、シロは何も分からずにいたので地面に激突してしまった。

「なにすんだよ」

『見えてないか……仕方ない……』

法師は白粉のようなものをさすったパフを空に向かって擦る、すると何もないように見えた場所から馬が見えた。

『さあ乗りなされ、正直男なんか乗せて二人旅なぞ嫌ですが』

「なら無理しないで、俺は飛ぶ」

シロは翼を変身能力で生やした、金色の闇の戦いっぷりを賞賛する人の話を基に覚えた。本人からでないのは、どんな変身ができるか、という質問がどう殺したか？ に脳内で繋がって、姉に対して気軽に聞

ける話題でないと思ったのと、急にできた姉に対し距離感を近づける事ができずいくらかの気恥ずかしさを覚えたためである。

『飛べたのか……』

「といつかなんのつもりです?」

馬に乗せてどこかへ連れて行くつもりのようなのだが。

『そなたはこの一件……おそらく何を選んででも後悔するだろう』
凶星だ、捕まえても、見なかった事にしても、言っても、言わなくても、きつともう少し何か良い方法があるはずだと思ってしまう。一番手っ取り早いのは、過去に行つて根を断つという禁忌に手を染める事。だが……同じ事をライムはした。

『だが後悔というものは今の先には立たないが、いつかの先には必ず立つ。彼の顛末を見届け、何を思ったか、どうしたかかったか未来の為に心に刻み込んでおけ。一番やってはならないのは目を瞑り、何も見ない事だ。その選択は次回までとっておけ、まあ次回なんてない方が良さだろうが』

ライムに何をする気かは分からないが、何もしないのは良くないというのには賛成だった。

「その前にこれ警部達に渡しに行かなきゃ」

ブラディクスの放った血を入れたビン、調べてもらえれば何かは掴めるかもしれない。

『そうか……なら……ダメか、だろうな。仕方ない、式鬼って
いう一種の式神呼ぶぞ。く♪』

法師が口笛を吹くと、ビンがひとりでにシロの上着ポケットから離れて行った。

「へっ。」

直後法師は何かに気づいた様子で聞いて来た。

『しまったどこに運ばばよろしいか?』

シロは自分のスマホを取り出し、メールを入れた。

『警部へ、ブラディクスの吸った血を詰め込んだ俺の名前の書いてあるビンが来たら鑑定してください。』

PS まだ隣町の交番の所にいると助かります』つと……」

『ああ……あそこか、行け』

その言葉の後、ビンがすごい勢いでどこかへ行った。

『行くのか?』

法師が誰かに話しかけているが、法師の話しかける方向には誰もいない。

『お供も他の式鬼に任せれば良いだろう? 拙僧も怖がってるのについてくる訳ないだろう?』

端から見れば独り言をひたすらに繰り返しているだけのよう聞こえる。だが目の前にいる法師は戦いの心得はあるようだし、馬も見えなかっただけでいたと分かった。決して妄言ではない、とは思う。ただ、こっちは見えないがあっちは見える……その事で壁を感じて、少しもどかしいと思った。

『死が怖いのなら懇意にしてる幽霊に付き添ってもらえ……お静ちゃんはダメだよ、奴のメンタルに引つ張られるかもしれない……それに一度死んだからって克服できる訳ないからな、その点掛け軸を呼び水に不死鳥への憧憬、羨望……ひっくりかえりて信仰から産まれたお前なら大丈夫って期待してたんだけどな……話途中で切りやがって』

法師はぼやきながら馬に乗り、その馬は法師が乗ると空を駆け出していった。

「え」

この法師とその周辺相手には、常識とかは何も考えない方が良さそうだとシロは思った。

「そういえばお静ちゃんって……ミカド先生の所の看護士?」

独り言を呟いたその時、法師の耳は大きく動いた。

『ライムとやらを追っている間、お静ちゃんについて詳しく聞かせてもらおうか……子供相手には抑えてたがそなたには良いだろうか?』

「正気? 聞こえるのか?」

動いている時に話しかけられても風に遮られて聞こえないだろう、とシロは思った。

『構わん、そもそも拙僧は元忍者だ、ちよつとしくじってこうなつた

が……そういう訳で聴覚はいい方だ。さあ、お静ちゃんの事を洗いざらい……吐け』

「知ってる事だけで良いなら……」

二周年特別記念 V・M・C妄想新風録

chapter 1 謎の新入り

V・M・C……ヴィーナス・モモ・クラブと読み彩南高校におけるモモ・ベリア・デビルークを愛する野郎共の集まりの総称である、ぶどうかいてきなももの仮面を付け日々彼らにとっての女神である彼女について愛でたり妄想したりして過ごしている。そんな彼らの前に、一人の男子がやってきた。

「ごめんください」

男子は殴り込むようにドアを勢いよく開けて部屋に入った。その音を聞いてモモを撮ってできた映像を鑑賞していた会員達は驚き、ドアを見た。

現れたのは男子、ひよつとすると新たに芽生えた同好の士かもしれないと会員達は期待を込めて言い放つ。

「「ようこそおいでくださいました」」

V・M・Cの会員達は男子を歓迎した。

「時に君は……モモ様は好きか？モモ・ベリア・デビルークを!?かの女神を!!」

「はい!!大好きです、愛しております。」

「その愛のために我らと争い、モモ様を悲しませるような真似はしないと誓えるか?」

「誓えます」

とかなんとか言っているが、正体はアサキム・ドーウィンである。面白そうな集まりを知り、それを見物するために彼もまた目の前の男達と同じようにオリジン・ローによるへんそう仮面を付けたのだ。

「「(入会を)許可する!!」」

「(ここ)はV・M・C……モモさんを愛する気持ちとその事で我らと争わない人間であれば誰でも受け付けるぞ、今ここに女子の会員はいないけど」

まあいたら侍女か女子好きの女子とかに限定されるような集まりかもしれない。彼女は決して王子様系ではないのだから……

「とその前にこれを」

会員の一人が渡してきたのは周りのみんながつけている、舞踏会などでつけるような黒いマスコぶどうかじてきなもの。

「これは？」

「我々にとつてのバッジのような物だ。この部屋にいる間、つけて欲しい」

「分かった」

アサキムはマスコぶどうかじてきなものを装着した。

「これで晴れて君もV・M・Cヴァイナーナスの会員だ。我々と共に、モモさんの純潔を守り、モモさんを選ばれるように励んでいこう」

「うん」

アサキムは自分で言っていてその言葉を白々しいと思った。選ばれる相手は決まりきっているのだ、そして彼女に心を奪われているという訳でないのに。

だが、面白そうな集まりを見るには演技も必要だ。

それから会員達と一緒にスクリーンを鑑賞した。かるーくV・M・Cヴァイナーナスの目的も聞かされながら……

スクリーンに映っているのは、どれも中心人物はモモ・ベリア・デビルークだった。撮り方の癖が掴めない……というよりおそらく個人個人が撮った写真を繋げていつているようで”有志の集まり”である事をより一層強調させる。

スクリーンの向こうの彼女は、ふんわりとした笑顔、双子の姉と映っている所、植物を世話している所。その他も含めて、どれも純粹無垢で心優しい可憐な少女として映っている。だが、アサキムは思った。これは彼女の仮面そとつちであると……その仮面の剥がれる瞬間を目の当たりにしたため、そう思った。だが、だとすれば、このスクリーンの向こうの彼女は本当の彼女ではない？なら本当の彼女とはあの仮面の先にある？

「心ここにあらずみだいな、新人!!」

「無理もない、モモさんの姿を写真とはいえ直視したんだ。あまりの尊さに天にも昇ろうというもの、ところで何を考えていたのか、

我々と共有する気はないだろうか？」

「覗いてみるかい？」

話を合わせるためにアサキムはモモについて、即興だが妄想してみた。

ある昼下がりの教室にて……

モモはおもむろにアメ玉の詰まった箱から包みを取り出す。

そして包みの中から取り出したのはスフィア、アサキムの求めるスフィアの、アメ玉程のミニチュアサイズ、そのスフィアを2つの指でつまみ、舌に絡ませつつ頬張った。

左右の頬に行ったり来たりしているの、その分彼女の舌の動きが予想できる。

スフィアが美味しいのか、モモは頬に手を当てながら顔をほころばせ、この妄想は終幕を迎える……

「(しまった)」

どうやら無意識にスフィアの事を考えてしまったようだ。

「新人、僕は君の考えているメロン味のキャンディーのようになりたい。そんな風に、モモさんを笑顔にできたならと……」

「ああ……それができるなら我々は、どんな苦労も厭いはしない……」

何人かが、アサキムの頭の中を覗いて涙を流していた。

少しこそばゆく感じながら、アサキムはスクリーンの鑑賞を再び始める。

「ところで新入り、君は結城リトの事をどう思う？」

「……………」

アサキムは声をかけてきた会員の方を向こうとした。

「悪い、邪魔したな。ビデオを見ながらいい」

会員の言っている通り、スクリーンの方に向き直して考えてみた。精神面においては、女性に好かれるだけはある男……と思う。おつむの出来如何はあまり知る機会はないが、肉体面はたまに女性にボコボコにされてもすぐ治っているみたいなので丈夫な方だろう。

「この前奴からモモさんを守ろうとしたらモモさんを怒らせちゃっ

「ただ……」

「その事についてだけ……僕らは彼に与えねばならないのかもしれない、結城リトにV・M・C名誉会員の座を!!」

結城リトが会員になってしまえば、V・M・Cの目的の一つは果たされる。

「何?」

ヴァイナス

「V」

「M」

「C」

「C」

「「名誉会員だトー!!」」

会員達は全員、驚いてアサキムを見た。名誉会員とする事は、会員でない者を会員と同様に扱う事を意味する。

「何故あんなケダモノに……」

分からなくはない、彼の噂を辿れば女性にとってよろしくないものばかりだ。しかもそれらは全て真実である事もアサキムは知っている。

「モモ姫はそのケダモノに心を許しているように見えた。何故だ?」

「モモ様は誰が相手だろうと、慈愛を振りまいてくれる女神であるからに他ならない!!そう、あの結城リトであろうと」

「如何に女神の如き存在であれ、害となる者相手に容赦はしないだろう。つまりは認められているだけの何かはある、という事になる……探ってみようじゃないか、それが何なのか。それを知りたくも僕達の、ヴァイナス V・モモ M・クラブ Cの宿命だと思おう」

「それもそうかもしれないが……」

「あのケダモノには婚約者がいて、モモさんの姉君なんだぞ」

「そのいずれ至る家族という立ち位置から見た彼女を、知りたいとは思わないか?僕は知りたい」

万象に対して知りたいと思う気持ち……好奇心、それに関しては少なくともメア以下だ。

どれほどその感情を高めれば、彼女に届くのだろうか?スフィアの

力を、己のものとできるだろうか？

「アリだな」

「ナシでしょう」

「でもあの男を一回調べるのは必要だと思います」

「それがいいか、その役目は……て新入り、帰るのか？」

「そうだね、今日はありがとう」

「今日もモモさんは!!」

「……………」

まるで意味の分からない言葉だったので、アサキムは啞然とする他に何もできそうになかった。

「ああ……すまんすまん、俺達流の挨拶なんだが……恥ずかしかつたら別に良いんだ」

「最高に小悪魔だった？」

「おお……ありがとう、またな!!」

会員達が手を振ってさよならの挨拶を交わし、アサキムも手を振って返した。

「どう思う？あの新入り」

「まあ……仲良くはできるんじゃないか？」

chapter 2 同じ数のリトさんを揃えれば奴らに勝ち目はなく

目的も果たし、アサキムは部室を出て、廊下をうろついていた。

「アーサキムさーん」

振り返らずとも分かる、その声と重圧はモモ・ベリア・デビルークだ。そして、笑った顔をしているがその額に怒りを隠しきれていないという事も……

「愛しの次期王とは共に在らずか」

「そうしたいのは山々ですけど、少しあなたに聞かなければならぬ事があるので、その時の顔をリトさんに見せたくないのだからこうなってるんです」

「モモ姫に怒られる事、僕はしたかな？」

アサキムはモモの方を振り向いて聞いてみた、原因はわかっている

が……

「一部始終は見せてもらいました、まさかあなたもそっち側の人間だとは思いませんでしたよ……」

アサキムはああと言いながら

「君は薔薇のような人間だ、その花の可憐さ、いずれ備える美しさに心惹かれる人間は後を絶たないだろうね。だが、綺麗な薔薇には棘があると言う。君の棘とは、内に秘めたる業火のような激情……棘すらも愛せる程、僕は君に焦がれてはいない」

「否定はしませんが、なんだかこう他人に言われるとイラツと……どうしました？ 気持ち悪いですよ」

アサキムが笑いをこらえようとしている所をモモはドン引きした表情で見っていた。

「嫌……面白く集まりだったよ、ヴァーナス V・M・C」

アサキムは良い笑顔で笑った。ヴァーナス V・M・C……対照的にモモはだるそうにため息、そして普段から抱えていたと言わんばかりにだるく、重そうな言葉を漏らす。

「あんなのうざったいだけですよ」

「群がる者達が君にとってなんら価値のない人間だからじゃないかな？ 例えば……」

「モブだって言えば良いのにいちいち言い換えなきゃいけないのは中二病のつらい所ですね」

アサキムはお構いなしに教室に飾ってある世界地図を見て一國一國を指差す。

「おはよう、モモ、元気？」

日本のリトさん、つまり普通のリトさん

「ボンジュール、モモ、馬に乗って移動したいなら任せてくれよ」

フランスのリトさん、軽竜騎兵のコスチュームを着ていて乗馬で移動するスタイル。

「モモ、寒いなら（上着を脱いで手渡す）これ着ろよ、俺は今8枚着てるから大丈夫」

ロシアのリトさん、寒い国なので服装で体温調節している。

「この試合、俺達が勝つたら聞いて欲しい事があるんだ、え？今言え、俺だつて心の準備がな……今言わないと試合に影響が出る？仕方ないか」

アメリカのリトさん、試合前でアメフト用の衣類を着用している、ちなみに花形。

「ホアチャ、ホアチャチャチャチャチャチャチャチャチャ、アチャー!!見てた？恥ずかしいな」

中国のリトさん、拳法着を着用し、必要に応じて脱ぐ。

「オオオオオオオオ」

エジプトのリトさん、ピラミッドの中で眠るミイラ。マスクと包帯のせいで、そうだと示さなければ分からない。

「あのゾウさんすごいな、ナナと仲良くなれるかも」

インドのリトは半分以上の確率でナナ派のような気がし、焦りを感じながらアサキムは話を続けた。

「ローマ!!」

聞いている通り、ローマのリトさんである。

「モモ様、私のこの命に代えても貴女を守ってみせます」

ブリテンのリトさん、騎士の装備で固めたリトさんである。

「ヒヤッハー!!王女様たあこいつは上玉だ、でもこんな所にいるって事は……大丈夫？国、送ろうか？」

カリブのリトさん、海賊だ。

その他のリト「モモ、モモ、モモ、モモ、モモ、モモ」

リト達が、桃に悪魔的な模様を加えた奇つ怪な旗の元に群がりだす。

全員「モモ、俺達の内の誰かと、結婚してくれー!!」

「ウツ」

モモはよだれを垂らし、倒れた。

「ほら、やっぱり」

アサキムは指を差し勝ち誇るように表情が綻んだ、負けじとモモも立ち上がる。

「解釈違いに加えていつも考えている事、それとあいつらとリトさ

ん本人よりマイルド、例えるならぬるま湯に生焼けのお肉、でも悪くはないですね」

「ほう……」

「いきますよ、――（規制音）」

アサキムはモモから生命の欲求の形を延々と聞かされた。

「ゴクツ」

その言葉一つ一つを思い浮かべてしまい、終いにはアサキムは口から血を流し倒れた。

「……までとは……君はそこまで踏み込んでいたのか!!」

「考えましたか？考えましたね？私もこう……ウフフ、楽しくなってきたやいました」

目にハートを浮かべ、恍惚とした表情を隠さないまま教室を出て行くモモにアサキムは圧倒され敗北感すら抱く事もできないまま意識を閉じようとしていた。

「あ、それと私100人に追いかけるより、1人に追いかけてたり追いかけられたりしたい方なのでそこんところよろしくお願いしますね」

chapter3 彼女の母星には同担がたくさんいそう

「(王女モモ……君の産まれた星には……クククククククク、もつとたくさん会員の資格を持つ者達がいるはずだ、老若問わず、それこそ一国を築き上げられる程に)」

そう思いつつも意識を閉じたアサキムは、一つ夢を見た。

「なあーにーモモ様のファンクラブだとおうー何故拙者を混ぜない？」

「モモ様は小さいころから知っている我等が娘のようなもの、どこかの馬の骨かも分からん貴様等なぞノウだノウ」

さつき会ったV・M・Cは、選ぶ側であり、選ばれる側でありたいとも思ってる連中の集まりだ。だが、宇宙にはきつと完全に選ぶ側というのも存在しうる……それは彼女が子供の頃から知ってる大人達。

「某の見立てでは全員モモ様の心を掴めなかつたと見るが、いかなかな」

それだけでは終わらない。

「ヨオ、オレモ、マゼテ」

下から急に、大きな木が生えてきた。シバリ杉だ。

ついでに、キャノンフラワーや他の植物も混じってきた。

「ナカヨクシヨウゼ、デナイト、モモサマ、トナリ、ムリ」

「ワテモ」

「ワタシモ」

家来、もとい友達枠まで出てきてしまった。こんな風な喋り方かはともかく、こいつらも選ぶ側なのだろう……事実、植物とは友達とも言える彼女相手に植物と仲良くできない人間では釣り合わない。彼らV・M・Cはその壁を越えようとするだろうが、物理的にやられない事を祈るばかりである。

「はは……愛されてるね」

と呟いていると、リトの娘の立ち位置である、セリーヌがやってきた。

「まうく!!」

「これが娘枠か……」

……

「ハッ」

アサキムは意識を取り戻した。

「……………それはそれとしてこのままでは彼に危害が降りかかるな……………」

だが、別に放っておいても構わないような気がしてきた。結城リトがモモに襲われた所で返り討ち（意味深）に遭うのが関の山で、彼女もきつとどういふ結果に及んでも、満足するだろう。

「ふ…………次に太陽が空を昇るその時まで、風のままに進もうか」
アサキムは満足そうに、彩南高校を後にした。

第四十四話 電王、求めてく

く一方そのころく

風夏はララと母親の春菜と一緒に東京の某所、ミルクデイツパーという所に向かっていた。

『出せー!!ここから出せー!!』

ララが今持っている一枚の札から、ずーっと男の声、イマジンの声が聞こえてくる。

「ダーメ」

『ケチー!!ケチンボ!!ケチトンボ!!ケチの助!!』

下手な駄々っ子よりも喚いており、近くを通る人は声の方の先にいるララに目がいく。だが、声が大の男であるのとそれに該当する人間が近くにいないため追求されるのは避ける事ができている。父親^{リト}を留守番にさせたのは正解だった。

こうなつたのには理由がある。

説明のため時を少し遡るとしよう……

く結城家の別荘く

風夏は共用スペースで宿題のドリルを片付け、絵本を開いたままそれを枕にうつ伏せに寝転んでいた。それを見つかって頭を撫でられた……感覚から見て父親だった、だからその気は無かったが本格的に眠りつつある。

「……読み疲れちゃったか、寝るならベッドの上だけにしとけよな」
夢見心地になりながら、風夏は声を振り絞った。

「ララさん探しに行くの?。パパ」

「……………まあ、まあな………なんかイマジンがって」

イマジン、まだ風夏にはそれがなんの事だか分からなかった。

「ママの事もよろしく、おやすみ」

「おやすみ……」

だが、眠る前にドアをいじくる音と、開閉する音が聞こえてきた。

「あ、帰ってきた」

風夏は眠りかけた目をこすり、絵本をたたむよう軽くリトに叱られ

つつも玄関に向かった。

「ただいま〜」

「戻ったぞ」

見えたのは謎の怪人の手をとって引っ張ってる凜といつの間にか
ララから分離した状態で、抱きかかえられて帰ってきたペケ。

「無事……そうだな」

「うん!!」

ララの元気の良い返事を聞きリトはホツとした、下から見ても風夏も
つられてホツとした顔になった。

「私もな」

「ただいま〜風夏」

「ペケはどうしたの?」

「バッテリー切れみたい」

確かに普段の小言の絶えない様子からは考えられない程元気がな
さそうだ。

「おつかれさま、ペケちゃん」

『はい』

「さも当然のように家が上がってるけど……こいつがイマジン?」

「どうも、この度ピンクな人に取り憑いたイマジンです。」

イマジンはララの髪を指差して言った、ララの髪はピンク色だ、ラ
ラだけではなくその妹、母、娘も。

「(話聞いてたやつより話せそうだな)、ちよつと座って待ってて」

リトはすぐにその場を立ち去った、おそらく来客に対しての

イマジン……宇宙人とは違うのだろうか?

だが、考えようとするのと泣きべそをかいているような声がして……
風夏はなんとなくだがイマジンの声をかけた。

「どうしたの、泣きそうだよ?」

そのイマジンは、風夏の言葉を聞いて、見た目では分からないが号
泣した。

「グスツひどいんだよー、契約者がオレの事いじめてくるんだよー」

「そ……そんな事してたの?はい」

リトはイマジンに水を入れたコップを渡した後、ララと凜の方を見た。言うまでもなく、説明求むといった所だろう……ララはペケをソファアーに寝かせてから充電し、それに答えた。

「そこまではしてないよー」

「少し危害を加えるとどうなるのか教えてやっただけだ、あの男……アサキム・ドーウインの差し金のようだし」

その名前を聞き、コップの水を飲んでいたイマジンは言いたい事ができたように飲み干すまでのピッチをあげた。

「へえー俺を捕まえたあいつつてそんな名前なのか……………」
イマジンはリトの方を指差した。

「似てるな、あんた。あ、水ありがとう。ごちそうさん」

「はい、どういたしまして……………」

「？」

『へ？』

「？」

ララ達は、近くにいる人間の顔を見合わせて首を傾げた。何故か？理由が分からないので風夏はリトに質問した。

「パパ、なんで皆はてなばかりなの？」

「アサキムって奴はな、俺とは顔とか、それ以外も何も似てなかったんだ」

「ふーん」

アサキム……思い出したが、最近父母達の間で話題になってるダークなイケメン、実は異母弟のラズが会っていたらしいイケメン、どんな人間だろうか？

「それはそうときつきはごめんね〜」

「全くおんなじノリで威嚇してきて謝ってきて、なんなの俺の契約者サイコパスなの？」

サイコ……パス？

「人の持つてる喜怒哀楽の内喜と楽の割合が多いだけだが」

「ララがお前にした事に関しちや悪いと思うけどさ、今の発言は良くないよ」

「へーいよ」

嫌そうな受け答えの後、イマジンは急にリト達の方を向いた。

「でもそのやられっぱなしの時間はおしまい、さあ……ショータイム、だ!!」

イマジンはそう叫ぶと、黄色く光る球へと変化し、ララに突っ込んでいく。

「きゃ」

ララが軽く叫ぶと体に、近づくと危険そうなビリビリした光が流れ、それが一旦落ち着いてからララの感じが変わり始めた。

『ははは、このナイス、バディ!! てっおっも!!』

ララは人が変わったように胸を誇張する態勢を取った、実際ぎゅつとされた時の感覚からみるに母親はるなよりはある。

『漲るパワー!!』

ララは、右手を掲げて炎を出現させた。彼女の好きな番組の主人公、らしいキョーコのやる事をとうとう真似しだしたのかと呆気にとられた。

『燃やせ燃やせえ!!』

ララが音頭をとるようにドンドンと地面を踏み、いつもとは違う方向性で楽しそうにしていると、リトはララの身体に向かってジャンプをかまそうとした。

「俺のララから離れろ!!」

リアクションも、いつものララとは何かが違った。

『ハッ(リトの方を見る)ハッ(もう一度)もしかして、これイマジン史上最悪の展開か? ヤメロー!!』

何が最悪の展開か、子供の風夏には分からない。だが少し気になる。何が起こるか……

「いけません、風夏様あ!!」

見てみたい、そう思って見ていたが近くにいた侍女に目と耳を塞がれた。

「風夏様、見てはなりません、まだ御身には早ようございます……?」

「何か？」

「いえ、いつもならここで快音かイチヤイ……：気になさらず」
侍女の警戒と力が緩くなったので目を覆った手を押しのと、リトとララがお互いを睨みながら取っ組み合っているのが見えた。

絵面だけで言えばこんな光景は異質だ、夫婦喧嘩というものはあまり見た事はないが二人の間で絶対ここまでの勢いの争いは起こり得はしない……というのが風夏の認識である。自分の母親ともそうだ。

「……………」

「……………変な事したら契約者の尻尾でぐるぐる巻きにすんぞ」

「でも尻尾はデビルーク人の性感帯だからな」

『マジでか……………』

ララは言われると、リトを押しつけてから確かめるように自分の尻尾を握り締め

『グハアッ』

脇をこちよこちよされた猫のようにのたうち回ったのだった。和室の壁をぶち破れて、かつ階段を転げ落ちてても変わらないであろう勢いで回転するその様子を今まで呆然としつつ見ていた凜も行動に移る。

「間抜け過ぎて見ちゃいけない、王妃から離れろ」

例によって木刀を持ち出す凜、だが、たまには手刀で落とすのも格好良くて良いんじゃないかと風夏は思う。

『やなことたゝこの体は人質として使わせてもらう。あんな怖い思いをさせてくる奴が1人減るのも都合だしよ』

これまたララが普段しないようなあつかんべーの表情を作り、立ち上がれるようになったララは逃げ出した。もう少し真剣な顔でそれをすれば、風夏も変な気分が起きたかもしれない。

「王妃には妹がいる、怖いぞ……私達とは比べようもないオーラを見せるかもしれないな」

『イヤー!!』

そしてララは家の中を走り回りながら泣いた。

「水野さん、どうい話なの？これ」

近くの侍女にどうい状況か聞いてみる事にした。下の名前は覚えてないが一応地球人だそうだ。

「王妃様の御体に先程の妖怪変化が取り憑いているようです。」

つまり……ララの体はイマジンに取り憑いているという事だろう、その場合ララはどうなるのか？

「ララさんはどうなるの？」

「噂が本当だとすればララ様の何かしらの望みを叶え、過去をぐちやぐちやにしようとするでしょう。そして私の雇用も……ララ様が特異点であるなら取り憑かれても自力で引剥がす事ができますが……あ、特異点というのは……よく分かりませんね」

「ペケちゃん、どうにかならない？」

動きを強制させるギプスのようにイマジンを抑えてくれないかという心持ちで頼んでみた。

『ララ様が受け入れてくれないときついですね、下手すると内側から壊されるかも……』

「うーん、ララさんどうしたら良いかな……」

急に謎の札が机の中にあったのを思い出した、謎の法師からなんか授業のおまけのようにもらった札。

「あ」

「どうしました？」

「札があった」

「あのよう……すぐそんな札でございますか」

風夏は自分の部屋に向かって札を回収した、どのくらいかは風夏には分からないが古びた紙で読めない文字が書かれている。明日以降に詳しい人に調べてもらおう予定だったが撤回、急いでイマジンの元に向かう。

「ねえねえ」

『ん？さっきの嬢ちゃんか、なんだ？』

ララに取り憑いたイマジンはリト達とは違う態度で風夏の言葉に応えた、警戒心を緩められる相手だと思われるのだろう。

「これ、効くかな……」

『ん?』

ララに取り憑いたイマジンは屈んだ。

知らない法師がくれた札、効き目があるかどうか分からないが、ダメ元で風夏はララの額に札を貼った。

『ツ!!引っ張られるー』

効き目があるのか黄色い光が、札の中に吸い込まれていく。

『嘘だー!!』

「ありがとう、風夏」

元に戻ったララは風夏と、二人でハイタッチした。

『まったく嬢ちゃんめ……びえん』

「さーて、この子どうしよう……」

それからテーブルで、イマジンの宿る札を囲みラズも話に加わっての会議が始まった。

「まさかあのうさんくさい札が役に立つとはな……どんな顔だったか覚えてないか?風夏、ラズ」

風夏は首を横に振った。

「私、見てない」

「妖怪さんでな、髪が長くて爪も長かったんだぜ」

「髪は白かったか?」

「黒かったぜ!!」

「そうか……犬系ではないのか、だが札使うのは別人の方か」

『それはそうと望みを言うならいつでも受け付けるからな』

「言わないよ」

『ちえっあー』

ふてくされたイマジンの声を遮るかのように玄関から誰かが入ってくる音が聞こえた。

『あ』

「ただいま」

母親が帰ってきたようなので。一同は春菜を迎えに行った。

『おいてかれた……』

イマジンの札を置き去りにして……

「春菜ちゃん……おかえり」

「リト君……ただいま」

「ママ」

風夏は春菜に向かって駆け寄った。

「ただいま、風夏……ごめんね一人で家から離れて」

「うん」

「それから、ララさん……話があるけど」

そして春菜も話に加わった。

春菜は解決の糸口を持って帰ってきてくれたのだった。

春菜が言うには、謎の道化から電王がいるという場所を教えるも
らったようだ。それからシロというヤミの弟分に言われて一旦帰っ
て来たそうなの。

『え……うそ、電王の所に連れてかれるの？嫌だークソウ、出れねえ
!!』

そこに有るのは札しかないのにイマジンが如何に暴れてるのが
分かる気がしてきた。

「大人しくしてて、マジカルキョーコでも見よう？」

マジカルキョーコのDVDの表紙を見たがどことなくイマジンが
マジカルキョーコに似ている事が分かる。そういうので少しは話も
弾めば良いかと思った。

『嫌だ、大人しくなんてしないぞ、俺は諦めねえからな』

「ええ……」

札も今のところ一枚限りの物品であり、別れた法師も行方は分から
ない、そもそも誰だか分からないのだ。誰だか分かれば探しようがあ
るが唯一の手がかりは法師の声とラズの主観だけだ、どうしようもな
い。札に封じ込められているイマジンがどう出るか分からない以上
対策を立てた方が良く、そのための電王だそうなの。

不確定だが、電王とやたらに頼らねばならないのも確かなようだ。

……

そんな訳で、ミルクデイツパーという場所に行かないといけない。

知らない道化師からの情報を当てにしないといけないのもあれだが……春菜が検索した所によると喫茶店だそうな。

電王……どういふのかは分からないがどこにいるのだろうか？

宇宙船でひとつ飛び……するには停めておく所の広さが足りない、仕方ないので少し歩く事になった。

「ついたかな」

二階建ての白っぽい建物、そこがミルクディッパーだそうだ。

ドアを開くと、白黒の大きな望遠鏡が目に入った。ベルの音があまり聞こえなくなる程……

だが、人の声は話が別だった。

「早いんですけど、どうぞ……」

春菜達より少し上ぐらいのお姉さんがいて、そのお姉さんが声をかけてきた。

「注文は何にしましょうか」

風夏はミルク、ララと春菜はコーヒーを頼んだ。

そしてミルクだけ先に来た。

「待ってて……今コーヒーがいい仕事をしているので……母の受け売りですけど」

遠目から見て、本棚には星に関する本がずらりと並んでいた。よく見ると新品もそこかしこにある、地球人と宇宙人の交流が活発化し星々に行けるようになっても観るといふ行為自体を気に入っている人間がいる証かもしれない。

「星……好き？」

お姉さんは本棚の本を見ている風夏に話しかけてきた。

「あんまり」

それを聞いてお姉さんは少しの間ガクリと頭を下に向けた。

「……………あら」

ずっとこけつつもお姉さんは淹れたコーヒーを持ってきた、その間お姉さんがララのポケットを見ているのが分かった、確かにひどいレベルの砂を撒き散らしているがワザとではない、はずだ。そういえばその中には札が入ってるような……

「あの……あなた、ひよつとしてイマジンに取り憑かれててます?」

「うん、そうだよ。だからここに来たんだ」

春菜はララにそつと耳打ちした。

「ボソツ (ララさん……今更だけどちよつと怪しくない?)」

「分かってる、急に信用はできないかもしれないけど……そういうの、役に立てると思うから」

ドアを開く音がする……来客ではなさそうだから多分、裏口から誰か来たようだ……

「コハナちゃん、来ーたよー」

スイカの皮をかぶった怪人のような誰かがやってきた。

「デネブ!? 父さんの所に行つてたんじやないの?」

「せつかく、愛理さんと二人きりの旅行なんだ。そつとしておかないと……それを言うならコハナちゃんも行けば良かったじやないか、侑斗だつて心の中ではコハナちゃんとも行きたいと思つているんだ」

「そこ突かれると何も言えないわね」

「あの?」

「あ……私は桜井コハナ、小さい花ね、こつちは」

「デネブです。あ……これデネブキャンディーです。侑斗と、愛理さんと、コハナちゃんをよろしく。おいしいよ」

デネブと名乗る怪人は風夏にペロペロキャンディーをくれ、春菜達にもどうぞと言いつつアメ玉をくれた、コハナと知らない誰か2人の事も宣伝しつっ。

「ありがとう」

「どういたしまして」

デネブは風夏がぺこりと頭を下げると同じく頭をぺこりと下げた。悪い奴ではなさそうな気がした。

「コハナ、異母妹いもとうととそつくりな名前……華はなつて言うの」

「あなたの妹つてハナちゃんつて言うんだ? 私の名前の基になった人もハナなんだつて……」

「うん、唯さ……」

そこから先を言おうとすると、春菜に手で遮られた。

「話がややこしくなるから……ね？」

「はい」

コハナも何かを察してくれたのかそれ以上は聞かなかった。

「ところでイメージに何を言いましたか？」

ララは自己紹介と、イメージの事について話した。

「その人、怪しい」

「それもそうだけどすごい札だなあ、これにイメージ封印したって」

『誰かの望み叶えてんのか、良いなあ』

「でも……安心しきれないわね……」

ビリリツと不吉な音がした、ハナは札を破いているようだ。

「あ」

それで上手くいくか分からなかったから電王なるものに話を聞こうとしたのだが……仕方ない。

『おっ』

すかさず黄色い光は、札から飛び出した。そして灰になった状態、空から生えた下半身と地面に埋まった上半身として出てきた……

「ありがとうございます」

言うまでもなく、封印が解けてしまったようだ……イメージは灰だがランニングをしようする感覚でミルクディッパーから出て行くとした。

そして、イメージがドアを開けるために形を整えた途端、コハナはイメージを殴った。

「コハナちゃん、ハナちゃんにそっくり……」

だが、その対応はイメージには良くなかったみたいだ。

「全く、どいつもこいつもすぐ殴れば良いみたいな扱いしやがって、あつたまきた!!」

逆鱗に触れるというより、積もり積もったものがなだれ込むような怒り。ちよつと仕方ない気もしてきた。

だが余裕を持って見てはいられない。イメージは口元から火を出そうとしていた。マジカルキョーコ元ネタより、こぼれるよだれのように火が漏れ出

ている分荒々しさを感じさせる。

「風夏!!」

「こつちです、こつち」

春菜に覆うように庇われ、デネブに外に導かれながら、コハナとラがイマジンに突っ込んで行くのを見た。

「リトとの時間を、壊させたりしないから」

「それがあんたの望みか？」

「違うよ、これは私の抱負で、絶対自分でやるって気持ち。」

「そうよ……こいつに望みなんか言っちゃダメ、だって」

「望み……」

叔母の顔が急に浮かんだ、失踪していつの間にか死んだ叔母………会いたい。

「叔母さんに……会いたい」

その一言で、気まずい空気が流れた。コハナとデネブはきよとんとしていたが……

「わりの、嬢ちゃんの望みはちよつと叶えられそうにない……またな」

イマジンはどこかから持ち出したハウキに乗ってどこかへ去った。

「待ちなさいよ!!行っちゃったか……」

「これで終わったのかな？」

「いいえ」

コハナは否定した。

「ララさんにそのうちまた接触してくると思います。イマジンが過去に行く事を諦めたりしない限り……」

コハナは身支度を整えようとした。

「コハナちゃん、今日は団体の予約があるって言ってなかったっけ？それにコハナちゃんが強くてもベルトがない、だから、ダメだ」

「団体の予約……あ、いけない。母さん達も今日は無理そうだし

……イマジンはモモタロス達に頼むか……デネブ、頼める？」

「ああ……任せておけ!!」

そんな訳でデネブがついて来るようになった。

「電王……ではないかもしれないけど頼りにしてください」

第四十五話 アサキムVSライムくその1・心が決めるもの

く彩南町 遊園地く

青き空に朱の色が混じりだした頃……

アサキムはソフトクリームを携えて、休憩所に向かっていた。茶色いコーンの上に乗った真っ白なクリーム、トッピングにウエハースがねじ込まれている事を除けば至って普通のソフトクリームだ。そして子供を連れた大人達、観覧車、ジェットコースター、メリーゴールランドに回るティーカップ……普通の遊園地、平和そうな場所。その中でアサキムの見た目だけが不協和音を産み出している。いつそのことヒーローショーの中に紛れ込んだ方が違和感が少なくなるような気がしなくもない、実際店員にまだ休憩時間ではないとすら言われた。ついでにザステインといういわば変な格好の先例のせいで宇宙人と誤解されてもいる。

「えげつない事をするよな、本当」

ライムはパフェを食べながら、アサキムを待っていたようだ。アサキムはライムの向かいに座り、ライムと同じ方向を向いてソフトクリームを食べ始めた。快美に感じられる程度に冷えたクリームは、冷たさを示しつつもまろやかで優しい甘さをアサキムの口に届けた。原料は牛乳、だからだろう……この優しい甘さは、言うなれば包まれるような甘さだ。乳と名の付く飲み物は、牛でも羊でも人でも、母なるものが子に与えんとするものだ。いわば生命を育むためのもの、ならばこの甘さは生命の味いのちと言っても差し支えはないかもしれない。ライムは道化師の衣装を脱いでいるようで、黒のジャンパー、ジーンズを着ていた。以前教会を訪れた時のとは別の、新品に……

「何の用かな？」

「ワザとか？ここに案内したのはあんたのクセに。後飲み込むまで喋るなよ、ソフトが出る」

その通りで、実はこうなる前に次元力の力で変装して声をかけ、ラ

イムを遊園地に誘い出していた。

「しかも呼んだ側の癖に呼ばれたオレの後にここに来やがって、あれか？ザステインさんと同じ方向音痴って奴」

「辿る道筋が多すぎて覚えきれないだけさ、それより調子はどうか？」
「半々、アサキム・ドーウイン……お前がララさんにあんな事をしなければもう少し上々だったのに」

ララにイマジンを取り憑かせた事を言っている。

「彼女だと時刻はおそらく結城リトと出会った日か……」

「恩を仇で返すのはオレだけで良いんだが？」

「恩？」

「あれはララさんから姉さん伝いでもらったものなんだ」

「君の罪は、まずそこからだったか」

「そうかもな……まあ、得られたものも有った訳で……」

「悪いね……そろそろ手放してもらおう時が近づいて来ている」

「オレの邪魔をしないでくれよ、今が一番生きているって感じがするんだ、このプリンだって」

ライムはプリンの塊をスプーンですくい、口の中に放り込んで頬張った。その表情は今まで見てきた、もしくは知っている彼の見せる暗い表情ではない、とても穏やかなものだ。

「うまいんだ、こんなうまいプリンは10歳以来だ、ああ……記憶喪失の時もか」

全ての物事において感じ方は人それぞれという、だが同じ人間でもその時の心によって感じ方も分かれてくる。苦しい時は何をしても楽しくはないし、楽しい時は何をしても楽しい。嫌いな人間の隣でなら、どれだけの高級な料理だろうと美味しくないと感じさせ、好きな人間によって作られたならどれだけの簡素な料理でさえ美味しいと感じさせる。場合によっては、空腹感すら操れるに至る。だとすれば心はまるでフィルターのようだ、そして記憶はそれを今に繋ぎ止めるもの？

彼の過去と照らし合わせて考えると、今の彼は自身に課せられた重荷から解き放たれたという認識で良いのだろう、そのきっかけは……

?

「泣き言一つで願いが通るなら君の母親は悩みもせず、君の手で死なずに済んだ。そうだろうか？」

ライムはアサキムの言葉を聞き、口元に笑みを少しだけ浮かべた。同意と見て良いのかもしれない。

「それと少し聞いてみたい事があるんだ」

「ん？」

「君は君の両親の馴れ初めを知っているか？」

結城美柑が禁忌に触れてまで欲しかったもの、それは言わずとも分かった。それ故のイチゴ、書き換わってライムだ。

知りたいのは、それを欲しいと欲を抱く理由……そういう風に情動が動いた引き鉄。

「……………」

ライムはプリンの部分を飲み込んでしまつて余韻に浸り尽くしてから質問に答えだす。

「知らない。聞いた事もない、聞いたつてお腹も膨れないし心も満たされないだろうな。向こうが堕ちて、オレも堕とされて、その結果オレはここにいる」

「そうだろうね、悪かった」

沈黙が生まれ、その間にソフトクリームの残りとうエハースを食べ尽くした。ウエハースの口の中に残留している感覚は何ともいえない気分だ。

「ところで、君以上に恵まれない人間もいるって説かれはしなかった？」

アサキムは並行世界での旅路の中でそういう人間達も見てきた事を思い出した。

環境に恵まれない人間、身体に恵まれない人間がいた。ライムは身内に恵まれない人間という事にしておくが、それにももつとパターンはある。

そういう人間達の運命を変えようとした時もあったが、諦めた。仮に一回は変える事ができても、別の世界に移ると同じような問題で

困っていたり、そういう人間達が恵まれている代わりに他に恵まれない人間達というものが出てきたりもして、その気は無くなっている。

「懐かしいな、子守歌みたいに散々聞かされてきた。そうさ、オレよりつらい目に遭っている人間は宇宙にたくさんいるのかもしれない、だからってオレが苦しいのを耐えられるもんか」

「そうだね」

そこで耐えねばと気負うなら、ただでさえ悲鳴をあげている心は今度こそ壊れだす。壊れた心に宿るものがあるとすればそれは……

無い物ねだりは止す事にした、この世界に既に一つスフィアが存在している以上、他のは期待できない。

「うん、良い味だった」

コーンを食べてしまい、手の中の残留物はゴミ箱の上からはたき落とした。

「ごちそうさま」

ライムもパフェを食べてしまい、ゴミをゴミ箱に捨てた。

周りを見たが人気はない、ある程度は周囲を気にせず戦える。

先程の棘を含みつつも、ただ会話するだけというのも良いものだがお互いそれが目的ではない。

「君と僕が争うのは必然だったのかもね」

「ああ、あんたがララさんを狙った時、オレの敵になった」

不干涉で終われば良かった。

「全てはスフィアを得るためだ」

「もう一回言うけどオレにとって今のこの世界こそが楽園なんだ」
だが、互いに望みがある。

「その道へと至るためには」

「それを守るためには」

そこを譲っては、自分が自分ではいられなくなる……そんな望みが。

「君の記憶が」

「あんたの存在が」

だから、結論は一つ。

「邪魔だ!!」

邪魔な者を、取り払う。

「ブラディクス!!」

ライムが叫ぶと、若干黒っぽい、黒咲芽亜の服装みたいな色の剣がライムの手まで吸い付くように飛んできた。

「ほう……そういう事もできるか!!」

アサキムもデイスキャリバーを召喚した。

「僕は君の樂園に獄炎をもたらそう」

アサキムはライムに走って近づいた。

「以前のように凍てつかせれば終焉と至る訳じゃないからね」

「そうかな?」

ライムはブラディクスをアサキムに向けた。

「ブラッドソ——ン!!」

その叫びと共に、ブラディクスの刃は樹のように無数の棘となり、アサキムに向かって伸びていった。

「フツ」

避けるのも億劫になるスピードで、避けたとしてもある程度追尾してくる事が想定できた。なのでアサキムは自分に当たってきそうな部分をデイスキャリバーで削った。

「!？」

「君の煉罪を裁く!!」

ライムに近づいて、一閃。

少し切って血を出させるぐらいの勢いのつもりだった。

「!？」

「……………」

ライムは手首でデイスキャリバーを止めていた。

「……………人の手首の強度じゃない……………」

彼の手首は人とは思えない程堅く、切れはしなかった。ここまでの強度……その持ち主……思い返せば、彼の周りにはそれなりにいた。

「ナノマシン……………」

金色の闇の腕を斬ろうと試みた記憶が蘇った、結果は失敗。

「左手首だけだが、使ってみると便利だな……これ」

左手首で、押し返された。そこ以外はおそらく普通の人間の手だ、スフィア・リアクターでもない……そう考えると少しデイスキャリバーに力が入らなくなってくる。

「はああ!!」

デイスキャリバーでの攻撃は一旦諦め、ライムの頬を拳で攻撃した。一度腕を引いてからの、ストレート。

「くっ」

今度は確かな手応えを感じ、ライムは吹っ飛んでいった。すかさず、追撃をしにアサキムは飛び上がる。

そして近づいていって、数発……拳を振るう。

ライムは顔を動かし、全て紙一重程で避けた。

一度攻撃に転じ、空振りとなった時僅かな隙が産まれた。殴りかかった腕を掴まれ、引っ張られた。そして腹部に膝蹴りをくらう。

「ククク……」

痛みを感じつつ、膝蹴りで体をくの字に曲げられたその勢いに乗り頭突きを加えた。

ライムの胸に直撃、筋肉が少な目なのか胸骨に当たった感覚のした後、ライムは後ずさりをした……先ほどの膝蹴りの勢いもありアサキムも後ずさり。

「おばさん達じゃなくて良かったね、それとも残念?」

「戦いの時は、戦いの事を考えるべきだよ」

もう一度、デイスキャリバーを振るいつつライムに向かった。

「それもそうか」

避けられ、ブラディクスで防がれた。

「受ける!!」

アサキムは回し蹴りを繰り出す……がかわされた。

「……………」

ライムはアサキムが今現在軸としている足一本目掛けてしやがみ込んで足払いを繰り出す、アサキムは飛んで、かつ狙われた部分を膝を曲げて避けて再び回し蹴りを繰り出した。今度は命中し、ライムは

一歩程後ずさりした。

「こうなったら」

ライムは少し構えた。

「ブラッドエツジ!!」

ライムはブラディクスから、赤い飛び道具をアサキムに向かって放った。

「!!面白いね」

アサキムはデイスキャリバーで赤い飛び道具を斬りつけ、跳ね返した。

「何!!」

ライムは驚いてその飛び道具をブラディクスで受け止めた、赤い飛び道具は消失したが……

「ハハハハ!!」

アサキムはすぐさまライムに近づき、デイスキャリバーを振るった。

「クツ!!」

一回はブラディクスで防がれた、だがそれだけでは終わらない。

「ランブリング・デイスキャリバー!!」

デイスキャリバーの召還は既にあるので省略して、眼前の敵（ライム）に対してたくさん斬撃と高速移動を繰り返した。対応しきれていないようで、段々とブラディクスでのガードが緩くなってきている。

その斬撃で魔法陣を形成、完成した勢いで移動が跳躍となり、距離ができた。

「終わりにしよう、ライム」

アサキムはそういうとライムの方を振り返った。魔法陣は、爆発する。

「ぐああああ!!」

ライムは吹っ飛び、ブラディクスを手放してしまう。

ブラディクスはライムの手から離れ、回転して20mは先に飛んでいき、地面に突き刺さった。

「ぐう………が………」

「君の魂に安らぎを与えよう」

この戦いの終極点……今回のアサキムの目的の完遂……それが近づいている。

ライムの記憶の……消去。

そのために懐からアサキムは装置を取り出そうとした。

「なんだなんだ」

「すげー」

「さっきの本物か？」

周囲にいつの間にか人だかりが出来ている、この状況を見てはやしたてようとする者、好奇心を募らせている者……ヒーローショーか何かが終わって帰ろうとしている客だろうか？いずれにせよ、彼らの道と交わるべき出来事では無いから……無視してくれば良いのにとアサキムは思った。止めようとする者が現れるなら、止めるかはともかくそれなりに対応しよう。だがそうしない人間達は即刻去ね、と考えてしまう。

「おお……すっげ、なんだこれ」

一般人の一人がブラディクスに近づいていく、それから他の人間達を見渡すまで放置している内にブラディクスを素手で掴まれた。

「あいにく見せ物じゃないんだ」

シウロウガを呼び寄せ、ラスター・エッジで威嚇し追い払う事も視野に入れたいと思ってきたその時。

アサキムがシウロウガで追っ払うより早く異変に目がついた、ライムの元にブラディクスを拾った一般人が近づいていったのだ。手に掴んでから渡すのに一切のためらいが無い、普通ならブラディクスのような珍しい細工の剣を拾えば、隅々まで舐めまわすように見るだろう……その挙動が気になって、呼び出すのを後回しにしてしまった。

「ダメじゃないか……気安く魔剣に触っちゃ」

ライムと一般人の言葉が、重なっている。

「そういうのは危険だって結論つけられてないかなあ!？」

男は操られている、そう判断するより他はなかった。

「はあ!!」

ライムはブラディクスを男の腕に刺した。そうした途端、男は肌が青白くなって倒れた。出血はしていない……とアサキムは分析したが違う、出血しようとしている部分をブラディクスで吸い取られて、さらに血をいじくり塞がれている。

「次は……」

ライムはブラディクスを持ち替えてグリップ部分を一般人に向けた。

「邪魔だ」

グリップ部分が突然如意棒のように飛び出し、一般人達の手の甲を次々と貫いていった。

「何をしようとしている?」

「ヴァンパイア、吸血鬼とか言ったっけ……血を吸って生きてる奴らの牙にかかればどうなると思う?」

「その身を眷属とされる……か」

「正解」

手の甲を貫かれた人間達が、一斉に近くにいる人間達を襲い始めた。手の甲の傷跡は赤黒い跡が残っている、先程の要領で塞いだのかもしれない。

「キ……」

それを機に、戦いの場をたき火の場とでも言わんばかりに群がる人間達の喧騒は、悲鳴へと変貌を遂げた。

「キヤアアアアアア!!」

悲鳴がいくつもの方角へと流れていく、襲いかかっている人間もそちらへ行こうとしているようだ。

「帰れ、帰れえ!!オレの周りに、寄るなあ!?!うう……ばあ!!」

自分から離れるようにライムは告げて、そして片膝を地面について苦しみだした。

「ハア……生体への意識に向けてのアクセス……ここまでできいか」

アサキムにはブラディクスに関しての知識はない、だがライムがやった事の大変さは分かる。あれは人間で成し遂げるにはニュータ

イプのような……鋭敏な感覚を持ち得なければ難しい。

「けど……まだ、まだだ!!」

ライムはブラディクスを以前の持ち方に戻し、アサキムに切っ先を向けた。

「もう終わりにしよう」

アサキムはデイスキャリバーを収めて、装置を使おうとした。だが……邪魔というものは絶えず無限に湧くものらしい。

「なんかスツゴク騒ぎになってるけど……」

美奈子だ、秋月美奈子がやってきた。次々と邪魔が入ってくるなど思いつつ本懐を果たすのはもう少し先のようにだと察し、アサキムは装置を取り出すのを止めた、次邪魔がいなくなったらだ。

「……おばさん」

ライムはヤミやまだ年若い、生娘の香りすら漂う美奈子に対してもその呼称のようだ。理由はおそらく単純で、ライム的美柑（はは）はヤミの親友であり……そのヤミの夫であるリトの妹。未来の美奈子もその美柑に対して何らかの交流を持っていたのかもしれない、おそらく幼少の頃から……

「彼女の魂が呼んだか（適当）」

「……やだ、イケメンが二人……」

美奈子はアサキムとライムを見て頬を紅潮させながらその頬を両手で覆った。

「じゃない、アサキムって人とその声って……来夢!？」

美奈子はライムの顔を凝視した、その顔は一部の人間、主に結城家の縁者なら誰もがみんな驚く顔だろう、見知った人間の面影がそこにあるのだから。

「そ、そっくり、師匠に……」

「ここまで来れば隠す事に意味は無いか、彼女の親類だよ……血の繋がった……ね」

「へ〜来夢、師匠の親戚だったんだ。え……でもでも、師匠から甥っ子の話は聞いても弟の話なんて聞いてないし、そもそも師匠、従兄弟いないって」

「後一つ……残された座があるだろうか？」

息子という座が……

「……………まさか」

美奈子は、隠しきれない驚きのまま……震えながら一歩……二歩……後ずさりした。金色の闇も同じ結論に至った事で暴走しかけたのを思い出す。

「来夢、あなた……………」

美奈子の瞳の奥に微量に含んでいた、美柑の面影……それを持つ者への憧憬……言い換えれば、ある種の羨望。

それらはこぼれ落ち、代わりに別の感情で満たされようとしていた。

「そういう事だよ、おばさん。おばさんが師匠と呼ぶ人の血がオレの中には流れてるんだ、それも半分な」

「どうして、自分の親なんでしょ!?!なんでそんなひどい事できるのよ!!」

「じゃあ、おばさんは自分に降りかかった不利益の原因が親だったら許せるのか!?!」

「!?!」

第四十六話 ×アサキム○美奈子VSライムくその 2・芽生える気持ち

同じ小学校の奴らは口々に言っていた。

「捨て子」

「貰われっ子」

「お前の母ちゃんデーベーソー、あ、知らないから分かんなかったわ、あひゃひゃひゃひゃひゃ!!」

実際そうなのだ、教会で育つという事は……そういう事なのだろう。

妹と弟と可愛がる人間も、兄さん姉さんと呼び慕う人間も、自分を育ててくれた神父も、シスターも、みんな……全員。自分と顔の似ている人間は……いない。

学校でそう言ってくる奴には、よく噛みついた。言葉の綾ではなく、そのままの意味で……

そうした日はこつぴどく叱られたものだ。

噛みついた事に関しては認めざるを得ない、悪い事をした……と……

だが何故そうなったかに関して言うと自分より年上の人間はみんな、目を伏せて耐えろとばかり言いたげな雰囲気を通じてから何かしらを言う。

何故だろうか？

「どうして？シスター」

年上のシスターは頭を撫でながら諭すように答えた。

「それはね、美奈子……みんな似たような事を言われてきたからよ」「みんなあんな事をいわれるぐらいならこんな所出て行こうよ」

「それは違うわ……ここからいなくなれば、ここが無くなれば解決って訳でも無いの。人がいる限り、必ず……子供を自分で育てられない人間もいるの。でも子供だって人よ、寝ていい場所が欲しいの。くつろげる所が必要なの……こんな所でも……ね」

人がいる限りここみたいな所は必要らしい。

「だからってあんな事言われるの嫌だな……ここじゃない所なら何も言われなくなるかな……」

「変わらないわよ、場所が変わっても」

「ずっとここにしかないの？」

「なら大きくなるまでの辛抱よ。そしたらあなたが決めれば良いわ」

そうして、その自分が決められる年になって美柑と出会った。

彼女に憧れ、出て行くのは延期した。彼女は子供をお腹に宿していたのを見て、自分のできる事をしようと思ったのだ。

美柑に憧れたのは、容姿も料理も何もかも完璧な美女だったのもあるが、彼女が外の世界の人間だったからなのかもしれない。そんな彼女には自分や教会で生まれ育った人間とその親達のように離れ離れにはなつてほしくなかったのかもしれない。

どの程度の割合がそうかは知らないが子供を育てようとした時、自分がされたかったように育てるのだろう……そして多分、上手くいかなかったという訳だ……目の前にいる人間……来夢が何よりの証拠らしい。来夢こそ、師匠と呼ぶ人間の子供で自分の師匠を殺した人間だった。そしてずっと、来夢と住んでいたのだ……

その来夢は聞いてきた、自分の不利益の原因が親でも許せるのか……と

自分は捨てられたのかどうかは定かではない、だが……もし……捨てられたのだとすれば……

考えれば考えるほど、許せなくなる。

だから、考えたくない……

許したい訳じゃない。

ただ、悪い要素しか無いのにそこに頭を煩わせたくない。

それより、憎むべき相手が目の前にいるのだ。

今からしばらくの間は美奈子達の果たすべき決着の時だ、だからアサキムは観客に徹しなければならぬと身を引く事にした。観客は

一人だけではない……風呂敷を纏い、日除けのかぶさった鳥もいる。
「こうなる前に終わらせたかったけど、運命の刻が訪れた。見届けようじゃないか……姑獲鳥」
姑獲鳥……生命宿す人間死す時、宿す子供を世に解き放つ事無く果てた無念が転じて産まれる存在……彼女は、ライムを子供そのものと認識しているのかもしれない。じゃなければ子供の仇を見張っているのか……

「…………許せない」

ライムは笑顔を浮かべた、どうやらそう答えるとは分かっていたようだ。

「おばさんの」

「でも、私は……会った事もない人間より、あなたの方が、憎い!!」
美奈子はライムを指差して言った、指先と表情に宿るは少女の、まだ幼さの残る人間の帯びていい顔では無い凄惨さ。

「まあそうだろうね……」

ライムの返しにさらに怒りを募らせる美奈子。

「もう少し悪びれるように言っつてよ……」

美奈子は心に憎しみをぶちまけながらライムに迫る。

「謝れ!!謝れ!!師匠に謝れ!!」

「謝った所で何も変わりはない、やつが何度謝っても、オレが何度謝っても、何かが変わった訳じゃなかった……」

「償うって気持ちすら見せないの?」

「そんな気持ち芽生えるぐらいなら最初からこんな事はしない」

「そりゃそつか……」

美奈子はライムに殴りかかった。だがライムに軽々と止められ、次の手を出せないでいる。

「師匠は……来夢のせいでここに帰ってこれないんだ……師匠……かわいそう、よりもよってあのお腹の中にいた子供から否定されるなんて」

「オレの事はかわいそうって思っつてくれないの?」

「何をよ……」

仕方ないので、アサキムは説明する事にした。観客である事を弁えつつ、全部を包み隠さずに言うとなら、ライムが逆上するかもしれないので、彼女が思い至るのを促すだけに留まるが……

「あの時、君達が助けたはずの蜂が握っていた情報を思い出すと良い。答えはそこにある」

「蜂？・ビーちゃんの事？」

美奈子は考え込む仕草を見せた後、何かに思い至ったという表情に早変わりした。

答えと言ってはなんだがライムは、美柑とそしてリトの子供。関係性は言うまでもない、その事実が一つあれば、奇異の目で見られるようになるのは確実だ。奇異の目、悪意と言いつてもいい、要は人がそれに晒されると耐えられないもの。ライムはそれを浴びなければならぬ運命を産まれながらに背負った。自分が選択してそうなた訳でも無いのに……

「……………だから何？ライムはもう別枠だよ、それで師匠が殺されるいわれなんて無かったのに!!」

「有るさ……奴は王家に問題を持ち込んできたんだから……」

「好きな人と一緒にいたいって願うのがそんなに悪いの!!」

「欲望をぶつけて良い相手と悪い相手がいるんだよ!!」

「だからって殺されなきゃいけない理由になるわけ？」

「これでも過去の権力闘争よりかはずっとシンプルだ、何の罪もない子供ですらたくさん死なせるんだもんな」

「過去の話じゃん。今の話じゃないのよ、それ。話をずらすな、昔の案件で正当化するな!!」

「なら、どうすれば良かったの？」

「一人で、ずっと逃げてれば良かったじゃない、誰の迷惑にもならないように」

「そんなの無理だった……無理だったんだ……」

「そうだよね……逃げられないよね……分かる、分かるけど!!」

美柑にとっての楽園は、彼にとっての地獄。ならば彼の楽園は……美柑の何だろうか？どちらにとっても楽園というパターンは存在し

うるのか？

「あなたが嫌がらなきや……師匠はもつと生きられたんだ……」

「子供は人形じゃない!!嫌なものは嫌だ!!」

「被害者ぶって……あなたのような人間の望みなんてどうせすぐ壊れるんだ、嫌……あたしが壊す」

美奈子はケータイ？スマホ？を構えた。どこに宛てているかは分からないが指の動きから見て誰かに電話をしようとしているようだ。

「春菜さん辺りが良いかな……もういつそ師匠のお兄さんにしようか」

「言うの?」

「………当たり前じゃん、あなたは、それだけの事をした!!自分の欲望のために、師匠を殺したんだ!!このまま黙ってると思うな!!」

「!!」

「後悔してくれるならまだいい、でもそれで満足されるぐらいなら……」

「やめて、やめて!!」

ライムは美奈子に懇願します。本当にやめて欲しいようで、切羽詰まっているのが見える。そして心なしかスフィア無しなのに黒いオーラが垣間見えた。

「師匠の事はやめてくれなかったのに……」

当然のようにそっぽを向き拒否する美奈子。

「うわああああああ!!」

ブラディクスから、血でできた飛び道具が飛び出す。その飛び道具は美奈子のスマホを両断した。先ほど血を吸ったからか切れ味も良くなっている。

「来夢………!!」

美奈子はライムの方を向き、睨む。

「デビルークに危害を加えないで!!」

「デビルークデビルークデビルーク……遠い惑星の方が師匠より大事なの?」

「聞くまでもない事を……………」

ブラディクスの目のようなオブジェが先程戦った時より爛々と輝きだした、それはさながら獲物を見つけた狩人……………餌を見て喜ぶ猛禽のよう……………アサキムもスフィアと、それを既に発現させているリアクターを見れば、眼光から同じ輝きを放てる自信がある。

「デビルークの問題になるから師匠が死んだっていうなら……………荒らしてやる」

少し突飛だとは思わないでもない結論にはなる……………だが、悪意を伴う結論はえてしてそういうものだろう。

「皆さん、聞いてください!!」

美奈子は叫んだ。湧き起こる怒りのまま、力いっぱい……………

「私の師匠、結城美柑を殺した人間はここにいます!!」

メガホン、スピーカー無し呼び……………おまけに追っ払った影響で聴いている人間は今ここにはアサキムとライムしかない。無意味と言えよう行為ではあるが……………

「オレ、後悔してる……………」

焼き付けるには充分だった。

「え?」

その言葉が聞きたかったとでも言いたげに、口角が上り上がった状態で振り向く美奈子。

「おばさんが生き返った時……………ホツとしたんだ、おばさんにまで危害が加わって申し訳ないって思ったんだ……………」

「ありがとうって言えば良いのかしら?」

「でも今気づかされたんだ、そうしない方が良かったって……………神父……………あなたの願い通りにはなれそうにない……………」

悪意が、連鎖を起こそうとしている……………

「器となるべきは……………」

↓ライム? 美奈子?

姑獲鳥うぶめが、ライムに近づこうとしている。ライムの腕まで飛び込む……………噛みつく気だ。

「姑獲鳥、逆だ!!」

思わずアサキムは叫んだ、そうしても行動は変わらないだろうが……そうせざるを得ない気がした。

「本気でかじるか……」

ライムは腕を噛みついてきた姑獲鳥のくちばしをつかむ、その際彼と姑獲鳥の目が合った。

「……………」

姑獲鳥は彼を見るなり、目を泳がせている。恐れているようだ……だが、この妖怪の元々の性質か避けて逃げようという反応は見られない。

「邪魔だ」

ライムはブレイクスで姑獲鳥を刺そうとする……が、怪訝な顔をして止めた。

「ふん」

ライムはしばらく姑獲鳥を見つめた後、手首の動作だけで姑獲鳥を美奈子目掛けて投げた。姑獲鳥自体が美奈子には見えていないのか、何の回避行動も受け身も取らずに姑獲鳥のくちばしそのまま胸に突き刺さった。

「う……………」

名付けるなら、姑獲鳥ストライク!!

(※注意 よいこのホモ・サピエンスとそれ以外のみんなとスフィア・リアクターはまねしないでね)

「え……………」

美奈子は訳も分からなさそうな表情を浮かべつつ床に崩れ落ちた……不思議な事に刺さった胸から血は流れていない。

「オレが終点だったみたいだな、おばさん」

「なんで……………」

目の前にいる姑獲鳥が見えていないとすれば、不可視の一撃を叩き込まれた事になる。

「というか……姑獲鳥って……あの姑獲鳥?」

「ある坊さんから聞いたよ……おばさんが師匠と呼ぶ人間から産ま

れたらしいね……そいつにやられるなら本望でしょ？」

どこからどう聞いても当てつけにしか聞こえない……

「師匠、どこにいるんですか？」

美奈子は体が動かないのか腕だけを動かして姑獲鳥を探す。

「オンギヤア……」

姑獲鳥はその問いに答えるように鳴いたが、その事に気づく様子もない、やはり見えていないようだ。

「来夢に見えて私に見えないってつらいな……ねえ、私……また死ぬの？」

「ああ、まただよ……また、オレのせいでおばさんは死ぬんだ」

「痛いよ……」

「ああ……」

「痛いよ……師匠……」

そう呟いた後に、美奈子は姑獲鳥に気づいたのか迷いなく姑獲鳥の方に手を伸ばそうとする。

「やつと見えた。そこにいたんだ、師匠……」

そう言い残し彼女は砂となった……彼女も一度時の流れからこぼれ落ちた存在だ……だから、消えるその瞬間を見てはいないがおそらく神父と同じ消え方だ。

「……これでおばさんとおばさんの親達で揉めなくて済む」

「それが君の終点か」

観客の役割は終わり、今からは……

「過去の遺物を消しただけだ。死人に引つ掻き回されちゃたまんないから」

「……そうだね」

「ブラディクスの調子も戻ったし、続き」

邪魔が入って途中のままの対決の時間だ。

「ああ……そうしよう」

アサキムは、ライムと向き合い、お互いに剣を向けた。

その瞬間ふと思う。彼女を怒りや憎しみから解放できたと捉える

べきだろうか？と……

以下、美奈子闇堕ちルートです。

「器となるべきは……」

ライム？ ↓美奈子？

ライムはブラディクスを握る力を強めながら美奈子に突っ込んだ。手を伸ばせば美奈子と手を握りあえる距離まで近づき、ブラディクスを振るおうとする……

「!?」

ライムは痺れたようにブラディクスを手から落とした。そのブラディクスは、磁石に引き寄せられる鉄のように美奈子に向かっていった。

「そう……こうするのね」

美奈子が、ブラディクスを手にとった。

「え？」

想定外の事態にうろたえるライム、それとは対照的に一切の迷いを見せずに勢い付ける美奈子。

「はあ!!」

美奈子はライムに近づけるだけ近づいてからライムの胸をブラディクスで突き刺した。

「うぐっ」

そしてライムは膝をついて倒れた。

「痛い？」

「………さすがに慣れたな」

その言葉を聞いた瞬間、美奈子はライムを仰向けにさせて腹部を複数回足で突いた。

「そうじゃないのよ、もつと苦しんでよ。ほら、言え……ごめんなさいって、すみませんでしたって……言え!!」

さすがにこれ以上はまずいと思い、アサキムは止めるため近づこうとした。だがライムは首を横に振って止める。

「そうか………それが君の終点か」

アサキムは止めるのを辞めたが姑獲鳥は美奈子に突っ込んでいった。

「ホエアー!!」

「姑獲鳥は叫び声をあげつつ美奈子の白く細い指に噛みついた。

「!?痛い!!」

叫んだ瞬間美奈子の手から、黒い波動が放出された。その波動は姑獲鳥を美奈子から引き剥がした……彼女の悪意は干渉力が強まっている?」

「師匠に、何か言う事は?」

「もっと10年は早くこうなっていたらな……」

業を煮やした美奈子はブレイクスでライムを連続で刺した。

ライムの命の灯火は、消えた。

「ンギャ——!!」

姑獲鳥の叫びが辺りにこだまする。

「やりました、師匠……あなたの仇……私、取りました」

そんな姑獲鳥の叫びもお構いなしとばかりに歩を進めた。

「でもまだ、足りません……師匠の願いを認めない方全てを消すまで……私は終わりません」

彼女の周りから、黒い波動が流れた。それもさつきよりずっと濃く、暗い。器として覚醒を遂げたらしい。

「いいや、もう終わりだ」

なのでライム相手に使うはずだった装置を使う事にした。

「君をあの時見逃したのは、まだ君が血に汚れてもいない、無垢なるままだったからだ。再世を経てまで罪を犯す事も無かったのね……仕方ない、摘ませてもらおう」

「え……?」

「金色の闇みたいに止めれば良かったかな?でも、ここまで悪意に濡れるとは思わなかったな……」

「……………」

程なくして、美奈子の体は全身砂になった。

「記憶なくして存在を維持するのは難しかったのか……まあ、そう

だろうね」

彼女は一度死んだ人間みたいだ、だからイマジンに体質が近いよう
で……彼女が彼女であるための記憶全てが無くなればこれこの通り
……当て身ですませておけば良かったのかは分からない。

「……………」

姑獲鳥はライムだった肉体のそばに寄った。くちばしを当てこす
りながら倒れている彼を見下ろすその姿は、彼の死を悲しんでいるか
のように哀愁を感じさせる。

「ホエア……」

少しはアサキムの心も痛まないでもない、母が子の亡骸を抱いて泣
く様をそこに感じたのもあるが、そもそもこの惨劇はアサキムにも非
があるのだ。

「……………こういふのも初めてでは無いけどね……………」

だからこそ、歩みを止める訳には行かない。

そう思い姑獲鳥に背を向けてアサキムは歩き出した。

次は……王妃が望みを口に行っているかの確認だ。

第四十七話 アサキムVSライムくその3・王手

空も、太陽の色が溶け出したように赤くなっている頃……

アサキムとライムは剣で互いに斬り合っていた。

これは己の障害となる者を排除するためだけの戦いだ。

「ところで君は言った、彼女と親が争わずに済むと……彼女はこの未来、何が起ころはずだった？」

会話してはいるがお互いに攻撃しあつて金属音で少し聞き取りづらい。

「ああ……別に他愛も無い話だ。捨てたとはいえ、娘と正しい人間が他の星とはいえ王族の人間と近い間柄になつてたんだ。少しはステータスにしたくなるつて話でさ……」

当然、諍いも発生する。

「そういう事か……スファイアの覚醒を促すならと踏み込む時もある。でもいい気はしないよね」

「だろう？ おじさんも仲直りのために隣人分の尽力はしようとしたけどオレの存在でさ、じいさん達と少し距離できちまったから……そこ突かれたせいでかける目も微々たるものになつて」

「そう……」

家族の話をする度に、気分が落ち込んでくるのが分かる。片親ずつなら、誇つてしかるべきなのに……

「たあ!!」

そうはならないから、こうなっている。

「彼女と会う前より殺気が研ぎ澄まされているようだね……」

「あんたこそ、さつきより調子良くなつてるじゃん」

「そうかもしれない……強き負念が僕に、シユロウガに力を与えている……君達が撒く波動が、心地良かつたと言えるだろう」

ライムにとつてあまりいい気はしなかった。自分に向けられた、そこで終わるべき悪意や自分の失意と悪意を利用されているよう……

「人の悪意で力を増やすなんて、とんだクソヤロウだな!!」

ライムはアサキムに蹴りを入れ、距離を取った。

「いけえ!!」

ライムはブラディクスの刃を掲げて、アサキムに向けた。そして再びあの飛び道具を放つ。

「さっきの一撃ならば既に見切っている!!」

アサキムは先ほどと同じように、飛び道具が放たれたのと同じ風にデイスキャリバーを振るい、跳ね返した。

「分かったろう? 無駄なんだよ、ん!?」

ライムはブラディクスを持ちながら回転しつつ突撃してきた。跳ね返した飛び道具は、ブラディクスに絡みつき多分一撃の威力が底上げされている。

「それが本命という事か……確かに良い攻撃だ」

「はああああああ!!」

ライムはそのままアサキムまで突っ込んで行く。

「だから、唯一の弱所を叩く」

アサキムは思いつきり跳び、降下する時にライムの頭を手で抑えてきた。

「く!!」

アサキムの落下する勢いで、ライムの体勢は崩れされた。ブラディクスは飛んでいって攻撃はままならなくなり、このままでは床にライムの頭がめり込んでしまう。ついでに言うとならライムは頭を打って死ぬ。死ぬ事自体に頓着はないがそれで子どもであった頃の自分が苦しむのは嫌だ。

「ほえあー!!」

姑獲鳥が、飛び上がってライムにぶつかり、ライムのクッションと化した。特に頭の部分を狙ったため姑獲鳥は頭に押しつぶされ、目を回す。

ライムは急いでブラディクスを回収した。

「まあ、君はそうするか……しばらくは眠れ」

そう言ってから近寄ってくるアサキムに対しライムはブラディクスを振り上げ、アサキムは後ろに退いて避けた。

「仕切り……………直しだ!!」

「いいだろう」

今度はライムがブラディクスを持ちアサキムに向かっていった。

「その意志を断つ!」

アサキムは剣を構えて迎え撃つ態勢を取った。

「させるか!!」

お互いの武器が十字にぶつかり、金属音が響いた。

「とつとと……………オレの事を諦めろ!!」

「諦めないさ……………君を越えた先にあるスファイアだ」

「芽亜さんのものだろうか?それは!!」

「これは彼女の願いなのさ、そうしない限り再び道は広がる」

「こんな荷物、放っておいてくれれば良かったのに!!」

「大切なもの程、放り出した後が苦痛なものさ」

その瞬間、フラッシュバックが起きた……………

『テメエが自分の事をララ達の荷物だと思っっているならそれはそれで良い……………だが荷物は必要だから背負うんだ、大切なもの程失ったら苦しいし悲しいし場合によっちゃ一生ものの心の傷になってしまうからな……………だから連れて帰る、覚悟しとけよ……………人の娘と孫泣かせやがって』

声の主はギド・ルシオン・デビルークだ、だが最近死んだのでライムと面識は無かったはずだった。

「なんだこれは……………」

「ダメだよ、別の事考えちゃ」

ライムはブラディクスによる攻撃を止め、左手で裏拳を繰り出す。アサキムは30。後ろにのけ反って避けた。その勢いに乗り、ブリッジから手を突いてバック転し蹴りを放つ。ライムは後ずさりしてその攻撃を避けた。

「ああ、クソ!!」

ライムは血による飛び道具を数発放った。アサキムは反復横飛びのように左右に移動し、全て避けた。

アサキムもデイスキャリバーとやらで突きを繰り出す……………がライ

ムも避ける。

その後も攻撃と移動を繰り返すが決定打をお互い入れる事はできずにいる……回転しての攻撃も先ほどのように突破されるので有効では無さそうだった。

「……………」

「ハハハ……ハハハハハハハ!!」

高笑いをして、余裕そうなアサキムに対してライムは少し疲れを感じている。一年半は隣町にも出歩いた事のない生活を送っていたからだろうか？仕方ないので必殺技で決める事にした。

「凍らせてやる……」

ライムはブレイクスを強く握った。タイムフリーズスラッシュを放つための……

「(タイムフリーズスラッシュか……攻撃した相手の血の流れをいじる事によってどこかの闘法のように凍らせる技……あれをくらっても溶かす手段はある……がそう何度も同じ技はくろうのは癪だ)同じ手段に乗る僕じゃない!!」

ライムの挙動を見て、アサキムは急に消えた。

「消えた!!」

左右を見回してもアサキムは、いない。

「……だよ」

後ろに移動されていた。すぐに目の前に回り込まれた。

「……………」

アサキムはライムに密着する程近づき、ライムのブレイクスを持っていて手を片腕で挟み込みロックした。

「!!」

「その剣の届く範囲でしか凍らせられないんだろう?こうすればもうどうにもならないね。そして……仮にも王族だ、だからこの言葉で締めくくろうじゃないか……………チエックメイト王手!!」

アサキムは黒塗りの装置をライムの額にくっつけた。

「これは!!」

「目覚めよ、ばいばいメモリーくん」

アサキムは装置のトリガー部分を押し、聞いた通りであれば本来なら四方八方に伝わるはずの光がレーザーポインターのように、ライムの方に収束し直撃する。

「さあ……思い出のように、はかな儂くと散れ!!」

「ああああ!!」

目に対して、度を越した衝撃が走った。太陽を目にした時に感じる眩しさ……あれの倍以上の衝撃。太陽を虫眼鏡などで見なければこんな事にはなりえないような、そんな衝撃。

「ううう……」

アサキムはライムの拘束を解き、バック転で後退した。やっと開けられた片目に映るばいばいメモリーくんは、砂になって跡形も無くなった。

「因果をいじるのは、割と得意なのさ……だがここまで強くなるとは思わなかったけどね」

ライムは衝撃により座り込んでしまった。

「これは……」

思考の隅から徐々に徐々に、何かが消し飛んでいく。その消し飛んでいったのが何なのか、思い浮かべようとしても全く分からない。それが分かれば消し飛んでいったとは言えないが………だが、一応は察する事ができる、記憶だ。まるで記憶が、どこか遠くへ消し飛んでいくようだ………

あの韻の踏み方はおそらく王妃の発明品、そこを省みればあまりシリアス実用的な効果はないはずだった、せいぜい騒動の種になる程度。アサキム・ドローインがあれをいじくったのだろうか？誰かの言った通り全ては使い方次第のよう……誰が使ったかだけでも、被害の性格も変わるらしい。

そして分かるのは、このままでは記憶が全部消えるだろうという事。この記憶が全て消えれば、おそらく自分が自分でいられなくなる。

「オレは……失うのか？あの女を殺して、やっと掴み取ったものを」
産まれなくなった事で、苦しい思いをしなくて済む自分を

永遠の平穏を貪れる自分。

それは過去を元通りにされたら、全て水の泡となる。

「嫌だ……」

記憶が無くなる……そんな状態で過去を塗り替えられれば、確実に自分はいなくなる。そうなってしまうえば、自分がやってきた事の意味が……無くなってしまふ。また繰り返す、おんなじ時間のおんなじ自分が、王家の汚点だと泣き叫び、母親を恨んでしまふ。

「だってさ、喜ぶといい……姑獲鳥、今君の基となった人間の子供は自己の喪失を恐れている。それを望んでいた彼が、厭う事ができるようになったんだ、彼は自分の記憶に重みを感じ始めた!!」

ライムは立ち上がりとうとして足に力を入れた。

「うるさい……ブラディクス……オレの血でも肉でもくれてやるから……こいつに……ハア!! 一撃を!!」

くらわさせて欲しい。そう願うより先に体の方に限界が来たように、ライムは力を入れた足に力が入らなくなり、うつぶせに寝転んでしまった。

「……………」

諦めざるを得なさそうだ。疲労感とその感情を手助けして、不思議と感情が楽になってきた。ただ、名前も結局覚えていない神父に申し訳ないような気もしてくる。

「ホエア」

姑獲鳥の弱った声が聞こえる………確か母親となる人間から産まれる妖怪だったような………本人であつてたまるかとは思うが、少しぐらいは感傷的にならざるを得ない。

「なあ」

呼びかけに応じているのか、起き抜けに行動するようにおぼつかない足取りではあるが近づいて頭をすり寄らせてきている。

「なんで、あんたは良くて、オレはダメなんだ?」

美柑ははわやは自分の望みを叶えた、だがそれは社会のルールから、大多数の嗜好から外れた行いだつた。同じく時の運行というルールから外れたライムの行動は、これこの通り邪魔された。美柑の望みは止めて

くれなかつたのに……それにしても彼女の望みとは何だったのか？
もう思い出せなくなってきた。

「まあいい………無駄に痛い思いさせてごめん………」
もうすぐこの自分がいなくなると考えると、謝るのにも苦は無くなってきたように思える。

再び目覚める頃には、ライムという存在は無くなっているだろう。少なくとも母親を殺したライムという存在は……それが長い目で見れば吉なのか、凶なのかはさておき、もうライムには選択肢は一つしか残されていない。

受け入れる？ いったい何を受け入れるのだろうか？

「さようなら」

さつきまで思い浮かべられたはずの優しそうな女性達と男性達の顔も思い出せなくなっている。これ以上失う事を知覚しながら失っていくより、何も知らないまま何もかも失っている方が楽な気がした………だからもう眠りにつくしかないのだ。

「おやすみ」

罪により生まれ、罪により生きる彼は今眠りについた。次に目覚める頃には、彼の記憶はない。取り戻せたとしても、その時には過去を変えているだろう。だが具体的には何をすれば良いのか？ それを考えるより先に……言葉を贈る。

「君の罪に終焉を、君への罰に合いの手を……次に会う時は互いに縁の断ち切れる事を祈ろうか」

そして、いずれ存在意義の無くなる姑獲鳥にトドメを刺しておくべきか……

考えるまでも無かった。

「用も無いのに、何かをする方がおかしいか」

アサキムはその場にいるライムと姑獲鳥を後にした。

「次は王妃の番だ……もう契約を完了させてなければ良いけど」

望みは自分の力で叶えたそうな彼女の事だ、滅多な事では望みを口にして契約を完了はさせないだろう。

と思っていると異様な気配がアサキムの方に迫ってきた……のを感じた。

「そこか!？」

アサキムはデイスキャリバーを投げた。

「!?あの剣は!!」

少しこの世界で聞き覚えのある叫び声。

「下がってくれ」

投げた先に現れたのは、馬に騎乗した法師と純白な翼を生やし飛んでいるシロ。

シロはいつの間にか翼に不似合いな茶髪へと変化していた、だがそこは法師と比べれば問題では無い。法師からは軽く見て1000人を下らない程のまつろわぬ霊を内包しているように見え、それだけでなく核となる特殊な因子も感じる。

「もつと高く、跳べ!!」

法師が手綱を動かすと、馬は指示通り飛びアサキムのデイスキャリバーを避けた。法師は応酬とでも言わんばかりにアサキムに柄杓を投げてきた。

横に移動して避けたアサキムは感嘆の思いがこみ上げその感情を目線に宿す。その間に法師は馬から勢い良く飛び降り、馬に手を振った。

「ご苦労だった。下がってくれ」

そして法師は、ライム達を探しているようだった。

第四十八話 悪鬼滅魄 ダイヨウジン

シロが盛り上がった灰の塊を見て気になる事があったようでそこをじつと見ている。

「あの砂……………見覚えがある、まさか美奈子って人のなのか？」

「……………砂とかは妖とは別の理で動いてるだろうから、拙僧には分からん!!だが斬ると似たような姿になる怪人を見かけたような……………!!」

法師はライムと姑獲鳥を見て、編み笠を目深にかぶりなおす。

「しかし……………遅かったか……………」

「嫌、ライムは生きてる。間に合ってる、セーフだ」

シロはガッツポーズを取った後スマホをハイスピードで操作し始めた。

「いいや、遅かったよ。久しぶりだね……………シロ、君は人が生きるのに必要なものはなんだと思う？」

アサキムがそう問いかけると、シロは厄介な奴に出会ったと言わんばかりに苦々しそうな表情を浮かべつつ返答した。

「……………命だ、んでもってそれを思いのままに使える自由だ」

「それもあるね、だが他にもある……………記憶だ。命という器に宿るそれは、主の標となりて未来へと導くんだよ」

「無くたってどうにかなるだろう」

「標を与えてくれる誰かがいるなら、気にするまでもないと言える強き心を持つ人間ならそうだろう。そうでない人間には無くした破片が、不安を、焦燥を、誘うんだ。結城イチゴの場合、思い出そうとすればする程その後が滑稽になり得そうで」

あれこれ話していると法師がシロの前を通る事で話を遮ってきた。

「今、ここで倒れている男はお前が原因と見て良いんだな？」

「そういう事さ、それを聞く君は何者だい？」

「坊さんだ」

そんな一言でくくつていいとは思えない。

「坊さんだと………君は悪霊だろう？それもかなりの数からなっている」

その数に比例してか、感じられる力も強大なものとなっている。

「まあ否定はしない、背負いこんだものの想念で自分が自分でないなりそんな時もあるしい」

そう法師が呟いていると、空間に歪みが見えたような気がした。揺らぎの先にうつすらと見えるものは………蛇だろうか？人は余裕で丸呑みできるような大きな蛇が見えた。

「ふうー」

その横で一仕事を終えたようにシロは爽やかな表情を浮かべ、法師に言う。

「坊さん、今警部とブラディクス用に銀河通販でマジックハンド注文したから!!」

「そうか……じゃあ」

法師はどこからか用意した刀を抜いて、アサキムに斬りかかった。アサキムはディスクヤリバーでそれを受け止める。

「悪霊が、何故彼を気にかける？」

「奴も充分アレだが、拙僧は『妖の味方』なんだから……それ以上に姑獲鳥を気にかけているのさ!!」

「そんな立ち位置で、よく人と共にいられるね」

悪霊が妖怪の味方だと豪語してはばからないのは譲ったとして、だがそれではいつ人に斬られてもおかしくはない。

「だからこの衣装を着ている………祓うにも、戯れるにも、丁度良い」

「そう……」

「先回りされたのは拙僧の失敗だが………」

「そうだね……だが気に病む事は無い、時に干渉し……姑獲鳥が産まれなかった事にすればいい」

「できるのか？時の流れを乱す事なぞ」

「僕にも……今の獄鳥にもそれはできない、だができる者はいる」
直接刃をぶつけ合うと見えてきた、この世界の妖怪がどういいうもの

か。無論法師のパターンだけしかまだ分からないが……

「へえ……魂が無いから、狭間にすら向かう事は叶わないのか……」

「妖あやかしみたいな面の人間には言われたくないな、最近の若いものの言葉で言う……人妖じんようみたいな」

突如降ってわいた専門用語……だが数多くの並行世界をくぐり抜けたアサキムにとってこの程度は序の口だ。

「妖あやかし……人妖じんよう……妖怪ならそうかもしれないね」

無限獄に堕ちた事による呪い、死を経たとしても蘇る結果へと至らせるそれがアサキムの印象を妖怪たらしめているのだろう……

「だから僕は願うのさ、そうでなくなりたいと……呪われし放浪者としての運命を断ち切りたい!!」

アサキムが刀を捌いて距離を取ると、今度は法師が弓を持ち、矢を引き絞る。

「清姫伝説、人虎伝……呪いがどうあれ、人の身から化生に至ったものを人妖そとうとは言わないがな!!」

言葉と共に放たれた矢は風を切ってアサキムのいる場所に向かう。アサキムはディスクヤリバーで防ぐ。

「この程度で射抜けるとは思わない事だね」
「なら……いつをくらえ」

法師は、アサキムに向かって苦無をぶん投げた……

「……妖忍あやかしのんぼう法……苦無くまいぶんしん分身の術!!」

法師の唱えた通り、一つの苦無がたくさんの数に変化し、束になって向かっていった。

「はあ!!」

アサキムはディスクヤリバーを振るい、苦無を全て叩き落とした。

「忍法……か」

アサキムの眩きに追随するようにシロも疑問を呟いた。

「坊さんはお静さんの生前と同じぐらい……いやもつと長命の妖怪で……それで忍者? 坊さん? どっち?」

「坊さんだ」

「でも今忍法って」

「坊さんだ!!」

「そう言い張るならそれでいい、だよな?」

忍者が、世を忍ぶ仮の姿としてそういう道を選んだというだけの話だろう。おでん屋で働くニンジャに、介護士として働く忍者もいるのだ。その格好なら忍者としてで無くとも力を振るえる。

「ああ、話が早くて助かる」

それはそうと忍法はそれらしいが武器といい、扱い方といい、忍者のそれではないと言える……忍者が振るうには大きすぎる刀だ……

「挨拶はこれでおしまいだ」

力いっぱい刀を振るう戦い方は忍者というより武士に近い。

「お前が拙僧の事をなんとなく感じ取ったように拙僧もお前の事がなんとなく分かった」

「……………ほう?」

法師はアサキムに向けて真っ直ぐ指を差してきた。

「随分特殊な機巧からくりと縁の深いようだな……………」

すぐにスフィアとその器、そしてシユロウガが思い浮かんだ。

「だったらどうする?」

「こうだ……………急急如律令!!」

法師は術を唱え、札を2枚ばらまいた。

「祓機巧!!はらいからくり真柿童子、ガマ次郎!!」

『久方ぶりの出陣だ、ごう』

すると床に平面的な紫の結界が出来、甲冑のような出で立ちで足の短めな赤い鬼と

『黄昏時……………忍者らしい、良い月である』

若干の緑つぼさを帯びた黒い蛙が、結界から現れた!!

「速さと術重視で行くぞ、祓合体はらいがたい、隠神将来!!」

法師が叫ぶと、宣言通り合体を始めた。

『久方ぶりとは申せども、どの程度昔であったものか』

『海の向こうの妖の見聞に行ったから100年ぶりだぞ、見ない間にどんどん足を踏み入れにくい地形へと変わっている……………』

『そうか、まあ良い……………我らの勇姿、とくとご覧じろ』

『ちなみに祓機巧一機につき一体式鬼……妖が宿る事になる、つまりこの機巧こそ今の我らの器である。そんな我らが複数体集まって産まれる姿……それこそ』

悪鬼滅魄 ダイヨウジン 第四十八話!!

蛙がメインのようで、腕と足と顔部分が蛙の黒い色と同じになっている。

「ハッ!!」

法師はダイヨウジンと呼んだ巨人に飛び乗った。

——一方その頃

真が外を見てみると急に、巨大なロボットが現れたのだ。驚いた真は双眼鏡でそのロボットを覗く。

「あれは……」

深紅の胴体、黒い四肢と頭、勇者を思わせるような雄々しい顔。

「お前の好きそうなものだ」

母親の凜は息子の頭に手をポンポンと乗せつつ答えた。

「嘘だろ……二体のみでの合体とか追加戦士か?……嫌、あの合体方法は龍虎王に近い……あれ?母上、龍虎王って何でしたっけ?」

「フツ………分からん」

「………」

シロは呆然としているようだ、流れるような勢いで考えもつかない事が起こっているのだから仕方ないとは言えるかもしれないが……

「面白い!!来い、シュロウガ!!」

だがアサキムは違う、少し……ワクワクしていた。戦い自体は嫌いではないのだ……だからシュロウガを召還した。

「行くぞ!!」

「!!」

今度はらしい大きさの忍者刀でダイヨウジンは攻撃してきた。

アサキムはシュロウガの振るうデイスキャリバーで受け止めた。

「はああ!!」

シュロウガは飛べるが、そこは勢い。ダイヨウジンと格闘しながら

走り回った。

「まつきびし、まつきびし」

だがダイヨウジンは、それをこなしつつ不特定多数のトラップをシュロウガの走る先にばらまいていた。

「!!」

これではシュロウガの足を止めざるを得ない、動きの勢いが悪くなるのも仕方ない。

「分身の術!!」

その隙を突かれ本体含め分身10体に走りながら囲まれた、忍者の見た目は伊達ではない。避けようと上に飛べばすぐに本体から攻撃を受けるだろう……

「さあ、どうした?」

声のする方向にラスター・エッジで攻撃するとダイヨウジンが一体煙のように消えた。ご丁寧に分身に喋らせているようだ……

「……………」

ならば風だ、風を読む。ダイヨウジンに当たる風を読むのだ……

見えた!!

「ククク……風が呼んでいる!!」

アサキムはデイスキャリバーの剣先から衝撃波を放ち、ダイヨウジンの一体に攻撃した。

「む……」

ダイヨウジンは走るのを止め、避けた。

「ランブリング・デイスキャリバー!!」

急いでダイヨウジンに近づき、連続で斬りつけた。

「ハハハ……ん?」

その時に気づいたが斬った手応えがない、ない事はないが想定していたものより薄っぺらい。そのためメの攻撃をする気が失せた。

「この手応えの無さは……」

気がつくともダイヨウジンの大きさまである大きな紙が、ズタズタになっただけでもパンツと真っ直ぐ張っていた状態から力の抜けたように風にだらしなく流されていった。

「身代わりか」

「変わり身の術だ………」

ダイヨウジンは、いつの間にかシユロウガの後ろにいた。刀を振るおうとする気配がしたのでノールックでダイヨウジンの腹部にデイスキャリバーを突き立てガード。

「おっと」

ダイヨウジンは避けて宙返りする。

「いけえ!!」

着地する前にダイヨウジンが苦無を投げてきた、だがこの攻撃はシユロウガを狙っている訳ではないようで、苦無はシユロウガの向こうにある空き地に突き刺さる。

「風縛壁!!」

ダイヨウジンが印を結ぶと苦無を起点に風が巻き起こった。ビル一つには届くように見える高さのいわば台風、近寄ればひどい目に遭うのは目に見えている……がそこは近づかなければ良いだけの話である。

「おおおおおおお!!」

だがダイヨウジンは鎖鎌を手に持ち、分銅と鎖を飛ばしてきた。その鎖は近くにいない事で油断していたシユロウガに巻きついて拘束し、アサキムが鎖を認識した瞬間シユロウガを風の方へ引つ張っていった。

「くっ」

風に引つ張られ、身を切るような風がシユロウガを襲う。

「つ跳べないか……ならば、穿て!!」

「雷撃!!」

シユロウガは風に巻き込まれながら額ラスター・エッジからビームを、ダイヨウジンは動きながら人差し指から雷を照射した。二つはぶつかり、閃光へと変わる。

「雷撃!!雷撃!!雷撃!!雷撃!!雷撃!!雷撃!!雷撃!!」

「邪眼よ、撃ち抜け!!」

延々と続くラスター・エッジに対して連射で対抗するダイヨウジ

ン。
ぶつかって、そのたびに閃光へと変わっていくため少々眩しすぎた。

「罅が明かん!!」

法師が叫ぶと、ダイヨウジンは忍者刀を掲げて飛び上がった。

「爆火斬・紅蓮!!」

「自分の掛けた罫に向かうとは滑稽だね!!」

「いいや、もうおしまいだ!!」

ダイヨウジンの仕掛けた風は、法師の発言のタイミングで止まった。罫の効果の切れる時間を熟知している……流石仕掛け人だと感心せざるを得ない。

「はあ!!」

ダイヨウジンの忍者刀が炎を纏い、5回閃く。

「……………」

避けるには、間に合わない……だが、攻撃をする事でダメージを減らす事はできそうだった。

「トラジツク・ジエノサイダー!!」

獄鳥を4発飛ばし、ガード。最後の1撃はデイスキャリバーでガードした……爆発が生じ、両者お互いに吹っ飛んでしまった。

「やったのか?」

シロが呟いていると……………

「かはあ!!」

白い梱包物が飛んできてシロの頭にぶつかってきた……よろけながらシロは体を起こす。

「あれ、こんな仕様だったっけ……? まあいいや」

注文した通りの品物であったためか、気を取り直してブラディクスを回収する作業に入った。

「そつと……………そつと……………」

シロがゆっくりブラディクスに近づき、回収しようとしていると……両者、同時に立ち上がる。

「流石……普通の妖とは違うな……………」

「……………長居しすぎたか」

突如黒い何かが飛来してきた。

「う……………」

法師の怖いものを見たような声が聞こえたが、そこはスルー……

「千客万来とは言うが僕は客を待つ身じゃないんだ、勘弁して欲しいね」

「そう言うな、この機体に潜む魂がお前に会いたがっていた……無
論、俺もな」

黒く、禍々しい、鎌を掲げた悪魔のような姿。この宇宙で一度協力
する羽目になった事のあるその名前は……デイス・アストラナガン

第四十九話 再びの銃神

視点……シロ

巨大なロボットに乗って現れたのはクオヴレーという名前の人間。以前愛銃ハーデイスの化身っぽい現れ方をした機体……デイス・アストラナガンを駆りリト達と一緒にユニクロンと戦ったらしい。らしいというのは実際に見ていないからだ、当時その場に居合わせた所で何の力になれる保証も無い。

「百邪に分類するものが1、2、3……これがこの地球の戦力か？」
デイス・アストラナガンが近くに寄ると、距離を取ろうとするダイヨウジン。

「どうした？」

『拙僧達こいつに近寄ると……吸い込まれる!!』

デイスの因子は悪霊、怨霊の負念を己の力とする事ができるそうだ。ハーデイスはそんな能力は持っていないが……

法師がそういうものの凝り固まった存在である事を顧みればさもありなんと思えた。

『拙僧も式鬼もこう……元々産まれた時代もあれだからそれなりに人も斬ってるしバックにいるのもめっちゃノーブルパワーとか負念の量とかあれだしそのあいつにも悪霊認定されてるから目を付けられても仕方ないかもしれない!!けどお静ちゃんは違う、見ず知らずで行き倒れだった俺にも優しくかったし寂しさのあまり人を連れて行くような地縛霊っぽい事もしてないしだからまだ手も真つ白だし何より清楚で可愛いし仕込めば宮中にも上がれるってバックにもお褒めの言葉でやっぱり可愛い……だからお願いお静ちゃんは見逃してー!!（お静ちゃんは違うの下りからこの間3秒）見逃してくるなら内包してる反物とか叢雲とかやるから……嘘でござる嘘でござる若、妖としての核は渡してはならんってのは重々承知してるから見限るのはちよつと、だからその悪魔……叢雲の話は忘れて?』
凄まじい早口だった。

「お前は何を言っている?」

クオヴレーの言葉に同意だ。そしてロボットから放たれる周りに丸聞こえの音声で話題にされるお静にとつてもこの会話は恥ずかしいだろうと推察できる気がしなくもない。お静と言うのはおそらくここ彩南町の高校で幽霊兼保健室の先生(代理)をしている女性の事だ。幽霊……実体が無いから保健室の先生が用意したバイオロイド体を使っている。

彼女についてシロなりに知っている事を洗いざらい吐くと

『はーん……………霊的メンテ施さなきゃ……………ていうか実体(仮)を得ただと、拙僧も検診されたいな……………おいおら呆れないでくれ、取り憑く相手を間違えた？このやり取り四百年続けるの飽きたよ拙僧』

らしい。なかなか大変そうだ。

「だがこれだけは言える、守りたい者がいるなら帰れ。怨霊の塊であれ……………その気持ちは尊重する」

クオヴレーの言葉で、ダイヨウジンから法師の一息ついた声が漏れだした。

『そういう訳だ……………帰るぞ』

法師の乗るダイヨウジンはアサキムの乗るシクロウガの肩にポンと手を置いた。随分と親しげな感じだった、おそらく彼との縁はたった今バトルしただけだろうに……………アサキムはシクロウガの手でそれを払う。

「帰るなら一人で帰りなよ、あの銃神の眼光が見据えているのは僕だけなんだから」

『聞くがその方……………妖あやかしの敵か？味方か？』

「敵か味方かなんて区別で俺を当てはめるのは……………よせ、そんなもの都合一つでなんとでも変わる」

「目的はなんだい？聞かなくても分かるけど」

「呪われし放浪者……………ユニクロンを目覚めさせようとしたな？そうさせないためにと俺に頼んでおいて」

「結構抑止力になったろう？」

確かに噂では先代の王の再来と名高いデイスの飛来によって、先代

の王様の力を恐れた連中は大人しくなっていると聞く。代替わりしても、強いから宇宙を束ねられるようになったギド・ルシオン・デビルークの存在を恐れている人間達は未だにいるのだ。

「そうだな……だが、お前はそれを無にしようとしている。それが癪だ、だからここに来た」

「なるほどね……ならば、始めようか」

ダイヨウジンがその場からいなくなった後、デイス・アストラナガンとシユロウガは上空まで飛んで、お互いの手に持っている武器で戦いを始めた。

「すごい戦いだな」

どれも建物以上の巨大ロボットだから、ある程度の大きさが保証されていて……そしてどちらもスピードで翻弄するタイプみたいで、見る分には映画以上に手に汗を握ってしまいそうな攻防が繰り広げられている。

「こんばんは……」

リトとヤミがやってきた。

「あ、王様達……どうしてここに？」

「あれだけ大きなロボットが戦ってたら嫌でも目立ちますよ、ペケちゃんの時は間に合いませんでしたが……その内モモとナナも来ると思います」

「まだ傷治って間もないんだから休んでなきやダメだってヤミ」

伴侶（の内の一人）を心配しているリトの声を聞き、自分が誰の近くににいるかを思い出してしまった。今気づかれてない内に……

「はあ!!」

シロはそこにあつた頭だけを覆えるコーンをリトに被せた。

「あれ、ヤミ……急に道が真っ暗になったぞ……どこ……どこ？」

上手く極まったのかシロがやったと気づかれてる様子もない。

「ここにす」

「そこか……どこだ？って、うわあ!!」

「きゃあ!!」

前が見えないため、リトはヤミを押し倒してしまう。

「あ、いた」

リトはヤミの胸を触って今そこにいる事を確認していた、夫婦がイヤイチャしているだけだ……と見れば問題は無いが見てるシロにはきつい。

「あ、いた……じゃありませんよ、本当に……手、貸しましょうか？」
ヤミが起きた後はリトに手を引っ張った、その後……手を繋いだ状態になっている。

「ナンカゴメンナサイ」

そういうのは屋内に留めさせるべきだろう。

「良いですよ、シロ。それより……」

ヤミは悲しそうな顔で、ライムを見つめていた。

今、ライムは倒れている。そこにいるリトと似ている顔を、彼の妹と似ている髪の色を晒しながら。前回相對した時に引っさげていたブラディクスが証拠となっている。

「ヤミ、このコーン取ってくれ」

「今ヤミの手が、震えてた。何にそれだけ衝撃くらったのか俺……知らないきやいけないと思うんだ」

「じゃあ……いきます」

コーンを取って、リトは改めてシロの近くで倒れているライムを見た。

気絶して目を完全に塞いでる分、前に見た時より安らいだ面持ちだ。目の前の王様を人相悪くしたような顔を見せないで済んだのは不幸中の幸いと言うべきか。

「これって……」

もう、言い逃れはできそうにない。

「実は……」

知っている事、洗いざらい喋った。

「という訳だ」

「シロ」

一生の中で最も聞き慣れた二文字、それが異常に重く響く。

「なんででしょう、王様」

何故言わなかったのかと、怒られる覚悟を決めるしかない。だが、想定した言葉とは違っていた。

「ありがとう、ライムの事……守ろうとしてくれて……ヤミも、こんな事知ってて……言えなくて、つらかったら？」

リトは倒れているライムに駆け寄ると、しばらくうつむいた姿勢になる。

「リトさん……」

この状況、慰めるのは自分じゃない……

「顔を上げてください、デビルーク王」

「夢かもと片付けて、結論を先延ばしにしてたから、ツケが回ったんだよ。きつと」

「自分を責めないでください、デビルーク王。それをこいつは望んじやいない、多分」

デビルーク王が責任を取ろうとすればするほど、ライムは自分を責めるだろう。もう、自分はいはいけない人間なのだという価値観に浸りきっている。

さらに言えば、自分の両親より王妃やその他の妻達が悲しむ方を嫌と思っているのかもしれない。そうでなければ、彼の謝罪、というより煽りは嘘になる。

『オレなんか構うより、唯さんと華姉さんと彩ちゃんについてて（できうる限りの声帯模写）』って言いそうだし」

「そうか……」

気のせいかな、ブラディクスの輝きが少し増したような気がする……

「……」
シュロウガとデイスはその上でずっと戦っていた。空中で斬り合ってるパターンが多いような気がする……

「シロ……」

クオヴレーの声だ、だがクオヴレーは今アサキムと戦っている……

「念話だとも思えば良い」

「ああ……この前（※第十六話）のあれか」

「シロ……因子が目覚めたのなら、お前の力を貸せ」

「俺に……一体何ができる?」

ハーデイスは失った、変身能力は巨大ロボ相手では微力ではない。どうすれば良いのだろうか?

「お前の能力は……時間さえあれば何度殺しても動く心臓と……大筒変形だ」

「!?」

「唱えろ……テトラクテュス・グラマトン」

その詠唱は、以前デイスを呼んだ時の呪文だった。デビルークの、人々の味方としてここにいる男を、信じない理由はない。

「テトラクテュス・グラマトン」

シロが詠唱を唱えると、体全体が金属化し、銃になって巨大化した。

「あれがシロだけの変身能力?」

「来い………来い!!」

クオヴレーが叫び、デイス・アストラナガンが手を掲げると銃となったシロは回転して手に収まった。

何に依るものかはさておき、何かエネルギーを蓄えているのが分かる。

「デッド・エンド・シユート!!」

『待った、かけてやろうか?』

今度は………女性の声。

そして、一面何もない空間。

体は変身能力を使用していない元の状態だ………ここは脳内の中か?」

『久しぶりだな』

よく日に焼けたガン黒とかいう色に分類されるような肌、黒猫のよ
うな金色の目と伸びきった黒髪………紫系統のフリフリが利いた短め
のスカートと黒い和服を着た少女が一人、目の前にいる。

「誰?」

顔写真のみだが似たような顔を見た気がする、名前は確か………
「ああそうだ、ネメシスだったっけか………」

ネメシスはにやりと笑みをシロに向けた。

『正確にはその1%分だがな、髪の毛一本すら組み上げられない非力な思念体だ……おかげでお前にしか干渉できなかったしユニクロンとやらにも選ばれる事も無かった。今やつとお前の脳内で意識に形を吹き込めるまでになつた所だ』

同じように研究施設で産まれたヤミとは違う。彼女の顔を、目を見ていると何故か不快な気分になってくる。

「なんであんたが俺の中にいるんだよ!？」

『……プロジェクト・ネメシスが失敗と判断されたのと入れ違いで練られた変身兵器開発計画……プロジェクト・ブラックキャットで産まれた生体兵器と同じ顔をした奴が、ヤミを捕まえに宮殿に来たからな。覗いて同じ奴だと分かった、だから変身能力の目覚めるその時が来たら本体に知らせるタイマーの役割のため分離して、お前の中に留まっていた訳だが……』

まさかこつちをメインにしなければならぬ日が来るとは予想もしなかったそうだ。

「プロジェクト・ブラックキャット?」

突然の知らない単語に首を傾げるが、ネメシスはそれに答える気は無さそうだ。

『それよりどうだ?自分が生体兵器だと知って』

「びっくりした……でもそこ自体は重要じゃないんだ、良いも悪いも有りはしないと思う……もうそうやって産まれてしまったから……自分が恥じなくて良い生き方を選べばな……でも何かしら当てはめようとしてくる奴がいて、そいつらの態度はでかいし力も強い。そういう奴らを許す事はできない……例えばあんたのようなな」

『ほう?』

ダークネス計画に関して聞かされた時に思った事を口に出す。

「ダークネス計画なーんてものを立てて、姉さん達を暗い暗い道に呼び戻そうとしたらしいな……兵器は闇の中でしか生きられないって」

ダークネス計画……その昔に計画された、ヤミにリトを殺させ元の

殺し屋に戻す計画らしい……ヤミは元々リトを殺すためにこの地球に降り立ち、以来そのまま殺さずころせずにいるらしいが、そんな殺し屋稼業に支障が出る程情の湧いていった相手を殺させて、この町にいられなくし……より深い谷底にはまらせるために立てたろくでもない計画といった印象だ。

混沌カオスやら兵器がどうかかデビルーク政権の転覆だの言っていたらしいがその事はどうでも良い、人のたくさん生きられる拠り所を壊そうとするのはどうでも良くはないが二の次だ。ヤミがどう思うか、別人格ダークネス(仮)の闇は良くても心のどこかで後悔してしまう彼女がいないか、一番重要なのはそこだと思う。

『お前もそうだろう、罪人は償うべきといつかそんな事を言っていたな……』

確かにそういう事も言っていた、否定はできない。兵器として産まれたから人を殺さなきゃいけないと迫るのと、人間として生きるならこれまでやってきた事の責任取れよ、ハーレムに入って終わりだと思うなど迫るのは違うと抗議はしたいが……

「今はそう思えない、姉さんについて俺が言える事はもう何も無い……」

ヤミはガーランド、息子を失った。昔殺した標的の家族による敵討ちによって……因果応報、それでも足りないぐらいと彼女の伝説の礎になった者達の家族は言うかもしれない。だが、ガーランド自身が何かをした訳ではない。彼女の罪に子供は関係ない、そんな関係ない人間が彼女への罰として犠牲になるのなら……もうそれ以上は償わせるということにはならないのではとシロは思う。

『姉さん……か』

「棚に上げて言わせてもらうが、兵器ってなんなんだよ……俺達は力はあるけど兵器じゃない、人間だ……それで良いじゃねえか？人間と同じ顔で、好きな食べ物食って、好きな人間と一緒にいられりや楽しい。どこが違うんだ!？」

兵器だから人をたくさん殺さなければいけない……そんな道理があつて良い筈は無い。

『兵器として産まれたなら、兵器として生きろと言っているだけだが?』

シロの考えは違った。

「兵器は道具だ……兵器だって位置付ける以上……人の道具なんだよ」

愛銃、ハーデイスの事を思い出した。銃……戦車……爆弾……自分達と毛色は違うが兵器の代表格。

「人に使われて、人に害を与えて、人に嫌われて、それがどれだけつらくても何も言えない!!……俺はごめんだね、そんなもの。あんたはそれで良いのか!？」

シロの見るネメシスは、そういうのは嫌いそうに見えた。

ネメシスはシロの胸ぐらをつかんだ。

『その激情で一体どのくらい……』

「……?」

『……(シロを解放する)使うのは私達だ……そう思つて動いてきたよ』

「?随分”兵器”や”私達”って言葉にこだわるんだな」

兵器、私達……私達、兵器……

シロの推論だが、ネメシスにとって兵器という言葉には本来それ自体が持つ意味以上のものを持っているのかもしれない。それはアイデンティティに基づいたもの、例えば……

『……それ以上今思つてる事について考えるな』

ネメシスはアイアンクローをくらわせ、シロの思考を妨害してきた。現実世界とは違うはずなのに、頭蓋骨を締め付けられる感触がある。

「あたたたた」

外見に相応しい、滑らかで柔らかな指だが圧が強すぎて次第に指の感触がどうでもよくなつてきている。

『話を脱線させすぎたな、昔ならもつと白熱させても良かったが私はお前と口論するために話しかけた訳じゃないんだ』

やっと解放された、そう思うと、本能的に大きいため息がこぼれで

る。

「ハア…………じゃあ、なんの用だよ？」

『次の一手を選ぶ猶予をくれてやろうと思つてな…………お前が變形して、そして放つのは丸々ダークマター…………この惑星の大気中の濃度を薄めるぐらいの量をかき集めて撃つ。それはそれはすごい威力だ。ご丁寧にサイズアップしているしビルなんか消し飛べるだろう』

「マジか…………」

『マジだ、撃つならその辺りをよく考えて撃つんだな』

犠牲が出るかもしれない、ならばどうすれば良いかは分かり切っている。だがしかし、エネルギーを充填している状態で無理に変身を解けば多分爆発するかもしれない。そんな中で取れる手段は……………？

「そうだ、あんたがネメシスならさつさと俺の体から出て王様の所に顔出せよ、多分喜ぶ」

『1%だからまだ時間がかかる、しばらくお前の中にいさせてもらおう…………じゃあな』

「ああ」

たっぷり時間が経つたような気はするがクオヴレー達がそれについて訝しんでいる様子もない、今正に引き金を弾こうとしているからそんなに時間は経っていないのかもしれない。

「デッド・エンド・シュート!!」

範囲をできるだけ狭めて、確実にシュロウガを狙う。

そして放たれるのは、勢いの良い水鉄砲…………もといレーザーガンみたいに真っ直ぐ飛ぶ黒くて禍々しいビーム。ネメシスは全てダークマターと言っていた、ダークマターはこの世界では食べ物として通用する物だ、そのため食べ物と粗末にするなど、クオヴレーとも、ネメシスとも違う内なる声が聞こえてくる。

シュロウガに命中する、だが特に効果は無さそうだ。

クオヴレーが何やら考え込んだ後銃となったシロを動かすと、シュロウガに当たっているビーム状のダークマターが移動し、爆発した。範囲を狭めたからこうなったが、狭めていなければと思うとぞつと

する。

「出力が少ないな、シロ……そんなものではない筈だ」

「これ以上はノウ!!」

大体溜まった分を消費しつくしたシロは急いで元の体に戻り、デイス・アストラナガンの手のひらに着地した。

「何?」

クオヴレーにとってその行動は予想外だったようで、驚きでいっぱいのようなだった。

「だって建物とかこの辺いっばいだし」

「そうか……ならば仕方ない……帰るならこれを使え、スピン、ドリフト、インディー!!」

恐らく言語として、電子音を鳴らしているであろうロボット三体が集い、合体する。

三体のロボットは黄色くて、大きなボードに合体した。

「コスモテクター、これでお別れだ。行け!!」

コスモテクターと呼ばれた大きなボードは、シロを乗せて飛び立つて行った。その時クオヴレーは呟く。

「因子を使わせてくれてありがとう……だな」

礼を言いたいのはシロの方だった。クオヴレーとデイス・アストラナガンはシロとハーデイスとは比べようが無い程に強く、いるだけで宇宙に益をもたらしてくれた。

「……ち……そ………ありがとう」

シュロウガは破損した腕を元通りに直し、デイスの前に立つ。

「ユニクロンの仔、しかも封印を解く鍵じゃないか。しかも盾として使える」

「新天地を探していたらしくて、宇宙を飛び回っている間に拾った」

「何故今さつき使わなかった?」

「防いでもいいが、防ぐ事で発するエネルギーをここで出す訳にもいかない」

「なるほどね」

二人のロボットを駆る野郎共が会話をしている間コスモテクター

に乗ってスノボーのように飛んでいる時、リトの邸宅が見えた。その窓から王子のラズと、元アイドル兼メモルゼの王女の人が見えて、何か喋っている。

が・ん・ば・っ・て・く・れ・よ

あ・ぶ・な・い・か・ら・こ・っ・ち・よ

窓の外からラズ王子がデイス・アストラナガンを応援して、若干上の階層の窓の外だったから元メモルゼの王女に厳しく咎められているようだった。遠目にしか見えないから、読唇術によつての解読だ
が。

「……………懐かしい面だ……………あいつは元気にしているだろうか？」

クオヴレーは何故か嬉しそうに変な言葉を呟く。

「？」

『勇気』

よくわからないが、嬉しそうなクオヴレーはやる気（バフ）に満ち溢れていた。

「ほう……………これは……………」

そして今、アサキムは困っているのが分かる。

第五十話 魔剣（ブラディクス）の優雅な目覚め

「さすがに……きついね、鳥ちやうのように舞い、風のように逃げるとしよう」

「逃がさない……」
黒いゴキブリデイス・アストラナガンのような機体と黒い鳥シユウのような機体ウが追いかけてっことをしている。

一方その頃

「……………」

目の前で目を瞑り、起きる気配もなく横たわっている青年が妹……美柑を殺した犯人だった。

そして驚くべき事に、青年の顔は……………」

鏡で散々見た顔だ、子供の頃……何度も近くで笑顔を向けた顔だ、さらにミミを初めとした可愛い子供達の顔もそこにある。

なんとなくだが、直感も含めシロの言っていた情報は本当であるかのように信じさせてくれる。

これが本当の事なら、なんて悪夢なのだろう？

何かの嫌がらせであればまだ良い。だがシロの実直な部分を見て、嫌がらせでこういう事の言える人間じゃないと分かっているから信じざるを得ない。

「なあ……違うんだったら違うって言うてくれよ」

そうだと仮定してから、愛おしさと憎らしさが膨れ上がっている。

直接話を聞いたら、良いのかもしれない。

だが期待させないで欲しい。

その期待を叩き落とさないで欲しい。

「リトさん」

リトの肩にヤミは手を乗せてきた、添えられる温もりが落涙を促す。

だが、それを阻害する何かが聞こえる。

『んん…………』

寝起きのあくびに近い声だ……それより……声の方向にあるの

は……

「ああ!!」

「あいつは!?!」

刀のような反りを持ち、赤い刃を持つ魔剣、ブラディクス。その昔凜に取り憑いて、所有物扱いして、自分達を攻撃しようとしてきた。

「危険です」

ヤミは即座にリトの前に立つ、攻撃力も防御力も機動力もヤミの方が上だから合理的に考えればそうするべきなのだろうが、リトは納得しかなかった。

「でも、後ろで見てる訳には……」

そしてブラディクスは、はつきりと目覚めた。取っ手の部分にくっついたマジックハンドをぶんと放り出して……

そして真っ直ぐ飛んでいくマジックハンドをヤミは叩き潰した。

「安いですね、これ」

見てみると確かに、そこらのデパートで子供の玩具として安値で買えるような材質のマジックハンドだった。人の腕ほどの大きさはあるのでその分値は張るかもだが。

「そんな事より……」

ブラディクスだ。赤く光る核っぽさそうな部分が有るという特徴以外はほぼ同じ……

『ああ——なんと良い目覚め、その人、このような時この星でなんとおっしやる?』

「ズコー」

ずっこけてしまった。

脳内に直接語りかけてくる声は、昔凜に取り憑いたのとは随分違う。ついでに言うとう物腰の柔らかさも……

「……………おはようございます?」

以前戦ったのとは比べ、柔らかい態度だった。そのため、態度の突っぱねようがなく普通に答えてしまった。

『それでは元氣よく、おはようございます!!ですが今日の月は大変不機嫌みたいですね、全く顔を出していない。新月と言うのでしたっ

け？いけません、私わたくしさま様のような者は満月と共に颯爽と舞い降りるべきとライブラリにも書いてあつた筈」

どこのライブラリに書いてあるのかは知らないがどうにもキャラが違うすぎて可笑しさがこみ上げる気がしないでもない。

『その人、その人』

そんなブラディクスから気さくに話しかけられた。

「俺は結城リトだよ、王様」

「私はヤミです、この人の妻です」

簡単に自己紹介をすると、ブラディクスは相槌を打ちつつとんでもない提案をしてきた。

『……寝ている間相当エネルギーを消費し、このままだと私わたくしさま様光沢を失つてしまいそうなのです、やんごとなき貴方方に頼むのもあれですが血をお恵みいただけませんか？』

「えー」

『まあ意地悪、このままでは私様お腹が空いてバタンキューでございます。(そんなお腹はない) 私様は剣ですよ、刃物ですよ、バタンキューと倒れたらまずいではありませんか？』

倒れる剣、それはきつと振り下ろされるのと大差ない、ただではすまなさそうだ、考えると寒気がする。

「その物言い……あなたは……本当にブラディクスなんですか？」

『ええ、私様の名はブラディクス……という事になってますね、個体名のような、種族名のような。そこに偽りは無いと思っっています、というか何故それを知っているのです？』

何故？それを聞かれると弱った、そもそも魔ブラディクス剣についてリトが初めて耳にしたのはザステインの語るホラー調の話、そして本物と戦つてヤミに解説してもらつて以降、調べる機会も無い……嫌、終わった問題だと思つて調べても無かつたのだ。

「それはですね」

ヤミが代わりにブラディクスに魔ブラディクス剣の話を見せた。2000年前の遙か昔に作られた、知的金属生命体、それがいつしか呪いの魔剣と呼ばれるようになるまでの話を……

『それはブラディクスというものについて誰かが……恐らく開発者が吹聴して回ったという線で良さそうですね』

「何故そう思いますか?」

『あなたは誰かを襲う時に高らかに

『我こそは○○』

など己の名前を宣言しますか?』

敵と相対する際自分の特徴をひけらかしますでしょうか?』

「まあ、しないですね」

してたら、ヤミはイヴという名前でも有名になっていたかもしれない。元々ヤミはイヴという名前を名付けられて、殺し屋をしている時に金色の闇というコードネームで呼ばれるようになって、そしてそれをもじってヤミと呼ばれるに至ったのだ。

『前者は自分の存在を世に知らしめるという意義がありますがそんな事ができるのはよほど出世欲の強い方でなければなりません。後者においては必ず殺せるという余裕がなければ行うのは心理的に難しい、いざ仕損じた後警戒されれば血をいただく機会が減ります。弱点も広められるかもしれません。話は変わりますが私様ならば人を操る時は動かこわれなくなるまでは使わせてもらいます、ですから操られる人間から情報を絞り取るのは難しい。そして何より、あなたの仰るどこの銀河で作られたという話は、開発者からもたらされた情報等が無ければ発言力においては厳しいのです。2000年の時を隔ててなおその情報が遺されているという事は………』

「なるほど」

長い話だったが、ヤミの話は開発した側の人間からの情報が含まれていなければ辻褄の合わないそうだ。それはそうと昔凜を操ったのと根本は同じだと、そういう確信は得られた。

『しかし………2000年、2000年!!生きるためとはいえない強烈な臭いのするものにたからねばならないと思えば、品性にも支障が出るのも無理もないと言えましょう。それはそうと血を与えるのです、さしあたって私様には必要ですから』

「やらないよ」

『どうしてもくれないとおっしゃる？ならば私様、賢くびよいんを襲うとしましょう。』

ありったけの輸血パックがそこにあると聞きます、肉という壁より薄く、斬りやすい、それでいて大量に摂取できると……ならば逃がす手はありません。

目指せご馳走の山々』

脅しとも、本気とも掴みきれない恐ろしい言葉が返ってきた。病院は患者のいる所だ、その数だけ何かしらの事情で弱っている人達でいっぱいになる。あわよくばとそつちも標的にするのは明らか。

「ちよつとこいつ昔戦った奴より兵器としての偏差値高すぎませんか？非人道的で聞いちゃいられないのですが……」

ヤミの言葉に同感だった、前に戦ったブラデイクスは一心不乱に目の前の血を求めているブラデイクスだった。今日の前にいるブラデイクスは効率的に血を採れる場所を心得ており……気分次第でいつでも実行するようだ。

『私様とてつらいのです。人はまだ良い、食物を口に放り込み、分解し血肉に変えられる。しかし私様はそれができない、既製品にしかありつけないのです』

ならば、自分なら……

自分の血で穏便に片付けられるなら……

「分かった……俺の血、やるよ」

そう思ったリトは自分で親指を傷つけ、そこから垂れた血をブラデイクスに当てた。

「ちよつと、リトさん!!」

「……ごめん、ヤミ……」

『私様、垂れ流しの蛇口で渴きを癒やす趣味は毛頭無いのですが』
とは言いつつも自分に付いた血を拒む気はないようで、ブラデイクスに光沢が宿りだした。

『……む、この味は………慈愛と悲しみ………何かつらい事を経験しました？まあいいでしょう、あなたに免じびよいんは諦めます……人間的に言う舌が潤いました』

確かに機嫌と早口加減が良くなったような気がする、ほぼ念でしか会話をしていないはずだが……

「……………あなたは何故ここに？」

ヤミの質問に、ブラディクスは快く答える。

『そうですね、あれは私様が産まれて間もない頃……………』

始めに抱いたのは疑問。生命あるものなら、否、心宿るものなら全ての存在が一度は抱く疑問。

『私様は誰…………？』

その答えは、本能的な欲求アブローチによって理解した。

『私様はブラディクス…………ああ、血が欲しい。血を採らねば』

自分が何者か理解すると同時に、血が欲しくなった、子供が生きるため…………最も手近な食物として母の乳を吸いたいと願うように。

だが、自分の形は剣だ。知能ある者とはいえ、刃が体の殆どの面積を占めている、剣なのだ。駆動においては不便この上ない、扱いやすい体がいる。

運が良かったのか、悪かったのか、丁度良く動かしやすそうな肉体が自分を持っていたのだ。ブラディクスには分かっていた、どれだけ鎧や衣装で肌身を見せないようにしようが…………人間の肉体がそこにある事を…………

ならば答えは一つ
操ろう。

大地を踏みしめる足を得よう。

自らを振るう腕（かいな）を得よう。

波長云々は操れば分かる筈だ。

そして……………

『味も見ておこう』

せっかく取り憑くのだ、人体の味も把握しておきたい、美味しければ非常食としての運用もよし、そうでなくても動かさせれば良いと思った。

『失礼』

柄の部分から管を伸ばし、ブラディクスを持っている人間の手首を貫いた。

貫かれてなお微動だにしない人間に意識を向ける事無く、ブラディクスは血を吸い取った。直接干渉できた以上、もういつでも操れるという確信はあった。

『う……負念と淀み濃ゆすぎ、胃がもたれる……(そんな胃はない)』それは、初めての血こほんとしてはいただけない味だった。怯えから来るものであるならまだしも、相手を滅ぼすという感情で一杯になっていたのだ。

何故か精神が浸食されていくように感じた。上書きされていくような……そんな自覚すら無くなっていくような気がした、胡蝶の夢レベルの生の実感の短さに辟易しつつも流れに任せるしかないと片付けるしか術も無く……

少しは未来予測ぐらいしておけば良かったと反省する間も無く、ブラディクスのメモリー機能は停止した。

『という訳で、それ以降の記憶は私様にはないのです』

「そうでしたか………という事はあなたが取り憑く予定だった人との経路パスはあなたが目覚めるまでずっと繋がったまま………その間主導権を握られていたとか?」

『ハッ確かに』

「しかし触手使えたんですね」

『ええ………見ていてください』

「?」

「遅くなってすまん!!」

モモとナナが空からやってきた、彼女達はララの発明品によって衣服に翼が付き、飛べるのだ。

『そのマダム達、失礼』

ブラディクスは待ちわびていたかのように声を上げる、ナナとモモも先ほどのリト達と同じように驚きを隠せないようだった。

「え?」

「なんであいつが……!?!」

モモとナナが驚いている間に、ブラディクスは、刃の1部分を触手のように変えて、真っ直ぐ伸ばしモモとナナの二の腕に縫い付けるように突き刺した。

テン タクル ス

○ イ ン パ ク ト

「きゃっ」

「うっ」

ナナとモモは、苦痛のあまり表情を歪ませる。当然だ、二の腕とはいえ、凶器のサイズが注射器程になってたとはいえ、刺されたのだ。

『仕上げはかつちりと』

そして刺された箇所を何かで埋めているようだ。

「大丈夫か?」

「大丈夫ですか?」

「ああ、ちよつと目眩がするぐらいだ……」

目眩がするほど血を抜き取られたという事だろうか?

「リトさんこそ、指の所大丈夫ですか?」

「ああ………まあな」

お互いの無事を確認している間、ブラディクスはモモとナナの血をレビューしていた。

『んーん、片方は運動栄養欲求が満たされ、行き届いて、まさしくライブなお味、デリシヤス!!もう片方は……運動栄養は良いのですが少し何かを我慢してますね、いけませんね………いけません。良き血には淀みがあつてはいけないのです、淀みとは迷い、欲求不満……色々と有ります………他にもありますがまあ良いでしょう。ありがとうございます、あ……ベンチはあつちです』

ブラディクスは先ほどモモとナナを襲った部分の刃で、ベンチを指差した。

「それはそうですがリトさんでしか解消できない思いがですね、でも今ちよつと唯さんの事で立て込んでるので自粛してるんです」
「だからあれほど子供達と教育番組のダンス一緒に踊らないかって

言ったのに」

人、それを昇華という。

「ナナお姉様、私ナナお姉様ほど単純でないので体動かせばなんと
かいける訳ではないので（おっ）」

「な、私だつてなー!!」

ナナは怒り、モモを追いかけ回す。姉妹同士で仲良くわちゃわちゃ
している感があり、微笑ましくはある。

だが外で妻の欲求不満をカミングアウトされ、今、唯が子供を産ん
だとか美柑が死んだとか色々あるとはいえそれに気づかなかつた自
分が情けなく思えてきたリト。

「ごめんモモ、ナナ、ヤミ、それはそうと何してくれてるんだてめえ
!!」

それはそれとして言わなければならない事のあるリトはブラディ
クスにつかみかかった。

『勘違いなさらないください、私様はびよーいんを諦めると言っ
ただけで……………それに私様、いたずらにマダムの柔肌を傷つきたい
訳ではありません。蚊のようにプスリといかせてもらっただけです
ので、何……………注射器とさほど変わりはしません』

「そういう問題じゃねえ…………!!」

『そもそももらい方というものが有ります。あんな垂れこぼす前提
の受け取り方で満足できますでしょうか?』

「う……………」

「屁理屈を!!」

ヤミはすかさず腕をガントレットの形状に変身しブラディクスを
攻撃。

『アッハン』

ブラディクスは刃全体をウナギのようにくねらせて避けた。

「!?!」

それを見てヤミは動きがぎこちなくなつた。ヤミは苦手なのだ、
ニユルニユルしたものは……………

『来ると分かってくらう私様ではないのです、仕掛けられた時、逃げ

ようと背を向ければ大ダメージ、背を向けずに行動すればローダメージ』

「ニユルニユルしてる……この展性……なんの液体金属ですか？」

知らない言葉が出てくる。

「液体金属？」

「固体と流体、両方の形態を常温で引き出せる金属です。そのため兵器としての自由度の高さはヤミさんのナノマシンと遜色ありません、あんまり暑かったり寒かったりするとあれですが」

「ありがと、モモ」

「お役に立てて光栄です」

リトの言葉に笑顔で返すモモを見て、少し気がほぐれた。

『というわけで、また日を改めて……私様今から鞆作ってきますので』

ブラディクスは、ジャンプしてどこか別の場所に向かおうとしていた。

「捕まえた!!」

そうはさせまいとナナはブラディクスを両手で持つ、片方は刃の部分なのでおそろおそろの峰の部分を支えるといった風に。

「はあ!!」

ブラディクスはナナに膝蹴りで真つ二つに割られた。

『吸血種というだけで……このような仕打ち、率直に言ってひどい』

「お前とは関係ないかもしれないがこっちは服バツサリされてるんだ、悪く思うな!!」

「私もですよ」

『ああ……それはそれは、災難でしたね……』

「あなたが人の血を狙って襲う限り、私達は何度だって眠らせますから」

ブラディクスが動かなくなった後でシロが空から戻ってきた。

「王妃の妹君も来たのか」

シロは辺りをうろろして状況を確認しようとする。

「げっブラデイクス、目覚めてるのか？」

「もう終わったぞー」

「そ……そうなのか」

「シロ、あなたの持ってたマジックハンドちよつと安くありませんか？」

「だから良いんだよ、下手に高性能な奴使ったらそれ伝って操られるかもしれないだろ？」

確かに安くても接触の少ない方が良いのかもしれない。

しばらく雑談に耽った……

「注意削がれてるし……こいつはもらった」

シロは猫が獲物に飛びかかるようにダイナミックに飛び、ライムのいる場所に着地しライムを担ぐ。

「ああ!!」

ヤミは声を挙げて驚き、ナナとモモはきよんとした表情でシロを見る。

「おいてけ……おいてけ……」

リトはシロの前に立ち置いてくように促した。

「こいつは、重要参考人だ……銀河警察に預けさせてもらう」

「でも……そいつは俺の子だろ？」

それを聞いてナナとモモは驚いた、初耳なのもそうだし……

「え!？」

「マジか!? どういう事だ？」

「あんまりおおっぴらに言うのもあれだけど、そうさ。だからこそ貴方達の元に預ける訳にはいかないんだ。被害者遺族の感情を余計に悪くさせないように、私刑をさせないようにするのも銀河警察の役割だね……変に情が湧かれても困るんだ」

「え……でもクビになっただんですよね？」

「警部がいる、だから警部に引き渡せば良い」

「わざわざ私達がそうさせるとでもっ？」

モモはシロに向かって睨みつける。

「対策はしている、姉さん以外はな」

シロは除草剤とスプレー缶を出してきた、スプレー缶には唐辛子と書いてあるのが見て取れる。何か出たらすぐに吹きかける気だ。

「これがあればキャノンフラワーも何も怖く……!!」

モモはシロに高速で近づき、シロの腹部に一発を放つ!!

「がああああああ!!」

シロは衝撃のあまり、眼と口から銀色の粒子を吐き出し膝を地につけた。

「お供を呼び出すだけが私達の強さじゃないんですよ白猫君」

「おいたわしやシロ……」

「勉強になった……」

「その人を放して」

「ダメだ………こいつと話させる訳には!!こいつの言葉聞いたら悲しくなるぞ」

「それは私達が決める事です」

『ちよつと待ったー!!白猫やー!!』

白馬に乗る法衣を着た透明人間が、突進するようにこちらに、ライムに向かつて来ている。

『それ以上争うのは良くない、皆様方ーふるへゆらゆら……破ア!!』

法師の袖がライムに近づくとライムは額に何かを当てられたように揺れた。

「一体何を?」

既に距離が離れているが、法師は振り返る事無く大声で喋る。マイクを使っているのか、声に機械的なエコーもついて……

『妖巫女あやかしまこのように他人に無償でくれてやるような魄力の無い拙僧にできるのは単なる気つけのみだ……が、死人でなければ効果はある』

よく分からない言葉が出てきたが人はそれをケチという、だが魄は命の一部というらしいからあまりそれをケチるからといって責める筋合いは無いのかもしれない。

「ううん……」

『そいつの魂力、つまり精神力は今是不安定だ。もしかしたらライムとやらは記憶喪失になっているかもしれない、精神力の基盤として記

憶は割と占めているから……もうこれしかする事は無さそうだし、じゃあ、お静ちゃんとその他諸々の安否を確認してくるから』

法師は全速力で駆け抜けていく。車ならば法廷速度は余裕で越えるような勢いで……追いかけるという選択肢を取らせる間も与えてはくれない。

「なんだったんだ……?」

「急に去ってくんだもんな……話も聞けなかった」

ナナは動物と心を通わせられるのだ、馬に話を聞く気だったのだらう……

「でも初めて見たな、あんな馬……」

影も形も無くなり、追えなくなった馬と法師より……それよりもライムだ、ライムが目覚まそうとしている。

「こうして見るとそっくりですね……」

モモは良いものを見たかのようにうっとりとしていた。確かにそっくりだ、だからこそ向き合わなくちゃいけない。

「……………んん」

ライムは目を覚まそうとしている。

それを聞いてか、シロは彼を担ぐのを止め、ゆっくりと降ろす。

ライムは瞳の色まで、美柑そっくりで……リトは懐かしくなった。

「……………誰?!」

ライムは、リト達の顔を見るなり怯えるように顔をひきつらせ、後ずさりしていた。

「助けて」

ライムはシロの後ろに隠れる。

「お、落ち着いてください」

「お姉さん達を見てると、怖いんだ……オレなんか消えてしまえば良いって……思わずにいられない」

あまりの突然っぷりに言っている言葉の内容の重さとは逆にしんと静まり返ってしまった。

「あ……ごめんなさい、オレ……自分でもどうしてそうなのか全く分かんなくて」

記憶を失ったという情報は本当のようだ、その為もう情報は聞き出せないだろう。ほっとするような、そうでもないような……

「リトさんそつくりの面でそんなに怯えられると……ショックです」

モモは少しふてくされ、顔を膨らます。

「モモ、他に言う事あるだろうーが」

ナナはライムを抱きしめる。

「よしよし……大丈夫だからな……落ち着けよ……」

「う……うん……」

ライムは少し安心を得たように背を丸くした。

「雨降って地固まるとは言っても、その雨が強すぎるとな……さて、どう転ぶか」

その様子を眺めていたシロが呟くと、空から列車が現れた。

緑の機関車のように見える列車。

春菜にララは、風夏は時の列車を持つ人と会う事ができたのか？

『空を翔る列車とは……素晴らしい、見てて気分が晴れ渡るようです』

折れたはずのブラディクスは、何もなかったようにシロに語りかける。

「え……生きてんの？」

『マダムの良き血を蓄えた、しなやかな体から繰り広げる攻撃は大変美しく極まっていました。ですが私様折れたくらいで壊れはしないのです』

ブラディクスは、ビチャビチャと液体音を立てつつ折れた刃をたちまち接合する形で修復した。

「うわぁ……どうやったら永眠するんだ？」

『それは……』

「ゴクリ」

『ヒ・ミ・ツ』